

# 母親のネガティブな被養育経験が子育てに及ぼす影響

ー克服へのプロセスに注目してー

白百合女子大学大学院 文学研究科  
博士課程 発達心理学専攻  
千崎美恵

# 目次

## 序論

はじめに .....	5
第1章 本論文の理論的背景 .....	9
第1節 子ども虐待と非臨床群の母親における不適切な養育態度 .....	9
第2節 乳幼児期の母子関係による子どもの発達臨床的理論 .....	10
第3節 虐待の世代間連鎖 .....	13
第4節 虐待の世代間連鎖の克服への要因 .....	15
第5節 内的ワーキングモデルと愛着の世代間伝達 .....	17
第6節 虐待に向かう母親の心性 .....	21
第7節 育児困難感の背景要因 .....	23
第8節 育児困難感を示す母親への支援 .....	25
第2章 本論文の目的と構成 .....	28
第1節 本論文の目的 .....	28
第2節 本論文の構成 .....	32

## 本論

第3章 研究1 被養育経験の世代間連鎖と母親の愛着スタイル・虐待心性との関連 .....	36
第1節 目的 .....	36
第2節 方法 .....	36
第3節 結果 .....	39
第4節 考察 .....	59
第4章 研究2 母親のネガティブな被養育経験が養育態度に及ぼす影響の検討 .....	66
第1節 目的 .....	66
第2節 方法 .....	67
第3節 結果 .....	68
第4節 考察 .....	69
第5章 研究3 ネガティブな被養育経験の連鎖を克服する母親の心理プロセス .....	72
第1節 目的 .....	72
第2節 方法 .....	72

第3節 結果と考察 .....	79
第4節 まとめ .....	116
<b>第6章 研究4 子どもの年齢変化に伴う母親の被養育経験の影響の変容プロセス</b> .....	124
第1節 目的 .....	124
第2節 方法 .....	124
第3節 結果と考察 .....	126
第4節 まとめ .....	144
<b>第7章 研究5 ネガティブな被養育経験を持つ母親のパーソナリティと介入の検討</b> .....	148
第1節 目的 .....	148
第2節 方法 .....	148
第3節 結果と考察 .....	149
第4節 まとめと考察 .....	159
 <b>結論</b>	
<b>第8章 総括</b> .....	163
第1節 本論文の総合考察 .....	163
第2節 本論文の限界と今後の課題 .....	172
第3節 本論文の意義 .....	173
<b>文献</b> .....	175
<b>要約</b> .....	189
<b>付記</b> .....	192
<b>謝辞</b> .....	193
<b>附録</b> .....	194

## 図一覧

Figure 1	The determinants of parenting
Figure 2	研究 1 の連鎖分類
Figure 3	研究 2 の仮説モデル図
Figure 4	本論文の構成
Figure 5	被養育経験尺度得点の分布
Figure 6	養育態度尺度得点の分布
Figure 7	連鎖分類ごとの割合
Figure 8	連鎖分類各群の愛着スタイル
Figure 9	ネガティブな被養育経験の世代間連鎖と愛着スタイル
Figure 10	各群における愛着スタイル傾向および分散分析の結果
Figure 11	各群における虐待心性傾向および分散分析の結果
Figure 12	不適切な養育態度の世代間連鎖の仮説モデル図
Figure 13	被養育経験・愛着スタイル・虐待心性・養育態度の共分散構造分析の結果
Figure 14	研究 3 の結果図 ネガティブな被養育経験の克服への心理プロセス
Figure 15	研究 4 の結果図 ネガティブな被養育経験の克服への心理プロセス
Figure 16	育児被害感情の構造と変容
Figure 17	育児被害感情の概念化と支援の視点
Figure 18	ネガティブな被養育経験を持つ母親への心理的支援モデル

## 表一覧

Table 1	被養育経験尺度因子分析結果
Table 2	養育態度尺度因子分析結果
Table 3	成人版愛着スタイル尺度因子分析結果
Table 4	虐待心性尺度因子分析結果
Table 5	被養育経験・養育態度と愛着スタイル・虐待心性との相関
Table 6	連鎖分類ごとの人数
Table 7	連鎖分類各群の愛着スタイル
Table 8	各群における愛着スタイル得点の平均値とSDおよび分散分析結果
Table 9	各群における虐待心性得点の平均値と SD および分散分析結果
Table 10	各群における夫のサポート満足度得点の平均値と SD および分散分析結果
Table 11	研究3のインタビュー対象者属性
Table 12	研究3のカテゴリーと概念の定義
Table 13	研究4のインタビュー対象者属性
Table 14	研究4のカテゴリーと概念の定義

## はじめに

少子化，核家族化がすすむ中，社会全体で子どもを育てようという方向性が定められる一方で，親による子ども虐待の現状，発達に問題を抱える子どもへの対応など，子育てに向き合う親の負担感は増大しているように感じられる。

乳幼児健康診査の心理相談では，子どもの発達や精神面の問題，養育者の困難感や育児環境の問題が主な相談内容となっている。心理相談において子どもの発達や問題行動に関する経過観察となった場合，親の気持ちに寄り添いながら環境を整えて子どもの状態の改善を図れるよう促すが，うまく進まないケースを注意深く見てみると，親が回避的であったり，被害的であったり，孤立しているケースであることに気がつく。

子育て支援のファーストステップともいえる乳幼児健康診査の基本は疾病のスクリーニングと子育て支援とされている。児童虐待防止法（2000年施行）により虐待の早期発見と予防が取り入れられ，発達障害者支援法（2005年施行）により発達障害の早期発見・予防が新しいニーズとしてあげられた（秦野，2016）。子どもの健やかな発達を支える環境要因としての親の精神的健康や養育への支援は重要な課題の一つであると考えられる。

子どもの発達障害などを主訴に受診する親子に，子どもに明確な障害が認められず，母親のマザーリングの問題に帰結することがしばしばある（木部，2009），『子どもが〇〇障害（ADHD，発達障害など）』という，児の問題という形式での訴えは，しばしば虐待親からの切実なSOSであることがある（鷺山，2004）等とあるように，子どもの発達の問題が親の養育態度や母子関係に起因するケースが存在すると考えられる。子どもの健やかな発達と子育て支援の両側面からみて，親に対する特別な支援が必要なケースを見逃してはならない。母子臨床に関する心理相談においては，子ども，親，そして母子関係のありようを見立てることが重要であり，親の養育態度が子どもの発達の問題に影響を及ぼしている可能性を念頭に置き，育児困難感の背景要因に関しての注意が重要である。子ども側の要因とともに養育者側の見えにくい要因について注意を向けた包括的で適切なアセスメントが求められる。

育児困難感のリスク因子として，子どもの問題，親の問題，環境の問題があるといわれている（Belsky，1984）。親の問題のひとつに，親の育ちの歴史が示されている。親の育ちの歴史，すなわち，親の被養育経験は，親の養育態度を規定する重要な要因である。

昨今、子ども虐待の報告件数は増加の一途をたどり、悲惨な虐待事件が報道されている。また、虐待は重篤なケースばかりではなく、一般家庭の不適切な養育の延長線上に位置づけられるようになっている（中嶋，2005・大原，2003）。虐待傾向のある親の要因のひとつに、親自身が被虐待経験を持っている（Egeland, Jacovitz, & Srouge, 1988 ; Steele & Pollock, 1968）ことが挙げられている。虐待の世代間連鎖の問題である。被虐待経験とまでいかなくとも、自分の親との関係に葛藤を抱いている母親は少なくない。子どもができたことによって親との葛藤が顕在化して苦しくなるケースも多い。重篤なケースであると周囲が気づいて手を差し伸べることができる可能性が高いが、疾病としては現れていないが子育てという業に向き合うときに、被養育経験による葛藤や生きづらさが子育てに影響を及ぼし、目の前の自分の子どもとの関係性に苦しくなることがあると考えられる。親になると親のありがたみがわかると言われるが、自分の親との関係に葛藤を抱いている母親は、自分が親になったときに自分の親のことや自分の被養育経験をどのように振り返るのであろうか。そして、自分の子どもとどのように向き合うのであろうか。

本研究では、母親が自分の受けてきた養育に対してネガティブな感情を抱いている経験をネガティブな被養育経験と定義する。ネガティブな被養育経験を有する子育て中の母親に注目して、その特徴を量的および質的に捉えていくこととする。まず、一般家庭の幼児を持つ母親に対して、育ちの歴史、すなわち、被養育経験がどのように現在の養育態度に影響を及ぼしているか、不適切な養育の世代間連鎖について検討する。また、一般家庭の幼児を持つ母親で、ネガティブな被養育経験がある母親にインタビュー調査を行うことにより、ネガティブな被養育経験によって生じる育児困難感の発生機序を明らかにするとともに、ネガティブな被養育経験を乗り越えようとする母親の心理プロセスについて探索的に検討することを目的とする。ネガティブな被養育経験によって育児困難感を抱く母親への心理的支援の一助となるような研究としたい。

本研究では、専門機関が虐待事例として関わった場合を臨床群、それ以外を非臨床群として区別する。虐待の世代間連鎖に関して、臨床群における先行研究を概観することによって、非臨床群についての検討の視点とする。また、近年少しずつなされてきた非臨床群の実証研究について、その結果を検討の視点とする。非臨床群における、ネガティブな被養育経験を有することによって育児困難感を示す母親について検討することは、虐待予防の観点からも重要であると考えられる。

なお、子ども虐待の加害者の 9 割は実母である（厚生労働省，2014）ことと，日本における父親の育児参加はまだ発展途上であり，現実には，父親はいるが実際の育児には参加しないという日本特有の育児環境がいまだにある（柏木，2008）という現状から，本研究における対象者については母親に限定した。



## 序論

---

## 第1章 本論文の理論的背景

### 第1節 子ども虐待と非臨床群の母親における不適切な養育態度

近年、児童虐待による悲惨な出来事が社会の注目を集めている。児童虐待は子どもの精神、身体発達を阻害し、時にはトラウマの後遺症として成人になってもその体験に呪縛され（西澤，1994）、子どもに深刻な影響を及ぼすと考えられる。児童相談所への相談件数の変遷をみると、1990年度は1101件であったが、毎年約1000件事例程度の増加があり、2000年の児童虐待の防止等に関する法律の施行後は24,800件と急増している。さらに2016年度の速報値では122,578件と報告されている（厚生労働省，2016a）。

子どもへの虐待は、1962年にKemp et al. が、“The battered-child syndrome”（被虐待児症候群）として初めて医学的・系統的に報告して以来、子どもが親によって虐待されるという事実が認識されるようになった。被虐待児症候群は深刻な身体的虐待を受けた子どもの臨床像であり、重傷や死亡に至る稀ではない事例であり、発育不全についてもすでに言及されている。そして、教育歴の高い、経済的にも社会的にも安定した背景の人々にも生じることや、親からの虐待が生じた家族にみられる最も重要な要因のひとつである「自分がされたことを他者にする」という「攻撃的な親への同一化」と表現されるこの現象が、自分は親のようににはならないと強く願っているにもかかわらず生じること（Kemp et al., 1962）などが述べられている。また、児童虐待の問題は、かつては虐待する人個人の病理が問題にされ処罰的に扱われてきたが、近年は子どもをとりまく家族や身近な集団の、複雑な集団力動や関係性の障害の反映として理解されつつある（渡辺，2000）。社会福祉法人子どもの虐待防止センター（1999；2000；2001）が首都圏の母親を対象として調査を行った結果、約1割の母親が「たたく」「泣いても放っておく」など子どもに虐待相当行為を繰り返していることが明らかになった。それ以降、子どもの虐待の問題は、犯罪行為として認識される虐待だけでなく、一般家庭での養育の中に存在する問題として認識されてきた。マルトリートメントと言われる、大人による子どもへの不適切な取り扱いの中に存在する心理的虐待や心理的なネグレクトについては、親が虐待を行っているという認識がないまま、日常的に行われている場合も想定される。しつけと虐待との境目は明瞭ではなく、虐待はスペクトラムと捉えることができると考えられる。

虐待が一般家庭における育児困難感の延長線上で発生するものとの認識が強調されるようになり、臨床群ではない一般家庭の親を対象とした虐待傾向に関する研究が進めら

れてきた。三島（2001）は、母親の意識にみる子どもへの虐待傾向に影響を及ぼすリスクファクターについて検討し、虐待傾向に対して、育児ストレス、対児感情、育児意識が影響を及ぼしていることを示唆した。大原（2003）は、母親の虐待行動のリスクファクターとして、育児負担感、解離傾向、子どもに対する不適切な認知・期待感、家庭内の暴力傾向、母性意識（否定感）を挙げている。虐待行為に関連する要因について中嶋（2004）は、母親の被養育経験、親の攻撃性の高さ、配偶者の要因を挙げている。花田・坂原・寺岡（2005）は、幼稚園に子どもを通園させている母親の育児不安と児童虐待傾向について検討し、虐待傾向を示す母親のうち育児不安を認知していない場合は、認知の変容を促進するケアも必要であると述べている。山野（2006）は、育児負担感と不適切な養育関連モデルを提示し、不適切な養育に育児負担感は関連が強いことを検証した。田口・河原・西留（2014）は、虐待的行為指標の妥当性を検討する上で、虐待的行為得点が育児負担感・育児不安と関連することを示唆した。

一般家庭における虐待の程度は専門機関が関わっている事例と比較すると軽度であり、出現する子どもの症状が目立たないこともあって見逃されやすいが、成長してからその影響によって不適応として現れる可能性も少なくない。深刻な虐待問題だけでなく、育児困難感を背景要因とする不適切な養育態度を含めた問題の解決も極めて重要な課題である。虐待予備群となり得る一般家庭についての早期の支援と適切なケアが求められる。

本研究では、専門機関が虐待事例として関わった場合を臨床群、それ以外を非臨床群として区別する。調査対象者については、子ども虐待の加害者の9割は実母であり（厚生労働省，2014）、虐待を受けた年齢別の比率は、学齢期以下の子どもが半数を超える（黒澤・田上，2005）。よって、幼児を持つ非臨床群の母親を調査の対象とする。

## 第2節 乳幼児期の母子関係による子どもの発達臨床的理論

子育て中の母親自身の乳幼児期の被養育経験を考える際、被養育経験がネガティブなものである場合の問題点に関して、念頭に置くべき重要な理論がある。

Bowlby は、比較行動学、進化論、制御理論をも盛り込んだ壮大な愛着理論を1969年に発表した。赤ん坊が母親とほかの人とを区別し、母親という特定の人物に対して注意や関心を集中させていく心理機制をアタッチメント（attachment）と呼んで以来、愛情をともなった心の結びつき（affectional bond）をさす用語として広く用いられるようになった（繁多，2014）。Bowlby（1969／1991；1973／1991）の愛着理論では、人生の

早期における愛着対象（主に母親）との相互作用の特質が、後の対人関係の様々な側面に影響を与えると仮定している。また、早期の子どもと愛着対象との絆が重要視されており、そのような絆を内包する関係である“愛着関係”での子どもの主観的な経験が、発達過程にあるパーソナリティ特性や対人的な能力の形成に寄与するとされている。さらに、乳児が養育者との具体的な経験や相互作用を通して、養育者への接近可能性や情緒的応答性などに関する表象、それと補完的に自己についての表象、そしてそれらの関係についての表象を形成するというワーキングモデル（一般的には内的ワーキングモデル）の概念を提唱した。この自己ならびに他者についての内的ワーキングモデルは、心的表象としてその後の対人関係における行動や知覚、期待や信念を方向づけるような心理的メカニズムを形作っていく（Bowlby, 1969/1991 ; 1973/1991）。

Klein (1946/1985) は、新生児からの母子関係に立脚して、心的発達を論じた。対象関係が生之初めから存在し、その最初の対象が、子どもにとって良い（満足を与える）（good 〈gratifying〉）乳房と、悪い（欲求不満をひきおこす）（bad 〈frustrating〉）乳房とに分裂（splitting）する母親の乳房であり、この分裂の結果、愛と憎しみが分離する、さらに、最初の対象との関係は取り入れ（introjection）と投影（projection）を含み、したがって生之初めから、この対象関係は取り入れと投影との間の、そして内的および外的対象と内的および外的な状況の間の相互関係からつくられるとした。すなわち、健康な母子関係の中心は、乳児が自分の不安を母親に投影し、母親が適切に不安を緩和して乳児に返すことである。しかし、母親は乳児の要望を理解しつつも、やむなくそれを拒否することもある。この時、乳児の不安は母親に包容されることがなく、乳児は不満足な状態に追いやられることになる。満足したよい体験が不満足な悪い体験に優ると、乳児はよい体験の記憶によって悪い体験に耐えることができるようになり、よい体験と悪い体験をもたらす乳房が同一の源泉であることを知ることができるようになる。一方、虐待や不適切な養育などでは不満足な悪い体験が満足したよい体験を凌ぐ。このような状況においては、“妄想分裂ポジション”の下でスプリッティングした対象が結合されることはなく、スプリッティングはさらに拡大する（木部, 2006）。

Klein の理論を受けて、Bion (1962/1999) は、対象が投影される容器（container）と、容器に投影できる対象という考えを、モデルとして用いるために抽象することとし、後者の対象を、内容（contained）という用語で呼ぶと唱えた。容器と内容は、情動による接続と浸透が可能である。そのように接続されたり浸透されたり或いはその両方によ

って、容器と内容は、通常成長と記述される変化をする。すなわち、乳児は、苦痛などの不快な情動を入れてくれる容器を必要としており、その役割を担っている母親の存在が不可欠であるとしている。母親に自分の情動が理解され、意味付けをされて返されるという体験を繰り返すことによって、こうした機能を自己に内在化させ、考える力や想像力の基になっていくとした。一方、容器と内容は、解体されたり情動を剥ぎ取られたときには生命力を失い、生命のない対象に近くなるとしている。

Winnicott (1956/1990) は、母親が生後間もない乳児の欲求を完全に満たすように育児に没頭することを原初的没頭と呼んだ。始め母親は乳児のニーズにほとんど完全に適応し、その後時間がたつにつれて、母親の失敗を処理する幼児の能力が増大するに従って、完全に適応するのを徐々に減らしていく。母子一体感の中で、母親が安定した適度の世話や安定的で一貫した関わりをすることが「ほどよい母親」として重要である。乳児は未熟な自我を母親の自我に支えてもらうことによって、内的対象と良い関係が確立されていき、良い環境を信用する機会を持ち、現在と未来に自信を持つことができることにつながるとした。

Mahler (1975/1981) は、分離・個体化理論において、乳児が母親との一体感から徐々に分離していく過程を段階に分けて示した。個体化および対象恒常性の確立期には、母親と自分との区別が明確にできるようになり、母親像を安定的に内的対象として確保できるようになるとしている。その前の段階の再接近期に、母親が適切に情緒的対応を示さないと、後の人格発達に悪影響を与える可能性が高いとしている。

Erikson は、人間を精神 - 身体的 psycho and somatic, 対人関係的 interpersonal, 社会・文化的、歴史的な多次元的存在としてとらえ、自我をその統合の主体と考える。そして、心理 - 性的 - 漸成的発達論 psycho - sexual - epigenetic theory を、自我心理学の立場から自我の漸成的発達 ego - epigenesis の理論へと発展させた(小此木, 2002)。Erikson は、健康なパーソナリティを構成する最初の要素を、基本的信頼の感覚と名付けた。これは、生後 1 年間の経験から引き出された自分自身と世界に対する一つの態度である。基本的信頼感が基本的不信を上回るバランスとなる持続するパターンをしっかりと確立することが、芽生えはじめたパーソナリティの最初の課題であり、したがって、母性的ケアの最も優先されるべき課題である。母親たちはその関係の質の中で、〈赤ちゃんの個別の欲求を敏感に配慮すること〉と〈自分たちの属する共同体のライフスタイルとして信頼されている枠組みの中で自分が信頼に足る人間であるという確かな感覚〉を

結合させる営みを通して、子どもの中に信頼感を創りあげていく（これが子どもの中にアイデンティティ感覚の基礎となるものを形成し、後にそのアイデンティティ感覚が、「これでよい」という感覚、「自分は自分自身である」という感覚、「他の人から信頼されている通りのものに自分はなりつつある」という感覚を結合していくことになる）。両親は、禁止と許可によって子どもを導く特定の方法を持っているだけでは足りない。それに加えて、両親がしていることには意味があるという深い確信、しかもほとんど身体的な確信を、子どもに示すことができなくてはならない。この意味において Erikson は、子どもの養育の伝統的システムは、信頼を作り出す要因となっているとすることができるとしている。幼児がさらに発達すると、自分自身の心身を自分でコントロールする自己コントロール能力を確立し、他に対して自律した存在として自己を全うする自律性の獲得が次の発達課題になってゆく。自律を発達させるためには、初期の信頼の段階がしっかり発達し、その持続が確実でなければならない。母子関係を主とするこの段階までの発達課題をひとつおろし達成した個体は、社会適応上必要な基本的能力をいちおう獲得し、それ以後の人生において、ひどい病的な障害にはいたらない。しかしもし、その発達課題の達成の失敗が積み重なっている場合には、それが病的な心身の障害を引き起こす素因になる。後期思春期から後期青年期にかけての自我同一性の確立も、その失敗による同一性拡散症状群も、そしてまた中高年代における完全性と絶望も、同様の観点から理解されなければならない（小此木，2002）。

子ども時代の良質な被養育経験および母子相互作用が、子どもの健全な心的発達にとっていかに重要であるか、そして、その後の人格形成にいかに影響を及ぼしていくかという枠組みに基づき、ネガティブな被養育経験が子育て中の母親にどのような影響を及ぼしているのか探索的に検討していく。

### 第3節 虐待の世代間連鎖

子どもへの虐待の発生は、ひとつの要因に直接的に結び付けられるものではなく、複数の要因が重なり合って発生すると考えられる。Helfer, R. E. & Krugman, D. R. (1997/2003) は、以下に挙げる要素が揃ったときに発生する傾向があるとしている。すなわち、親や保護者が潜在的に持っている子どもを虐待する傾向（親自身が小児期に虐待やネグレクトを受けたことと関連している）、特殊な子ども、身体的・心理的あるいは環境上のストレスや危機である。児童虐待が生じる背景については、過去に多くの調

査があり、結果は類似している。津崎（2012）は、家庭の経済的困窮、家族の社会的孤立、親の精神不安や人格の未熟性、の三つの要因が多くの子の核になっていると述べている。その中の親の精神不安や人格の未熟性を導く親の心理的要因に関して、虐待の臨床群の研究では、国内外で同様の指摘がなされている（中嶋，2004）。虐待傾向の高い親の特徴として、自己評価が低い（Coohey & Braum, 1997; Evans, 1980; 西澤，1994），敵対的で攻撃的な傾向があり（Evans, 1980; 西澤 1994），家族関係に満足していない（Evans, 1980; Steele, 1986; 津崎，1992），社会的に孤立している・対人関係の問題を抱えている（庄司，2001; 玉井，2001; Trickett, Aber, Carlson, & Cicchetti, 1991），親自身が被虐待経験を持っている（Egeland, Jacobvitz, & Sroufe, 1988; Steele & Pollock, 1968; 渡辺，2000）などが挙げられる。Fraiberg, Adelson, & Shapiro（1975/2011）は、母親が自らの成育歴の悲惨さを否認し、乳児をこの転移対象としてしまうために養育困難に陥っていることを見出し、「母親が自分の泣き声を聞いてもらうことができれば、その母親は自分の泣き声を聞くだろう」と結論し、母親自身の養育体験にスポットを当てた（木部，2012）。

子どもへの虐待の発生要因の中でも、自らが子ども時代に虐待を受けていたという虐待の世代間連鎖は重要な要因のひとつであると考えられる。世代間連鎖とは、世代間伝達とも言われており、母親の幼少時における両親との間での経験が自分の子どもとの相互作用に影響を及ぼし、その特徴、性質、価値観などが子どもへと伝達することをいう。

世代間連鎖のメカニズムについては様々な研究がなされている。虐待を受けた人が、後に自分の子どもを虐待するとう現象を精神分析では、原始的防衛機制や攻撃者への同一化、役割逆転、転移性攻撃などの概念を用いて説明している（遠藤，1992）。虐待を受けた人に多く見られる原始的防衛機制としては、否認（denial）や投影（projection）などがあげられる。否認とは、自己が知覚しているにもかかわらず、その存在を認知すると不安や嫌悪感などを引き起こすような現実の存在そのものを認知しないという防衛機制をいう（西澤，1994）。攻撃者への同一化は、被害者から加害者になることは、心に焼きついた心的外傷を逆転させる効果があり、子どもは虐待の痛手から自分を守ろうとして、危害を加えた人に同一化する（渡辺，2000）。西澤（1994）は、虐待が虐待を生むという現象を、社会的学習理論の攻撃－愛情の連合学習という観点と、モデル学習という観点から説明している。愛着の観点からの虐待の世代間連鎖は、子どもの母親への情愛的結びつきである愛着の重要性を指摘した Bowlby（1969/1991）の愛着理論に源を持

つ。

Kaufman & Zigler (1987)の研究では、虐待の世代間連鎖の発生率について、30% ±5 と報告された。この比率は一般人口における虐待の出現率の 6 倍に及ぶという。Egeland (1988) は、貧困、若年、未婚、望まない妊娠などのリスク要因のある出産 267 例の女性を 12 年間追跡し、世代間連鎖について調査した。子どもへの虐待やネグレクトが生じた割合は、性的被虐待歴が 46%であり、次いで、被ネグレクト歴 38%と身体的被虐待歴 34%であった。一方で、被虐待歴があっても一部の母親は子どもを適切に養育できていた。身体的被虐待歴が最も連鎖が少なく、それでも不適切な養育、適切な養育、どちらともいえない、が約 3 分の 1 ずつであった。調査方法の多様さにより、児童虐待等の世代間連鎖の比率(リスクの程度)についての精度は疑問視される(久保田, 2013)。

非臨床群を対象とした研究における虐待の世代間連鎖率に関しても、同様の指摘が適用されると考えられるが、いくつかの報告がなされている。中嶋(2004)は 25.9%と報告し、被虐待相当行為経験をもつ人の方がもたない人より、虐待相当行為を生じさせている割合が 2 倍以上の高率であったと報告した。中谷(2002)は 50.0%, 木本・岡本(2007)は 45.95%と報告している。世代間連鎖率の数字の扱いには慎重を要するが、被虐待経験を持つ人の方が、子どもへの虐待相当行為を生じさせるリスクが高いことが示唆されている。

本研究では、育児中の母親が、自分が受けてきた養育経験にネガティブな感情を持っているために、現在の子育てに困難感を感じている世代間連鎖に注目する。被虐待とは思いたくないが子ども時代に辛い思いをしたという母親が存在することを想定し、本研究においては、被虐待という言葉を使わず、ネガティブな被養育経験ということばで統一し、その定義を「ネガティブな感情を抱いている自分が受けてきた養育経験」とする。また、母親の自分の子どもに対する養育態度を「適切な養育」「不適切な養育」という表現で統一し、「不適切な養育」の定義として「子どもに苦痛を与えているであろう養育態度」とする。

#### 第 4 節 虐待の世代間連鎖の克服への要因

Kaufman & Zigler (1987) は同時に、虐待は連鎖するという記述には真実の部分もあるが、世代間連鎖による虐待が起こるのを弱めていく要因も多くあることを指摘している。ネガティブな養育経験があっても、子どもに適切に関わることができる母親



が存在することも報告されている (Hopkins, 1990)。近年では負の世代間連鎖を断ち切るためにはどうしたらいいのかということに注目が集まっている。

虐待のようなネガティブな被養育経験がありながらも適応的な養育態度をとることができる要因とは何だろうか。Fraiberg et al. (1975/2011) は、痛みや苦しみを思い出すことで両親はぞっとするような過去を盲目のうちに反復することを免れていると述べている。鵜飼 (2000) は、虐待を受けたという自分の成育史上の体験が自分の過去の歴史の一部として整理されているか否かが重要な鍵になると論じている。また、Steele (1986) は、成長した後に健康的な社会生活を送っている被虐待児の多くは、子ども時代に重要な代理人物をもつことができていたことを指摘している。福田 (2004) もネガティブな養育経験がある場合でも、子ども時代のポジティブな重要他者の存在があれば、適切な養育行動をとることができることを示している。青木・松本 (2006) は虐待の世代間連鎖を断った養育者と世代間連鎖のある養育者を比較した研究をレビューし、両者の違いは、持続して一定の情緒的支持を与えてくれる人物を少なくとも 1 人持っているかどうかと、自分の養育者との過去の陰性の体験に多面的且つまとまった見方をし、それについて率直にまとまりをもって語ることができるかどうかの 2 点であるとしている。Egeland et al. (1988) によっても、虐待の連鎖を断ち切ることができたケースの共通点として、子ども時代のある時点で愛情とサポートの提供者としての (虐待親に代わる) 他者の存在があったこと、情緒的サポートの提供者としてのパートナー (恋人、夫) の存在があること、あるいはある時点で心理療法を体験し、セラピストとの関係性を通して他者や自己に関する内的ワーキングモデルの修正に至ることができ得たことなどが挙げられている。Kaufman & Zigler (1987) は、虐待を受けた経験があったとしても多くの社会的サポートを受けていれば子どもを虐待する親はほとんどいないと、社会的サポートの重要性を指摘している。

以上のように、負の世代間連鎖が起こらないための要因はいくつかあるが、これらは深刻な虐待についての研究が多い。しかし、現実には先に述べたように、重度の虐待とまではいかないにしても、一般の家庭の中に起こっている軽度の暴力、拒否的行為などの負の連鎖が子育て中の母子の精神的健康に及ぼしている影響は大きいと考えられる。

一般の家庭の母親を対象とする負の世代間連鎖を断ち切る研究として、木本・岡本 (2007) は連鎖が生じなかった人は子ども時代に親以外の大人との情緒的交流を持つことができていたために葛藤を子ども時代に解消できていたことが示唆されたと述べてい

る。林・横山（2010）は、内省（振り返り語る）力、子ども時代のポジティブな重要他者の存在、社会的サポートの重要性を確認している。しかし、不適切な養育を含めたネガティブな被養育経験の世代間連鎖の研究はまだ少ない現状であり、更なる研究が求められる。

## 第5節 内的ワーキングモデルと愛着の世代間伝達

内的ワーキングモデルは、Bowlby の提唱した愛着の継続性を提供し、青年期や成人期における対人関係に多大な影響を及ぼし得るであろう早期の関係の役割を理解するための要諦となる（金政，2003）。内的ワーキングモデルへの注目は、それまで主に愛着関係における乳幼児の行動パターンや様式（愛着パターン）の分類に焦点が当てられてきた愛着研究（Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978）を、成人の表象レベルの愛着様式を対象とする研究にまで拡張させることを可能にした。その一つの流れが、発達心理学の分野で主になされてきた Adult Attachment Interview（以下 AAI とする）（Main, Kaplan, & Cassidy, 1985）を用いた成人の愛着研究であり、いま一つの流れが、社会心理学の分野で関心を集めてきた Adult Attachment Questionnaire（以下 AAQ とする）という自己報告型の尺度を使用する青年・成人期の愛着研究であろう（金政，2007）。

乳幼児の愛着スタイルを測定する尺度である Strange Situation Procedure（以下 SSP とする）（Ainsworth et al., 1978）において、乳幼児の愛着行動の個人差は、一般的に“現にその場に居合わせる”愛着対象への近接可能性とその対象に対する情緒的態度の整合一貫性によって把握される（数井・遠藤・田中・坂上・菅沼，2000）。近接可能性が全般的に低い子どもを A 型（回避型）、分離後の再会などにおいてネガティブな情動が低減されて然るべき事態でも不安がおさまらず愛着対象に怒りをぶつけてしまう、情動の両価性が高い（整合一貫性の低い）子どもを C 型（アンビバレント型）、そして、愛着対象への近接可能性が高く、その対象に対する情緒的態度に整合一貫した特徴が認められる子どもを B 型（安定型）にそれぞれ振り分ける（Ainsworth et al., 1978）。こうした SSP の基本原理は、AAI の中にもそのまま生かされているが、AAI における愛着対象は、“現にその場に居合わせる愛着対象”ではなく、種々の質問を通して潜在的に活性化される“記憶表象としての愛着対象”である（数井ほか，2000）。Main et al.（1985）は、記憶表象に対する近接可能性と語りの整合一貫性の 2 次元を基準に

4つのタイプに振り分ける分類枠を提示している。4つのタイプとは、F型（安定・自律型：整合一貫性が認められるタイプ）、Ds型（愛着軽視型：想起しないタイプ）、E型（とらわれ型：語り全般の整合性が低いタイプ）、U型（未解決型：整合一貫性が著しく損なわれるタイプ）である。

AAIの開発以来、養育者の愛着スタイルが養育行動や子どもの愛着形成に対してどのような影響を与えるかという愛着の世代間伝達に関心が向けられた（金政，2003）。Crowell & Feldman（1988）の研究では、AAIにおいてF型，すなわち安定で自律的と分類された母親は，自分の子どもの愛着の表現に自由に応答することができる。一方，AAIにおいてDs型，すなわち回避的と分類される母親は，母子の相互関係において調律（母親が乳児の波長に合わせること）の欠如が見られ，回避的とみなされた親の子どもは，その愛着の発達に困難をきたすことがあるという。このような母親はしばしば自分自身の母親から拒否されてきている。E型，すなわち没頭型と分類される母親は一貫性がない傾向にあり，自分の子どもに対して混乱した像を描いており，子どもの愛着の発達は不満足な状況に陥りやすいことが示唆されている。数井ほか（2000）は，日本人母子における愛着について，母親の愛着表象をAAIで，子どもの愛着行動を愛着Qセット法によって測定を行った結果，安定型の母親の子どもは，不安定型の母親の子どもよりも愛着安定性が高く，それは，愛着の世代間伝達を示すものであった。

また，愛着の世代間伝達の重要な媒介変数として，Fonagy（2001／2008）は，実際には未だ意図性を有してはいない乳児に対して意図性があるものとして接する親の能力，すなわち乳児の心のなかにあると想定される，そしてまた親自身がその子やその子の心的状態に関して心のなかに生起させる，思考，感情，欲求といった視点から乳児について考える能力を挙げている。青木（2014）は，アタッチメント関係は，養育者の内的作業モデル，養育者の感受性，乳幼児のアタッチメントという3要素がお互いに力動的に影響しあっているオープンなシステムであるとしている。近藤（2014）は，アタッチメントの伝達モデルにおける媒介要因として，「養育行動の敏感性」を挙げている。「養育行動の敏感性」とは，子どもの心に思いをはせる能力，親の内省機能，すなわち，自己と他者の内的状態を同定し解釈する能力，子どもの内的状態を推察する洞察能力であるとまとめている。また，虐待の世代間伝達についての研究において，情緒応答性が扱われている（林・横山，2010）。

島（2014）は，内的ワーキングモデルは重要な他者との相互作用を通して形成される

ものであり、親がとる養育行動の違いによって子どものアタッチメントが異なることは多くの研究で示されており、両者の関係は頑健なるものであると考えられると述べている。ネガティブな被養育経験によって、幼少期に不安定な愛着パターンを形成したと思われる母親は、成人期における愛着スタイルも不安定なものになっていると考えられる。そのような観点から、母親の愛着スタイルと子どもへの養育態度との関連についての実証研究が行われてきた。長沼（2005）は、子育て中の母親への AAI と母親と子どもとの相互作用の観察を通じて、母親の愛着パターンと問題解決の観察場面における母子の態度との関連を検討し、母親の愛着パターンが子どもに対する養育態度に関連していることを示した。AAI ではなく、質問紙尺度を使用しての愛着スタイルと養育態度との関連は多くの研究で取り上げられている。酒井・加藤（2007）は、一般他者に対する愛着スタイル尺度である ECR-GO と虐待傾向尺度を用いて、養育者の対人関係の持ち方が虐待傾向に及ぼす影響を検討し、対人関係全般に対する「関係不安」が特定のケアの対象である子どもへの養育行動に影響を及ぼすことを示した。さらに、「関係不安」が高まることにより、養育機能における否定的認知が活性化されることが示唆された。浦山・西村（2009）は、詫摩・戸田（1988）の愛着スタイル尺度を用いて母親の愛着スタイルを測定し、不安定な内的ワーキングモデルをもつ母親は、虐待的な養育態度に陥りやすいという研究仮説において、両価高群の母親について検証できたとしている。また、稲垣・渡邊（2007）は、被養育経験によって形成されと考えられる内的ワーキングモデルは養育態度、対人関係、さらに、自己受容のあり方に深く関わっていると述べている。武内・田井中・河野（2014）は、母親の養育態度について母親の愛着スタイルと自己受容に焦点をあてて検討し、愛着スタイルが自己受容に影響を与え、愛着スタイルと自己受容が養育態度に影響を与えていることを示した。

虐待の世代間連鎖に関して、このような愛着理論に依拠して、被虐待－虐待という事実ではなく、より包括的に親子の愛着関係全体を扱おうという視点から、より微視的に虐待の連続性の機序を把握しようとする向きがある（遠藤，1992）。すなわち、世代間連鎖されるのは虐待そのものではなく、虐待の体験によって形成された内的ワーキングモデルであるという考えである。内的ワーキングモデル研究は、乳幼児期にとどまらず、生涯にわたるアタッチメントの問題を扱うのであるが、そこにはアタッチメントの世代間伝達の問題があり、それは今日重大な社会問題となっている虐待の問題とつながっている（山本，2010）。

世代間伝達に関する研究で Hopkins (1990) は、乳幼児の愛着スタイルを測定する尺度である SSP (Ainsworth et al., 1978) と、成人の愛着スタイルを測定する尺度を用いた研究を行い、不幸な子ども時代の反復強迫は、その人がその不幸な過去を受け入れた時に避けることができるという示唆を得た。また、虐待の連鎖を断ち切ることができたケースの共通点を見出した Egeland et al. (1988) の研究の仮説、すなわち、“親に代わる愛情とサポート” “情緒的パートナーの存在” “心理療法の経験” は、Bowlby のアタッチメント理論に依拠している。本研究では、ネガティブな被養育経験の世代間連鎖を検討するにあたり、被養育経験が養育態度に影響を及ぼすプロセスとして母親の愛着スタイルを取り上げる。

AAQ に関する研究は、Hazan & Shaver (1987) によって、成人の愛着理論が提唱されており、彼女らは、青年・成人期における愛着の様式、すなわち愛着スタイルによって、両親についての印象、親密な二者関係の捉え方やそこでの感情経験が異なることを示した。さらに、Bartholomew & Horowitz (1991) は Bowlby (1969/1991; 1973/1991) の主張する自己および他者への作業モデルに注目することで、青年・成人期の愛着スタイルが二つの次元軸（自己モデルならびに他者モデル）から解釈可能であるとの見解を提示した。その後、Brennan, Clark, & Shaver (1998) は、先行研究で用いられた尺度の因子分析による統合を試み、各尺度の項目を不安と回避の 2 次元に集約されることを明らかにし、この結果に基づき回避と不安 18 項目ずつから構成される Experience in Close Relationships (以下 ECR) を作成した。日本においても一般他者版 ECR-GO が中尾・加藤 (2004) によって作成され、主流となっている (古村・村上・戸田, 2016)。

様々な AAQ が提示される中、各尺度の下位尺度の関連についての研究もおこなわれている。Hazan & Shaver (1987) がアタッチメント理論を成人の恋愛関係に拡張して以降、成人のアタッチメント研究は数多く行われてきた。その中で、アタッチメント・スタイルを測定する様々な自己報告式尺度が作成され (古村ほか, 2016)、下位尺度間の相関に関する研究もおこなわれている。Bartholomew & Horowitz (1991) は、3 類型の回避型が RQ (関係尺度) による 2 次元 4 類型モデルの拒絶型と恐れ型の二つを含んでいると指摘している。中尾・加藤 (2003) は、RQ の強制選択にもとづく 4 つの愛着スタイル群により 3 カテゴリーの 3 因子の得点が異なることから次の 3 点が示唆された。

(1) 安定型得点は安定型の特徴を表している。(2) アンビバレント得点はとらわれ型

の特徴を表しているというよりはむしろ、とらわれ型や恐れ型の特徴を表している。(3) 回避型得点は恐れ型の特徴というよりはむしろ、恐れ型と拒絶型の特徴を表している。また、古村ほか(2016)は、アダルト・アタッチメント・スタイル尺度(ECR-RS)(Fraley, Heffernan, Vicary, & Brumbaugh, 2011)における潜在変数である「全体不安」と本研究で使用された成人版愛着スタイル尺度のアンビバレント型は高い相関を示したと述べている。

本研究においては、Hazan & Shaver (1987)のオリジナル尺度を修正して邦訳し、託摩・戸田(1988)が信頼性と妥当性を検討した成人版愛着スタイル尺度を使用する。ECR-GOは項目数が36と多いのに対し、本尺度は18項目となっており、調査協力者の負担を考慮すると項目数の少なさは利点であると考えられる。また、他尺度との相関も示されており、個人内特性としての安定傾向、回避傾向、アンビバレント傾向に注目した母親の被養育経験と養育態度との関連の検証過程において、本尺度の採用は妥当であると考えられる。

## 第6節 虐待に向かう母親の心性

子ども虐待の早期発見や予防、虐待を行う親への援助を考える場合、虐待に至る心理的特徴を把握することは重要であると考えられる。西澤・屋内(2006)は、虐待的行為につながる心理的特徴として虐待心性を取り上げ、虐待心性尺度の開発を試みた。その結果、因子分析により「体罰肯定」「自己の欲求優先」「被害的認知」「自信喪失」「疲労・疲弊」「完璧志向性」の6因子が抽出された。「被害的認知」「体罰肯定」「自己の欲求優先」は、虐待の世代間連鎖の有無に関連があるとされ、その中でも虐待行動に最も大きな影響を及ぼしているとされる「被害的認知」は、虐待傾向の強い者の中では被虐待経験を持つ者に特有の心理的特徴であることが示された。本研究では、虐待の世代間連鎖の有無に関連があるとされた「被害的認知」「体罰肯定」「自己の欲求優先」に絞って、世代間連鎖に関して、虐待心性の影響の及ぼし方の特徴を検討する。

「被害的認知」に関わると考えられる先行研究の中で、Steele & Pollock (1968)は、重度の虐待60例に関する研究において、子どもへの非現実的な期待と要求、および、乳幼児の要求や未熟さや無力さを無視して対応する養育という2つの基本要素を見出し、その背景に子どもについての親の知覚の重大な歪み(misperception)があるとした。中谷・中谷(2006)は、「認知の歪み」に注目し、これは、子どもの行動を悪意に解

積する、子どもに非現実的な期待をする、子どもが段階を追って成長することを理解しないなどの認知上の問題であるとした。田口・河原・西（2014）も、被害的認知とは、子どもが反抗的行動をとった際に“悪意を感じる”“バカにされた気がする”と、子どもの意図をことさら悪意に解釈する認知様式であるとしている。臨床事例においては、“この子わざと寝ないんです”“毎晩わざと夜泣きするんです”生後 11 か月の女の赤ちゃんを膝にのせた母親は先ほどからわが子が手におえないと訴えている（渡辺，2000）など、母親の被害的認知が指摘されている。中谷・中谷（2006）は、子どもの反抗行動に対する母親の認知と虐待的行為の関係を検討し、虐待的行為に影響を及ぼす母親の認知特性は、子どもに対する否定的認知ではなく、母親の自尊感情の低さや育児ストレスの高さからもたらされる被害的認知であることを明らかにし、一般の母親にも臨床群と同様の虐待メカニズムが存在することを示した。また、母親の未熟な防衛スタイルが虐待的行為を強いる傾向が示され、暴力系行為においては、「被害的認知」が影響を及ぼしていることが示唆された（中谷・本城・村瀬・金子，2007）。會田・大河原（2014）は、母親のネガティブな被養育経験（負情動・身体感覚否定経験）が、自尊感情、育児不安、被害的認知、「子どもをコントロールできない」という感覚（統制不能感）にどのような影響をあたえているのかを検討し、負情動否定経験認識が育児不安を高め、育児不安が被害的認知を高めると同時に、身体感覚否定経験認識が直接、被害的認知を高めることを明らかにした。

虐待心性の「体罰肯定」については、昨今、育児におけるしつけと体罰の境界についての議論が過熱していることもあり注目されている。子ども虐待についての認識に関して、どこまでを虐待と認識するかなどの研究も行われている（中嶋，2005；鈴木・木村・刀根・及川，2001）。体罰肯定に対する考えは文化的な違いも影響するが、被養育経験など、環境によっても影響を受けている可能性があり、虐待の世代間連鎖を検討する上で重要な要因となり得ると考えられる。

虐待心性として「自己の欲求優先」の概念も挙げられる。子育てより自分のことを優先させたいと考える親が増えており、育児負担感の文脈でも自己優先の概念は取り上げられている。子育ては、物理的にも経済的にも精神的にも自分のやりたいことへの我慢がついてくると考えられる。岩淵・奥澤・神川・川崎・中西・贅・稗田・津田・和田・野見山（2009）の母親の育児負担感への寄与因子の検討に関する研究において、育児による拘束因子がそれに当たる。母親の自己優先が虐待相当行為にどのように影響を及ぼし

ているのかを捉える必要がある。

## 第7節 育児困難感の背景要因

Belsky (1984) は、A process model of the determinants of parenting において、子どもの気質的要素と親の養育態度が子どもの発達に影響を及ぼすとともに、親の養育態度には、子どもの気質、ソーシャルネットワークや夫婦関係・家庭状況、仕事・経済的状况などの環境要因、および親の育ちの歴史・パーソナリティが影響しているというプロセスモデルを提唱した (Figure 1 は Belsky (1984) を基に田中 (2013) が改変)。“親が子ども時代に被った被虐待体験は、親の育ちの歴史に相当する。しかし、これは軽視すべきことではない。言い換えると、すべてはここから始まっている” (田中, 2013) とあるように、親の育ちの歴史、すなわち、被養育経験は、親の養育を規定する重要な要因である。さらに、育てにくい子どもへの対応に親が困難を抱える場合とともに、親側の何らかの要因による不適切な養育態度が子どもの発達を妨げ、育てにくい子どもとなっていく場合があり、母子相互作用と育児困難感は密接に関連していると考えられる。

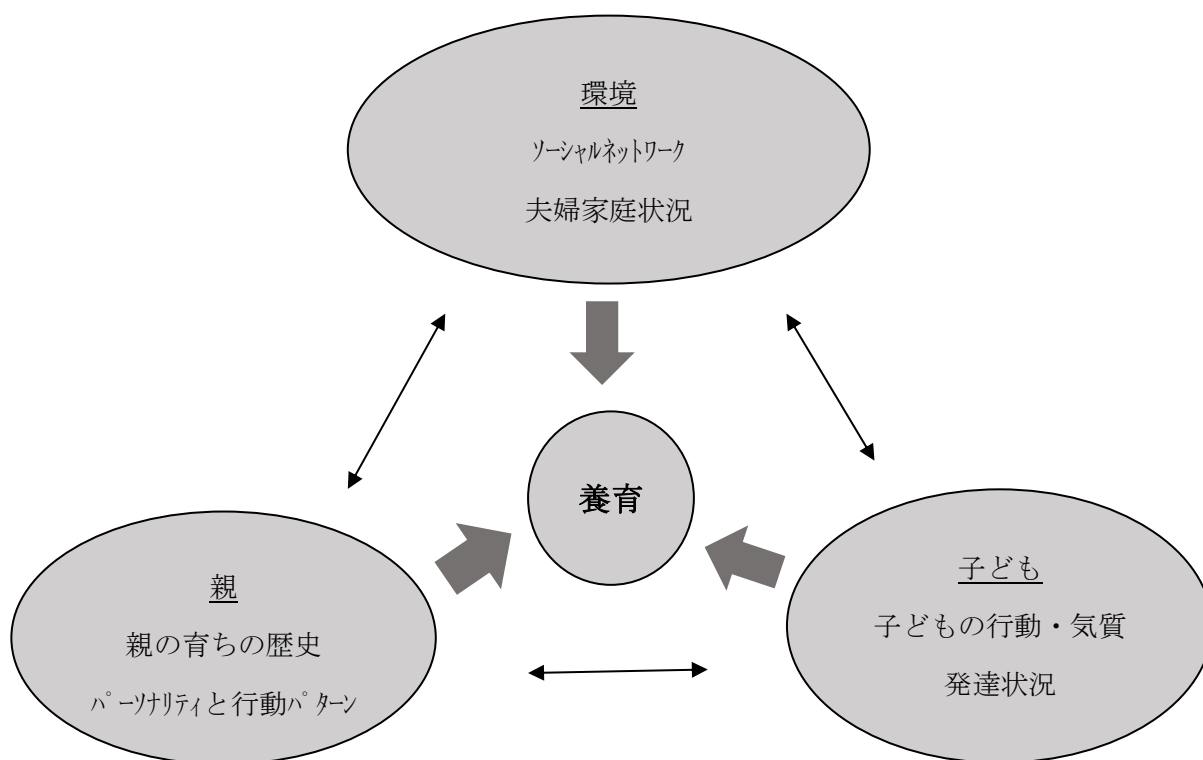


Figure 1 The determinants of parenting (Belsky, 1984/田中, 2013)



育児への否定的感情は“育児不安”あるいは“育児ストレス”などと呼ばれることが多いが、その名称や定義は統一されておらず、また同時に、その捉え方や内容も多岐に渡る（荒牧・無藤，2008）。様々な文脈で扱われ、その要因についての研究がなされてきた。育児不安の研究は、1980年代に牧野や本村らによって注目され、進められてきた。牧野（1982）は、育児不安に関連する要因として、母親自身の要因、家族の人間関係の要因、母親自身の意識に関する要因、母親の生活のあり方、母親の社会活動と社会関係の5つの要因を取り上げて調査を行った結果、夫婦関係と母親の社会的な人間関係のあり方が育児不安と関連があることが示された。本村・磯田・内田（1985）による育児不安の要因の検討においては、育児不安の低い母親は、母親役割以外に、仕事や趣味活動、社会活動に興味を示し、夫や地域社会と多くの関わりを持っていることが示された。1993年から川井ほかによって、育児不安に関する臨床的研究が続けられ、育児に関する困難感とは「育児困難感」と命名され、育児支援質問紙が開発された（川井・庄司・千賀・加藤・中村・谷口・恒次・安藤（1999）。川井・庄司・千賀・加藤・中村・安藤・谷口・佐藤・恒次（2000）において、育児困難感の規定要因について子どもの年齢別に検討している。成分として「夫・父親・家族機能の問題」「母親の不安・抑うつ傾向」「Difficult Baby」「夫の心身不調」「夫・父親の役割問題」「家族機能の問題」「育児困難感Ⅰ（心配・困惑・不適格感）」「育児困難感Ⅱ（ネガティブな感情・攻撃衝動性）」が抽出された。

その後、育児困難感との関連要因に関する研究が進められた。小原（2005）は、0歳児の母親と1歳児の母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連を検討し、0歳児の母親は、情動共感性の下位尺度である感情的被影響性と感情的冷淡さの高い母親ほど育児困難感が高く、1歳児の母親は、子どもの快感情を多く読み取る母親ほど育児困難感が高いことが示された。山口・丸井・斉藤・荒賀（2007）は、1歳児をもつ母親の育児困難感について、母親の属性との関連について検討した結果、妊娠中に何らかの異常があった母親において育児困難感との有意な関連が示され、妊娠中からの対応の必要性を述べている。荒牧・無藤（2008）は、母親の抱く育児への否定的・肯定的感情とその関連要因について検討し、「負担感」「育て方／育ちへの不安」「肯定感」に分かれることを確認した。「負担感」の関連要因に関して、末子の年齢が高いほど高く、夫や園の先生・友人らのサポートが多いほど低く、幼稚園群の方が保育所群よりも、専業主婦の方が有職者よりも高い傾向がみられた。「育ちへの不安感」は、男児を持つ母

親で高い傾向があり、「育て方への不安感」は、夫のサポートが多いほど低く、「育て方／育ちへの不安」は、ともに情報サポートが多いほど高いことが示唆された。岩淵ほか（2009）では、母親の育児負担感への寄与因子を検討し、母親の社会的活動制限にはサポート不足と育児の知識と技術不足が、児に対する否定的感情には子どもの特性が有意に寄与していることが示された。渡邊（2011）は、サポートによって変え得るリスクに着目することがより多くの親を対象とする一次予防につながるとして育児不安に着目している。さらに、「育児不安」の下位概念であり、育児の中で感じられる不安のうち虐待に対する漠然とした不安や恐れを伴う状態であるという「虐待不安」が、妊娠期の母親への調査によって「育児ヘルプ」と関連することが示され、妊娠期からのソーシャル・サポートの重要性を述べている（渡邊，2014）。井田（2013）は、母親の育児困難感の概念分析を行い、先行要因として「母親の要因」「子どもの要因」「夫の要因」「育児支援」「家庭の要因」が抽出された。坂田・成瀬・田口・村嶋（2014）は、幼児の行動特性を、外向的特性群、内向的特性群、混合型特性群に分けて母親の育児困難感との関連要因を検討し、いずれの行動特性群でも、自己効力感が低いこと、家族からの評価サポートを受けていないことが、育児困難感の高さに関連していることを明らかにした。

育児に関する不安や困難感については様々な用語が使用されてきたが、本研究においては、育児困難感として束ねて扱うこととする。また、ネガティブな被養育経験は、ネガティブな感情を抱いている自分が受けてきた養育と定義する。本研究では、育児困難感の背景要因の一つであると考えられるネガティブな被養育経験に注目し、ネガティブな被養育経験による育児困難感を抱える母親の育ちの歴史、すなわち、ネガティブな被養育経験が、どのように子育てに影響を及ぼしているのか、その発生機序と、ネガティブな被養育経験を乗り越えようとする母親の心理プロセスについて検討する。

## 第8節 育児困難感を示す母親への支援

育児期の母親への社会的サポートはさまざま存在する。少子化や核家族化が進む中、地域での子育てや自治体による社会的サポートが充実しつつある。しかし、そのようなサポート体制が整っていったとしても、それが親たちにとってどのような助けになるのか、援助者は何に注意を払ってどのように支援していけばいいのかの吟味が重要であると考えられる。

中谷（2002）は、虐待の世代間連鎖と子育て支援事業の認知に関する研究において、非虐待群は、支援事業に関する情報量が少ない結果となったが、それは母親自身が持つサポート資源が多いために、精神的・肉体的なゆとりが影響していると述べている。また、虐待連鎖群においては、支援事業の情報量は他の群と比較して有意に多いにも関わらず、支援事業別には他の群と比べて有意差がでなかった結果から、内省的自己の未熟さが、真に自分に必要な支援とは何かを突き詰めることを妨げ、何をしてもらいたいのかよくわからない状況に陥らせているのではないかと考察している。

Kempe & Helfer（1972）は、革新的な治療的アプローチとして、被虐待児症候群が初めて疑われ診断されるときには家族構成にひそむ精神病理についての高度に専門的で正確な評価が絶対的に重要であるとした上で、次のような地域支援を提示している。地域住民の年長者による育児支援、熟練の保健師による訪問、家事援助ホームヘルプ、一時保育、虐待する親の相互援助グループである。ハイリスク家庭に対して、有効な援助的介入は何よりもアウトリーチであるべき（久保田，2013）との指摘もある。保健所、学校、幼稚園、保育所、いずれの場所において心理相談は行われており、その視点はいかされると考えられる。

また、Gray, Kempe et al.（1979）は、虐待の予後と予防を検討するにあたり、出産前の情報 74 項目の質問紙の実施、分娩室での情報のアセスメント、産後 6 週間の観察と問診による評価を行い、高リスク介入群、高リスク介入なし群、低リスク群の各 50 例を同定した。評価においては、分娩室での親子の相互関係の観察から得られる情報が最も正確であった。介入については、小児科医による新生児室での診察、産後病棟での親との面接、継続的な小児科医の診察および保健師の訪問、必要医療機関への紹介などを行い、平均 26.8 か月後に家族を評価した。婚姻状態（単身）および年齢（若年）が高リスク群と低リスク群の間で有意差があった。異常な養育態度は改善されなかったが、予防的介入を行ったことにより、子どもの虐待を防ぐことができた結果となった。このことから、小児医学と地域支援による早期の予防的介入の効果が期待できるとし、特別な援助を要する家族を同定し、肯定的で支援的、集中的で継続的な介入につなげる必要性を述べた。

虐待してしまう、あるいは養育困難に陥っている親への援助において重要なことは、育児指導ではなく育児支援である（鷺山，2016a）。①親の相談者になることで心理社会的孤立を解き、②生活ストレスの軽減を図り、③子どもの心身の健康を他の大人が関わ

ることで改善し、④これらの援助で親の負担が軽減した後で親の育児を変える働きかけを行う（小林，2007）。この順序が大切なのは、①～③を親が体験することで形成される援助関係なしには、しばしば援助拒否を誘発するからである（鷺山，2016a）。

Steele（1997／2003）は、子どもを虐待する親は他者を信頼すること、自分もケアを受けてよいと思えるようになること、人に気を遣われることによって人を気遣うことを学ぶことが必要であるとしている。これらの課題は、個別支援にくわえて、ハイリスク親支援グループを併用することで大幅に前進しやすくなる（鷺山，2016b）。とある。育児困難感を抱える母親をどのように支えるか、その方法論の検討も求められる。

また、木部（2012）は、「育てにくい子」と一般的に称される乳児に触れ、育児困難は、母親だけの要因でないことを示し、子育て支援には、母親だけでなく、子どもの発達、気質、心的状態を判断する必要があると述べている。

鵜飼（2000）は、児童虐待は常に世代間で伝達すると自動的に考えるのではなく、その親がいかに自分の生活史を受け入れているのかによって示される個人の内的表象の問題、あるいはいかに自分の葛藤を克服しているのか、またどれだけの社会的、経済的サポートを受けることができているのかなどという複雑な諸問題の関係のなかで捉えるべきであろうと述べている。平井（2015）は、自分自身の「育てられ経験」を信頼のできる人に話せること、そして失敗も含めて親としての「ありのまま」を受け入れ赦されること、しかし、より良い親であろうと、子どものことを考え続けるために協働関係を持つこと。こうしたことが子育て支援においては決定的に重要な要素であるとしている。さらに、子育て支援は親を育てる支援であり、子どものことを一緒に考える協働関係を持ちつつ、その親の中にある子どもも育てていくことが含まれているのかもしれないと述べている。

## 第2章 本論文の目的と構成

### 第1節 本論文の目的

子どもの健やかな成長を支える重要な要素として親の養育態度があると考えられる。特に幼少期・児童期における親の影響は大きく、親が子どもに対して適切な関わりを持つことがむずかしい状態となる育児困難感への支援は緊急を要する課題である。本研究では、育児困難感の背景要因のひとつであるネガティブな被養育経験を有する母親を対象に、不適切な養育の世代間連鎖と不連続性について検討し、ネガティブな被養育経験を乗り越えようとする母親の心理プロセスとその支援のあり方について提案することを目的とする。

重要なことは、世代間連鎖の程度を厳密に捉えるよりも、世代間連鎖（と連鎖しない場合）の過程と、その過程に共通する（連鎖を）促進する要因、抑制する要因、媒介要因を捉えることだと言える。なぜならば、ハイリスク親子・家族への早期からの予防的支援プログラムの有効性を高めるには、媒介要因などの明確化こそが重要である（久保田, 2013）。すなわち、ネガティブな被養育経験が影響して生じる育児困難感が生じるプロセスおよび要因、克服しようとする心理プロセスを検討することが、母親への心理的支援を有効に行うための鍵になると考えられる。そこで本研究では、一般家庭の幼児を持つ母親を対象に、ネガティブな被養育経験の世代間連鎖の特徴を検討し（研究1）、母親の被養育経験と現在の養育態度との世代間連鎖と「愛着スタイル」「虐待心性」をプロセス要因と捉えて検討する（研究2）。そして、ネガティブな被養育経験を有する母親を対象にインタビュー調査を行うことにより、ネガティブな被養育経験によって生じる育児困難感の発生機序、および、ネガティブな被養育経験を乗り越えようとする母親の心理プロセスと克服への要因を明らかにしたい（研究3）。さらに、縦断的インタビュー調査を実施し、子どもが児童期になることによって育児困難感がどのように変容していくのかそのプロセスについて検討する（研究4）。さらに、そのうちの3名の母親のパーソナリティ検査を検討すること、および、心理療法を行っている1名の経過を検討することにより、ネガティブな被養育経験を持つ母親の特徴と介入による変容について検討する（研究5）。研究1から研究5によって、ネガティブな被養育経験によって育児困難感を示す母親への心理的支援の視点について提案することを目的とする。

研究1において、幼児を育てる一般家庭の母親に焦点をあて、虐待に限定しないネガ

ティブと思われる被養育経験がある母親がどのくらい存在し、現在どのような養育態度をとっているかという世代間連鎖について検討することを目的とする。被養育経験尺度得点および養育態度尺度得点を用いて、ネガティブな被養育経験があり現在の養育が不適切な傾向がみられる母親を連鎖あり群、ネガティブな被養育経験がありながらも現在不適切な養育態度がみられない母親を連鎖なし群、ネガティブな被養育経験がなく現在の養育が不適切な傾向がみられる母親を不適切養育群、ネガティブな被養育経験がなく現在不適切な養育がみられない母親を安定養育群に分類する（Figure 2）。それぞれの群において、被養育経験によって形成され则认为られている愛着スタイルと不適切な養育態度に影響を及ぼすと考えられている虐待心性（西澤・屋内，2006）について、その特徴的な傾向について検討することを目的とする

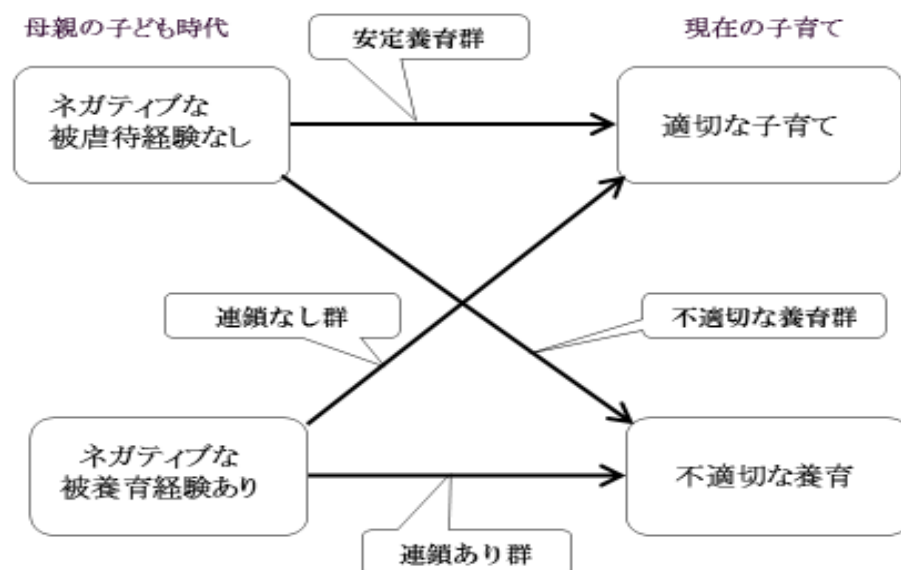


Figure 2 研究1の連鎖分類

研究2では、研究1で得られた結果と先行研究に基づいて仮説モデルを作成（Figure 3）、母親のネガティブな被養育経験が自分の子どもへの不適切な養育態度に与える影響について、母親の愛着スタイルと虐待心性をプロセス要因とする。共分散構造分析によって検証し、不適切な養育態度の世代間連鎖の因果関係モデルを提示することを目的とする。

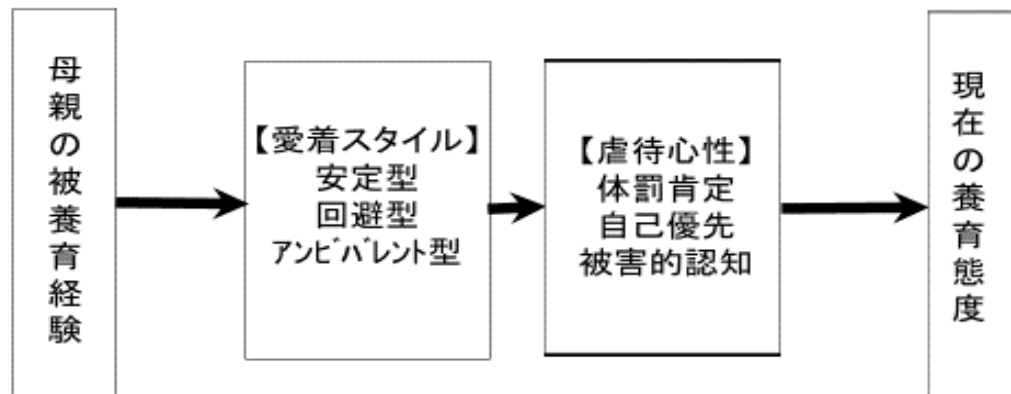


Figure 3 研究 2 の仮説モデル図

研究 3 では、ネガティブな被養育経験を有する母親に対してインタビュー調査を行い、ネガティブな被養育経験からどのような影響を受け、どのような育児困難感があるのか、子どもとどう向き合いどう乗り越えようとしているのか、という母親の心理プロセスについて探索的に検討することを目的とする。臨床群の先行研究によって示された負の世代間連鎖を断ち切る要因としての自らの経験を振り返り語る能力、すなわち内省、親に代わる重要他者の存在、社会的サポートの享受に着目して検討する。また、インタビュー対象者のうち、連鎖あり群と連鎖なし群の母親の特徴と心理プロセスを比較して、連鎖を乗り越える要因について検討することを目的とする。

研究 4 では、研究 3 の対象者に対して縦断的インタビュー調査を実施し、幼児であった子どもが児童期に入ったことによって、母親のネガティブな被養育経験の影響はどのように変化していくのかについて探索的に検討することを目的とする。児童期はアタッチメントが物理的近接から表象的近接へと実質的に切り替わる一大転換期である（遠藤，2010）というように、児童期への注目は重要であると考えられる。そこで、児童期の子育てにおいて、ネガティブな被養育経験による母親の育児困難感が、幼児期と比較してどう変容しているのか、どう乗り越えようとしているのかという心理プロセスについて探索的に検討することを目的とする。さらに、研究 3 と併せて、ネガティブな被養育経

験を持つ母親の育児困難感の特徴とあり様を概念化することを目的とする。

研究 5 では、インタビュー対象者のうち 3 名の母親のロールシャッハ・テストと文章完成法（Sentence completion test：以下 SCT とする）の結果について検討してパーソナリティの側面から考察するとともに、継続的な心理療法による効果と変容過程について検証することにより、ネガティブな被養育経験を持つ母親の介入の視点を提案することを目的とする。

子育て支援等の母子臨床に関わる専門家は、育児困難に陥っている要因、そして悪循環を見出し、合理的かつ効果的な治療構造を創造することが任務である（木部，2015）。子育てに向き合う母親が困難感を呈した時、その背景要因を吟味して、的確な見立てと援助の方針を立てることが重要であると考えられる。研究 1・研究 2 から導き出された、ネガティブな被養育経験が不適切な養育態度に及ぼす影響のモデル図と、研究 3・研究 4 において示された、ネガティブな被養育経験の連鎖を乗り越えようとする心理プロセス、および、研究 5・研究 6 によるネガティブな被養育経験を有する母親の特徴と介入による変容の検討を総合して、ネガティブな被養育経験による育児困難感を抱える母親への心理的支援モデルを提示することを目的とする。



## 第2節 本論文の構成

本論文の構成は以下（Figure 4）の通りである。

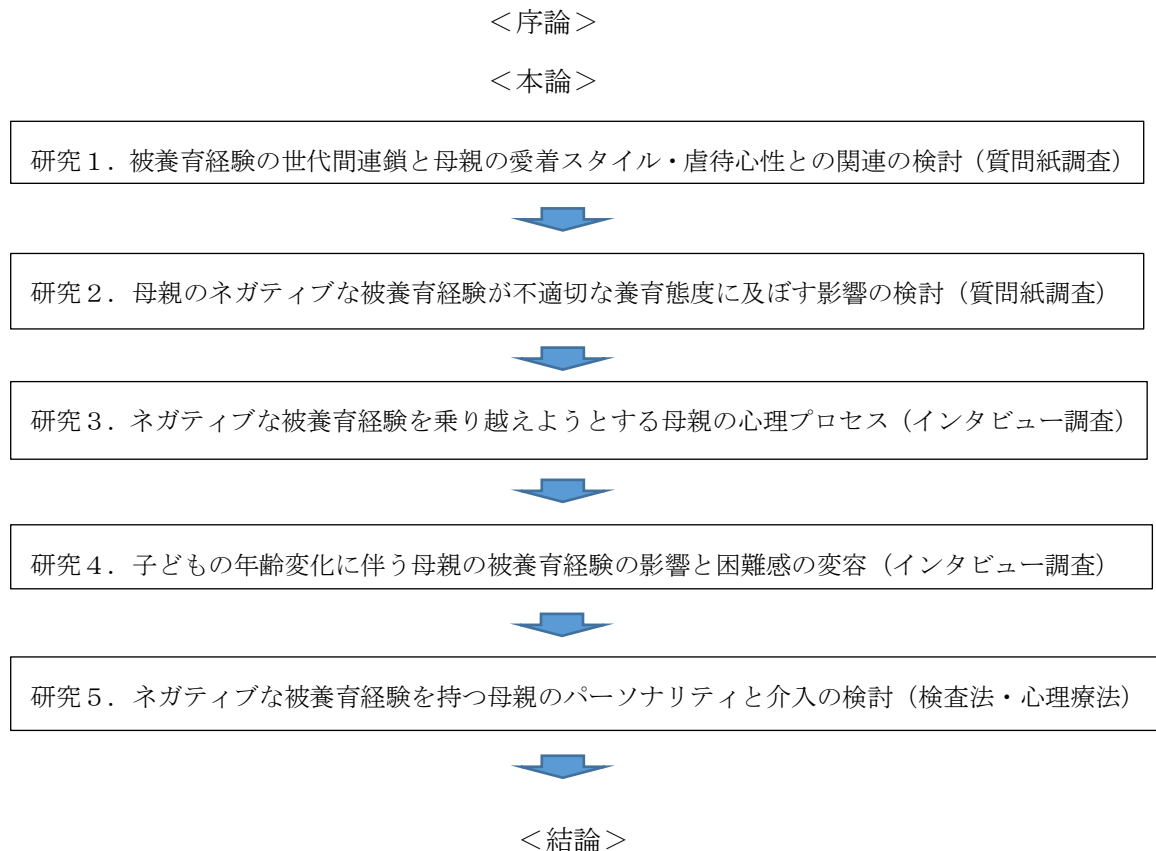


Figure 4 本論文の構成

### 研究1 被養育経験の世代間連鎖と母親の愛着スタイル・虐待心性との関連

幼児を育てる一般家庭の母親に焦点をあて、虐待に限定しないネガティブと思われる被養育経験がある母親がどのくらい存在し、現在どのような養育態度をとっているかという世代間連鎖について、被養育経験尺度、養育態度尺度、愛着スタイル尺度（託摩・戸田，1988）、虐待心性尺度（西澤・屋内，2006）を用いて検討、世代間連鎖の要因および特徴について検討する。

### 研究2 母親のネガティブな被養育経験が不適切な養育態度に与える影響の検討

研究2では、研究1で得られた結果と先行研究によって導き出された仮説モデルを提

示，母親のネガティブな被養育経験が現在の子どもへの不適切な養育態度に与える影響について，母親の愛着スタイルと虐待心性をプロセス要因として因果関係を共分散構造分析によって検証する。

### **研究 3 ネガティブな被養育経験を乗り越えようとする母親の心理プロセス**

研究 3 では，ネガティブな被養育経験がある母親に対してインタビュー調査を行い，ネガティブな被養育経験からどのような影響を受け，どのような育児困難感が生じ，どのように乗り越えようとしているのかというプロセスについて探索的に検討する。臨床群の先行研究によって示された負の世代間連鎖を断ち切る要因としての自らの経験を振り返り語る能力，親に代わる重要他者の存在，社会的サポートの享受についても検討する。

### **研究 4 子どもの年齢変化に伴う母親のネガティブな被養育経験の影響と困難感の変容の検討**

研究 4 では，研究 3 の対象者に対して縦断的インタビュー調査を実施し，幼児であった子どもが児童期に入ったことによって，母親のネガティブな被養育経験の影響と育児困難感がどのように変化していくのか，幼児期との比較も含めて探索的に検討する。

### **研究 5 ネガティブな被養育経験を持つ母親の特徴と介入の検討**

研究 5 では，研究 4 のインタビュー協力者のうち，3 名の母親のロールシャッハ・テストと SCT の結果をもとに，ネガティブな被養育経験を持つ母親のパーソナリティの側面を検討する。また，単発的な介入と継続的な心理療法を通して，ネガティブな被養育経験を有する母親への介入による変容過程について検討する。

## **総合考察**

研究 1，研究 2，研究 3，研究 4，研究 5 の結果と考察を踏まえて，ネガティブな被養育経験を持つ母親特有の育児困難感の特徴とあり様について概念化していく。さらに，研究 1・研究 2 から導き出された，ネガティブな被養育経験が不適切な養育態度に及ぼす影響のモデル図と，研究 3・研究 4 において示された，ネガティブな被養育経験の連鎖を乗り越えようとする心理プロセス，および，研究 5 によるネガティブな被養育経験

を有する母親の特徴と介入による変容の検討を総合して、ネガティブな被養育経験による育児困難感を抱える母親への心理的支援モデルについて提示する。

## 本論

---

### 第3章 研究1 被養育経験の世代間連鎖と母親の愛着スタイル・虐待心性との関連

#### 第1節 目的

一般家庭の幼児を持つ母親に焦点をあて、どの程度ネガティブな被養育経験があり、それがどのように現在の子育てにおける養育態度に影響を及ぼしているのかを調査し、ネガティブな養育の世代間連鎖について検討するとともに、母親の内的側面に注目した支援のあり方を提案することを目的とする。内的側面を捉える媒介要因として、被援助行動にも影響があると考えられる母親の愛着スタイル、および、虐待心性として、体罰肯定、自己優先、被害的認知についてその特徴を検討する。

ネガティブな被養育経験があり現在不適切な養育態度を示す母親を連鎖あり群、ネガティブな被養育経験がありながらも適応的な子育てを行う母親を連鎖なし群、ネガティブな被養育経験がなく現在不適切な養育態度を示す母親を不適切養育群、ネガティブな被養育経験がなく現在適応的な養育態度を示す母親を安定養育群に分類し、ネガティブな養育の世代間連鎖の特徴を検討する。

#### 第2節 方法

##### 2-1 調査対象

調査対象者は、幼児を持つ母親 1257 名とした。虐待が生じる年齢のピークの 1 つが 3 歳前後の保育園児の年齢であること（納谷・小林・鈴木，1995），虐待の加害者としては、平成 13 年度全国児童相談所の虐待相談の統計より、母親が 64. 5%である（本間，2003）ことから、幼稚園・保育園に通う幼児を持つ母親を対象とした。

都市部の母親だけを対象とするとデータに偏りが生じる可能性があるため、関東圏内の都と県、東海圏内の県にある園の保護者を対象とした。関東圏内の A 幼稚園，B 幼稚園，C 幼稚園，D 保育園，E 幼保園の保護者に対して、また、東海圏内の F 幼稚園，G 幼稚園，H 保育園の保護者に対して質問紙を配布した。その他、関東圏内・東海圏内に住む調査者の知人を介して直接母親に配布した。また、精神科医の紹介による臨床群の母親 3 名に対して直接実施した。

##### 2-2 調査時期

2013 年 7 月下旬～10 月中旬

## 2-3 調査方法

個別自記入形式の質問紙調査を実施した。調査実施にあたり、8つの園の園長に対して調査の趣旨と実施時期や方法の説明を行い、実施の了解を得た。それぞれ調査実施前に、質問紙とともに調査に関する注意事項を記述した文書と、大学からの協力依頼文書を手渡して説明した。決定した実施期間に、担当の職員から保護者に届くよう手渡しされた。A, B, C, D, E, G, Hの園においては、園の出入り口に回収用ボックスを取り付け、保護者が入れる形式とした。F 幼稚園については、保護者から担当の先生、もしくは園の事務所に届けてもらう形式とした。質問紙は個別に封筒に入れ、回収は封筒に入れて封をしたうえで回収する形式をとっており、個人の情報が露出しないよう配慮した。保護者への質問紙調査の協力依頼については、回収箱にその旨を記載した文書を掲示した。同時に、園発行のお便り、またはお知らせによって、その旨が保護者に伝達された。園への配布の他に、知人を介しての配布を行い回収した。また、精神科医の紹介による臨床群3名に対し質問紙調査を実施した。

質問紙のタイトルは「子育てに関するアンケート」とし、表紙には、小さな子どもを育てる母親への支援に役立てるという趣旨、および、回収は強制ではないことを記載した。謝礼は提示しなかった。回答はいずれも無記名で行われ、インタビューへの協力に同意した場合に連絡先を記入する形式とした。

## 2-4 調査内容

本調査の質問紙を付録に示す。質問紙は全対象者に対して同一とした。

### 2-4-1 フェイスシート

年齢、性別、就労形態①専業主婦、②常勤、③パート・アルバイト、④自営手伝い、⑤その他（自由記述）からの選択、教育歴①中学、②高校、③専門学校、④大学、⑥大学院、⑦その他（自由記述）からの選択、夫の年齢、夫の職業（自由記述）、子どもの年齢・性別、家族構成①配偶者、②子どもの人数、③実父、④実母、⑤義父、⑥義母、⑦きょうだい（自由記述）、⑧その他（自由記述）からの選択（複数回答可）についての記入を求めた。

#### 2-4-2 育児環境

親族の同居・近居の有無とその人物の自由記述，育児援助者の有無とその人物の自由記述，育児相談者の有無とその人物の自由記述，夫のサポートへの満足度①満足している，②普通，③不満であるからの選択，自分が育った家の家族構成①父，②母，③きょうだい，④祖父母，⑤その他（自由記述）からの選択（複数回答可）についての記入を求めた。

#### 2-4-3 被養育経験尺度

Child Abuse and Trauma Scale（Sanders & Becker-Laussen, 1995）を邦訳，および，中嶋（2004）の被虐待相当行為経験尺度を参照し，日本の虐待の定義と照らし合わせ，虐待の専門家の意見を参考に項目を追加・削除した。それらについて，幼児をもつ母親3名に対して予備的調査を行い，伝わりにくい質問や言葉づかいについて，適切になるよう項目内容を修正した。回答者の負担を考慮し，項目数を減らすため，先行研究における因子負荷量の低い項目を中心に削除した。なお，性的虐待に相当する項目は，フラッシュバックや回答の拒否の高まりが予想されたため加えていない。質問項目は20項目，回答は，「1：まったくそうではなかった」「2：あまりそうではなかった」「3：どちらともいえない」「4：どちらかというところだった」「5：いつもそうだった」の5件法とした。

#### 2-4-4 養育態度尺度

花田・小西（2003）の『母親の養育態度における潜在的虐待リスクスクリーニング質問紙』の「力に頼らない養育態度」「自己肯定感を育む養育態度」因子の11項目，唐・矢嶋・桐野・種子・中嶋（2005）の『母親の子どもに対するマルトリートメント』の項目群から因子負荷量が0.4以上で重要だと思われる項目を採用し，17項目とした。回答者への心理的な抵抗や虚偽の回答につながる可能性を考慮し質問文を不適切な養育態度を直接尋ねる質問項目から肯定的な養育態度に変えて作成，回答は，「1：まったくそうではない」「2：あまりそうではない」「3：どちらともいえない」「4：どちらかというところである」「5：いつもそうだ」の5件法とした。

#### 2-4-5 成人版愛着スタイル尺度

尺度は、Hazan & Shaver の成人の愛着尺度での記述をいくつかの文章に分けて尺度項目とし、それらをリッカート法によって評定する託摩・戸田（1988）によって作成された成人版愛着スタイル尺度を使用した。安定型，回避型，アンビバレント型の各愛着スタイルの特性を記述したそれぞれ 6 つの下位項目計 18 項目から構成され，これを「非常によくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの 5 件法で評定した。尺度の併存的妥当性，構成概念妥当性は託摩・戸田（1988）で確認されている。

成人愛着スタイル尺度としては，“親密な対人関係体験尺度”（Brennan et al, 1998）（Experience in Close Relationships inventory ; ECR と略す）が，規準的な測度となりつつある（中尾・加藤，2004）が，本研究では，項目数の観点から託摩・戸田（1988）の尺度を使用することとした。両者の関連に関する考察は研究 2 において述べる。

#### 2-4-6 虐待心性尺度

西澤・屋内（2006）の虐待心性尺度のうち，被虐待経験および虐待相当行為との関連が深いことが示された 3 つの因子「被害的認知」「自分の欲求優先」「体罰肯定」のそれぞれの因子から因子負荷量が高いものから 3 項目ずつ採用，「非常にあてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」「まったくあてはまらない」の 4 件法の質問紙を作成した。

#### 2-5 統計処理

統計処理には IBM SPSS Statistics 23 を使用した。

### 第 3 節 結果

#### 3-1 有効回答者

質問紙は全部で 1257 部配布され，777 部回収された（回収率 61. 8%）。園において配布された質問紙は 1163 部で，687 部回収された（回収率 59. 1%）。知人を介して配布された質問紙は 91 部で 87 部回収された（回収率 95. 6%）。臨床群は 3 部であった。777 部のうち，父親が記入したものと子どもの年齢が 1 歳であった母親の回答を分析から除外し，有効回答者は 775 名であった。平均年齢 36. 7 歳（ $SD=4. 17$ ），関東圏幼稚園 467 名（60. 3%），関東圏保育園 70 名（9. 0%），東海圏幼稚園 186 名（24. 0%），



東海圏保育園 52 名 (6. 7%) であった。家族構成は、核家族きょうだい有が 516 名 (66. 6%)、核家族きょうだい無が 137 名 (17. 7%)、多世帯家族きょうだい有が 92 名 (11. 9%)、多世帯家族きょうだい無が 12 名 (1. 5%)、核家族母子父子家庭が 6 名 (0. 8%)、多世帯家族母子父子家庭が 4 名 (0. 5%) であった。就労形態は、専業主婦が 465 名 (60. 0%)、常勤が 70 名 (9. 0%)、パート・アルバイトが 191 名 (24. 6%)、自営手伝いが 19 名 (2. 5%) 他であった。

### 3-2 被養育経験尺度の構造

被養育経験尺度の 20 項目の平均値と標準偏差を算出し、天井効果・床効果について検討した結果、12 項目において天井効果がみられた。本尺度は、集団から外れている人を問題視するスクリーニングテストの要素がある尺度であるため、元々天井効果を性質として有する尺度である。本調査では、臨床群ではない、幼児を園に通わせている一般家庭の母親を対象としているため、虐待傾向のある不適切な養育を受けていないという回答をした場合の高得点群を想定している。また、天井効果の見られる項目においても、不適切な被養育経験のある対象者は低い回答を示していたため、天井効果の見られた項目を排除せず、そのまま採用することとした。20 項目全てを採用して最尤法による因子分析を行った。固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮すると 3 因子構造が妥当であると考えられ、再度 3 因子を仮定して最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果に対し、共通性が .30 未満であり、因子負荷量が .35 以下で十分な値を示さなかったもの 1 項目を除外し、残りの 19 項目に対して再度最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。プロマックス回転後の最終的因子パターンと因子間相関を Table 1 に示す。なお回転前の 3 因子で 19 項目の全分散を説明する割合は 47. 14%であった。

各項目は、被養育経験についての肯定的な質問内容になっており、まったくそうではなかった、あまりそうではなかったなど、肯定的な質問項目に対して否定で答えると得点が低く、被養育経験がよりネガティブである構造であった。否定的な質問項目は逆転項目として扱い、合計得点が低いほど被養育経験がネガティブであることを示した。

Table 1 被養育経験尺度因子分析結果

	I	II	III	共通性
<b>I : 心理的虐待 (<math>\alpha = .90</math>)</b>				
親は私の意見を尊重していた	.82	-.07	-.12	.53
親は私を傷つけないような言葉がけをしてくれた	.81	.08	-.18	.65
親は私によく関わり、守ってくれた	.73	-.13	.21	.39
私の家のルールは納得のいくルールだった	.64	.07	.01	.59
親は私の学校のことや興味があることに関心を示してくれた	.64	-.17	.23	.27
親は私のことを大事にしてくれた	.62	-.05	.27	.52
親はきょうだいをみな平等に扱っていた	.61	.02	.03	.37
ほんのささいなことでも親にひどくしかられた*	.57	.40	-.29	.32
親に放っておかれていたと感じた*	.51	-.04	.31	.57
何も悪いことをしていないのに起こられたりどなられることがあった*	.45	.33	.02	.47
親に無視された*	.41	.21	.11	.51
<b>II : 身体的虐待 (<math>\alpha = .80</math>)</b>				
親に物を投げつけられた*	-.07	.75	.17	.37
親にけられた*	-.10	.73	.19	.50
親に何か物を使ってたたかれた*	-.04	.73	.02	.59
親に平手やげんこつでたたかれた*	.09	.60	-.12	.29
親に部屋や風呂場などに閉じ込められた*	-.02	.53	-.01	.55
<b>III : ネグレクト (<math>\alpha = .64</math>)</b>				
親は洗濯や身の回りの世話をしてくれた	-.03	.02	.58	.59
親は栄養が十分な食事を用意してくれた	.07	.05	.55	.48
病気やケガをしたときは病院に連れていってもらった	.00	.11	.50	.41
回転後の負荷量平方和	6.06	4.25	3.23	
因子間相関	I	II	III	
I	-	.53	.54	
II		-	.25	
III			-	

因子抽出法: 最尤法 プロマックス回転

\*: 逆転項目

第1因子は、‘親は私の意見を尊重していた’‘親は私を傷つけないような言葉がけをしてくれた’‘親は私によく関わり、守ってくれた’など、得点が低いと受容的でない養育となる項目が高い負荷量を示していた。そこでこれを「心理的虐待」と命名した。第2因子は、‘親にものを投げつけられた’‘親にけられた’など、身体的な攻撃の項目に高い負荷量を示しており、「身体的虐待」と命名した。第3因子は、‘親は洗濯や身の回

りの世話をしてくれた’ ‘親は栄養が十分な食事を用意してくれた’ ‘病気やケガをしたときは、病院に連れていってもらった’ などの項目で、得点が低い場合、育児放棄にあたる内容であり、「ネグレクト」と命名した。

このようにネガティブな被養育経験に関する項目は「心理的虐待」「身体的虐待」「ネグレクト」から構成されることが明らかとなった。「心理的虐待」の各項目の平均得点は 43. 1 ( $SD=8. 07$ ) であった。「身体的虐待」の各項目の平均得点は 21. 4 ( $SD=3. 80$ ) であった。「ネグレクト」の各項目の平均得点は 14. 1 ( $SD=1. 63$ ) であった。

内的整合性を検討するために信頼性係数 (Cronbachの $\alpha$ 係数) を算出したところ、「心理的虐待」で. 90, 「身体的虐待」で. 80, 「ネグレクト」で. 64と概ね十分な値が得られた。

### 3-3 養育態度尺度の構造

養育態度尺度の 17 項目の平均値と標準偏差を算出し、天井効果・床効果について検討したところ、7 項目において天井効果がみられたが、被養育経験尺度と同様に、内容的に必要な項目と判断し、17 項目すべてを採用して最尤法による因子分析を行った。固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮すると 3 因子構造が妥当であると考えられ、再度 3 因子を仮定して最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果に対し、共通性が. 30 未満であるものと、因子負荷量が. 35 以下で十分な値を示さなかったもの 4 項目を除外し、残りの 13 項目に対して再度最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。プロマックス回転後の最終的因子パターンと因子間相関を Table 2 に示す。なお回転前の 3 因子で 13 項目の全分散を説明する割合は 51. 20%であった。

Table 2 養育態度尺度因子分析結果

	I	II	III	共通性
<b>I : 身体的虐待 (<math>\alpha = .83</math>)</b>				
外に閉め出さない	.85	-.01	-.03	.61
部屋や風呂場に閉じ込めない	.85	.00	-.08	.44
子どもだけを家に残して夜間に外出はしない	.64	-.02	-.20	.50
物をなげつけない	.59	.07	.14	.51
頭はたたかない	.46	.03	.29	.33
お尻はたたかない	.43	-.09	.27	.49
<b>II : 無関心 (<math>\alpha = .80</math>)</b>				
私は子どもとスキンシップをとっている	.02	.80	-.06	.44
子どもと一緒に遊んでいる	-.04	.72	-.01	.69
子どもの話をよく聞く	-.05	.67	.10	.59
小さいことでも良いことはほめる	.04	.66	-.02	.66
<b>III : 不適切な声掛け (<math>\alpha = .79</math>)</b>				
感情的にしかることはない	-.12	.01	.81	.51
子どもをしかるとき大声を出さない	-.05	-.06	.81	.57
子どもが傷つくようなことは言わない	.11	.09	.61	.32
回転後の負荷量平方和				
	<b>3.24</b>	2.73	3.04	
因子間相関				
I	-	.27	.48	
II		-	.48	
III			-	

因子抽出法: 最尤法・プロマックス回転

第1因子は6項目で構成されており, ‘外に閉め出さない’ ‘部屋や風呂場に閉じ込めない’ ‘子どもだけを家に残して夜間に外出しない’ ‘物をなげつけない’ ‘頭はたたかない’ ‘お尻はたたかない’ の項目が高い因子負荷量を示していた。これに対し, あまりそうではない, まったくそうではない, を選択して点数が低くなった場合, 身体的虐待傾向にあると考えられるため, これを「身体的虐待」因子と命名した。第2因子は4項目で構成されており, ‘子どもとスキンシップをとっている’ ‘子どもと一緒に遊んでいる’ ‘子どもの話をよく聞く’ ‘小さいことでも良いことはほめる’ の項目が高い因子負荷量を示していた。これに対し, あまりそうではない, まったくそうではない, を選択して点数が低くなった場合, 関わらない, 放っておくという状態になるため, 「無関心」因子

と命名した。質問紙の項目には、‘親は洗濯や身の回りの世話をしてくれた’‘病気やケガをしたときは病院に連れていってもらった’など、ネグレクトに含まれる重度の育児放棄の内容を含んでいたが、因子分析の結果、分析項目から削除することとなった。今回の調査対象者が子どもを幼稚園・保育園に通わせている一般家庭の母親であり、また、現在の育児の様子を問う項目であったため、生命に関わるようなネグレクトを測る項目は尺度として成立しなかったと考えられる。第3因子は3項目で構成されており、‘感情的に叱ることはない’‘子どもを叱るときは大声を出さない’‘子どもが傷つくようなことは言わない’の項目が高い因子負荷量を示した。この設問に対し、あまりそうではない、まったくそうではない、を選択して点数が低くなった場合、子どもに対して心理的に攻撃していると考えられるため、「不適切な声掛け」因子と命名した。

このように、園に通わせる幼児を持つ母親への不適切な傾向を測る養育態度尺度は、「身体的虐待」「無関心」「不適切な声掛け」から構成されることが明らかとなった。「身体的虐待」の各項目の平均得点は 24. 6 ( $SD=5. 22$ ) であった。「無関心」の各項目の平均得点は 15. 3 ( $SD=6. 83$ ) であった。「不適切な声掛け」の各項目の平均得点は 8. 31 ( $SD=6. 61$ ) であった。

各因子における得点を合計した値を下位尺度得点とした。内的整合性を検討するために信頼性係数 (Cronbach の  $\alpha$  係数) を算出したところ、「身体的虐待」で . 83, 「無関心」で . 80, 「不適切な声掛け」で . 79 と十分な値が得られた。

### 3-4 成人版愛着スタイル尺度の構造

まず成人版愛着スタイル尺度の 18 項目の平均値と標準偏差を算出し、天井効果もしくは床効果の有無を確認した結果、該当する項目がなかったため、全 18 項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮すると 3 因子構造が妥当であると考えられ、再度 3 因子を仮定して主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。当該尺度は先行研究においてその妥当性および信頼性が証明されているため、共通性が低い項目もあったが、因子負荷量は全ての項目で . 35 以上を示し、すべての項目を採用した。プロマックス回転後の最終的因子パターンと因子間相関を Table 3 に示す。なお回転前の 3 因子で 13 項目の全分散を説明する割合は 40. 39% であった。

Table 3 成人版愛着スタイル尺度因子分析結果

	I	II	III	共通性
<b>I : 安定 (<math>\alpha = .83</math>)</b>				
私はすぐに人と親しくなれる方だ	.93	.16	.04	.67
私は知り合いがしやすい方だ	.90	.19	.05	.22
初めて会った人とでもうまくやっていける自信がある	.71	-.07	.07	.42
私は人に好かれやすい性質だと思う	.56	-.16	.04	.74
気軽に頼ったり頼られたりすることができる	.43	-.05	-.29	.39
たいていの人は私のことを好いてくれていると思う	.40	-.22	-.02	.40
<b>II : アンビバレント (<math>\alpha = .77</math>)</b>				
自分に自信がもてない方だ	-.15	.73	-.17	.41
友達が本当に私を好いてくれていないのではないかと、私と一緒にいたくないのではないかと心配になる	.05	.70	.01	.23
ちょっとしたことですぐに自信をなくしてしまう	.00	.69	-.03	.11
自分をしんようできないことがよくある	.04	.61	.10	.30
人は本当はいいやながら私と親しくしてくれているのではないと思う	-.08	.53	.16	.37
私はいつも人と一緒にいたがるので時々人からうとまれてしまう	.21	.37	-.09	.46
<b>III : 回避 (<math>\alpha = .68</math>)</b>				
あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上にしたくなることを求められたりするとイライラしてしまう	.03	-.03	.64	.37
どんなに親しい間柄であろうと、なれなれしい態度をとられると嫌になってしまう	.10	.02	.62	.42
人と親しくなるのは好きではない	-.23	.03	.53	.59
人に頼るのは好きではない	.00	-.05	.48	.52
私は人に頼らなくても自分ひとりで十分に上手くやっていけると思う	.21	-.12	.44	.18
人は全般的には信用できないと思う	-.09	.08	.41	.46
回転後の負荷量平方和				
	3.70	3.27	2.35	
因子間相関				
I	-	-.47	-.31	
II		-	.33	
III			-	

因子抽出法: 主因子法 プロマックス回転

第1因子は6項目で構成されており, ‘私はすぐに人と親しくなれる方だ’ ‘私は知り合いがしやすい方だ’ など, 対人関係を築きやすい項目が高い因子負荷量を示しており, 「安定」因子と命名した。第2因子は6項目で構成されており, ‘自分に自信がもてない方だ’ ‘友達が本当に私を好いてくれていないのではないかと、私と一緒にいたくないのでは

ないかと心配になる’など、自信がなく不安定な状態を表す項目が高い因子負荷量を示しており、「アンビバレント」因子と命名した。第3因子は6項目で構成されており、‘あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう’‘どんなに親しい間柄であろうと、なれなれしい態度をとられると嫌になってしまう’など、人嫌いと自尊心の強さを表す項目が高い因子負荷量を示しており、「回避」因子と命名した。

このように成人版愛着スタイルに関する項目は「安定」「アンビバレント」「回避」から構成されることが明らかとなった。「安定」の各項目の平均得点は 18. 0 ( $SD=3. 78$ ) であった。「アンビバレント」の各項目の平均得点は 15. 3 ( $SD=3. 77$ ) であった。「回避」の各項目の平均得点は 15. 2 ( $SD=3. 41$ ) であった。

各因子における得点を合計した値を下位尺度得点とした。内的整合性を検討するために信頼性係数（Cronbachの $\alpha$ 係数）を算出したところ、「安定」で. 83, 「アンビバレント」で. 77, 「回避」で. 68と概ね十分な値が得られた。

### 3-5 虐待心性尺度の構造

虐待心性尺度の 9 項目の平均値と標準偏差を算出し、天井効果・床効果について検討したがすべての項目においてみられなかった。そのため、全 9 項目すべてを採用し、最尤法による因子分析を行った。固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮すると 3 因子構造が妥当であると考えられ、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、すべての項目において、共通性は . 30 以上、因子負荷量は . 45 以上となった。プロマックス回転後の最終的因子パターンと因子間相関を Table 4 に示す。なお回転前の 3 因子で 9 項目の全分散を説明する割合は 57. 28%であった。

Table 4 虐待心性尺度因子分析結果

	I	II	III	共通性
<b>I : 体罰肯定 (<math>\alpha=.87</math>)</b>				
体罰はしつけの方法として有効である	.92	-.04	-.01	.62
子どもをしつけるためには体罰は必要である	.84	-.01	.01	.53
体罰を使ってでも子どもをしつけるのは親の務めである	.76	.07	-.02	.70
<b>II : 自己優先 (<math>\alpha=.75</math>)</b>				
子どもがいなければもっと自由にできるのと感じる	.00	.84	-.06	.66
子どもがいるために自分の楽しみがうばわれた気がする	-.04	.80	.00	.52
子どものことよりも自分の楽しみを優先したい	.09	.45	.14	.82
<b>III : 被害的認知 (<math>\alpha=.72</math>)</b>				
子どもが私をばかにしているように感じる	-.09	.01	.75	.32
子どもが私に対して悪意を抱いているような気がする	.04	-.07	.74	.38
子どもがわざと私をこまらせようとしている	.05	.12	.54	.60
回転後の負荷量平方和	2.41	2.04	2.06	
因子間相関	I	II	III	
I	-	.24	.35	
II		-	.47	
III			-	

因子抽出法: 最尤法・プロマックス回転

第1因子は3項目で構成されており, ‘体罰はしつけの方法として有効である’ など体罰を肯定する内容の項目が高い負荷量を示しており, これを「体罰肯定」因子と命名した。第2因子は3項目で構成されており, ‘子どもがいなければもっと自由にできるのと感じる’ など, 自分を優先させる内容項目が高い負荷量を示しており, 「自己優先」因子と命名した。第3因子は3項目で構成されており, ‘子どもが私をばかにしているように感じる’ など被害的な認知の内容の項目が高い負荷量を示しており, 「被害的認知」因子と命名した。

このように虐待心性に関する項目は「体罰肯定」「自己優先」「被害的認知」から構成されることが明らかとなった。「体罰肯定」の各項目の平均得点は5.1 ( $SD=2.05$ )であった。「自己優先」の各項目の平均得点は5.6 ( $SD=1.90$ )であった。「被害的認知」の各項目の平均得点は3.9 ( $SD=1.36$ )であった。

各因子における得点を合計した値を下位尺度得点とした。内的整合性を検討するため



に信頼性係数 (Cronbach の  $\alpha$  係数) を算出したところ, 「体罰肯定」で .87, 「自己優先」で .75, 「被害的認知」で .72 と十分な値が得られた。

### 3-6 被養育経験および養育態度と愛着スタイル・虐待心性との関連

被養育経験・養育態度と, 愛着スタイル, 虐待心性との関連を検討するために, Pearson の相関係数を算出し, その結果を Table 5 に示した。被養育経験と養育態度は弱い正の相関( $r=.28, p<.01$ )が見られた。また, 被養育経験は愛着スタイルの安定との間に弱い正の相関( $r=.25, p<.01$ )が, 回避・アンビバレントとの間に弱い負の相関 ( $r=-.26, p<.01$ ) ( $r=-.24, p<.01$ ) が, 虐待心性の体罰肯定・自己優先・被害的認知との間にも弱い負の相関 ( $r=-.22, p<.01$ ) ( $r=-.21, p<.01$ ) ( $r=-.26, p<.01$ ) が見られた。養育態度は, 虐待心性のうち, 被害的認知および体罰肯定との間に有意な比較的強い負の相関 ( $r=-.42, p<.01$ ) ( $r=-.41, p<.01$ ), 自己優先との間には有意な弱い負の相関( $r=-.30, p<.01$ )が見られた。また, 愛着スタイルのアンビバレントとも有意な弱い負の相関 ( $r=-.29, p<.01$ ) が見られた。さらに, 愛着スタイルのアンビバレントと虐待心性の被害的認知との間には有意な弱い正の相関 ( $r=.35, p<.01$ ) が見られた。

Table 5 被養育経験・養育態度と愛着スタイル・虐待心性との相関

	被養育経験	養育態度	安定	回避	アンビバレント	体罰肯定	自己優先	被害的認知
被養育経験	-	.28**	.25**	-.26**	-.24**	-.22**	-.21**	-.26**
養育態度		-	.16**	-.11**	-.29**	-.41**	-.30**	-.42**
安定			-	-.25**	-.39**	-.10**	-.10**	-.15**
回避				-	.22**	.12**	.17**	.15**
アンビバレント					-	.17**	.26**	.35**
体罰肯定						-	.22**	.28**
自己優先							-	.40**
被害的認知								-

\*\*  $p<.01$

### 3-7 被養育経験尺度におけるネガティブな被養育経験の有無に関するカットオフ

#### ポイント

被養育経験尺度は, ネガティブな被養育経験の多い人は点数が小さくなるよう構成さ

れており、95点満点で、平均は78.59点 ( $SD=11.274$ , 中央値81点), 30点から95点に分布した。ネガティブな被養育経験という観点から、各項目の回答について、虐待を扱う児童精神科医と虐待対応機関に勤める専門家2名と検討し、‘親に平手やげんこつでたたかれた’ (逆転項目) ‘親は洗濯物や身の回りの世話をしてくれた’ ‘親に無視された’ (逆転項目) ‘親はわたしのことを大事にしてくれた’ ‘親は私によく関わり、守ってくれた’ ‘親に放っておかれていると感じた’ (逆転項目) ‘ほんのささいなことでも親にひどくしかられた’ (逆転項目) などの質問に対して「どちらともいえない」との回答は、ネガティブな被養育経験であると捉えられるとした。19項目のうち、ネガティブな回答の方がポジティブな回答より多い母親をネガティブな被養育経験あり群とした。すなわち、被養育経験尺度の合計得点が66点以下の対象者をネガティブな被養育経験あり群、67点以上をネガティブな被養育経験なし群とした。調査対象者の被養育経験尺度19項目の合計得点の分布を Figure 5 に示す。母親764人のうち104人に、ネガティブな印象を抱く不適切な被養育経験がある結果となり、その割合は全体の13.6%であった。

本尺度は、Child Abuse and Trauma Scale (Sanders & Becker-Laussen, 1995) の邦訳、および、中嶋 (2004) の被虐待相当行為経験尺度を参照して作成されており、本来は被虐待経験を問うものとなっている。Figure 5 において、黒で示された部分は被虐待経験あり群、グレーで示された部分は、母親が感じるネガティブな被養育経験あり群といえると考えられる。被虐待経験あり群は、全19項目すべてにおいてネガティブな回答をしている (平均より  $2SD$  低い得点にあたる) 群である。ネガティブな被養育経験あり群は、全19項目のうち、ネガティブな回答の方がポジティブな回答より多い (平均より  $1SD$  低い得点にあたる) 群である。本研究は、被虐待とまではいかないけれど、自分の被養育経験をネガティブに捉えている母親、いわゆるグレーゾーンの母親に焦点をあてているため、全19項目のうち、ネガティブな回答の方がポジティブな回答より多い母親をネガティブな被養育経験あり群とした。すなわち、カットオフポイントを66点とすることが妥当であると判断した。被養育経験尺度19項目の合計点の分布を Figure 5 に示す。母親764人のうち104人にネガティブな被養育経験がある結果となり、その割合は全体の13.6%であった。

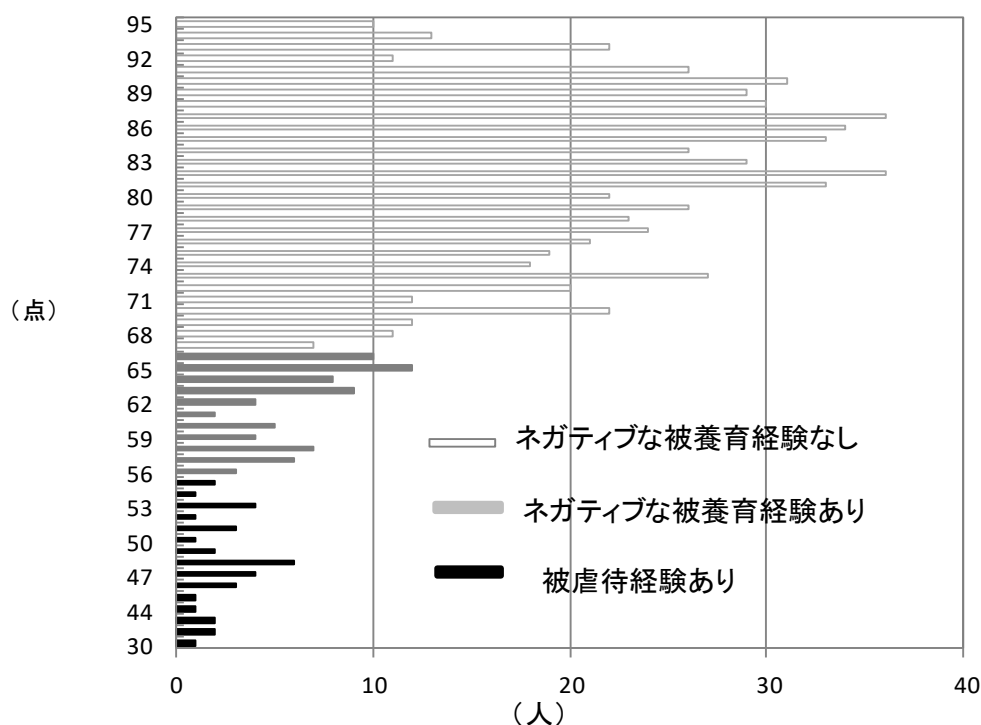


Figure 5 被養育経験尺度得点の分布

### 3-8 養育態度尺度における不適切な養育態度の有無に関するカットオフポイント

現在の子どもに対する養育態度尺度は、不適切な養育傾向の強い人の得点が小さくなるように構成されており、65点満点で、平均は48.19点 ( $SD=8.001$ , 中央値=49.0点), 17点から65点に分布した。本研究の調査項目について、不適切な養育態度かどうかという観点から、虐待を扱う児童精神科医と虐待対応機関に勤める専門家2名と検討した。‘子どもと一緒に遊んでいる’‘頭はたたかない’‘物を投げつけない’‘子どもが傷つくようなことは言わない’‘子どもだけを家に残して夜間に外出はしない’などの質問に対して「どちらともいえない」との回答は、適切な養育態度とはいえないと捉えられるとし、13項目すべての項目について、「どちらともいえない」「あまりそうではない」「まったくそうではない」と回答した母親を不適切な養育態度あり群とした。すなわち、養育態度尺度の合計得点が39点以下の対象者を不適切な養育態度あり群、40点以上を不適切な養育態度なし群とした。養育態度尺度13項目の合計点の分布を Figure 6 に示す。母親764人のうち112人に不適切な養育態度がみられる結果となり、その割合は全体の14.7%であった。

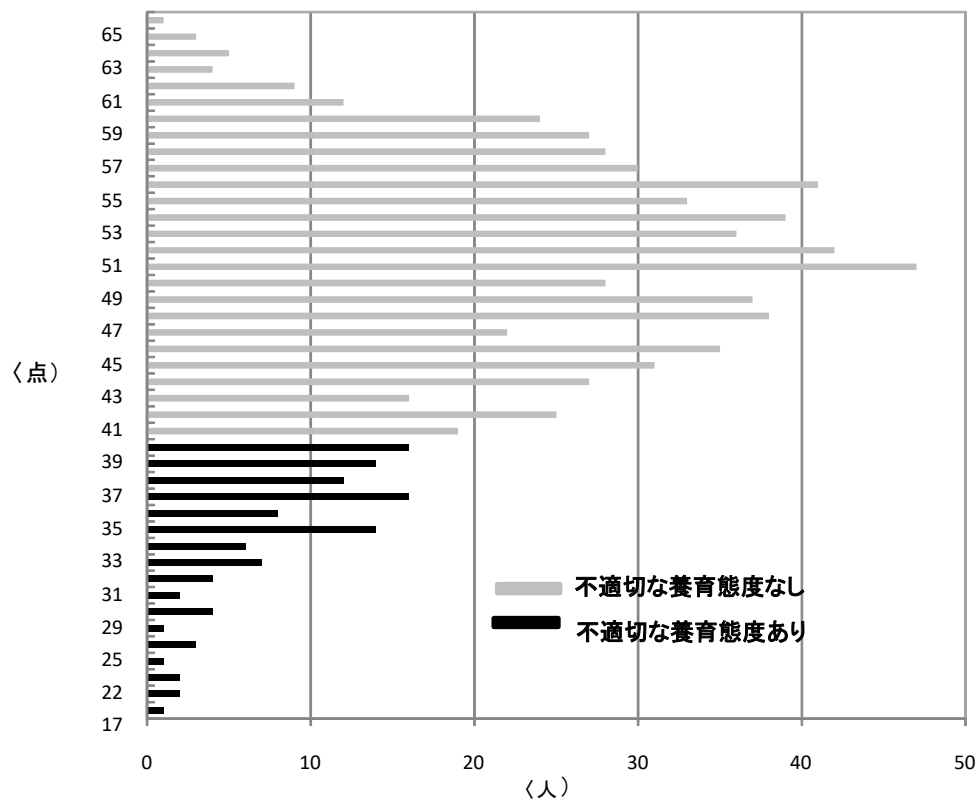


Figure 6 養育態度尺度得点の分布

### 3-9 不適切な養育の世代間連鎖に関する群分け

ネガティブな被養育経験があり不適切な養育態度がみられる母親を連鎖あり群、ネガティブな被養育経験がありながらも不適切な養育態度がみられない母親を連鎖なし群、ネガティブな被養育経験がなく不適切な養育態度がみられる母親を不適切養育群、ネガティブな被養育経験がなく不適切な養育態度もみられない母親を安定養育群に分類した。分類結果を Table 6 と Figure 7 に示した。

一般の家庭における幼児を持つ母親 764 人のうち 104 人にネガティブな被養育経験がある結果となり、その割合は全体の 13.6%であった。ネガティブな被養育経験のある母親 104 人のうち、現在の子育てにおいて不適切な養育態度がみられる母親、すなわち連鎖あり群は 30 人 (28. 8%) であった。ネガティブな被養育経験がある母親 104 人のうち、現在の子育てにおいて不適切な養育態度がみられない母親、すなわち連鎖なし群は 74 人 (71. 2%) であった。

一般の家庭における幼児を持つ母親で、子育てにおいて不適切な養育態度を示す母親は、764 人のうち 112 人であり、その割合は全体の 14. 7%であった。ネガティブな被養育経験のない母親 660 人のうち、現在子どもに対して不適切な養育態度がみられる母親、すなわち不適切養育群は 82 人 (12. 4%)、ネガティブな被養育経験のない母親 660 人のうち、不適切な養育態度がみられない母親、すなわち安定養育群は 578 人 (87. 6%) であった。

Table 6 連鎖分類ごとの人数

		不適切な養育		計
		あり	なし	
ネガティブな被養育経験	あり	連鎖あり群 30 人	連鎖なし群 74 人	104 人
	なし	不適切養育群 82 人	安定養育群 578 人	660 人
		112 人	652 人	764 人

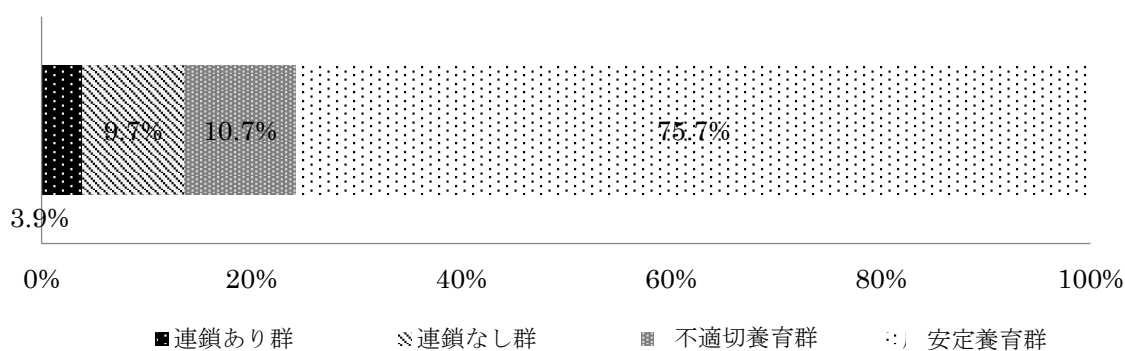


Figure 7 連鎖分類ごとの割合

### 3-10 連鎖あり群と連鎖なし群における被虐待の程度の差

被虐待経験のある母親のうち、連鎖あり群となった対象者と連鎖なし群となった対象者における被虐待の程度の差を調べるため、 $t$ 検定を行なった。その結果、連鎖あり群と連鎖なし群では被虐待の程度に差は認められず、被虐待の程度は、連鎖のありなしには関係がないことが示された ( $t(102)=.593, n.s.$ )。

### 3-11 各連鎖における愛着スタイルの特徴

愛着スタイルとしては、各因子を構成する6項目の評定値の加算平均をそれぞれの尺度得点とし、個人内で各因子の合計得点を比較し、最高得点の因子により強制的に安定型、回避型、アンビバレント型、混合型（最高得点が2つ以上あり、判定ができない場合）のいずれかに分類する方法を採用した。また、分析においては、安定尺度、回避尺度、アンビバレント尺度の各因子の合計得点を因子得点として使用した。

4つの連鎖分類である連鎖あり群、連鎖なし群、不適切養育群、安定養育群それぞれにおける愛着スタイルの型について、その度数と割合をTable 7とFigure 8に、愛着スタイルを介したネガティブな被養育経験の世代間連鎖の経路をFigure 9 に示した。

Table 7 連鎖分類各群の愛着スタイル

		愛着スタイル				
		安定型	回避型	アンビバレント型	混合型	
連鎖分類	連鎖あり群	<i>n</i> =30	6	8	15	1
		群中の割合 (%)	(20.0)	(26.7)	(50.0)	(3.3)
	連鎖なし群	<i>n</i> =71	22	16	20	13
		群中の割合 (%)	(31.0)	(22.5)	(28.2)	(18.3)
	不適切養育群	<i>n</i> =81	31	11	29	10
		群中の割合 (%)	(38.3)	(13.6)	(35.8)	(12.3)
	安定養育群	<i>n</i> =568	342	71	107	48
		群中の割合 (%)	(60.2)	(12.5)	(18.8)	(8.5)
	合計	<i>n</i> =750	401	106	171	72
		全体の割合	(53.5)	(14.1)	(22.8)	(9.6)

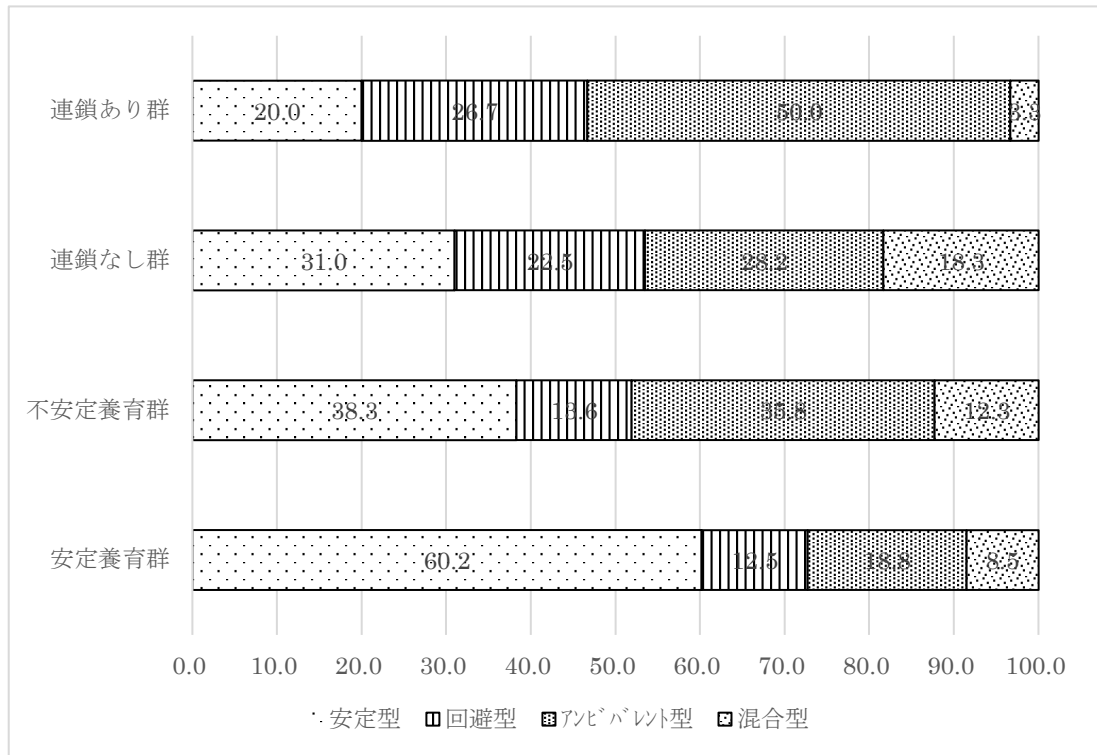


Figure 8 連鎖分類各群の愛着スタイル

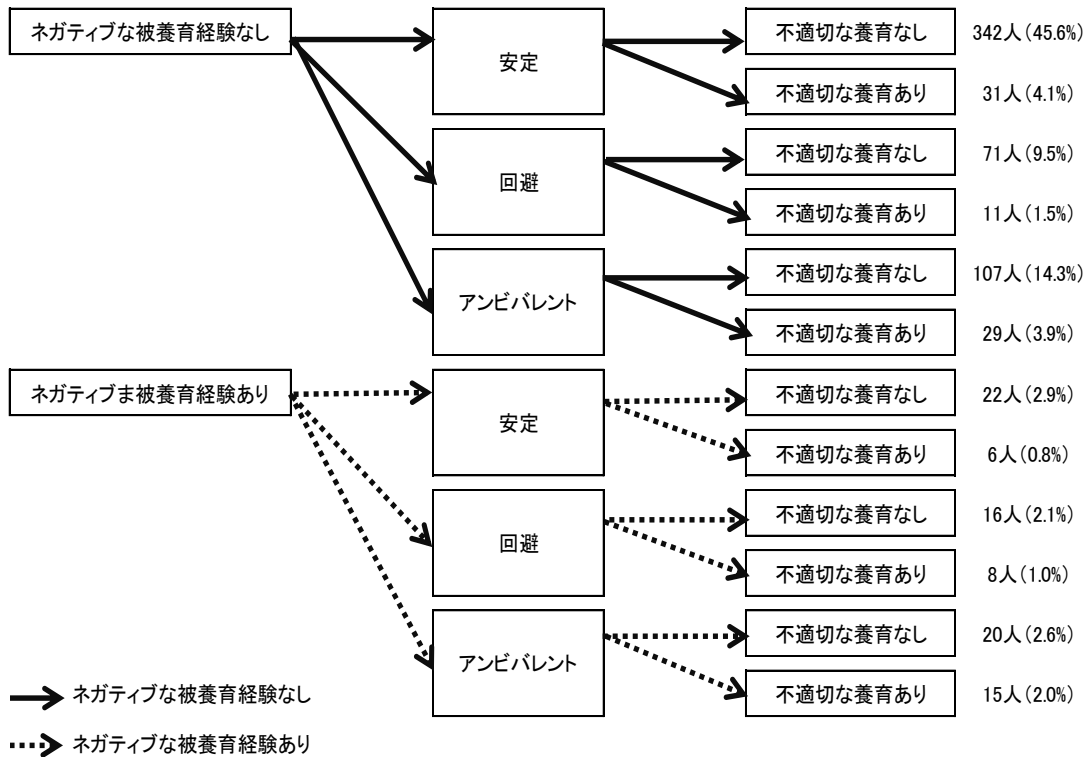


Figure 9 ネガティブな被養育経験の世代間連鎖と愛着スタイル

各群における愛着スタイルの安定傾向、回避傾向、アンビバレント傾向の差を捉え、その特徴を検討するために、連鎖あり群・連鎖なし群・不適切養育群・安定養育群を独立変数とし、愛着スタイルの各下位尺度である「安定」「回避」「アンビバレント」の得点を従属変数とした一元配置の分散分析を行なった。その結果、各群において有意な差がみられた。各群における愛着スタイル得点の平均値と標準偏差および分散分析の結果をTable 8およびFigure 10に示した。

Table 8 各群における愛着スタイル得点の平均値とSDおよび分散分析の結果

		①連鎖あり群 <i>n</i> 30	②連鎖なし群 71	③不適切養育群 81	④安定養育群 568	<i>F</i> 値 (多重比較)
安定	平均	15.4	16.7	17.3	18.4	10.87***
	<i>SD</i>	4.04	4.03	3.91	3.59	①②<④
回避	平均	17.1	17.2	15.1	14.8	15.21***
	<i>SD</i>	3.99	3.31	3.24	3.27	①②>③④
アンビバレント	平均	18.2	16.7	16	14.8	14.06***
	<i>SD</i>	3.87	3.71	4.00	3.60	(①>③④, ②③>④)

\*\*\* :  $p < .001$

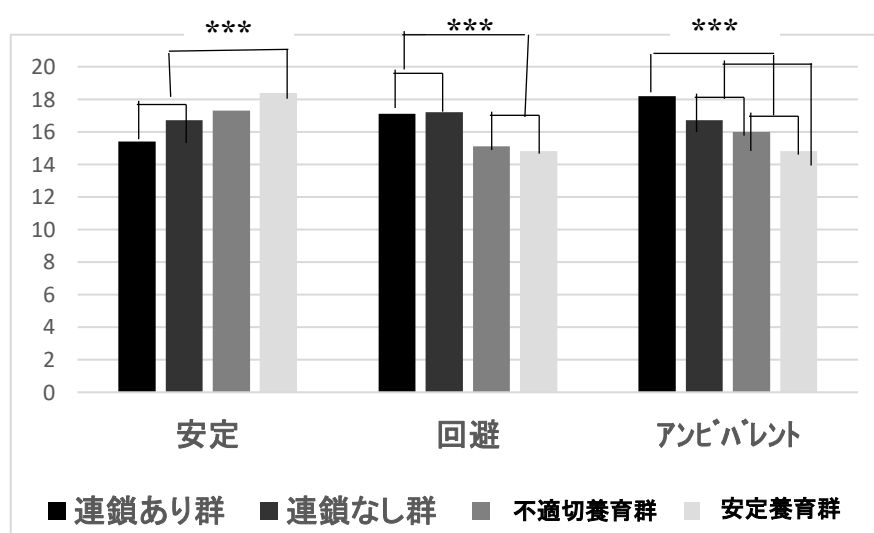


Figure 10 各群における愛着スタイル傾向および分散分析の結果 (\*\*\*) :  $p < .001$



「安定」「回避」「アンビバレント」において、群間に有意差がみられた（安定： $F(3, 753)=10.87, p<.001$  回避： $F(3, 755)=15.21, p<.001$  アンビバレント： $F(3, 754)=14.06, p<.001$ ）。これらについてTukeyの*HSD*法（5%水準）による多重比較を行なった。その結果、「安定」については、連鎖あり群と連鎖なし群が、安定養育群よりも有意に低い得点を示した。「回避」については、連鎖あり群・連鎖なし群が、不適切養育群・安定養育群に比べて有意に高い得点を示した。「アンビバレント」については、連鎖あり群が不適切養育群と安定養育群に比べて有意に高い得点を示した。また、連鎖なし群と不適切養育群は、安定養育群に比べて有意に高い得点を示した。アンビバレント傾向は、ネガティブな被養育経験がなく、不適切な養育もない安定養育群が他の群と比べて有意に低い得点が示された。

### 3-12 各群における虐待心性の特徴

各群における虐待心性の「体罰肯定」「自己優先」「被害的認知」および虐待心性合計の差を捉え、その特徴を検討するために、4つの虐待連鎖分類である連鎖あり群・連鎖なし群・不適切養育群・安定養育群を独立変数とし、虐待心性の各下位尺度である「体罰肯定」「自己優先」「被害的認知」および「虐待心性合計」の得点を従属変数とした一元配置の分散分析を行なった。その結果、各群間において有意な差がみられた。各群における虐待心性の平均値と標準偏差および分散分析の結果をTable 9およびFigure 11に示した。

Table 9 各群における虐待心性得点の平均値と SD および分散分析結果

		①連鎖あり群	②連鎖なし群	③不適切養育群	④安定養育群	F値
<i>n</i>		29	71	77	545	(多重比較)
体罰肯定	平均	6.7	5.6	5.8	4.9	12.95***
	<i>SD</i>	2.16	2.12	2.16	1.96	(①②③>④)
自己優先	平均	6.4	6.1	6.0	5.4	7.44***
	<i>SD</i>	2.63	2.09	2.26	1.74	(①②③>④)
被害的認知	平均	5.5	4.2	4.4	3.7	25.27***
	<i>SD</i>	1.92	1.58	1.59	1.16	(①>②③④) (②③>④)
虐待心性合計	平均	18.6	15.9	16.3	13.9	25.19***
	<i>SD</i>	5.04	4.28	4.38	3.43	(①>②③④) (②③>④)

\*\*\*  $p < .001$

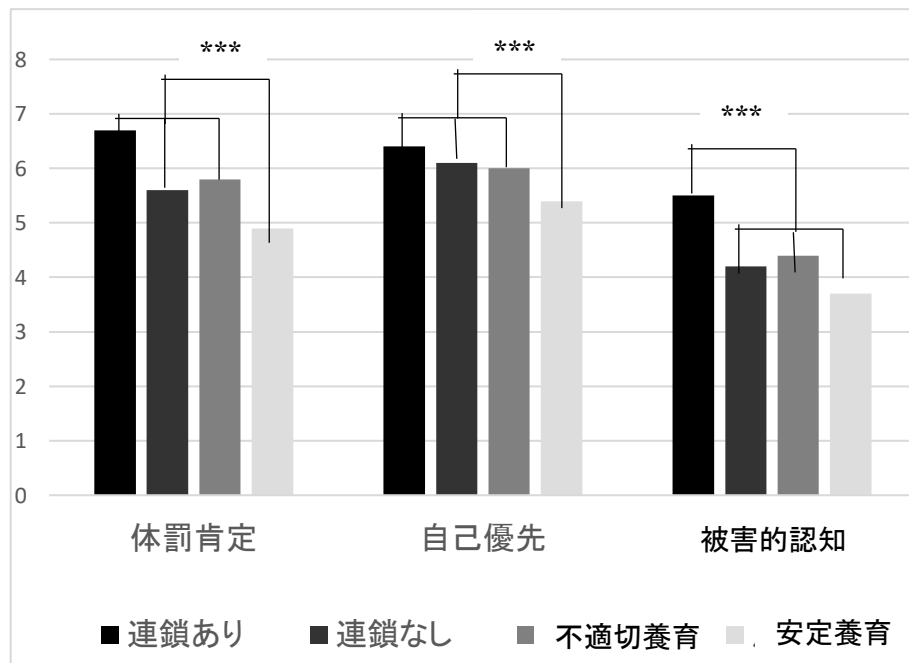


Figure 11 各群における虐待心性傾向および分散分析の結果 (\*\*\*:  $p < .001$ )

「体罰肯定」「自己優先」「被害的認知」および「虐待心性合計」において、群間に有意差がみられた（体罰肯定：F(3, 718)=12.95,  $p<.001$  自己優先：F(3, 717)=7.44,  $p<.001$  被害的認知：F(3, 718)=25.27,  $p<.001$  虐待心性合計：F(3, 717)=25.19,  $p<.001$ ）。これらについて Tukey の HSD 法（5%水準）による多重比較を行なった。その結果、「体罰肯定」については、安定養育群に比べて連鎖あり群、連鎖なし群、不適切養育群が有意に高い得点を示した。すなわち、安定養育群のみが有意に体罰肯定傾向が低いことが示唆された。「自己優先」につきも、安定養育群に比べて、連鎖あり群、連鎖なし群、不適切養育群が有意に高い得点を示した。同様に、安定養育群のみが有意に自己優先傾向が低いことが示唆された。

「被害的認知」については、連鎖あり群、連鎖なし群、不適切養育群が、安定養育群に比べて有意に高い得点を示した。さらに、連鎖あり群は連鎖なし群、不適切養育群と比べても有意に高い得点を示した。

### 3-13 各群と夫のサポート満足度との関連

各群における夫のサポートの満足度を比較するために、4つの連鎖分類である連鎖あり群・連鎖なし群・不適切養育群・安定養育群を独立変数とし、夫のサポート満足度の得点を従属変数とした一元配置の分散分析を行なった。夫のサポートの満足度はフェイスシートの質問項目に対して、①満足しているを1点、②普通を2点、③不満であることを3点とした得点によって分析した。その結果、各群間において有意な差がみられた。各群における夫のサポート満足度得点の平均値と標準偏差および分散分析の結果をTable 10に示した。

Table 10 各群における夫のサポート満足度得点の平均値と SD および分散分析結果

	①連鎖あり群	②連鎖なし群	③不適切養育群	④安定養育群	F値
<i>n</i>	30	72	82	574	(多重比較)
夫のサポート満足度 平均	2.0	1.8	1.9	1.6	8.53 <sup>***</sup>
(SD)	.54	.75	.71	.65	(①②③>④)

<sup>\*\*\*</sup> $p<.001$

夫のサポート満足度得点は、群間に有意差がみられた ( $F(3, 737)=8.53, p<.001$ )。これらについて Tukey の *HSD* 法 (5%水準) による多重比較を行なった。その結果、安定養育群に比べて連鎖あり群、連鎖なし群、不適切養育群が有意に高い得点を示した。すなわち、安定養育群が夫のサポートの満足度が他の群に比べて有意に高いことが示された。

## 第4節 考察

### 4-1 非臨床群の母親における虐待の世代間連鎖

一般の家庭における幼児を持つ母親のうち 13.6%の母親にネガティブな被養育経験があった。そのうち、現在の子育てにおいて不適切な養育態度がみられる連鎖あり群の母親の割合、すなわち世代間連鎖率は 28.8%であった。Kaufman & Zigler (1987) が臨床群、非臨床群の研究から検討して提唱した  $30\pm5\%$  という数値とほぼ一致するものとなった。一方、ネガティブな被養育経験がないのに、子どもへの不適切な養育態度がみられる母親の割合は 12.4%であった。このことにより、ネガティブな被養育経験を持つ母親の方が、子どもに対する不適切な養育態度を示すリスクが 2.3 倍以上であることが示された。本研究の調査対象者は非臨床群であり、被虐待経験とまではいえないケースを含めてネガティブな被養育経験が連鎖するかどうかについて検討した。非臨床群も臨床群と同様に 3 割弱の連鎖があること、ネガティブな被養育経験があることによって、子どもへの不適切な養育態度が生じるリスクが 2 倍以上になることが示された。

### 4-2 非臨床群の母親の不適切な養育態度

一般の家庭の幼児を持つ母親で、子育てにおいて不適切な養育態度を示す母親は、全体の 14.7%であった。先行研究 (社会福祉法人子ども虐待防止センター, 2001 他) 同様、非臨床群における 1 割程度の母親が子どもに不適切な養育を繰り返しているという結果が得られた。多くの母親が「あまりそうではない」と回答した不適切な養育態度の内容は、‘子どもをしかるときは大声をださない’ ( $M=2.5, SD=1.02$ ) ‘感情的にしかることはない’ ( $M=2.6, SD=1.01$ ) であり、軽度の叱責に関するものであったが、「まったくそうではない」を選択された場合には、子どもへの悪影響が生じる可能性があると考えられる。母親に多くのストレスがかかることによって、程度や頻度が増すと

重篤な虐待へと発展することも考えられる。よって、自分の感情に左右されて子どもに対して叱責を繰り返す母親に対しては、母親のストレスを軽減させるような支援や環境を提供する必要があると考えられる。

#### 4-3 ネガティブな被養育経験の連鎖分類と愛着スタイルとの関連

ネガティブな被養育経験の連鎖の分類である連鎖あり群、連鎖なし群、不適切養育群、安定養育群に関して、愛着スタイルの各因子「安定」「回避」「アンビバレント」の傾向に、群間による有意な差がみられた。

愛着スタイルの「安定」において、連鎖あり群と連鎖なし群が、安定養育群よりも有意に低い得点を示した。すなわち、被虐待経験がある人は、連鎖の有無に関わらず、ネガティブな被養育経験がなく現在も不適切な養育態度がない母親よりも愛着スタイルの安定傾向が有意に低いことが示された。成人期の愛着スタイルは、乳幼児期の親との相互作用によって形成された内的ワーキングモデルの影響を受けると言われている (Bowlby, 1973)。被虐待経験がある母親は、子ども時代に親との関係が安定しておらず、それによって形成された内的ワーキングモデルの影響で、現在の愛着スタイルも安定傾向が低いことが示された。本研究の結果、連鎖あり群と連鎖なし群との安定得点に有意な差はみられなかった。すなわち、ネガティブな被養育経験があった場合、自分の子育ての際に不適切な養育になるかどうか、つまり、ネガティブな被養育経験が連鎖するかどうかは、愛着スタイルの安定傾向とは関係がないことが示唆された。

ネガティブな被養育経験がなくて現在不適切な養育態度を示す不適切養育群は、安定得点について、連鎖あり群、連鎖なし群より高く、安定養育群より低かったが、有意な差ではなかった。戸田 (1991) は、愛着パターンは比較的永続的なワーキングモデルを反映していると考え、青年期以降も乳児期と類似したスタイルが存在するとしながらも、後に、乳幼児期の内的ワーキングモデルが変わらないままの構造で青年期以降も機能していると考えるのは明らかに誤りであるとしている。不適切な養育群の母親は、子ども時代のネガティブでない養育経験によって安定した愛着スタイルが形成されていたが、その後の様々な要因によって愛着スタイルが変化した可能性があることが示唆された。しかし、安定養育群と同様に、「安定」の平均得点が「回避」「アンビバレント」と比べて一番高いという結果は、ネガティブな被養育経験がなかったということによるものであろうと考えられる。

「回避」については、連鎖あり群・連鎖なし群が、不適切養育群・安定養育群に比べて有意に高い得点を示した。ネガティブな被養育経験の有無が愛着スタイルの回避傾向に影響を及ぼしているということができる。すなわち、ネガティブな被養育経験がある人は、ない人に比べて回避傾向が有意に高いことが示唆された。Bowlby (1988) によると、回避群の子どもたちは、子どもが世話を求めたとき、親に援助的に応答してもらえるという確信がまったくなく、逆に拒絶されるにちがいないと予測しているという。また、Bowlby (1969, 1973) は、各個人は世界について、およびその中の自己についての内的ワーキングモデルを構築すると仮定している。愛着のパターンがやがてその個人の属性となり、パーソナリティを形成していくということを説明するために必要な概念だという。乳児期を過ぎると、愛着関係は主たる愛着対象との間で経験してきた相互作用を通じて子どもが形成する内的ワーキングモデルによって支配されるようになるとしている。自分の愛着対象者が自分を援助したり保護したりするような応答をしてくれないような環境で育った子は、そうでない子に比べて安定傾向が低く、回避傾向が強いとされる。子どもたちは養育者との初期の相互作用を通して形成された愛着パターンに基づいて、その後の愛着スタイルを決定していく。ネガティブな被養育経験を持つ母親は、子ども時代に形成された回避型の愛着スタイルが踏襲され、現在も維持されていることが示唆された。

「アンビバレント」については、連鎖あり群が、不適切養育群と安定養育群に比べて有意に高い得点を示した。また、連鎖なし群と不適切養育群は、安定養育群に比べて有意に高い得点を示した。アンビバレント傾向は、ネガティブな被養育経験がなく、現在不適切な養育態度もない安定養育群が他の群と比べて有意に低い得点が示された。連鎖なし群、不適切養育群という、不適切な養育と無関係ではない群においては、何らかの要因によってアンビバレント傾向が生じていることが示された。ネガティブな被養育経験があり現在も不適切な養育態度を示している連鎖あり群は、アンビバレント傾向が極めて高かった。アンビバレント群の子どもたちは、子どもが援助を求めたとき、親が関わってくれるか、応答的であるか、援助的であるかということに関して不確かだと思っている。この不確かさゆえに、いつも分離不安の傾向があり、母親にすがりついたり、外界の探索に不安を感じている。この子どもたちの親は、あるときは子どもの手の届くところにいて援助的であったりすることもあるが、そうでないこともあり、また、このパターンの子どもたちの親は、臨床的知見によると、分離や見捨てるという脅しを、子

どもを支配する手段として用いることが多く、それによって不確実感が助長されている (Bowlby, 1988)。ネガティブな被養育経験があつて現在も不適切な養育態度を示す連鎖あり群の母親は、乳幼児期に自分の親から不適切な養育を受け、現在においてもそれが未消化であり、葛藤し続けているため、現在の愛着スタイルにおいてアンビバレント傾向が強く出ている可能性がある。また、本研究において「アンビバレント」は、虐待心性尺度における「被害的認知」と比較的強い相関がみられた ( $r = .35$ )。連鎖あり群は、ネガティブな被養育経験による葛藤を継続して持ち続け、被害的認知を子どもに抱いていることとも関係があることが示唆された。

対象者の愛着スタイルとして、各因子を構成する6項目の評定値の加算平均をそれぞれの尺度得点とし、個人内で各因子の合計得点を比較し、最高得点の因子により強制的に安定型、回避型、アンビバレント型、混合型に分類する強制選択法による各群の型の割合をみると、それぞれの型において特徴が示された。

安定型は、安定養育群では6割であるのに対し、不適切養育群では4割弱、連鎖なし群では3割、連鎖あり群では2割に留まった。安定養育群が一般的な家庭を表していると考えられる。それに比べて、その他の群は安定型が少なく、連鎖あり群においては  $1/3$  しか存在しなかった。安定養育群は半数以上が安定型であり、他の3群においては半数に満たないことが示された。

回避型は、回避得点によって分析した結果と同様に、ネガティブな被養育経験の有無に左右された。ネガティブな被養育経験がある連鎖あり群と、連鎖なし群の回避型の人数は、ネガティブな被養育経験のない不適切な養育群と安定養育群の回避型の人数の2倍程度となることが示された。不適切な養育を受けた子どもは、安全基地になるべき親がその機能を果たさず、自分が困難に直面したときに適切な援助を受けていない可能性がある。子どもは親を頼らなくなり、自分でどうにかしなくてはという愛着のスタイルを形成する。回避型の愛着スタイルを持って成長し、成人に至ってからもその特徴を示す傾向があることが示唆された。

アンビバレント型については、連鎖あり群のアンビバレント型は全体の50%であり、安定養育群のアンビバレント型の18.8%に比べて、2.7倍に相当することが示された。アンビバレント型は、ネガティブな被養育経験があつたり、現在の子育てで不適切な養育態度があることが影響している型であり、特に連鎖あり群は、半数がアンビバレント型となっており、過去から現在において不適切な養育が連鎖して、解決の糸口を見つけ

られないでいる可能性が高いことが示唆された。また、安定養育群には安定型となる人が多く、アンビバレント型を呈する人が少ないことが示された。アンビバレント型を呈するかどうかは、被養育経験から現在の養育態度に至るプロセスにおける葛藤の有無と関連があることが示唆された。

#### 4-4 ネガティブな被養育経験の連鎖分類と虐待心性との関連

「体罰肯定」「自己優先」「被害的認知」および「虐待心性合計」において、群間に有意差がみられた。「体罰肯定」については、安定養育群に比べて連鎖あり群、連鎖なし群、不適切養育群が有意に高い得点を示した。すなわち、安定養育群のみが有意に体罰肯定傾向が低いことが示された。「自己優先」についても、安定養育群に比べて、連鎖あり群、連鎖なし群、不適切養育群が有意に高い得点を示した。同様に、安定養育群のみが有意に自己優先傾向が低いことが示された。このことは、不適切な養育に関する媒介要因として、「体罰肯定」や「自己優先」が作用していることが示され、母親が適応的な子育てを行えているかどうかを捉える際に、体罰肯定感や自己優先感への注目が重要であることが示唆された。「被害的認知」については、連鎖あり群が、他の3群と比較して有意に高い得点を示した。さらに、連鎖なし群、不適切養育群は、安定養育群と比べて有意に高い得点を示した。すなわち、ネガティブな被養育経験があった場合、被害的認知が高い場合は、世代間連鎖が生じる可能性が高いことが示唆された。それは、ネガティブな被養育経験があった場合でも、被害的認知を克服できた人はネガティブな被養育経験の連鎖が生じない子育てができているといえることができる。被害的認知は、ネガティブな被養育経験があり、世代間連鎖が生じている母親の特徴であることが示された。被害的認知への介入が虐待防止に繋がることが示唆された。

#### 4-5 ネガティブな被養育経験の連鎖分類と子育てにおける夫のサポート満足度との関連

連鎖分類ごとの子育てにおける夫のサポートへの満足度との関連については、安定養育群は連鎖あり群、連鎖なし群、不適切養育群に比べて有意に夫のサポートへの満足度が高かった。夫との関係の満足度は適切な子育てとの関連が深いと言われている(庄司, 2001 他)が、本研究においても、子育てにおける夫のサポートが適応的な子育てに影響を与えていることが示された。



#### 4-6 連鎖あり群と連鎖なし群におけるネガティブな被養育経験の程度の違い

非臨床群において、ネガティブな被養育経験の世代間連鎖が生じるか生じないかに関して、ネガティブな被養育経験の程度や頻度は関係していないことが示された。すなわち、重度のネガティブな被養育経験がより連鎖を生じさせるということではなく、軽い叱責の繰り返しのよう状況であっても、子どもにとってはダメージを被ることがあり、ネガティブな被養育経験の世代間連鎖が生じる可能性があることが示唆された。

#### 4-7 まとめ

研究 1 において、幼児を育てる一般の家庭に焦点をあて、重度の虐待に限定しないネガティブと思われる被養育経験がある母親がどのくらい存在し、現在どのような養育態度をとっているかという世代間連鎖について検討することを目的とした。

非臨床群の母親におけるネガティブな被養育経験の世代間連鎖率は 28. 8%であることが示された。ネガティブな被養育経験がなく、子どもへの不適切な養育態度がみられる母親の割合は 12. 4%であった。このことにより、ネガティブな被養育経験を持つ母親の方が、そうでない母親より子どもに不適切な養育態度を示すリスクが 2. 3 倍以上であることが示された。

一般の家庭の幼児を持つ母親で、子育てにおいて不適切な養育をしている母親は、全体の 14. 7%であった。先行研究（社会福祉法人子ども虐待防止センター，2001 他）同様、臨床群の母親にも虐待相当行為が 1 割程度存在していることが明らかになった。本研究で明らかになった母親の不適切な養育態度は軽度のものであったが、母親に何らかのストレスがかかり、程度や頻度が増した場合など、重篤な虐待へとエスカレートする可能性があると考えられる。よって、不適切な養育態度を軽度だからと見逃すのではなく、母親が不適切な養育をしてしまう要因を丁寧に見て行き、対応していくことが虐待の予防につながると考えられる。

世代間連鎖が生じるか生じないかは、ネガティブな被養育経験の程度とは関連がないことが示された。虐待とまではいかないような軽い叱責の繰り返しのよう状況であっても、子どもにとってはダメージを被ることがあり、不適切な養育の世代間連鎖となる可能性があることが示唆された。

ネガティブな被養育経験がある母親は、安定養育群より有意に愛着スタイルの安定傾

向が低かった。また、ネガティブな被養育経験がある母親は、ない母親より有意に愛着スタイルの回避傾向が高かった。愛着スタイルのアンビバレント型の出現率を比較すると、連鎖あり群は連鎖なし群の2倍近くあった。ネガティブな被養育経験の世代間連鎖と、母親の愛着スタイルがアンビバレント型との関連が示された。

虐待心性においては、連鎖あり群と連鎖なし群で有意な差がみられたのは被害的認知であった。連鎖あり群は他の3群すべてと比較して有意に被害的認知が高かった。また、現在の養育態度と被害的認知は比較的高い相関が見られた。さらに、愛着スタイルのアンビバレント傾向は、虐待心性の被害的認知と弱い相関がみられた。以上のことから、ネガティブな被養育経験があり、世代間連鎖が生じている母親は、アンビバレント傾向が高く、被害的認知も高い傾向にあることが示された。アンビバレントは過度の親和性と相手との関係に対する不安感によって特徴づけられている（訖摩・戸田，1988）。アンビバレント群の子どもたちは、子どもが親に援助を求めたとき、親が関わってくれるか、応答的であるか、援助的であるかということに対して不確かだと思っている（Bowlby, 1988）。連鎖あり群の母親は、そのような不適切な養育を受けて大人になり、まだその不安感を持ち続けている可能性があり、それが子どもに対する被害的認知に繋がっていると考えられる。西澤・屋内（2006）も、子どもへの虐待傾向を示す保護者の中でも自身に被虐待経験がある親には子どもに対する被害的な認知が特徴的にみられると述べている。本研究もその結果を支持した。

また、夫のサポート満足度については、安定養育群が他の3群よりも有意に高いことが示された。昨今は父母ともに子育てに関わるべきであるという風潮が強くなっている。一番の身近な存在である夫がどう子育てに関わるかは、物理的な負担の軽減以上に、精神的な負担の軽減につながると考えられる。逆に、夫の協力が得られない場合、相当のストレスになると考えられる。夫のサポートについては、現在盛んに行われている啓蒙的な活動とともに、母子関係で子育てを捉えるのではなく、父親を含んだ親子関係に注目していく必要があることが示唆された。

以上のように、育児困難感を示す母親に対しては、その背景の違いによって求められる支援の仕方が異なると考えられる。ネガティブな被養育経験の有無、母親の愛着スタイル、虐待心性、家族のサポートの有無を含む環境要因など、子育てに苦しむ母親を包括的に捉える視点が重要であると考えられる。

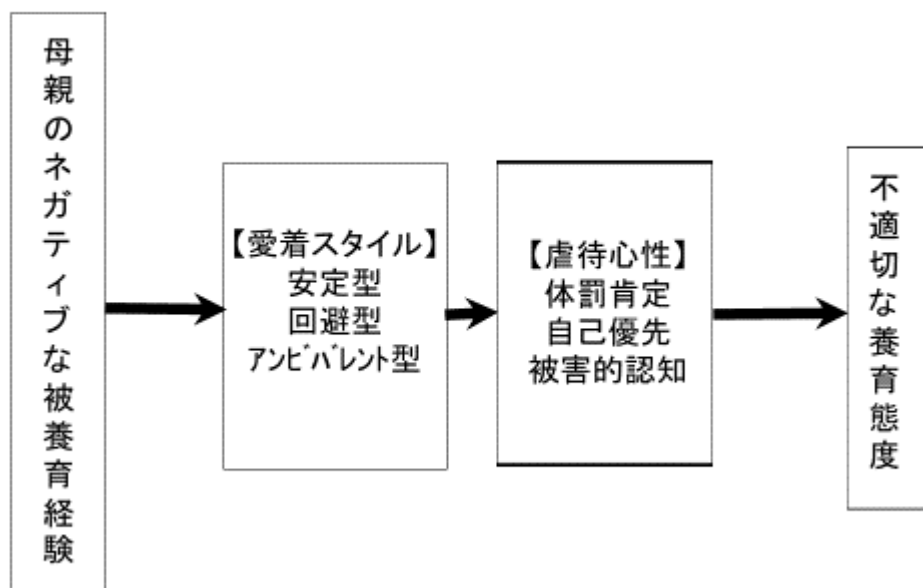
## 第4章 研究2 母親のネガティブな被養育経験が養育態度に及ぼす影響の検討

### 第1節 目的

内的ワーキングモデルは重要な他者との相互作用を通して形成されるものであり、親がとる養育行動の違いによって子どものアタッチメントが異なることは多くの研究で示されており、両者の関係は頑健なるものであると考えられる（島，2014）。ネガティブな被養育経験によって、幼少期に不安定な愛着パターンを形成したと考えられる母親は、成人期における愛着スタイルも不安定なものになり、それが養育態度に影響を及ぼしていると考えられる。

また、親の虐待心性、「被害的認知」「自分の欲求優先」「体罰肯定」が子どもへの虐待傾向の養育態度に影響を及ぼしていることが示されている（西澤・屋内，2006）。特に、被害的認知に関しては、臨床群の症例報告（深津，2002；西澤，1994；渡辺，2000 など）においても、近年の非臨床群の実証研究（會田・大河原，2014；中谷・中谷，2006；田中他，2014 など）においても、不適切な養育態度に影響を及ぼしていることが示唆されている。以上のように、親の被養育経験と内的ワーキングモデルおよび愛着スタイルとの関連、親の虐待心性と不適切な養育態度との関係については先行研究によって示されたが、これらを同時に扱った研究は見られない。そこで本研究では、母親の愛着スタイルと虐待心性を因果プロセスとして、母親のネガティブな被養育経験が現在の子どもへの養育態度に及ぼす影響について検討することを目的とする。

研究1の結果と先行研究から、母親の被養育経験によって形成されと考えられる母親の愛着スタイルが虐待心性に影響を及ぼし、虐待心性が現在の養育態度に影響を及ぼすことを想定して検討する。仮説モデルを Figure 12 に示した。



9

Figure 12 不適切な養育の世代間連鎖の仮説モデル図

## 第2節 方法

目的に沿って、幼児を持つ母親を対象として質問紙調査を行った。以下、調査協力者、調査の実施方法、質問紙の構成は研究1と同様であった。

### 2-1 調査対象

研究1に同じ

### 2-2 調査時期

研究1に同じ

### 2-3 調査方法

研究1に同じ

### 2-4 調査内容

研究1に同じ

## 2-5 統計処理

統計処理には IBM SPSS Amos 23 を使用した。

## 第3節 結果

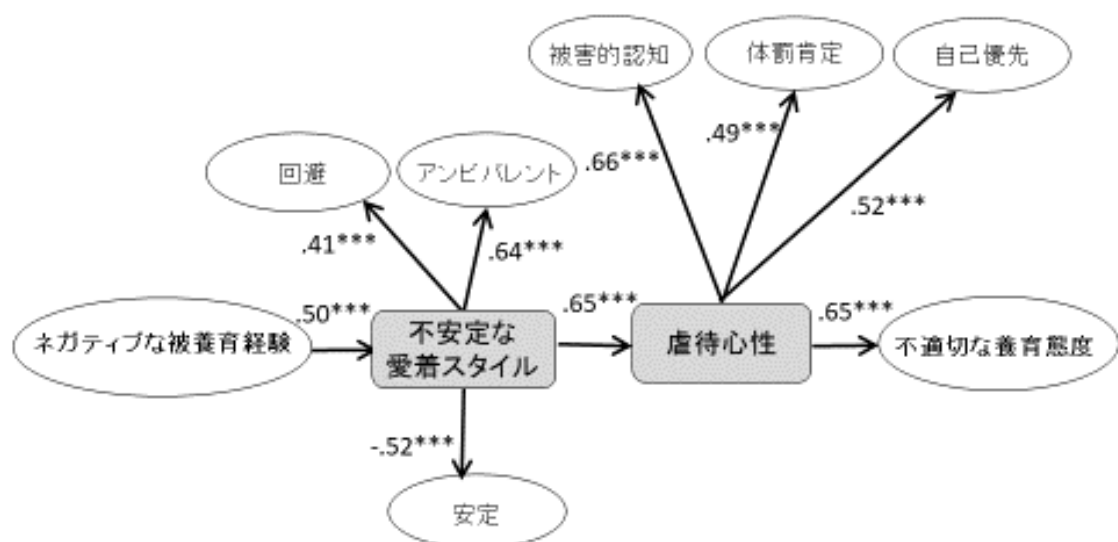
母親のネガティブな被養育経験が母親の愛着スタイル（安定・回避・アンビバレント）に影響し、愛着スタイルが母親の虐待心性（被害的認知・体罰肯定・自己優先）に影響を及ぼし、虐待心性が現在の子どもへの養育態度に影響を与えるというモデル

（Figure 12）を想定し、回答に不備のない 775 名のデータを使用して、共分散構造分析を用いて検証した。被養育経験尺度は、被養育経験がネガティブであるほど得点が低くなる尺度であるため、母親のネガティブな被養育経験による影響を示すために、すべての得点を逆転の得点として処理した。同様に、養育態度尺度も、養育態度が不適切なほど得点が低くなる尺度であるため、不適切な養育態度への影響を示すため、すべての得点を逆転項目として処理した。

成人版愛着スタイル尺度の下位尺度である「回避」「アンビバレント」「安定」を愛着スタイルとして潜在変数にまとめ、虐待心性尺度の下位尺度である「被害的認知」「体罰肯定」「自己優先」を虐待心性として潜在変数にまとめ、それぞれの観測変数へパスを引いた。変数間の因果関係に従い、ネガティブな被養育経験から愛着スタイルに、愛着スタイルから虐待心性に、虐待心性から不適切な養育態度にパスを引き、モデルの適合度を確認した。母親のネガティブな被養育経験と愛着スタイル、虐待心性、現在の育児における不適切な養育態度の関係について、最終モデルを図示した（Figure 13）。適合度の指標は、 $\chi^2=95.917$ ,  $df=19$ ,  $\chi^2/df=5.048$ , IFI=. 915, TLI=. 836, CFI=. 913, RMSEA=. 072 (90%CI (. 058, . 087) で許容水準を満たした。

母親のネガティブな被養育経験が潜在変数である愛着スタイルに及ぼす影響をみたところ、正のパスが得られ、パス係数は. 50 ( $p<. 001$ ) であった。愛着スタイルから各観測変数へのパス係数は、「回避」へは正のパスが得られ、パス係数は. 41 ( $p<. 001$ )、「アンビバレント」へは正のパスが得られ、パス係数は. 64 ( $p<. 001$ )、「安定」へは負のパスが得られ、パス係数は、-. 52 ( $p<. 001$ ) であった。そのため、愛着スタイルの潜在変数の名前を、「愛着スタイル」から「不安定な愛着スタイル」とした。「不安定な愛着スタイル」から「虐待心性」へは正のパスが得られ、パス係数

は、.65 ( $p < .001$ ) であった。潜在変数の「虐待心性」から各観測変数へのパス係数は「自己優先」へは、.52 ( $p < .001$ )、「体罰肯定」へは、.49 ( $p < .001$ )、「被害的認知」へは、.66 ( $p < .001$ ) であった。「虐待心性」から「不適切な養育態度」へは正のパスが得られ、パス係数は、.65 ( $p < .001$ ) であった。母親の「ネガティブな被養育経験」が「不安定な愛着スタイル」に影響を及ぼし、母親の「不安定な愛着スタイル」が「虐待心性」に影響を及ぼし、「虐待心性」が「不適切な養育態度」に影響を及ぼすことが示された (Figure. 13)。



\*\*\* $p < .001$

$\chi^2=95.917$ ,  $df=19$ ,  $CFI=.913$   $RMSEA=.072(90\%CI(.058, .087))$

Figure 13 被養育経験・愛着スタイル・虐待心性・養育態度の共分散構造分析の結果

#### 第4節 考察

被養育経験と母親の愛着スタイルとの関連、母親の虐待心性と養育態度との関連を示す先行研究と、研究1から導き出された母親の愛着スタイルと虐待心性との関連から想定された仮説モデルを検証し、本研究において各要因の関連モデル図が示された

(Figure 13)。母親のネガティブな被養育経験が母親の不安定な愛着スタイルに影響を及ぼしていた。自己のワーキングモデルの中核をなすのは、自分自身が愛着対象にどの

ように受容されているか、あるいは受容されていないかについての主観的な考えである (Bowlby, 1973)。母親自身が自分の被養育経験をどのように捉えているかということが母親の内的ワーキングモデルとなり、さらに、早期の関係性における諸経験は内的ワーキングモデルとアタッチメント・スタイルの形成に関わり、それらはその後のアタッチメント関係に一貫した影響をもたらす (Rholes & Simpson, 2004) とある。子ども時代のネガティブな被養育経験が母親の内的ワーキングモデルを形成し、現在も不安定な愛着スタイルとなっていることが示唆された。

さらに、不安定な愛着スタイルが虐待心性に正の影響を及ぼしていることが示された。安定型愛着は、必要なときには愛着対象が近接可能であり、そして応答的であると見なされるような表象システムを意味している。不安に満ちた不安定型愛着は、子どもが養育者の応答性を期待しておらず、そしてその知覚された愛着対象の応答性のなさを克服するための方略を探るような表象システムを合意している (Ainsworth et al., 1978)。愛着スタイルの回避やアンビバレントの傾向がある母親は、自分の親の応答性のなさや被暴力に対峙するための方略を探った結果として、「被害的認知」「体罰肯定」「自己優先」という虐待心性を持つようになった可能性があると考えられる。本研究では、母親の被虐待経験について、身体的虐待、心理的虐待、ネグレクト、性的虐待という虐待の種類については考慮していない。虐待心性のそれぞれについて考察する。

西澤 (1994) は、虐待の再生現象を説明する社会的学習理論のひとつとしてモデル学習という概念があり、親の行動をモデルにすることによって、自分の子育ての方法を学習するということを意味していると述べている。親の暴力をしつけの方法として学習してきた場合や、暴力を受けることを正当化しようと考えた可能性があり、虐待心性の「体罰肯定」が強化されたと考えられる。また、「自己の欲求優先」は“子どもがいなければ・・・”という、子どもの存在への非受容性を表す因子であり、「親」になりきれていないといった「親」としての未熟性や望まない妊娠・出産のための人生設計の変更といった女性としての生き方をめぐる葛藤などが関与している可能性がある (西澤・屋内, 2006)。子どもの存在への非受容性と「親」としての未熟性については、自分の幼少期が良好な親子関係ではなかったことによって、良い親子関係のイメージが持てないために生じている可能性も考えられる。良好な親子関係ではなかった、すなわち、愛着スタイルが「回避」「アンビバレント」傾向であると考えられ、それが虐待心性に影響を及ぼしている可能性があると考えられる。「被害的認知」については、虐待環境で

育った子どもは、「自分は悪い子」という低い自己評価と、「他者は自分を責め、自分を傷つける存在」という他者イメージをもつようになると言われている（西澤，1994）。母親が非応答的であったり、拒絶的であるような時、子は母親を悪いもの、“不安定なもの”として内在化し、それに応じて自分が愛され、助けられるに値しない存在であるという固定的な表象を作り上げてしまう（Bowlby, 1973）。自分も他者も信頼に値しないと考えることが、“子どもが私をばかにしているように感じる”“子どもが私に悪意を抱いているような気がする”などと被害的に認知する傾向に影響を及ぼしていると考えられる。深津（2002）は、児童虐待に関わる母親の特徴として自己価値の低さを挙げ、自信がないために絶えず人からどう思われているか気になり、過剰に厳しい目で自分を評価してしまうため、自分が母親としてうまく機能していないと、泣いている赤ん坊でさえも、自分のことを悪くてダメな母親だと非難しているように感じると述べている。本モデルにおいても母親の不安定な愛着スタイルが虐待心性に影響を及ぼしていることが示された。

さらに、虐待心性が母親の不適切な養育態度に正の影響を与えていることが示された。すなわち、母親が「体罰肯定」「自己欲求の優先」「被害的認知」などの虐待心性を抱くことによって不適切な養育態度が生じることが示された。

本研究によって、母親のネガティブな被養育経験が不安定な愛着スタイルに正の影響を及ぼし、母親の不安定な愛着スタイルが、「体罰肯定」「自己欲求の優先」「被害的認知」からなる虐待心性に正の影響を及ぼし、虐待心性が母親の不適切な養育態度に正の影響を及ぼしているというモデルが成立することが検証された。すなわち、母親のネガティブな被養育経験が、母親の不安定な愛着スタイルと虐待心性というプロセス要因を経て、不適切な養育態度に影響を及ぼすという、ネガティブな被養育経験の世代間連鎖のモデルが得られた。ネガティブな被養育経験を持つ母親の世代間連鎖を抑制するには、母親の愛着スタイルの特徴、および虐待心性の傾向に注目した支援の重要性が示唆された。



## 第5章 研究3 ネガティブな被養育経験の連鎖を克服する母親の心理プロセス

### 第1節 目的

研究1では、ネガティブな被養育経験が連鎖するかどうかに関して、「被害的認知」に有意な差が見られた。ネガティブな被養育経験の連鎖あり群は連鎖なし群に比べて有意に「被害的認知」が高いことが示唆された。また、研究2では、ネガティブな被養育経験が不安定な愛着スタイルに影響を及ぼし、不安定な愛着スタイルが虐待心性に影響を及ぼし、虐待心性が不適切な養育態度に影響を及ぼしていることが示された。では、ネガティブな被養育経験がある母親は、どのような特徴を持ち、連鎖を克服するためにどのような心理プロセスをたどるのであろうか。

研究3では、ネガティブな被養育経験がある、幼児を持つ母親に対してインタビュー調査を行うことにより、ネガティブな被養育経験がどう子育てに影響を及ぼしているのか、どう乗り越えようとしているのかという心理プロセスを探索的に検討することを目的とする。全体のプロセスをまとめたうえで、連鎖あり群と連鎖なし群との違いについて注目し、負の世代間連鎖を克服する要因についても探索的に検討することを目的とする。虐待の世代間連鎖に関する先行研究による負の連鎖を克服する要因、すなわち、自らの経験を振り返り語る能力、ポジティブな重要他者の存在、社会的サポートの享受について、非臨床群においても要因となっているのかについて検討する。

### 第2節 方法

#### 2-1 調査対象

研究1における質問紙調査の協力者777名において、インタビューへの協力意思を示して連絡先を記入した母親は48名であった。そのうち、ネガティブな被養育経験のある母親、すなわち、連鎖あり群と連鎖なし群の母親は6名であった。6名では調査対象者として人数が少なく、十分な情報が得られないという理由により、19項目中、ネガティブな回答（3点以下の回答）が5項目以上ある母親3名を加えて合計9名とした。また、総合病院の心療内科に通う幼児を持つ母親で、ネガティブな被養育経験があると主治医が判断した母親3名を調査対象者とした。3名に対して、研究1における質問紙調査を実施したところ、連鎖あり群が1名、安定養育群が2名であった。安定養育群の2名についても、19項目中、ネガティブな回答（3点以下の回答）が5項目以上

ある母親に該当した。最終的に、19 項目中、ネガティブな回答（3 点以下の回答）が 5 項目以上ある母親 12 名をネガティブな被養育経験を有する母親としてインタビューを実施した。そのため、調査対象者には、安定養育群 4 名、不安定養育群 1 名を含んでいる。

## 2-2 調査時期

2013 年 7 月中旬～11 月上旬

## 2-3 手続き

調査対象者 12 名に対し半構造化面接を行った。半構造化面接は筆者である面接者と一対一で行われ、インタビューガイドの質問に沿って自由に語ってもらった。面接場所では対象者の自宅、喫茶店および面接室にて行われた。面接時間は、40 分から 90 分の範囲であった。

## 2-4 倫理的配慮

面接に際して、守秘義務の保障、参加拒否権利の保障を説明し承諾を得たうえで、文書を交わした。調査対象者の許可を得て録音し逐語化した。

## 2-5 質問項目

林・横山（2010）を参考に作成したインタビューガイドを以下に提示する。

- ① 子ども時代（～12 歳）の両親それぞれの印象
- ② それにまつわる具体的なエピソード
- ③ その頃の両親それぞれに対する感情
- ④ 今現在の両親に対する感情
- ⑤ 子ども時代（～12 歳）の両親とのエピソードが現在の自分の考え方や気持ち・生活全般に与える影響
- ⑥ 子ども時代（～12 歳）に両親以外で印象に残る人物
- ⑦ その人物との関わりに関する具体的なエピソード
- ⑧ その人物とのエピソードが現在の自分の考え方や気持ち、生活全般に与える影響
- ⑨ 現在の自分自身の子育てについて、両親や⑥で挙げた人物が与える影響

- ⑩ 自分の受けた子育てと自分の子育ては実際にどの程度（何%くらい）似ているか
- ⑪ 気持ちとしてはどの程度同じように、違うようにしたいと考えているか
- ⑫ 自分の育てられ方について振り返ることはあるか、あるとすればそれはどんな時か
- ⑬ 自分の小さい時の家庭の様子や育てられ方について誰かに話すことはあるか
- ⑭ 話しているとしたらどんなときに誰に話しているか
- ⑮ 自分自身の子育てについて振り返ることはあるか、あるとすればそれはどんな時か
- ⑯ これまで子育ての中で辛かったり困ったりしたのはどんな時か
- ⑰ そういう時に頼りになった人や場所はどこか
- ⑱ 子育てに関しての家族のサポートについてどう感じているか
- ⑲ 施設や相談所などのサポートを利用したことはあるか
- ⑳ 自分の子育てについて、自分自身どのように思っているか

## 2-6 分析方法

### 2-6-1 M-GTA (Modified Grounded Theory Approach)

データの分析法は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA）を用いた。M-GTA は、Glaser & Strauss (1965) が開発したグラウンデッド・セオリー・アプローチをより理解・活用しやすいように木下 (1999) が修正した分析法である。

グラウンデッド・セオリーは、データに密着した分析から独自の説明概念を作り、それによって統合的に構成される。人間と人間の社会的な相互作用に関係し、人間行動の説明と予測に有効な、限定された範囲内における説明力に優れた理論である。また、木下 (2003, 2007) は実践的活用を促す理論であることを強調し、データが収集された現場と同じような社会的な場に戻されて、そこでの現実的問題に対して試されることによって、その出来栄が評価されるべきという領域密着型理論を重視する立場をとっている。

### 2-6-2 本研究に関する M-GTA の適応性

本研究は、インタビューデータより、対象者が両親からどのような養育を受け、それをどのように感じていたか、および、両親以外の重要他者との関わり、それらが現在の子育てにどのような影響を及ぼしているかについて、対象者の子ども時代の両親と重要他者との相互作用、そして、現在の自分と子どもとの相互作用を軸に、対象者の心理的

変化を捉え、現在の子育てのあり方を見ていこうとするものである。具体的な対象者の経験から、現在の子育てへのプロセス性を描き出したいと考えている点において、データの文脈を重視して切片化を行わない M-GTA が適していると考えた。また、母子関係の相互作用に注目したいと考えている点において、相互作用を重視する M-GTA を使用することが適切だと考えた。さらに、ネガティブな被養育経験を克服しようとする母親のプロセスを示し、それを支援者の立場として考察し、支援に役立てていくことが本論文の目的であるため、結果としてまとめられたグラウンデッド・セオリーを実践現場に還元する領域密着型理論を重視する M-GTA（木下，2003；2007）での分析が適切だと判断した。

### 2-6-3 分析過程

M-GTA を用いて行った分析過程を簡単に説明する。まず、インタビュー記録の中から、ディテールが豊富で多様な具体例がありそうな一つのデータを選び出した。次に、分析テーマに照らし合わせて関連のありそうな箇所に着目し、概念を生成した。その際、分析ワークシートを概念ごとに作成し、データで着目した箇所（具体例）の書き込みを行い、そこから具体例に即して定義を定めた。データ分析を進める中で、新たな概念を生成し、具体例が豊富に出てこなければ、その概念は有効でないと判断した。同時に、理論的メモには、考えた各概念の関係性、類似性、対極性を比較検討したもの等を書きこんだ。この過程において、解釈に深みを得るため、虐待に関する母子臨床の専門家の助言を得ながら、継続的比較分析を行っていった。すべてのデータの継続的比較分析が完了した後、各概念の関係性を検討し、カテゴリーを生成した。以上に基づき分析結果をまとめ、その概念を文章化し（ストーリーライン）、さらに結果図を作成した。分析の妥当性を図るために、M-GTA 研究会によるスーパーヴァイズを受け、必要に応じて修正した。

分析過程について具体例を挙げて実際の手順を示す。インタビュー実施後、分析を進めるにあたり、Aさんのデータを最初の分析データとした。Aさんは、インタビューの中で、両親からのネガティブなエピソードとそれに対する自分の気持ちを多く語っており、自分の苦しさなども言語化していたため、最初の分析データに相応しいと考えた。

分析テーマである「ネガティブな被養育経験の子育てへの影響とそれを乗り越えようとする母親の心理プロセス」に照らし合わせて、記録の中の関連のありそうな箇所にア

ンダーラインを引き、その部分についての解釈を行っていった。以下、カテゴリーを【 】、概念名を〈 〉、概念の定義を‘ ’、具体例を「 」で記述する。

Aさんのインタビュー記録の着目部分、例えば、「仕事が忙しい時は急に怒鳴られたり、急にけりとはばされたりということがありました」には、〈身体的虐待相当行為〉という概念を生成し、‘自分が受けた身体的な虐待に相当する行為’と定義した。「あなたは黙って親の言うことを聞いていればいいのっていう感じで怒鳴ったり、体をはげしくゆさぶったりすることがしばしばありました」という具体例も同様に〈身体的虐待相当行為〉の概念に分類した。「両親の意にそった形でふるまいたいという気持ちも強く、私自身も、両親の顔色をうかがうというか、そのことにちょっと必死だった」という具体例には、〈親の機嫌をうかがう〉という概念を生成し、‘親の機嫌をうかがっていた様子’（他のデータの分析を進める中で、定義を‘親の機嫌をうかがっていた様子・おびえていた様子’に変更）と定義した。「うまくたちまわれない自分がとても悪いんだと思い込んでいました。なのでおそらくその影響だと思うんですけど、自己評価が低いのかな、あと、自分にちょっと自信が持てない面が強いのかなと思います」という具体例には、〈自己肯定感の低さ〉という概念を生成し、‘自信が持てない’（他のデータの分析を進める中で、定義を‘自信が持てない、おどおどすること’に変更）と定義した。「外で接する大人たちに比べて両親それぞれの言い分や行動が理不尽なものだと感じていました」という具体例には、〈親への嫌悪感情〉という概念を生成し、‘親の養育態度に対して抱いた嫌悪感情やこうしてほしかったという気持ち’と定義した。その際、反対に位置づけられる具体例があり、〈親の養育の一部を受け入れる〉〈親の態度を前向きに捉える〉の概念を生成し、理論的メモに記した。

Aさんの記録を分析した結果、22個の概念が生成された。次にCさんのインタビュー記録について同様の作業を進めると、すでに生成された概念に振り分けられたものの他に、「すごい耐えているんでわたし、子どもがほんとに好きかもほんとにわからない。自我が出てからの子どもとかもともと苦手だったのかもしれないですけど、そういうときに対応するのにこれは私がこうやって親から育てられたせいなのかなって思う」という具体例があり、〈自分の性格を被養育経験に関連づけて考える〉の概念を生成、‘自分の性格や境遇を被養育経験のせいにする’と定義した。また、「自分がされたからそうしちゃうってこと多いじゃないですか、だからそうならないように自分を自制するっていうってすごい大変」という具体例には、〈自己コントロールのむずかしさ〉という概念を

生成し、‘自分がされたことをしないようにすることに常に意識を向けている大変さ’と定義した。〈ひとりでがんばる〉も C さんの分析の際に生成された概念であった。その後、E さんの分析を進める際、「母の印象っていうのはないですね。正直いつも寝ている人みたいな感じ、父は影が薄くてあまり話を聞いてくれない、あんまり相手をしてくれないという感じ」との具体例から、〈ネグレクト〉の概念を生成し、‘養育放棄や親の無関心’と定義した。それに従い、A さんの具体例「常に体の具合が悪いけど、他のおうちの子みたいに病院にあまり連れて行ってもらった記憶がなくて」も、〈身体的虐待相当行為〉からこの概念に移した。「自分を出すことが苦手、人に甘えることも苦手、あんまり人と距離を狭められない」という具体例から、〈人に頼れない〉という概念を生成し、‘人には頼れないと感じている’と定義した。「家が嫌だったということはある意味自立を促してもらえたのかな」「最近それが悪気があったのではなく、母は自分の気持ちに正直すぎるのでオブラートに包めない人だということがわかった」「世間にもまれると、お父さんに対して歩み寄ったりその当時の気持ちがわかったり、冷静にみれるようになった」という具体例から、〈親の態度を前向きにとらえる〉という概念を生成した。「転勤を何度か経験して、無理しなくていいんだなっていう、まわりに甘えるっていうことも大事だなと思いました」「他の人よりは少し経験していることが多いからそういう人の気持ちを考える人になってきたかな」の具体例には、〈被養育経験の捉え方を変える〉という概念を生成した。すべてのデータについて継続的比較分析を行い、その行程を理論的メモに記した。同時に、分析ワークシートを完成させていった。その後、概念の生成と解釈について口頭で虐待臨床の専門家に説明し、議論を交わして概念の言葉の見直しや定義の修正などを行い、カテゴリーに収束させて概念表を完成させた。

#### 2-6-4 解釈の適切さ

解釈の適切さや確からしさの向上を図り、本研究においては、分析・解釈の過程がわかりやすいように、手順について具体例を挙げて明示化することを重視した。

着目した具体例が最適に概念を示しているかを検証するために、インタビュー記録の中の注目個所にアンダーラインを引き、ラインの最後に（ ）をつけて、概念表とともに母子臨床の現場で働く心理士 4 名に各 3 人分のデータを提示し、最適と思われる概念を記してもらった（一致率 84. 6%）。筆者が、最適と思った概念と別の概念が妥当と評価された箇所に関しては、適切な概念名で示されていない、あるいは、重なる概念があ

ると判断し、協力を依頼した虐待臨床の専門家とともに解釈を深めて再考し、一部修正した。例えば、〈機嫌をうかがう〉と〈恐れ・怯え〉は重なる概念であると判断し、〈機嫌をうかがう〉にまとめた。〈子育ての辛さ〉を概念にしていたが、多くのデータがそこに割り振られてしまうため、〈子育ての辛さ〉は概念ではなくカテゴリーとしたなどである。「研究する人間」(木下, 2007)の意識化を重視しながらも、解釈に偏りがいないかを検証しながら進めることを目指した。

#### 2-6-5 概念生成の例示

本論文における一つの概念の生成過程を例示する。以下は、現在幼児を持つ母親が自分の被養育経験を語った部分である。「病院にあまり連れて行ってもらえなかったんですね。なんか家の中、常に動物がいて、私は皮膚炎になったり鼻炎になったりすることが多かったんですけど、母は一回病院に連れて行くだけでそのあと続けて治療をするようなときに、どうも続けて連れて行ってもらった記憶がなくて、1回行けばそれでいいと思っている感じで、常に身体具合が悪いけど、他のおうちの子みたいに病院にあまり連れて行ってもらった記憶がなくて…。なので、自分の子どもの場合は、なんかちょっと熱があったとかだったら必ず病院に連れていってるし、家の中も清潔を心がけているし、ほんとに反面教師に思っています」筆者はこの部分を、対象者が親の態度を見て、されていやだった被養育経験から、自分の子育てではそういうことはしないようにしようと考えたと解釈して、概念名を〈反面教師〉とし、定義を「親にされていやだったことはしないように強く思うこと」とした。他には、「なんかそれだけはしないでおこうと。子供に対して、っていうのはすごいありますね。そうやって思っているの、例えば叩くとかは絶対にやらないって思って、実際やらないようにしてる」「母があまり何もできない人だったので逆に私は逆にあの、何て言うか、子どもにかまってあげたいっていうのがあって、えーと、小学校とかでボランティアとか父兄が結構参加するイベントがあるんですけど、そういうのにこまめに出るようにしたりとか、とにかく私は母に対してえーと、なんか、自分の友達になんかお母さんが会ったら恥ずかしいなっていう気持ちがあって、子どもにとって恥ずかしくないお母さんでいようと思っています」など、親の養育態度を反面教師とする具体例が多くあり、キー概念として位置づけられた。

### 第3節 結果と考察

#### 3-1 対象者のプロフィール

対象者は、関東圏内住居者 9 名（臨床群 3 名含む）、東海圏内住居者 3 名であり、平均年齢は 36.3 歳（28 歳～44 歳）であった。家族構成は、夫と子ども 1 人が 2 名、夫と子ども 2 人が 7 名、夫と子ども 3 人が 2 名、子ども 2 人が 1 名であった。就労形態は、常勤 4 名、パート 1 名、自営手伝い 1 名、無職 6 名であった。原家族構成は多世帯が 7 名、核家族が 5 名であった。教育歴は中学卒 1 名、高校卒 3 名、専門学校卒 1 名、短大卒 1 名、大学卒 3 名、大学院卒 3 名であった。成人版愛着スタイル尺度（詫摩・戸田，1988）の結果、回避型 5 名、アンビバレント型 5 名、安定型 2 名であった。インタビュー対象者のプロフィールを Table 11 に示した。

Table 11 研究 3 のインタビュー対象者属性

名前	年齢	家族構成	就労	原家族構成	愛着スタイル
A	37	夫・子 2	有	多世帯兄弟有	回避
B	39	夫・子 3	有	母・祖父母兄弟無	回避
C	37	夫・子 2	有	父母兄弟有	回避
D	32	夫・子 3	無	父母兄弟有	アンビバレント
E	38	子 2	無	多世帯兄弟有	アンビバレント
F	41	夫・子 2	無	父母兄弟有	アンビバレント
G	31	夫・子 2	有	多世帯兄弟有	安定
H	44	夫・子 2	有	多世帯兄弟有	回避
I	37	夫・子 2	無	多世帯兄弟有	安定
J*	35	夫・子 1	有	父母兄弟有	アンビバレント
K*	36	夫・子 2	無	父母兄弟有	アンビバレント
L*	28	夫・子 1	無	多世帯兄弟無	回避

\* 臨床群：総合病院の心療内科に通院中



### 3-2 概念とカテゴリー・大カテゴリー

分析焦点者を「ネガティブな被養育経験を有する幼児を持つ母親」、分析テーマを「ネガティブな被養育経験の影響とおりあいをつける母親の心理プロセス」としてインタビューデータを分析した。その結果、生成された概念は30個であった。概念相互の関係からカテゴリーの収束化を行った結果、9個のカテゴリーに収束した。9個のカテゴリーは、3個の大カテゴリーに収束した。すべてのカテゴリーと概念の定義を Table 12 に示した。

Table 12 研究3のカテゴリーと概念の定義

大カテゴリー	カテゴリー	概念	定義
被 養 育 経 験	納得いかない 親の態度	心理的虐待・受容されていない	受容されていないと感じた親の態度
		身体的虐待相当行為	自分が受けた身体的な虐待に相当する行為
		ネグレクト	養育放棄と親の無関心
		きょうだいとの差別	きょうだいと差別された親の養育態度とそれに対する感情
	親の態度に対する 自分の反応	親への嫌悪感情	親の養育態度に対して抱いた嫌悪感情や こうしてほしかったという気持ち
		親の機嫌をうかがう	親の機嫌をうかがっていた様子・怯えていた様子
		孤独感・さみしい気持ち	親の態度に対してさみしいと感じたこと
	ポジティブな 要素	両親以外の重要他者の存在	親以外の重要人物との受容的な関わりとその影響
	自分の人格形成 への影響	自己肯定感の低さ	自信が持てない、おどおどすること
		人に頼れない	人には頼れないと感じること
		自分の性格を被養育経験に関連づけて考える	自分の性格や境遇を、親の養育態度・環境に 関連づけて考えること
子 育 て へ の 影 響	子育ての辛さ	自己コントロールのむずかしさ	自分がされたことをしないようにすることに 常に意識を向けている大変さ
		フラッシュバック	子育ての中で生じるフラッシュバックの辛さ・ 思い出すと辛くなること
		ひとりでがんばる	一人でがんばる子育ての辛さ
		子育ての適切なモデルがない	自分がされていないので適切な子育てが どういうものかわからない困難さ
	自信の持てない 子育て	親と同じことをしてしまう罪悪感	親の養育と同じことをしたくないのに 気がつけば同じことを子どもにってしまう罪悪感
		子どもへのネガティブな感情	子どもに対して抱いてしまうネガティブな感情
		子どもがどう育つか不安	子どもに対して無理していたり無視やどなる ことなどの子どもへの悪影響の不安
		子どもの発達や不適応への不安	子どもの発達障害や不適応が 今後どうなるのかの不安
	子育ての方略	反面教師	親にされていやだったことは しないように心掛けること
		頭で考える子育て	自然にできず頭でどう対応したら いいのか考えて行う子育て
		自分の子育てへの満足感	親ができなかったことを自分はできているという 満足感・自己肯定感を持つこと
お り あ い を つ け る	親に対する気持ちや 捉え方の変化	親の養育の一部を受け入れる	親の養育態度の中でここは良いと 思える部分について同じようにすること
		親の態度を前向きに捉える	時間の経過・自分が親になったこと・親が老いてきた こと等によって生じた親を受け入れようとする気持ち
		親の態度の合理的解釈	親はああいう状況だったからあんな 態度をとっても仕方なかったと思ひ込もうとすること
		あきらめて期待しないようにする	親に期待せず、会わないようにしたり距離を とったり、あきらめたりすること
	自分を 保つために	家族のサポート	夫や今の家族のサポートに支えられていること
		人に話すこと	自分の辛い経験や悩みを共感してもらうことで 癒えること
		専門家への相談・社会的サポート	育児相談や治療的介入など専門家に救われたことや 社会的サポートに助けられたこと
		被養育経験の捉え方を変える	被養育経験を自分なりに前向きに 捉えようとする

### 3-3 全体のプロセス

全体のプロセスを結果図とストーリーラインで示した。概念とカテゴリー間の関係を検討し、ネガティブな被養育経験を持ちながらも懸命に子育てに向き合っている母親の心理プロセスを結果図（Figure 14）に示した。続いて、すべての概念名とカテゴリー名によってプロセスを要約するストーリーラインを示した。分析の最小単位である概念を〈 〉、概念間の関係から生成されたカテゴリーを【 】、大カテゴリーを[ ]で示した。結果図において「 ➡ 」は影響の方向、「 ➡ 」は変化の方向を示す。

### 3-3-1 結果図

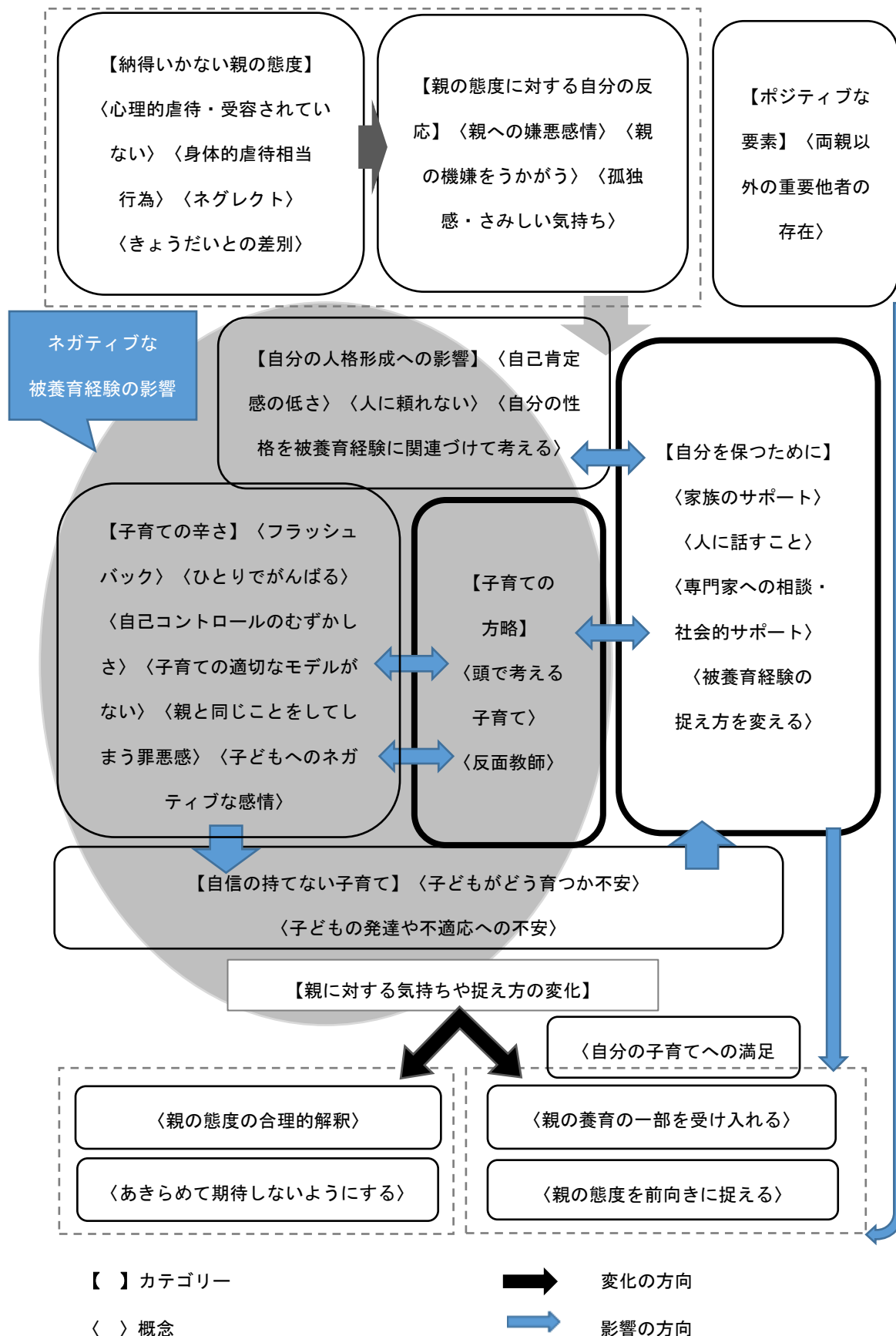


Figure 14 研究3の結果図 ネガティブな被養育経験の克服への心理プロセス

### 3-3-2 ストーリーライン

子ども時代の[被養育経験]は、人格形成やその後の人生の基礎となる。【納得いかない親の態度】である〈心理的虐待・受容されていない〉〈身体的虐待相当行為〉〈ネグレクト〉〈きょうだいとの差別〉は、子どもにネガティブな【親の態度に対する自分の反応】を生じさせる。〈親への嫌悪感情〉を抱きながらも〈親の機嫌をうかがう〉行動を取り、〈孤独感・さみしい気持ち〉があった。【ポジティブな要素】としての〈両親以外の重要他者の存在〉は、親との間に築けなかった愛着関係を代行する役割を担い、虐待に至らないで済んだ要因のひとつとなった。

[自分の子育てへの影響]段階において【自分の人格形成への影響】があった。ネガティブな被養育経験は、〈自己肯定感の低さ〉〈人に頼れない〉などの性格を形成し、〈自分の性格を被養育経験に関連づけて考える〉傾向にあった。ネガティブな被養育経験を持つ母親特有の【子育ての辛さ】として〈フラッシュバック〉や衝動的に子どもに対して〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉が挙げられ、〈自己コントロールのむずかしさ〉に葛藤を抱える。不適切な被養育経験で獲得してしまったであろう愛着スタイルの回避傾向によって〈ひとりでがんばる〉ことは強化され、がんばろうとしても自分が適切な養育を受けていないため〈子育ての適切なモデルがない〉ことに苦しむ。【自信の持てない子育て】は〈子どもがどう育つのか不安〉であり、〈子どもの発達や不適応への不安〉も重なる。辛い状態が続くと〈子どもへのネガティブな感情〉が生じて虐待のリスクが高まることもある。ネガティブな被養育経験を持つ母親の【子育ての方略】は〈反面教師〉であった。親にされていやだったことは子どもにしないという強い決意があり、それは〈頭で考える子育て〉でもあった。自分がしてもらいたかったことを自分が子どもにしてあげることにより〈自分の子育てへの満足感〉が得られ、自己肯定感や自分の傷の癒しを得られる場合もあった。

[おりあいをつける]段階では【親に対する気持ちや捉え方の変化】を生じさせる力動が働く。時間の経過、自分が親になったこと、親が年をとったことなどによって〈親の養育の一部を受け入れる〉〈親の態度を前向きに捉える〉ことが可能となる。一方で、前向きに捉えられず、あの場合は仕方がなかったと思い込む〈親の態度の合理的解釈〉や〈あきらめて期待しないようにする〉ことにより気持ちを整理していく母親も存在した。【自分を保つために】〈家族のサポート〉〈人に話すこと〉を求める母親もいたが、周囲への相談ではなく〈専門家への相談・社会的サポート〉を選択する 경우가多か

った。〈被養育経験の捉え方を変える〉ことによって前向きに子育てに取り組む方向へ変化していくが、一部の母親はいまだに葛藤を抱えながら子育てに向き合っている。

### 3-4 概念の定義と具体例およびカテゴリーごとの考察

カテゴリーについての説明に続き、各概念を挙げ、はじめにその定義を示し、続いて該当する具体例を抜粋して記述した。具体例は「 」で示し、具体例の後ろには面接協力者に割り当てたアルファベットを（ ）内に示した。それらを受け、カテゴリーごとの考察を示した。

#### 3-4-1 【納得いかない親の態度】

納得のいかない親の養育態度は、繰り返し本人の記憶として蘇る。自分を拒否された経験は、その後の人生に大きな負の影響を及ぼすと考えられる。

〈心理的虐待・受容されていない〉は、受容されていないと感じられた親の養育態度のことを指す。「父が仕事をやめてしまった関係で母の方もちょっと仕事を始めて忙しい様子だったので、子どもなりにちょっと家事を手伝ったりしてがんばってたんですが、あなたが作るものはまずいとあまり褒められた記憶はなくて、ちょっと攻撃的な反応が返ってくることが多かったです」(A)、「くつとか洋服とか選ぶときにお母さんが好きなブルーのものを選ばなくちゃって自分ですごい思ってた記憶があるんですね。それでもちょっと女の子っぽい色の物がどうしても欲しくなって、ピンク色の物とかを手にとってこれが欲しいって言ったときに、母に、そんないかにも女の子らしい頭の悪そうな色を選ぶなんてお母さんの子じゃないわとか言われて、その記憶がすごくあるんですけど」(A)、「あまり料理してなかった。だしの味わかんない。普通入院すると病院の料理っておいしくないというんですけど、食事がおいしかった。食べたいと思って言ったんだけど、魚料理やらない。そんな臭いもん作れるわけないでしょと言われ、希望をだしても却下だったし。たとえ作ってくれたりしても、いやいや作っているって感じで。お母さんのできないことは言っちゃだめって思った。母親は食に興味なかった。ごはんはワンパターンでバランスもよくなかった」(A)、「母はやっぱり時間に追われていたので、話しかけても今新聞読んでいるからとか言ってあまり話を聴いてもらった記憶がない。父は12歳までのときは絶対権力的な感じでもう逆らうなんてことはできなかった」(D)。

「私はほんとにこうしたかったのと言う気持ちを思い出す。例えばかわいい服をきたかったのに母親は正当的な、自分の好きなボーイッシュなものを着せられていたなど、服を見れば思い出すし。常に私はこうしたかったなということを常に思い出しますね。幼い時のことを」(F)。

〈**身体的虐待相当行為**〉は、自分が受けた明らかな虐待行為のことを指す。「父には仕事が忙しい時は急に怒鳴られたり、急にけりとばされたりということがありました。母の方は感情的になりやすく怒りっぽかったんですけど、例えば洗濯物の干し方だとか、物のしまい方、洋服のたたみ方とか、ほんとにささいなことなんですけども、別のやり方はいっさい認めてくれなくて、母に対してこういうやり方でたたむのを習ったよとかこうやって干すといいて聞いたよみたいに発言をするとすごく怒りだして、あなたは黙って親の言うことを聞いてればいいのっていう感じで怒鳴ったり身体を激しくゆさぶったりすることがしばしばありました」(A)、「母が1回すごく怒って柱に縛りつけられたことがあって、それが忘れられないんですけど今でも。兄がきてほどこいてくれたっていうエピソードがひとつ印象深いんですけど。結構泣いて怒ったりとかしてましたね」(C)、「あとあと聞いた話ですけど、家に灯油ばらまいてどうのっていう話を聞いた」(L)。

〈**ネグレクト**〉は、養育放棄と親の無関心のことを指す。「母は一回病院に連れて行くだけでそのあと続けて治療をするようなときに、どうも続けて連れて行ってもらった記憶がなくて、1回行けばそれでいいと思っている感じで。常に身体の具合が悪いけど、他のおうちの子みたいに病院にあまり連れて行ってもらった記憶がなくて」(A)、「母は病気で、印象っていうのはないですね。正直いつも寝ている人みたいな感じ。父と会うのは週末の土日だけだったので、父は影が薄くて(笑)あまり話を聞いてくれない、あんまり相手をしてくれないなという感じでした。母の方は、あまり接触がなかった」(E)、「(父親は)結構アルコールを飲んでいて人で、それがひどくなって、なんか家に帰ることがなかったりとか。病院に私を連れて(母の)お見舞いに行ったときに、私を置いてどこかに行っちゃったりとか、それも何してるかわからなかったんですけど、何日も帰ってこなくて気づいたら帰っていたとか、最終的にはくすりに溺れてしまったようで」(L)。

〈きょうだいとの差別〉は、きょうだいと差別された、親の養育態度やそれに対する感情のことを指す。「それぞれ高校生になってからなんですけど、朝早く出るとき、妹には朝ごはんがあったけど私にはなくて、それは父がなんだか早起きして、妹のためにせっせとサラダ作ってパン焼いたりしてたんですけど私にはなくて。あの子は一人で大丈夫だからみたいな感じで、そういえば私には朝ごはんはなかったなと思う」(A)、「私きょうだいの中で女、男、男なので、母に一番下の弟が1番かわいいでしょって中学生のころかなんかに聞いたらそうだよと言われたのがショックを受けた。弟と比較された」(D)。

子ども時代の【納得いかない親の態度】は、自分が〈受容されていない〉という経験となる。〈きょうだいとの差別〉や言葉の暴力など〈心理的虐待〉と思われる親からの言葉や態度が心の傷となる。

また、適切な養育とは子どもにとって必要なケアを与えることであり、それがなされないのがネグレクトである。ネグレクトは他の積極的な虐待に比べて一見軽いように見えるかもしれないが、実際には子どもの心身の健康に重篤な影響を及ぼすものである(奥山, 2010)。Eのケースは病気で寝込んだ母親がほとんど関わることなく、母親像を築くことができなかった。印象もエピソードもなく、母親は母親機能を果たしていない。Green (1986)によって提唱されたデッドマザー・コンプレックスのように、母親が実際には存在しているにも関わらず、母親の抑うつのために乳児の内的世界には存在していない特徴がある。Eは全体的に抑うつ感が漂い、表情があまりなかった。自ら、回避的であること、自己肯定感が低いことを述べている。子ども時代の【納得いかない親の態度】は、納得のいかない状態が続いた場合、本人の無意識の中で、あるいは意識の上での深い傷となり、その人を苦しめる。それが未消化の場合は、重篤な負の影響が出る可能性がある。〈きょうだいとの差別〉に関して、受け取る子ども側の感情にも左右されるものではあるが、Kemp et al. (1962)が、一人の子どもだけが虐待されて他の子は大切に愛されていることもある、重度の虐待を受けた子どもの性別が親の神経症的問題と特異的に関連している事例もみられると述べているように、根深い問題である可能性を秘めていると考えられる。



### 3-4-2 【親の態度に対する自分の反応】

親の態度に対して感じていた〈親への嫌悪感〉〈孤独感・さみしい気持ち〉を持ちながら、無意識のうちに繰り返されていた〈親の機嫌をうかがう〉自分の反応。親の被養育態度とリンクして生じる自分の反応事態もその後の自己感や対人スタイルのあり方に影響を及ぼす。

〈親への嫌悪感情〉は、親の養育態度に対して抱いた嫌悪感情やこうしてほしかったという気持ちを指す。「学校に通ったりするようになって、外で接する大人たちに比べて両親それぞれの言い分や行動がそれぞれ理不尽なものだと感じていました。イライラしていたなあ、何かやるとすぐ怒られたなあという気持ちが強いですね」(A)、「もう母親に対しては死ねとか書いてました日記に。ほんとにそれも覚えているんですけど。いなければいいと母親がっていうのを思っていましたね」(C)、「父親が強いつていうのはずっと変わらないんで、母親が父親のいいなりっていう状態も。DV ってまでは言えないけど言語的な DV っていうのは見てていやだなと思う」(C)、「なんでこの人たちが親なんだろうっていう、他の家族がうらやましかった。家を飛び出してよその子になりたいという気持ちしかなかった」(D)、「おじいちゃんおばあちゃんの方が、あの、すごく身近だったので、えーと、んー、あまり父と母にはそのときはあまりいい感情を持っていなかったですね」(E)、「はっきりいっていやで、厳しくて、なんでというか、反発ももちろんしましたし。でも怒られるみたい。両親とも同じような考えでした」(G)、「父は感情的に、自分の感情で怒る人だったので、それで子どもたちにもあたってくるので、ちょっと嫌な感じでした。嫌いとかではないんですけど、そういう怒鳴ったりするのがいやだった」(I)、「父親は怖かったけど覚えてない。母親は常にうるさかった。それがいやでいやで。大きくなってもずっとうるさかった」(K)。

〈親の機嫌をうかがう〉は、親の機嫌をうかがっていた様子、怯えていた様子のことを指す。「両親の思う通りにふるまいたい、両親の意にそった形でふるまいたいという気持ちも強く、私自身も、両親の顔色をうかがうというか、そのことにちょっと必死だったなあという思い出がある」(A)、「父は怒ってしまうともう1週間1ヶ月話をしなくて、家族と顔をあわせないことが多かったんで、私が怒らせないようにしないって思っていたことがありました。だからあまりけんかしないようにしないと、お父さんまた怒っ

て、天照大御神のように部屋にこもってしまうっていう風になってしまうので。できるだけお父さんが帰ってくる時間になったら片づけていたなという具合」(D)、「子どものときはやはり母親の機嫌を伺いながら、波風たたないように動くような雰囲気を持った母親だったと思います。子どもらしさっていうような、あんまりわがままも、母も言わなかったって言ってますし、それこそ服従関係だったと思います。それに対して疑問を持たなかった。いい子にしていればいいので、ただ父と母はいなくなったらどうしようという依存の気持ちはものすごくあったと思います」(F)、「やっぱり怖かったし、ご機嫌伺いながらずっときたかな。ずっと怒られているという、保育園の頃からつねにビクビクしているっていうことしかないですね」(J)。

〈孤独感・さみしい気持ち〉は、子ども時代に親の態度に対してさみしいと感じたことを指す。「理不尽だったなあという怒りの感情よりも、一層強く思っていたのは、さびしいっていう、両親から自分が理解されていないということと、理解されたいという気持ちから、さみしいという感情が強かったです」(A)、「母が別れた亭主にストーカーされていて、逃げるのに仲居をしていて児童施設に預けられていたので、親からいらぬ子なので捨てられたと思っていました」(B)、「休みの日にしか会いに来てくれなかった。他のお母さんはみんな一緒にいるのに。いらぬ子なんだと思って育っていました」(B)。

【納得のいかない親の態度】に対して、〈親への嫌悪感情〉を抱いていたことが多くの母親から語られた。しかし、その気持ちを表出して反抗していたという語りはなく、ほとんどの場合、〈親への嫌悪感情〉は抑圧され、親への過剰適応という形で行動化されていた。子どもは親に対してどんなに理不尽だと思っても親に頼らないで自分一人で生きていくことはできない。意識的に親に逆らわないことを選択する、あるいは、無意識的に親に逆らうことは避けてその支配下に置かれることを選択すると考えられる。木部(2006)は、虐待あるいは不適切な養育を受けた子どもの中には、問題行動を起こすこともなく、逆に過剰適応としてよい子が無意識的に演じる子どもがいる。こうした子どもは母親などの養育者の要望を適切に嗅ぎ取り、それに適した行動を迅速に行う。また常に養育者のご機嫌を伺いながら、敏感に養育者の意図を読み取る。ここには親子の役割逆転という構造が形成されると述べている。面接したすべての母親から、〈親の機嫌をうかがう〉行動をとっていたというエピソードが語られた。子どものときは、無意識

に親に気に入られるように振舞っていたということが今になると親の機嫌を伺っていたと認識できるようになっている場合もある。安心感が得られず、常に〈親の機嫌をうかがう〉という臨戦態勢の状態にいる緊張感や、〈孤独感・さみしい気持ち〉が心の奥底に流れていることにより、健全な心の発達には阻害されていくと考えられる。

### 3-4-3 【ポジティブな要素】

被養育経験の中でポジティブな要素は自分を保って生きていくための重要な鍵となる。親が親機能を果たしていない場合、〈両親以外の重要他者の存在〉の有無は、その後の人生を歩むにおいて決定的な差となると考えられる。

〈両親以外の重要他者の存在〉は、親以外の重要人物の存在と、その人物との受容的な関わりおよびその影響のことを指す。「とてもかわいがってもらったなあっていう気持ちです。あと、祖父もとても優しい人で、よく祖父と祖母と私っていう3人で旅行に連れて行ってくれまして、両親と私と妹っていう4人で旅行に行ったことは一度もなかったんですけど、祖父母と旅行に行ったっていうのが家族旅行だったのかなという思い出です」(A)、「祖父母と母の姉の旦那さん、伯父さん。一緒に暮らしてはいないんですけど、自分の娘のようにかわいがってもらった。祖父母も一緒に暮らしているのもあるし、かわいそうな子という気持ちもあるし、他のいところより愛情を注いでもらった」(B)、「おばあちゃんの子どもになりたいって思っていました。遠かったんですけど、母が週末休みでそうじをしたいので邪魔になるからおばあちゃんちに行くとと言われて祖母のところに行っていたので、祖母と週末一緒に過ごすことが多かったのです。やさしかったのでやっぱり天国だなと弟と言っていました」(D)、「祖父は仕事をずっと年までして、その仕事を子どもが手伝うとすごくほめてくれたり、テストとかでいい点をとると一番喜んでくれたのは祖父です。祖母はほんとにあのやさしい人で、なんか私が覚えているのは、水ぼうそうになったときに、かゆくて夜眠れなくて、祖母がずっと抱っこしてくれていたのを覚えています」(E)。

Steele (1986) は被虐待児童にとって子ども時代の重要他者の存在の重要性を述べている。Egeland et al. (1988) も、虐待の連鎖を断ち切ることができた要因のひとつとして、子ども時代のある時点で愛情とサポートの提供者としての親に代わる他者の存在

があったことを挙げている。例えば E のケースでは、親からはネグレクトを受けているような状態であり、安定した愛着も親との間には形成されていなかったが、祖父母との間に親に代わる愛着関係を築けていたと考えられる。E は、「おじいちゃんおばあちゃんの方がすごく身近だったので、あまり父と母にはそのときはあまりいい感情を持っていなかったですね」と語り、自分を保護してくれなかった両親のエピソードはほとんど語られず、祖父母の存在がそれを補完していたと考えられる。祖父母に育てられ、祖父母との間に愛着を形成したと考えられる。Klein (1946) の心的発達によると、早期乳児期に、ひとつの存在である乳房がよい乳房と悪い乳房という 2 つの乳房として別々に存在していると認識される“妄想分裂ポジション”から、それらを統合していく“抑うつポジション”に移行する。Klein は、満足したよい体験が不満足な悪い体験に優ると、乳児はよい体験の記憶によって悪い体験に耐えることができるようになり、よい体験と悪い体験をもたらす乳房が同一の源泉であると知ることができるようになる。虐待や不適切な養育などでは不満足な悪い体験が満足したよい体験を凌ぐ。このような状況においては、“妄想分裂ポジション”の下でスプリッティングした対象が統合されることなく、スプリッティングはさらに拡大すると Klein は考えた。もし人間のこころの中によい対象がまったく存在しなければ、その人は頼るものが何もなく、生き延びることはできないだろう。たとえば、とても熾烈な虐待を受けた子どもであっても、彼らが生き延びているということは、それがたとえ些細であったとしても、何らかのよい思い出、あるいはよい内的対象がわずかながらにも存在していたということなのであろう(木部, 2006)。母親 A, B, D, E のいずれも、親からの不適切な養育を受けていたが、祖父母の温かい養育や支えによってよい内的対象が存在し、心の傷は負ったとしても、社会に適応して生きていくことを可能にしたのだと考えられる。

また、祖父母の存在があったから、自分と両親との関係に盲目的に巻き込まれず、祖父母との比較を通して客観的に自分の親子関係を見つめることができたとも考えられる。

さらに、母親 B, E に関しては、祖父母が支えたというよりも祖父母が養育者として機能していたとすることができる。母親 B の語りの中で自分の母親に対して「それでもすれ違いが多かったのだからな一くらいで。おかえりではなく、いらっしやいと言っていた」とある。母親 E は、被養育経験に関する自分への影響についての質問に対し、両親の養育についてではなく、迷わず祖父母の養育に関して語っていたことから、親機能の代わりを祖父母がしていたという図式を裏付けているとすることができる。

母親 B, C, D は、ネガティブな被養育経験のなかにありながらも、〈親の養育の一部を受け入れる〉こと、すなわち、親の養育は不適切であったが、いいところもあり、そういうところは真似したいと思える語りがあった。被害的な妄想に巻き込まれている状態ではなく、親には悪い部分と良い部分が存在することを客観的に述べられていることは、“抑うつポジション”に位置していると考えられており、その点が、臨床群との違いであろうと考えられる。また、【納得いかない親の態度】が存在しながらも、親へのポジティブな感情を自分の中に同時に持つことができるのも、非臨床群の特徴であると考えられる。

#### 3-4-4 【自分の人格形成への影響】

被養育経験は人格形成に影響する。〈自己肯定感の低さ〉や〈人に頼れない〉自分を決定づける。特徴的なのは、〈自分の性格を被養育経験に関連づけて考える〉発言も多く、冷静に被養育経験を振り返り、客観視することができていた。

〈自己肯定感の低さ〉は、自分が信じられない、自信が持てない、ビクビクすることなどを指す。「両親との暮らしをちょっと長いこととても苦しかったんですね。実際に身体の不調にも出ていたんですけど、家庭の中のことで、なぜ苦しいのかわからずにうまく立ちまわれない自分がとても悪いのだと思い込んでいました。なのでおそらくその影響だと思うんですけど、自己評価が低いのかな、あと、自分にちょっと自信が持てていない面が強いのかなと思います」(A)、「自信を持てない方だと思う。自己肯定感が低い。それは母にそういう風に…、そうだったからかよくわかりませんが、なんか自信満々に堂々としたタイプではないです。それが影響しているんですかね、自分ではわからないんですけどね」(E)、「逆に母と同じようには自分ではできないっていうか、スーパーというか家事もして育児もして仕事もしてっていうことが、彼女はやりたくてやっていたと思うんですけど、私はやりたくてもその能力がないというのがすごくよくわかっているんで」(F)、「とにかく厳しかったっていう印象が強いので、振り返るとしたら、あのとき私がこうしたらどういう人生だったんだろうと架空の人生を思い浮かべたりしますけど。今、例えば、手に職とか持っているわけではないですし、はっきりいって何のとりえのない主婦なんですけど、もうちょっと、高校とか大学の進路のときに、したいことが明確に見つかっていたら、もっと違う人生だったのかなとか」(G)。

「私は子どもを産むべきじゃなかったかなと思う。結局、動物とかなら自分がね、やなときは檻に入れたりとか、外に逃がしちゃったりとかそういうことができるけど、自分が一番って思っている私みたいなタイプ、タイプっていうか人間には、子育てとか向いてない。精神的には中学生くらいでストップしている感じなんで。そのまま子どもできて、年にとってすごく大変なんですね。んーんー、私、んー、やっぱり私はダメなんだなとか、私じゃなければよかったなっていうのを強く思う。んー、私あんまり必要じゃない気がする。自分自身が今の家族の中に、子どもと主人と私の中で、私は悪影響を及ぼすだけで必要ない、主人がすごくよくやってくれるので、主人といた方がすごくいい子に育つような気がする」(J)、「全然ダメだなんていう、そうですね。こうしてこうしてこうしなくちゃって考えるけどできない」(K)。

〈人に頼れない〉は、人には頼れないと感じている自分のことを指す。「一般の家庭のように親に頼ることはない。自分で解決できることは自分でやる。夫にも協力求めたことないです」(B)、「自分を出すことが苦手っていうんですかね、お母さん友達もそこまで深く付き合える人がいないっていうのか、人に甘えることも苦手ですし、やっぱりあんまり人と距離を狭められないっていう感じがあります。自分の性格的には」(E)。

〈自分の性格を被養育経験に関連づけて考える〉は、自分の性格や境遇を、受けてきた親の養育態度や養育環境のせいにすることを指す。「うつ病になってしまった。子どもが小学校のとき、次女の妊娠、出産後、産後うつ病になりました。自傷行為まではいかないけど、とにかく死にたいと。何かなと治療受けていくうちに母親に対する不平不満、愛情不足、そういうのがカウンセリングでわかりまして、3年、4年近く葛藤してて」

(B)、「すごい耐えているんでわたし。すごい我慢するという感じ。子どもが好きかもほんとにわからない。職業がら赤ちゃんとかすごく好きだけど、自我が出てからの子どもとかもともと苦手かもしれないんですけど。そういうときに対応するのにこれは私がこうやって親から育てられたせいなのかなって思うことがありますね。自分が仕事で悩んだりとか交友関係で悩んだりとかしたときに、親がこうしたからではないだろうか、自分の成育歴をかなり反映して考えちゃう」(C)、「大声、声の大きい人とか怖い。なんだろう、怖い、ビクビクしちゃったり、怒られたりするとすごく動揺したり、影響はすべて出ていると思います。まあ、自分が精神的な病気になったり、全部影響してるかなと思

う」(J)、「影響しているかわからないんですけど、自分の人格形成の中で大事な時期に結構ぐちゃぐちゃになってたから、それで結局、神経クリニックに十何年通うことになったわけですけど」(L)。

ネガティブな被養育経験は母親自身の人格形成に大きな影響を与えていた。子ども期の被養育経験がアタッチメント表象として取り込まれ、アタッチメントに関する内的ワーキングモデルが、自己と他者への信頼に関する主観的な確信と社会的情動処理・シュミレーションバイアスをつくる(遠藤, 2013)とあるように、〈自己肯定感の低さ〉〈人に頼れない〉は、自分にも他者にも信頼に関する確信が持てないでいる、ネガティブな被養育経験の影響そのものであったと考えられる。そして、〈自分の性格を被養育経験に関連づけて考える〉とあるように、自分の自己肯定感が低いのも人に頼れない性格であるのも、被養育経験が原因だと理解しているようであった。自己肯定感や困難なことがあったときは人を頼っていいんだという気持ちを育むには、乳幼児期からの親との適切な愛着関係に基づいて、自分は愛される価値がある人間なんだ、自分は大丈夫だ、困ったら助けてくれる人がいるという確信を持つことが大切である。不適切な被養育経験を受けて育った人は、自分をその価値がない人間だと考えてしまう。

母親 F は、母親への嫌悪感を多く語りながら、残忍な母親を否認し、母親のことを「スーパー」だと理想化し、逆に不適切な養育の被害者である自分のことを卑下している。F の場合は重篤な虐待でなかったから、意識上での理想化に留まったが、このような現象はしばしば被虐待児に認められる心性であり、現実には残酷な両親の理想化である(木部, 2006)。

母親 C は、自分が何かの困難にぶつかると、自分の成育歴を反映して考えてしまうと語っている。母親 B は、出産というライフイベントに対峙し、産後うつ病になってしまった。母親 J, L は、現在も精神科に通う臨床群である。虐待によって自己評価が低下し、思春期の真の自立という問題に立ち向かうことができず、精神疾患として治療の対象となった。ライフイベントや困難に直面したときに、不適切な被養育経験による脆弱性が露呈し、自分を苦しめるという図式になっていると考えられる。

### 3-4-5 【子育ての辛さ】

子育ては一般的にも決して楽な仕事ではないが、ネガティブな被養育経験を持つ母親

にとって、それゆえの辛さが生じている。

〈自己コントロールのむずかしさ〉は、自分が親からされていやだったことをしないようにしたり、自分の思い描く子育てを実行するために日々意識を向けて自分を律すること、および、そのむずかしさのことを指す。「怒っちゃったとき。あんなにきつく言わなくてもよかったな、手をあげなくてもよかったなって。毎日振り返っていますね」(B)「自分がされたからそうしちゃうってこと多いじゃないですが、だからそうならないように自分を自制するっていうのってすごい大変って思いながらがんばってやっています。すごい意識していないとそれをわーって怒らないようにするとか大声ださないとか叩かないとかは自分の中でのすごい鉄則みたいになっている。全体的に生きてることに対して無理している。みんなそうだと思うんですけど努力している。自分の置かれていた環境をそのまま出していくと社会性のない人になっちゃうし、子育てもきつとうまくいかないですし。そうってはいけないっていうようにこう自分を常に修正しているっていう感じ」(C)、「大学進学決めるまでずっと母親の気分のムラに左右されていたというか。それを押しのけてまで何とかするというのはなかったの、私が娘に気分のムラをぶつけたときに娘がその私のようにならないように気をつけるようにはしている」(F)。

〈フラッシュバック〉は、子育ての中で生じるフラッシュバックの辛さのことを指す。「子どもと接する中で自分が幼いときに両親から怒鳴られたことや理不尽に怒られたことを鮮明に思い出してそれをちょっと苦しく思う事があります」(A)、「(子どもが)生まれてからやっぱり急にいろんなことを思い出すようになりまして。(中略)子どもと接しているとき常になんかフラッシュバックのように似た場面は思い出すので、常に振り返っている感覚ではあります」(A)、「フラッシュバックもある。育児の体罰とか厳しかった。(中略)母親と暮らすようになって、スパルタの教育をしてくれる人だったので、うーん、何か厳しかったですね。しつけという大義名分あるもん」(B)、「似たような場面って出るじゃないですか、なんか騒いだり子どもが言うことをきかないような、きつとこういうときにイライラして母親は怒ってわーって怒ったんだろうなっていうのが、フラッシュバックするんで自分の中でも」(C)、「私はほんとはこうしかったのにという気持ちを思い出す。例えばわたしはかわいい服をきたかったのに母親は正当的な、自分の好きなボーイッシュなものを着せられていたのと、服を見れば思い出すし。常に私はこ



うしたかったなということを常に思い出しますね。幼い時のことを」(F)。

〈ひとりでがんばる〉は、一人でがんばる子育ての辛さを指す。「泣いてたって感じですかね。1人で泣いて少しすっきりして次もがんばろう。自殺しちゃえば楽だなと思ったこともあった。自殺はしないけど。ここから飛び降りちゃえば楽だよなと何度となく思った。この状況から逃げ出したいっていう、だから誰か支えがいたらもっと違ったかも。自分が病気になったときも、全部自分でやっていて、まあ、近くに支援がない人はみんなそうだと思うんですけど。東京の人とか。んまあ助けを求めているっていうか、助けを求めている」(C),「パパがいないのでなんでも自分一人で受け止めなくては行けないので、自分の中でどんどん溜まっていった」(E),「海外で2人出産して子育てしたので、知らないことだらけで体力的にとってもきつかったのも、本当に責任感のみで生きているという感じで。赤ちゃんのことをかわいいと思わずもう子育てしてました」(F),「子どもを優先しなくちゃいけないし、それがものすごくいやなんです。私を見てっていうか、よくあのいろいろテレビとかで子育てでネグレストとかそういう子どもの虐待のとかを見たりするんだけど、そこでやっぱり同じように思うのは、なんで私を見てくれないの、なんで子どもばかりって、私だってすごく辛いのに。子どもがちっちゃい頃はもっとイライラしてたので、イライラすると物に当たったりとか、キーンってなったり、今でもする 때가あって、ひどい時はタオルとかをカミソリとかで傷つけたりとか、それくらいイライラします(中略)必死過ぎちゃって、自分を責めるんで。だから自分が消えたいっていうか、私も辛いからいいかなって。なんかちゃんとやっとなないと、あれなんか大丈夫あそこのうち、とか言われちゃうし、すごく毎日同じ服着てるとか泣き声がするとかでも言われちゃうし、もっと、私を見て、辛いのは子どもじゃなくて私なんだけどって。(中略)自分を責める。すごく。ポチッと押して消えられるボタンがあったらとっくに押していると思う」(J),「遊んであげたいけど要領下手。家事に精いっぱい、プレッシャー、そっちを優先して子どもを後回しにした」(K),「この子がミルク嫌いってこともすごいあとから知って、なんで飲まないんだろうってすごい悩んでいた時期があったから、この子に対してっていうより、体重も増えなかったりしたから、子育てっていうのに対してイライラして悩んでいた。子育てに関してイライラしていた時期、そこに旦那やら義母が、ガアアって言うから、ストレスたまってこの子に対してイラッとしてしまったことがある」(L)。

**〈子育ての適切なモデルがない〉**は、自分がされたことがないので、適切な子育てがどういふものかわからない困難さのことを指す。「それはやっちゃいけないから何か違う方法をとって思うんですけど、ちょっともどかしいのは、やっちゃいけないことはわかるんですけど、やっていいことのサンプルが自分自身にないので、そこがちょっといつも一呼吸おかないと。(中略)両親との体験だけをもとにしてしまうと、ほんとにやってはいけないことしかサンプルになくて、やってよいことの体験がないので、それがちょっと自分なりに困っている」(A)、「私が子供のころに基本的な生活習慣(手洗い、うがい、はみがき、入浴、バランスのよい食事)を身につける機会が不十分だったので、おそらく、ほかのひとと「普通」の感覚が違う」(A)、「祖母が、あのいろいろ一生懸命がんばって、忙しい人だったので、勉強教えてくれたりとか普通のお母さんっぽい細かい世話にまで手がまわらなくて、姉と一緒にいろいろ育っていった感じで。私も今子どもを持って、子どもに対して細かい母親的な世話っていうのがちゃんとできているのかなと時々思うことがあって、いろんなしつけとか、たとえば、幼稚園のお母さんの中には、服も幼稚園に持って行くランチョンマットとかも毎日毎日アイロンかけてきちんと持っていくというお母さんがいて、私はされたことがないので、自分の子どもにもそうする必要を感じていなくて、そういうお母さんもいるんだなって思ったりしました。子どもに対しても、あまり威厳っていうのか、すごくしつけに厳しい母親ではないと思います。(中略)これでいいのか、このやり方で本当に子どものためになったのかなと、自分が本当にそーゆうことされていないので、しょっちゅうまあ反省したり、他のお母さんと比べちゃったりということはありません。そうですね、他のお母さんのやり方を見てということが多いです」(E)。

**〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉**は、親の養育と同じことを、したくないのに自然に自分の子どもへしていることを指す。「子どもを強くしかった時に、あっ、親と同じことをやってないだろうかとすごく心配になって振り返ります」(A)、「決めつけて話をしてしまったり、あと話がくどいになって自分が子どもを怒っていて思いました。母と父と一緒にだなと思いますし、母は時間がなくて夜ヒステリックに声をあらげて怒っていたことがあるので、そんなところは母と一緒にだなと、悪い影響だと思います」(D)、「そこまで教育熱心ではない。それは私がそういう風に教育されたから、育ったからだと思いま

す。(中略) 子どもが何か欲しいって言うと、まあ、だめって言うときもありますけれど、どっちかって言えばなんか与えちゃう方のお母さん。そういうのを、これでいいのかなと反省したとき、自分の子ども時代を振り返って、なんかおばあちゃんに似ているのになって思うことがあります」(E)、「理想的には私は自分が感じてきたことを子どもに感じさせたくないと思っているんですけど、今そのことがいかに大変だということを感じ、結局、同じような、母親が私にしてきたような、せかしたり、気分によって子どもにあたったりとか、結局同じようなことを自分が子どもにしていると思います」(F)、「叱り方とかは、なんか本当に腹がたったときは、なんか父に似ているような気がします」(I)、「母親と同じように子どもに対して言ってしまったり、するっていうのがほんとによくありますね。なりたくない、あーいう風には言いたくないし、あのとき傷ついたし、そういう風に言ったらいけないんだってわかりながらもそうしてしまう」(J)「自分の子どもに対して自然に、したくもないのにガミガミ言ってすごい口うるさくなったりイライラしたりとかずっと性格が似てるなと思ってそれがいやで、似てる性格がいやでイライラしちゃうのがずっとある」(K)。

〈子どもへのネガティブな感情〉は、子どもに対して抱いてしまうネガティブな感情のことを指す。「子どもってどんな存在って聞かれても、何にも浮かばないっていうか、逆にこう大変だなあとか、いなければいいのになあとか、そういうのはいっぱい浮かんでくるけど、宝物とか、いなくちゃいけないとかそういうのは全然浮かんでこない。(中略) 24時間四六時中一緒だと思うと子ども好きじゃないし、産まなければ良かったなと思う。いなくなって欲しいと思うし、子どもなんなんだろうっていう感じ」(J)

〈自己肯定感の低さ〉や自分に自信が持てないこと、〈子育ての適切なモデルがない〉ことなどによって、子育てのしにくさを感じていると語る母親が多くいた。育児期の母親にとってその生きづらさは自分を苦しめる。自己をコントロールして、親からされた不適切な養育をしないようにしようと考えながらも、気がつく〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉が語られ、自分の養育態度についての葛藤が出現している。また、適切な養育を受けていない自分がどう子どもを育てていいかわからない(西澤, 1994)とあるように、〈子育ての適切なモデルがない〉親は、〈頭で考える子育て〉に移行していく。

母親 C は「自分がされたからそうしちゃうってこと多いじゃないですか、だからそう

ならないように自分を自制するっていうのってすごい大変。すごい意識していないとそれをわーって怒らないようにするとか大声ださないとか叩かないとかは自分の中でのすごい鉄則みたいになっている」と語りながらも、「助けを求めている」とも語っていた。C のような回避傾向の高い母親は、サポート量に影響をされることはほとんどないが、問題に向き合うことを避ける傾向がある。サポート不足を感じる母親や、問題に対して消極的な対処行動を用いる母親の背景には、母親自身の不安定な愛着スタイルが作用している可能性があり（小林，2006），【子育ての辛さ】を感じながらも〈ひとりでがんばる〉ことをしていると考えられる。

子ども時代の不適切な被養育経験がトラウマとなり、現在向き合っている自分の子どもの養育場面において、幾度となく思い起こされたり、〈フラッシュバック〉として出現し、母親を苦しめていることが語られた。アタッチメント形成はトラウマ耐性を作るはずであり、虐待を受けた子どもはアタッチメント形成に問題を持ち、それゆえに些細な刺激がトラウマになりやすい「易トラウマ性」を持ち、トラウマを受けることで、安心して他者を信頼して自己を守ってもらおうとするアタッチメント形成が阻害される悪循環が生じている（奥山，2008）。重篤な場合は PTSD（外傷後ストレス障害）となる。PTSD の具体的な症状は、侵入性症状群、回避・麻痺性症状群、過覚醒症状群の三つに分けられる（西澤，2010）。フラッシュバックは侵入性症候群に位置づけられ、トラウマ性体験をそれとは無関係な状況で再び体験しているかのように反応する。思い出したくないのに思い出してしまう症状は侵入性想起と呼ばれる。虐待の問題はアタッチメントとの関連が重要であるとされるが、トラウマという側面からのアプローチも多くなされている。

自分は、母親のようになりたくないと思い、子どもの世話を一生懸命する、しかし子どもは親の思い通りにはなってくれない、ついイライラして怒っているうちに、いつの間にか母親と同じように接しているということが起こる。それが無意識的な伝達になっていく。また、攻撃的な親への同一化と表現されるこの現象は、自分は親のようにはないと強く願っているにもかかわらず生じる（深津，2002）とあるように、自分ではコントロールできないまま、〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉が生じると考えられる。

今回の研究対象の主な母親は非臨床群であるが、臨床群である母親 J の〈子どもへのネガティブな感情〉は、臨床群であることを裏付けするような強い葛藤であると考えられる。

### 3-4-6 【自信の持てない子育て】

自分の子育てに自信が持てず、この先子どもがどうなっていくのか、どう育つのか不安になるという語りがあった。子どもの発達障害や言葉の遅れ、将来的な不適応を心配する語りも見られた。

〈子どもがどう育つか不安〉とは、自分が子どもに対して無理していたり、無視したり怒鳴ってしまうことの子どもへの悪影響の不安のことを指す。「自分が育てられた環境に比べればマシなのであって、はたして一般的にごくあたりまえの環境・親子関係を築けているのかは見当が付きません。甘やかしすぎなのか、逆に厳しくしすぎなのか判断に迷うことも多いです。子どもが通っている保育園での様子や先生とのやり取りの中で、そのごくあたりまえの環境をなんとなく推測して、今のところはおそらく大きく外れていないのだろうなあとは思っていますが自信はありません」(A)、「長女が5年生から中2にかけて、親がしょっちゅう死にたいとわめいていたら不安になりますよね。赤ん坊もいるし、お姉ちゃんは相当我慢していたと思う。私に依存していることが多い」(B)、「実際に言うことを聞かなかつたりとかの場面で叱らないといけない場面になると、無視しちゃうという傾向があって、まずは自分の気持ちを穏やかにしないと向き合えないんで、聞こえないふりじゃないけどそんな感じで、それがなんか悪い影響を与えるかなというのが今の悩みなんですけど」(C)、「ほんと怖くて、これから、ほんと、どうやって育っているのか自分のこのやり方でどう子どもが育っているのか心配でしかたない。自分が厳しい家で育ったからある程度自立したんだけど、こういう風にあまりあてにしない、反面教師的にやっている結果、ちゃんと育つのか、その結果、将来的に心配するという感じですかね」(C)、「夢の話ですけど、駅に呼び出されて息子の友達にたばこの火押し付けられたとか、この子がちゃんと育つのか不安。男の子の親になって振り込め詐欺の気持ちがわかる。何かやってくれるんじゃないかといつも思っているから、やっぱやったと思って振り込んでしまうんじゃないかと。今は幼稚園で私はわかっているけど、そのうち全然知らないところに行ってて、無事にやってくれるかというのがすごく不安です」(F)、「誰かに私の子育ての仕方を客観的に、ここはこうした方が良いかもとか指摘してほしい。自己流なのでよくわからないから…。仕事と違ってそういう面がやり難いというか難しいというか。自己満足で育ててしまいそうで怖いなと思っている」(I)。

「すごく気を遣わせる子にってしまったなというか、全部私が原因だろうなっていう風に思う。パパはすごく理解があって冷静で私がこう理想にしているような接し方ができるんですけど、私はわかりながらもできなかったりしてイライラしたりしてしまったりしてしまうので、私じゃなかったら良かったんじゃないかなと思う」(J)

〈子どもの発達や不適應への不安〉は、子どもの発達障害や不適應が今後どうなるのかという不安を指す。「子どもに発達障害の傾向が出ていまして、そのことを主人の方があまり受け入れられないので、相談したいしたいと思ってもあまりその話は聞きたくないみたいな感じで、思うような協力は現在得られていないというのが困っているところになります」(A)、「子どもがお祭りにいた時にどうしても欲しいものが諦められず、ほった叩いたとき、ぶったあと、自己嫌悪だったんですけど、あばれて大変で、しずめるためにも他に手段がなかったなと。年に1回か2回なんですけど、たまに叩いちゃうことがあります。気持ちを納めるのが子どもが苦手なんで、できるだけ考えてからたたくようにしている。かーとなると泣き叫ぶ傾向がありまして、あまり人が多いところでそれをやりますと迷惑かなと。大きくなってアンガーマネジメントっていうんですか、小学校入る前に準備として連れて行った方がいいのかなとか思ったりとか。できたらたきたくないので、私も。いい解決方法でないと思っているので」(A)、「上の子はよくできた子なので、このままいけばうつ病になるなこいつと思う。関わり過ぎているので私に対する依存が高いですね。次女はアスペルガーなんですね。生活一般のことが、そうとうできないので、今10歳、11歳になるんですけど、3歳児なみに幼くて、できない、お片づけできない、そういった面でこのままで大丈夫かと思う。教えても駄目だし。三女はそんな次女を見ているので、妹として甘えたい部分あるのに片づけ率先してしたり、朝起こしてあげたり、このままだとちょっと不安です。抱っこさせてあげるときに甘えさせてあげられない。そうするとちいさいとき自己の確立が難しくなる。あとあとひずみが来るんじゃないかと思います」(B)、「一生懸命だけど迷いながらやっているという感じ。どう育つか、上の子甘やかしすぎたかな、小学校入ってから弱過ぎていじめられるのかと思ったりとか。2人目の子は逆に下の子は強くなりすぎちゃって、手をかけられなかったからだと思うけど、思春期になったらぐれるんじゃないかとか、なんかもう自分の子育ては常に反省みたいな感じで思っていますね」(C)

〈自己肯定感の低さ〉〈子育ての適切なモデルがない〉〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉や不安などから、自分が子どもに対して無理していたり、無視したり怒鳴ってしまうことの子どもへの悪影響を懸念する語りがあった。

A のケースでは〈子どもの発達への不安〉が語られたが、A の〈頭で考える子育て〉によって、母子間の愛着形成に必要な調律や情緒の応答性が欠如している可能性がある。C の場合は非臨床群であるのでその域ではないが、虐待の結果生じる反応性愛着障害は発達障害との区別が非常に困難な臨床像を呈する場合があることが知られている(杉山, 2011)。子どもの発達障害への懸念が 4 人の母親から語られた。今回の事例がそれに該当するとは言えないが、子どもの発達障害傾向の状態像と、親の養育態度のあり方には何らかの関係がある可能性が示唆された。

### 3-4-7 【子育ての方略】

子どもと向き合うとき、自分の被養育経験を振り返って、どのようにしたら適切な子育てができるかを考えて実行している様子が語られた。

〈**反面教師**〉は、親にされていやだったことはしないように心掛けることを指す。

「自分の子どもの場合は、なんかちょっと熱があったとかだったら必ず病院に連れていってるし、家の中も清潔を心がけているし、ほんとに反面教師に思っています」(A)

「100%違うようにしたいです。当たり前子どもががんばれば褒めてあげたいし、子どもが悲しんでいればなぐさめてあげたいし、という。ごく普通のことをしてあげたいです。で、私自身はあんまり褒められた記憶はないし、何をしても大人はどうまくはできなかった子ども時代なので、何をしてもなんかここはダメねとか言われることが多かったもので、できるだけ褒めてあげたいなと思っています」(A)、「なんかそれだけはしないでおこうとかって子どもに対してっていうのはすごいありますね。そうやって思っているの、例えば叩くとかは絶対にやらないって思って、実際やらないようにしてるとか」(C)

「父みたいにそのときの気分で人を怒るっていうのがとっても真似したくないなと思います」(D)、「母があまり何もできない人だったので逆に私は。何て言うか、子どもにかまってあげたいっていうのがあって、小学校とかでボランティアとか父兄が結構参加するイベントがあるんですけど、そういうのにこまめに出るようにしたりとか、とにかく私は母に対して、自分の友達にお母さんが会ったら恥ずかしいなっていう気持ちがあって、

子どもにとって恥ずかしくないお母さんでいようと思っています」(E)、「結局母親が仕事、ワーキングママだったことで、もう私はワーキングママには子どもが小学校に上がるまではならないという強い気持ちがあって子どもを産みましたね。結局迎えに来るのが最後だったりとか、そういう寂しい気持ちを子どもにはさせたくない。0歳の頃から保育園に預けることだけはしないぞっていう風な気持ちを持っていました」(F)、「気分のムラを子どもにぶつけないということでは、母親のしてきたことっていうのとは180度違う母親でありたいというのが理想ですね」(F)、「私は強迫と感じてやめられなかった習い事とかあるんですけど、基本的には娘の意思を尊重しようという気持ちが常に働いています。私はストレスとかを与えないで彼女が決断できるように、そういう関係でありたいと思っている。やりたいと思ったことはサポートするけれど、無理にさせるようなことはしないようにしている」(F)、「親にこうしなさい、あーしなさいとかレールの上を走ってきた感じで育ってきたので逆に自分の子には選択をさせてあげたい。私が小さいときダメって言って言われて習い事をやらせてもらえなかったもので、自分の子には秘めた可能性あるかもしれないのでいい部分を伸ばしてあげたいというか、興味を持ったことは一通りやらせてあげられるような親になりたいと思っています」(G)、「言うことを聞かないとお尻を叩いてみたり、そういうことはしたくないですね。布団叩き棒で。逃げ足速くなった。脅かされてて、それはよくないと思いやりたくないからやっていないですね」(H)、「3姉妹で無意識にその親が比べる発言をしてたので、それがプレッシャーになったり、傷ついたりしてたので、そういうことはしないようにしています」(I)、「父を反面教師にして家庭的な人と結婚できたのかなと思ったりします」(I)、「すごく怖かった印象があるので、印象っていうかその感情しかないんで、子どもにはなるべく怒らないで、冷静に話を聞いてあげて、こう思ったんだね、こういう風に思っただんだねっていう風に、冷静に対処するっていうか、冷静に、自分自身も冷静に、冷静に言って、ダメなことはダメ、いいことはいいっていう風に褒めたり叱ったりしてあげたいっていう風に思っています」(J)、「似てきちゃう。それがいやで仕方ない。同じことはしないようにしようと思うけど」(K)。

《頭で考える子育て》は、子どもに自然に接するのではなく、必死に頭でどう対応したらいいのか考えて行う子育てであり、情緒応答性が乏しい子育てのことを指す。

「いつも一呼吸おかないと。保育園の先生はこうやってほめていたなとか、両親以外の



自分が接した大人であるとか、現在子どもがお世話になっている大人たちの対応を思い出してその場面に適した、やってよいことを自分なりに選択している感じで。だからなんか反射的にほめてあげるとかはできていないんだと思います。ひとつひとつ考えて選択して、褒めているのかなって自分で思います」(A)、「反射的に怒鳴っちゃうと、娘の方がやはり発達障害の傾向がありまして、大きい音がすごく苦手なので、反射的にたとえば怒鳴ってしまうと、怒鳴られたことのショックで、ほんとに伝えたいダメなことが伝わらないものですから、ちょっとやっぱり穏やかに接しないといけないというのもありまして、怒るのもちょっと反射的にはできないです」(A)

〈自分の子育てへの満足感〉は、子どもにしてあげてよかったと思える、自分の子育てへの肯定感・満足感のことを指す。「母にされたこと、同じような場面で、母にされた、父にされたことではないことをしてあげられたときにすこしちょっと満足感というか達成感というのがあるんだと思います。ちゃんとできたという気持ちがある」(A)、「子どもが娘なんですけど、やっぱり女の子なんで最初ピンク色にすごい魅かれて、やっぱり女の子ピンク好きなのはそんなに悪いことじゃないよなと思って、欲しいって言ったピンクのものをちゃんと買ってあげるし、そういうことを、好きだって言う色をちゃんと褒めてあげられたときに、そうだよな、ピンクかわいいからねとか、女の子らしくってかわいい色だよな、って、本人が好きなのをけなさずに褒めてあげる言葉が言えたときに、ああ、自分はこう言ってもらいたかったなあって思っ。そんなことの積み重ねでだんだんちょっと、なんだろう、自分自身のその傷ついたところもちょっと治ってくるようなところがあります」(A)、「毎日あったことをあーだよこーだよって毎日話している。普通の高校2年生は話さないじゃない。でさ、こーゆうのがうざかったとか、ものすごいオープンで話してくれるので普通のおうちより仲いいんじゃないかな」(B)、「幼児期から結構、療育に通ったりだとか、子どもの様子っていうのを一番に優先順位において行動している部分は180度違うと思います」(F)、「結構ほんとに子ども優先できたという自負があるので、がんばってそういうとこでよかったなっていう、がんばった甲斐があったなっていう、そういうとこで自分も嬉しくなったり、私が愛情のかけ方を間違ってたなかったかなと」(G)。

ほとんどの母親から聞かれた〈反面教師〉に関する語りは、不適切な養育経験を持ち

ながらも現在不適切な養育を行わないで、必死に自己をコントロールし、子育てに奮闘している母親たちの強い意志を感じるものであった。

〈頭で考える子育て〉に関して、防衛機制としての知性化の表れであったと考えられる。Stern (1985) によれば、養育者が乳児の情動に調律的に応答するアチューンメントの経験は、愛情に支えられている相互交渉の中で絶え間なく続く経験であり、その子どもその後の他者との情緒的コミュニケーションの基礎となる。母親 A は乳幼児期にそのような経験が少なかったことから、子どもとのやりとりを頭で考えてから行っていると述べており、自分の子どもとの自然な情緒的コミュニケーションにも支障をきたしているように感じられた。しかし、知性化でそれを乗り越えようとしていると考えられる。

親に虐待を受けた子が成長して加害者になるメカニズムは複雑であるが、「攻撃者への同一化」が有名である。虐待を受けた子は、見捨てられる不安と心身の苦痛にさいなまれながら生きる。被害者から加害者になることは、心に焼きついた心的外傷を逆転させる効果があり、子どもは虐待の痛手から自分を守ろうとして、危害を加えた人に同一化する（渡辺，2000）とあるが、今回の非臨床群の母親たちは、そこを踏みとどまるのに自分を一生懸命コントロールしている様子が語られていた。

Winnicott (1965) は不遇な環境下にある子どもが自立しているかのように現実的な適応行動を行うことができるのを証明する際に、その自己を“偽りの自己”と名づけた。

“偽りの自己”の背後、あるいは現実に触れない部分には未だに乳幼児的願望の満たされない“真の自己”が存在する。“偽りの自己”の主な防衛機制は知性化であり、この防衛が破綻しない限り、“偽りの自己”は現実の適応力として機能する（木部，2006）。〈反面教師〉〈頭で考える子育て〉の概念に関して、知性化によって虐待の世代間連鎖を免れているのであろうと考えられる。しかし、例えば母親 A に過度のストレスがかかった場合には、知性化で乗り越えるのは困難なことも生じるのではないかと考えられる。

#### 3-4-8 【親に対する気持ちや捉え方の変化】

〈親の態度の合理的解釈〉をしたり、〈親の態度を前向きに捉える〉、あるいは、〈あきらめて期待しないようにする〉など、いずれにしても前に進もうとして、親に対する気持ちを整理し、ネガティブな被養育経験を乗り越えようとする。

〈親の養育の一部を受け入れる〉は、親の養育態度の中でここは真似したいと思える

部分のことを指す。「母と一緒に暮らすようになってから、ストーカーしてた父が自殺して、落ち着いて安心して暮らすようになった。洋服や料理、すべて手作りで、仕事の合間にやってくれたりとか、その影響を受けている。自分の子にもレトルトや冷凍食品は与えないようにしている」(B)、「冷静に考えると、まあ全部が全部もちろん親のやったことがダメって言うわけではなくて、例えば好ききらいなく食べなさいとか、そういう基本的な生活習慣みたいな感じのところは子どもにもそういうようにしているっていうのはありますし、あとなんか、いいもの食べさせないとだめだよみたいな、食品もへんなもの、安いもの、簡単なものばかりじゃなくてちゃんとしたものを、そういうのは守っている。そうだなあって。早く寝なさいとか寝る時間を多く取るとか、そういうのはよかったし、今もそうしているっていうのはありますね」(C)、「あまりレトルトを使ったことない。だしも基本粉末とか使わない。自分で保存食作ったりとか、そういう買ったものじゃないものを食卓に出すというところは、忙しくても素晴らしいなと思います」(D)、「あれやりたい、これやりたいって言っても、えーそれ？って言われることなく、やってみたらっていつも後押ししてくれるというか。それが2人は共通していたと思います。そーいう気持ちでいつも子どもに接してあげたいなと思いますね」(D)

「例えば初節句とか七五三とか1歳のお祝いとか、そういう子どもの節目節目の行事ごととかに関しても、お祝いとかちゃんとくれたりとか、そういう昔からの、母も自分の親からやってもらったことを私にもちゃんとやってくれてるっていうか。私もこの子たちにそういういい伝統を継承していけたらいいかなと思っている」(G)、「いいところは真似したいかなっていう感じ」(L)

〈親の態度を前向きに捉える〉は、時間の経過、自分が親になったこと、親が老いてきたことなどによって起きた、親を受け入れようとする気持のことを指す。「私も働き、それなりにいろいろ世間にもまれると、ちょっとお父さんに対して歩み寄ったりその当時の気持ちがわかったりっていう、まったくもっていやという気持ちよりかは少し理解することができるようになった。好きとか嫌いとかではなく、冷静にみれるようになった。

(中略) 母も怖かったけど、今同じ子どもが3人という状況なので、仕事をしながらよく3人育てたなと思うと頭があがりません。まあ、ああするしかなかっただろうなと、好きとか嫌いというよりもああするしかなかったなと理解することができた」(D)、「母は私が20歳のときに亡くなったので、亡くなった後は、母は母なりになんか一生懸命

やってくれたのかなと思っています。父もいろいろ一人で暮らすことになっていて寂しかったんだろうとか、えーと、いろいろ我慢すること多かったんだろうなと思ってますけど、今は父に感謝することも多いですし。(中略)別に虐待されて育ったわけではないのでそれはよかったなと思います」(E),「今はすごくよく理解して、子育ても、遠くにいるんですけど協力してもらっていますし。父親も相変わらず、会話ないですけど、温かく見守るという感じで」(F),「今思うと、世間の高校生ではできないような経験をしたかなという逆に。友達と話していても話題が絶えないというか。今となっては感謝していますね」(G),「母については、今自分が同じような、子どもを産んでみて、このような環境ですごく大変だっただろうなと。父に関しては、私がしっかりしていた、で、ませていたこともあって、生意気に見えたのか、私が、子どもなのに何でも1人でやれていたという感じで。例えばちょっと遠くに行くのもそんな感じの対応だったので、最初は不安ながらに悔しくてそういう自分で何でもこう調べて行くとかし始めたんですけど、結局それが人に依存しないで済むように、私の場合はなりました。結局父に突き放されたタイミングが自分にとってはよかったのかもしれないですね」(I)

「母親は自分が子どもを産んでから逆に母親の方が頼りになってるのは確かなんですけど」(J),「私自身が母親になったから思うんですけど、子どもの為なら我慢いろいろできたりするんだろうなって思うんで、そう言う点ではすごい母親に対しては尊敬している。(中略)父は死んじゃってるらしいんで。でも工作中だって聞いたから、薬物止めてがんばってたのかなあとかそんな感じで思っていました。思い出になっているっていうか、嫌いではなかったんですね」(L)

**〈親の態度の合理的解釈〉**は、親はああいう状態だったから、あんな態度をとっても仕方なかったと考えることを指す。「両親ともにちょっと何か発達障害的な傾向を持っていたのではないのかなと考えています。で、両親にしても悪気はなかったんだろうなっていうことはなんとなくわかるんで、今はそれが自分なりに一番合理的に納得できる理由です。ただそのことに本人たちも気付けずにきたんだろうなと思っています」(A),「家がいやだったということはある意味自立を促してもらえてたのかなという気持ちもししたかなと思います」(D),「今考えればその年齢で共働きで子育てしていて保育園に預けて年子を育てていたら、そうなるのは当然かなと思います」(F),「母親は小さい頃から、もう今思うと、母親が怒る役割で、父親がなだめる役割だったのかなと思うんで

すけど」(J)

〈あきらめて期待しないようにする〉は、期待をせず、会わないようにしたり距離をとったり、あきらめたりすることを指す。「現在のところ、ちょっと残念なんですけど、父の方が先年なくなりまして、母の方は、健在なんですけれど、ちょっとやっぱトラブルになりがちなものですから今はちょっと接触を避けている状態です。(中略) やっぱ思い出すと涙が出てくる。んー、親と接触を避けるようにしてだいぶよかったんですけど、やっぱちょっと思い出すと苦しいです」(A)、「1回高校生のときに一度言ったことがあるのと、とにかく母とのやり取りですごく疲れてしまうので、手伝っていることとかにそんなに文句を言わないでほしいとかそういうことは言ったりとか、大人になってから小さい頃こう言われたことがとても辛かったっていう話をしても、そんな昔のことで持ちだしてあんたは執念深いとか言われて、たぶん自分が覚えているっていうことは消化しきれていないから覚えているのであって、それで言ったんですけど、やっぱ届かないですね」(A)、「どのみち遠くにいるのであまり会わない。てきとうに連絡とっててきとうに話すくらいには回復している。でも長い時間は一緒にいられない」(B)、「自分の父とか母はいましたけど、関係悪いせいか頼ろうとしていないので。うちから出てからは支援求めるのは0なので、実家に帰るのも自分が一番苦しいときに助けてもらおうとは思わない。親からの支援は期待していないので」(C)、「今は年老いているんで人生を全うしてくださいって感じ。で、別に怨んでいるとかは全然なくて、あの、そうですね、穏やかに過ごしてほしいなっていう感じですかね。ただ父親が強いついていうのはずっと変わらないんで、母親が父親のいいなりっていう状態も、DV ってまでは言えないけど言語的なDV っていうのは見ていやだなと思うから、できたら父親が早く死んで(笑)母親が自由になれたらいいなっていう風に思いますけどね」(C)、「父親は逆にあまり関わってこないっていうか、んー、あまり好きじゃないかな、いろいろあって」(J)。

重要なのは、ネガティブな被養育経験を本人がどう捉えて自分の中で納得させていくかであると考えられる。Fraiberg, Adelson, & Shapiro (1975)によると、子ども時代の有害な体験は繰り返される傾向にあるが、有害な体験の記憶とその記憶に対する反応を現在の理解へと統合させ、関連する怒りや困惑を再体験することができれば、子ども時代の体験の繰り返しを終わらせることができるのだという。被養育経験に対する自

分のネガティブな感情が無意識のうちに抑圧されていると、未消化のまま重篤な負の影響が出る可能性がある。非臨床群の母親たちはネガティブな被養育経験とそれに対する反応を自分なりに解釈し統合させ、語ることができており、過去を乗り越え、現在の子育てに向き合うことができていると考えられる。

### 3-4-9 【自分を保つために】

ネガティブな被養育経験のある自分を保つために、子育てへの〈家族のサポート〉や〈専門家への相談・社会的サポート〉が重要になってくる。また、〈人に話すこと〉によって共感してもらう体験や、子育て中に救われた経験や〈被養育経験の捉え方を変える〉ことを経て、自分を保っていけるようになる。

〈家族のサポート〉は、夫や今の家族のサポートに支えられていることやしてほしいことを指す。「私が子供のころに基本的な生活習慣（手洗い，うがい，はみがき，入浴，バランスのよい食事）を身につける機会が不十分だったので，おそらく，ほかのひとと「普通」の感覚が違うので，夫の意見を聞くようにしています」(A)，「夫の協力はありがたいと思うものの，もう少し踏み込んで関わってほしいとも感じています。保育園の送り迎え，運動会などの行事への参観といったルーチンワークはこなしてくれますが，保護者会を含めた保育園とのやり取り，発達相談でのアドバイスの内容検討や実行，情報収集，園への報告，意見のすりあわせ等，あれこれ考えて試行錯誤する部分には全く関心がなく，協力も得られていません。子どもの成長にかかわることで，本来なら一番に相談したい相手なのですが，話をしても関心を示してもらえない状態で，不満というか悩みのタネでもあります」(A)，「サポートねえ，ないなあ，ない。運動会も来ない。卒園式も来るかわからない。長女の小学校は来たことないし，長女の運動会も1度も来ない。次女は大好きなのでかろうじて運動会に2回来たかな。三女は保育園に一度も来ませんでした。生活でも，生活能力ない人なので，手伝ってはくれません」(B)

「夫は精いっぱいやってくれていると思うんです。子どものことはすごい好きみたいでよく遊んでくれているんで。これがマックスかなと思っている」(C)，「義父母はたまにみてあげようかと言ってくれたりするんですけど。でもなんかその私としてはみてくれるなら毎日この時間やってくれる，例えばお迎えに行ってくれるとかだといいけど，自由に生きている人なんで，思いつきで今日暇だからみてよっか，とかだと逆に生活のり

ズムが崩れる。子どももその時だけ甘えていろいろ食べてきてご飯が食べられなくなる  
とか、私のストレスが増す。お礼も言わないでいると悪いし、ご飯も作ってわたさなく  
ちゃいけないとか、気を遣うことが増える。逆に頼むの大変」(C), 「(夫は) あまり認め  
たくないけど。よく考えるとしてもらっている、ここぞというときにしてくれているだ  
ろうなと思う」(D), 「土日は父がちょっと子どもたちと遊んでくれたりするんですけど、  
父も母も自分の趣味があり、そっちの方を優先していて、子を見るのは私。あんまりあ  
の、助けになってくれることはないんですけど、まあ私ももうあてにはしていないって  
いう感じです。あの、母の方は実母ではないので、母は父の再婚した人なので、実母で  
はないので距離ある感じで、だからあまり気軽には頼めないし、あまり接点がない」(E),  
「うちの家族の場合は土日以外不在で、そのことを伝える時間もないので。それぞれの  
持ち場で、主人は仕事、私は子育て、家事、持ち場で 100%がんばっているんで、それ  
ぞれの持ち場を保つことで精一杯というのは、ちょっとバランスが悪いと思います」(F),  
「主人は結構忙しく外に出ちゃう、組合とかに入っていて、外に出ることも多くて、夜  
はいないことも多くて、1 番助けてくれるのは友達ですね、ママ友。すごくほんとにあ  
りがたいですね。家族のサポートよりも頼りになるというか、こんなこと言っちゃ怒ら  
れちゃうかもしれないけど。お姑さんもそんなになんですよ、うちのお姑さん、なんか  
一歩引いている人なので」(G), 「夫婦で協力し合って子育てをしている。と感じていま  
す。母や姉も助けてくれるので、感謝しています」(H), 「自分の中でストレスの解消法  
を見つけました。あまり頼ってはないです。夫は平日は深夜で、土日の予定も多いです  
が、子育ては私の仕事と思っているのであまり追い詰められることはないです。悩みが  
発生した時は、夫が話を聞いてくれます」(I), 「サポートはとってもらえるとと思いま  
す。やっぱり。保育園も、病院の先生に診断書を書いてもらって入れることができたし、  
私が調子悪いときに母親にきてもらって子どもをみてもらったりとか、私がイライラし  
て一人になりたくなったときに、主人がみてくれていて私が 2 階でイライラをどうしよ  
うもないのを叫んだりを 2 階ですとか、そういうのはしてもらっていると思う」(J),  
「主人がまず手伝ってくれない。手伝ってくれないのはまあいい、ただ、口うるさく命  
令するのがいやで、それが子育てに影響してしまう」(K), 「旦那があまりにもひどいか  
ら、ひどいっていうか、頼りないからほとんど母親の方にいる」(L)。

〈人に話すこと〉は、自分の辛い経験や子育ての悩みを共感してもらうことで癒える

こと、または、話したいけどなかなか話せないことを指す。「主人に小さかった頃のことを話そうとしても、主人の方はすごい温かい家庭なのでピンとこない。親と上手くいってない関係をあまりピンとこないようで、あまりその話をすごくすると私が文句を言っているような感じになっちゃってあまりよくないなあと思ってあまり言えないなあっていうところもあって。むずかしいですね、あんまり言い過ぎるとよくないし。ほんとは誰かに言いたいんですけど」(A)、「だんなの方がヘビーなのであんまり言えないですね。だんなのお母さんが、彼が5年から中3のときキッチンドランカーで、ガス管加えて自殺してみたり、高速飛び込んでみたり、私の上をいく自殺歴の持ち主だったのでちょっとかわいそうですね。話せなかった」(B)、「夫にもそこそこ話してる。70%は話している。柱に縛られたとか具体的なエピソードは話さないけど。結構叩く人だったから私は叩きたくないみたいな、育児方針の中で叩かないとか」(C)、「友達も似たような境遇で、両親が離婚して、父親いなくて、父親がこういう人だから、傷をなめ合うとかじゃないですけど、その子には20歳位のとき言ったかな。というくらいですかね。あとは、そうですね、私も大学院にいったことあるんですけど、友達に心理の子がいて、やっぱり自分の今後の進路を迷った時、結婚しようか、それともやっぱ仕事で地元に戻ろうか岐路だったんですけど、悩み聴いてもらったとき、そもそもどういう感じで育ってきたのか、そのときに結構深くまで話したかもしれないですね」(C)、「負の部分を人に話したくないなあと思うのであまり話してない。あと夫くらいですね。いろいろ問題がある家なので話とかなないと結構ちょっと大変になる」(D)、「(誰かに被養育経験を話すことは)ないですね。母のエピソードがないので、えーと、まあいろいろ複雑な家だったので」(E)、「子どもの友達のお母さんたちとしゃべったりしていると気が晴れるんですけど。話聞いて通じ合えることも多いですね」(E)、「お友達とか、心理士さんとも会っているので、自分の考えを整理したりとか話すことによってストレスを軽減したりするために話をします」(F)、「主人には結構話しますね。友達とかたわいもない話しのときとか話したりしますね」(G)、「主人に、私はこういう風にされたから、こういう風にしてあげたいな、みたいな、理想を言ったりします」(J)、「児童相談所とかそういうところに行けば虐待をする親の会とかあるんだろうけど、そういう会に参加する自分ってなんなんだろうって。虐待って変な風に思われるのはいやだし。親の会を作ってくれたらいいなあって。子育てして大変で辛くってっていう、そういうのがあれば遠くても行きます。きっと楽しみになると思います。わかるわかるって言ってもらえるだけで、そうだよーっていい



う」(J)。

〈専門家への相談・社会的サポート〉は、治療的介入や育児相談など専門家に救われたことやその存在が自分の支えになっていること、および、社会的サポート体制に助けられたことなどを指す。「保育園の先生、発達相談室の臨床心理士の先生。困ったことがあったときに、親身に相談にのってくださり一緒に考えてくださるのでとてもありがたいと思っています」(A)、「厳しかったですね。しつけという大義名分あるもん。うつ病になってしまった。長女が小学校のとき、次女の妊娠出産後、産後うつ病になりました。自傷行為まではいかないけど、とにかく死にたいと。何かなと治療受けていくうちに母親に対する不平不満、愛情不足、そーいうのがカウンセリングでわかりまして、3年、4年近く葛藤していて。自分では普通だと思っていた。そーゆうのが鬱積していると知らない状態で、カウンセリングで自分がわかった。カウンセリングする前まではわからなくて、周りから悩まないねって。悩みのない人だと言われる」(B)、「次女産むときに、区はサポートしてくれる。施設はショートステイを利用しまして、親がみてくれるわけでないの、保育園の年長さんのとき、三女産むとき同じようにショートステイを利用しました。あとは相談、いっぱい使っているかもしれない。長女の思春期相談も。前に不安定に、周りに悪い友達がいて万引きして相談に。保健所の思春期相談所みたいな。次女がアスペルガーってわかる前、警察の児童相談窓口があるんですけど、そーゆうところに相談して、サポート相談にいったりした。相当使っていると思いますよ」(B)、「育休中に子育てで広場地域のサークルみたいなのはちょこちょこ行った。この時間は相談にいきますとかはしないんだけど、そういうところに保育士さんとかサポーターがいて相談にいったりしました。おむつを取る練習をそろそろしようかなとか、たわいもないことですけど相談するっていうのはありましたね。深いところは相談しないですけど」(C)、「そのお母さんは、子育ての支援活動みたいなのに参加されている方だったので、なんか若干カウンセリングみたいな感じで話を聴いてもらったなと思います」(D)、「園の先生があ、結構、あ、なんか、あ、困った時はいろいろアドバイスとかいただいたことがあります」(E)、「年中の息子も、言葉の遅れ、その他行動や子育ての悩みを、OT、STを受けて、ドクターとその訓練士、そこの所属のすべてを把握している心理士さんに定期的に話すことで、あ、相談にのってもらっています。それがなければとても考えられないくらいにしんどいことだと思いますね」(F)、「知らない子にもすぐに手

が出ちゃう子で、何回もだめよだめよって教えても手が出ちゃって。私がすごい悩んじゃって、遊ばせたくなくなっちゃって。そういうときに1回相談に行きましたね。保健師さん」(G)、「地域の教育相談に行きましたね。小4から中3までの間、週に1回土曜日に行っていましたね。宿題をやらないだとかそういうがんこな性格とかがあったので困るんで。子どもは子ども、親は親で相談してみってくれるんで、そこに行って専門の人に相談してっていうのがありましたね。いろんなことの話聞いてくれるのでそこに行くといろいろとすっきりしました」(H)、「カウンセリングに行っているので小さい頃からの話はずっとその先生と。結婚するまでは、私が精神的に調子が悪くなるまで、なっぺからはずっと、母親も父親も、私のこれがいやだったあれがいやだったというのを聞きながら、先生と話していました。小さい頃はこうで、母親の態度がいやで、父親のあの態度がいやでとかそういうことは話しています。結婚前と結婚してから。結婚してからは子どもができる前までは主人と2人で入って私が話して主人が聞いているという感じでしたが、今は子どもが大きくなってきたので私だけ行って私だけ話してくる。子どものことが結構多くなってきたので、子どもが自分のことを言われているとわかってきたので」(J)、「精神科の先生、通い始めはすごい私たぶん泣いてたような記憶があるから、それから考えると今お薬を全く飲んでないから、なんか十何年ものつきあいでいろんなこと変わったなって感じ」(L)、「3、4か月のとき、体重が少ないので毎月計りに来てくださいとか言われて。育児の母子手帳のグラフに沿ってなくちゃいけないという感じのところだったから、それじゃないと健康でないっていう考えだったから、2か月でやめてしまった。体重なんて自分で測ればいいと思うし、保健師といえちょっと考えが違ったから。2カ月いってから止めてしまった。病院の方針とか、その保健師の方針とか、子育てをしてきた人たちの押し付けとか、そういうのをやめてほしい。保健師さんも言ってること人それぞれだし、なんか市によってとか、考え方が違うから統一してほしい」(L)。

〈被養育経験の捉え方を変える〉は、被養育経験を自分なりに前向きに捉えることを指す。「だんながリストラされたとき、会社がつぶれたとき。収入なくなりますよね。どうやって生活していこうかと。赤ん坊抱えて。くらいかな。それはね、辛かったり困ったり、人それぞれだけど、3か月7万円で生活しなくてはならなかった。3か月って職安から生活費を支給されるまでの間。でも何だろう。苦労を苦労だとあまり思わない性

格で、ゲームだなど、節約ゲームだなどと思って。なんとか生活しましたよ。長女が赤ちゃんのとき、まだ若かったから、生活保護とか知らなかった。でもこーゆう困りごとっていっぱいあったかもしれない。義母が植物人間になったのがその時期で、お義母さんの介護を、生まれてすぐの子を抱えて生活しなくちゃいけない。仕事ないしじゃあどうやって生活していこうかなと。そうゆうのいっぱいあったけど忘れちゃった。覚えていてもいいことないよ」(B)、「私も人間だし、頑張り過ぎないでおこうって思うようにしようと思います。自分で子育てをしてみて、自分は子どもが好きじゃないんだっていうのがわかったし、それなら無理してがんばる必要もないし、できることをやっていこうという気持ちになれるようになってきました。やっぱり転勤を何度か経験して、無理しなくていいんだっていうこと、まわりに甘えるっていうことも大事だなと思いました」(D)、「兄妹が2人で、うちは男と女ですが、2人いてくれてよかったなということと、こういうやり方でいいのかなとかいろいろ迷うことも多いですけど、別に虐待されて育ったわけではないのでそれはよかったなと思います」(E)、「自分がそういう病気になってなければそういう人の気持ちもわからないし、あと、父親がそういうくすりだのやってたのとかもなければ、そういう人の気持ちも知らないしっていうんで、他の人よりは少し経験していることが多いからそういう人の気持ちを少し考える人になってきたかな」(L)。

子育てへの〈家族のサポート〉の状況はまちまちであったが、〈専門家への相談・社会的サポート〉は、ほとんどの母親が利用していた。

母親 B は、乳幼児期に母親が、父親からのストーカー行為からの逃亡生活のため養護施設に預けられ、小学生低学年のときに同居が開始された。同時に厳しい母親からのしつけという名の体罰も始まった。母親 B がうつ病になったのは、長女が小学校低学年のときであり、そのころの自分と同じ年齢になり、次女の出産という出来事が重なったことによってうつ病を呈したと考えられる。産後うつ病には母親 B 自身の被虐待経験が影響している可能性が高いと考えられる。母親 B はうつ病の治療をきっかけに専門家とのカウンセリングが開始され、自分の葛藤の原因をみつめていくことになる。また、小林(2006)は、産後の抑うつ状態のリスクが高いのは愛着スタイルのアンビバレント傾向と回避傾向の高い母親であると述べている。母親 B の愛着スタイルは回避傾向で、安定・アンビバレントの2倍前後の得点を示していることも影響していると考えられる。

母親 J, L は、現在も精神科に通う臨床群である。虐待によって自己評価が低下し、思春期の真の自立という問題に立ち向かうことができず、精神疾患として治療の対象となった。治療的介入と家族の援助があって、現在の子育てが可能になっている。

### 3-5 連鎖あり群と連鎖なし群の比較

研究 1 の質問紙調査によるネガティブな被養育経験の群分けにおいては、ネガティブな被養育経験の連鎖あり群は 3 名、連鎖なし群は 4 名、不適切養育群は 1 名、安定養育群は 4 名であった。インタビュー対象者 12 名より語られた内容により、すべての対象者が自分の親の養育に対してネガティブな感情を抱いていることが示された。質問紙調査では、自分のネガティブな被養育経験を表出しにくい可能性があることが示唆された。質問紙調査において、ネガティブな被養育経験あり群であった母親について、連鎖あり群は、ネガティブな被養育経験を乗り越えようとしているができていない状態、連鎖なし群は、克服に至ろうとしている状態と捉え、両者の特徴と克服へのプロセスを比較することにより、ネガティブな被養育経験を克服する要因について検討した。

連鎖なし群の母親は、ネガティブな被養育経験を有するが、語りから、〈反面教師〉を誓い、衝動性を抑えるための〈自己コントロールのむずかしさ〉を言語化していた。「自分がされたからそうしちゃうってこと多いじゃないですか、だからそうならないように自分を自制するっていうのってすごい大変って思いながらがんばってやっています。すごい意識していないとそれをわーって怒らないようにするとか大声ださないとか叩かないとかは自分の中のすごい鉄則みたいになっている。全体的に生きてることに対して無理している。みんなそうだと思うんですけど努力している。自分の置かれていた環境をそのまま出していくと社会性のない人になっちゃうし、子育てもきつとうまくいきませんし。そうなってはいけないっていうようにこう自分を常に修正しているっていう感じ」とある。また、情緒応答性の低さを〈頭で考える子育て〉で対応している様子が語られた。「いつも一呼吸おかないと。保育園の先生はこうやってほめていたとか、両親以外の自分が接した大人であるとか、現在子どもがお世話になっている大人たちの対応を思い出してその場面に適した、やってよいことを自分なりに選択している感じで。だからなんか反射的にほめてあげるとかはできていないんだと思います。ひとつひとつ考えて選択して、褒めているのかなって自分で思います」とある。4 人中 3 人の最終学歴は大学院でもう一人は大学であったことにも関係している可能性がある（連鎖あり群

の母親の最終学歴は、高校 2 名と専門学校 1 名であった)。防衛としての知性化も見出された。知性化は衝動性を抑えることにつながっているが、情緒応答性の低さは母親たちの語りから顕著に見出された。連鎖あり群の母親は、「私はわかりながらもできなかったりしてイライラしたりしてしまったりしてしまうので、私じゃなかったら良かったんじゃないかなと思う」など、子どもに対してどう対応していいかわからない傾向が、連鎖なし群より強い可能性があると考えられる。いずれの群も、子育てについての辛さ・葛藤は抱えているが、その対処の仕方に違いがあると考えられる。連鎖なし群は、物理的に親の手助けを受けておらず、精神的にも独立している様子が語られたが、連鎖あり群は、親に嫌悪感情を抱きながらも依存しているというアンビバレントな感情が子育てに負の影響を及ぼしている可能性が示唆された。〈両親以外の重要他者の存在〉に関しては、負の世代間連鎖の克服への要因になっていたと考えられるが、今回の対象者については、連鎖あり群にも連鎖なし群にもその要因が作用していたと考えられるため、群による違いはないと考えられる。連鎖あり群と連鎖なし群の違いの検討に関しては、質問紙調査の群分けの指標の課題と、個別性の要因により、明確には示されなかったが、違いの傾向は示唆されたと考えられる。

#### 第 4 節 まとめ

ネガティブな被養育経験を有する母親を対象にインタビュー調査を行い、自分の被養育経験をどう捉えているのか、それによってどんな影響を受け、どう乗り越えようとしているのかという心理プロセスについて探索的に検討した。また、ネガティブな被養育経験の連鎖あり群と連鎖なし群の母親の心理プロセスの比較から、負の世代間連鎖を断ち切る要因を検討した。

インタビュー調査の対象者は、研究 1 の質問紙調査の被養育経験尺度において、ネガティブな回答が 5 項目以上あった母親 9 名、および、総合病院の心療内科に通う幼児を持つ患者で、主治医がネガティブな被養育経験があると判断した母親 3 名、計 12 名であった。ネガティブな被養育経験の連鎖分類は、ネガティブな被養育経験があり現在も不適切な養育態度を示す連鎖あり群が 3 名、ネガティブな被養育経験があり現在不適切な養育態度が見られない連鎖なし群が 4 名、ネガティブな被養育経験がなく現在不適切な養育態度が見られる不適切養育群が 1 名、ネガティブな被養育経験がなく現在も不適切な養育が見られない安定養育群が 4 名であった。

質問紙調査の結果、ネガティブな被養育経験なし群に分類された不適切養育群と安定養育群の5名についても、その語りの中には本人にとって【納得いかない親の態度】が存在していた。例えば、「私はほんとはこうしなかったのと言う気持を思い出す。例えば私は、ほんとはかわいい服をきたかったのに母親は正当的な、自分の好きなボーイッシュなものを着せられていたなど、服を見れば思い出すし。常に私はこうしなかったなということを常に思い出しますね。幼い時のことを。(中略) 子どものときはやはり母親の機嫌を伺いながら、波風たたないように動くような雰囲気を持った母親だったと思います」(F)、「言うことを聞かないとお尻を叩いてみたり、そういうことはしたくないですね。布団叩き棒で。逃げ足速くなった。脅かされて」(H)、「父は感情的に、自分の感情で怒る人だったので、それで子どもたちにもあたってくるので、ちょっと嫌な感じでした」(I)、「結構アルコールを飲んでいて人で、それがひどくなって、なんか家に帰ることがなかったりとか。それは何をしていたのか知らないですけど。あとはなんだろうな、病院に私を連れてお見舞いに行ったときにですけど、私を置いてどこかに行っちゃったりとか、それも何してるかわからなかったんですけど、何日も帰ってこなくて気づいたら帰っていたとか、最終的には薬に溺れてしまったようで」(L)、「父親は怖かったけど覚えてない。母親は常にうるさかった。それがいやでいやで。大きくなってもずっとうるさかった。(中略) 両親していやだった」(K)などの語りである。質問紙調査の結果より、5人ともネガティブな被養育経験なし群に分類されたが、インタビューを実施して丁寧に聴いていくと被養育経験に関する葛藤について語られた。そのことから、個人の抱える問題の背景や状態を捉えようとした場合、質問紙調査では限界があることが示唆された。

母親の[被養育経験]において、【納得いかない親の態度】には〈心理的虐待・親から受容されていない〉明らかな〈身体的虐待相当行為〉〈ネグレクト〉〈きょうだいとの差別〉などが語られた。親からのネガティブな言葉や態度が心の傷となって大人になってからも幾度となく思い出され、そのトラウマによって不適応を生じさせることもある。重篤な場合、精神医学では、DSM-IVなどの診断マニュアルに記載されている反応性愛着障害と診断される場合もある。親が安全基地になり得ず、愛着の形成が阻害され、その後の対人関係や自己感、レジリエンスのあり方に負の影響をもたらす。反応性とは、虐待やネグレクトなどの不適切な養育、あるいはアタッチメント対象の突然の喪失や、関係の断絶などによってアタッチメント障害が生じることを意味する(西澤, 2010)。

かない親の態度】は、様々な角度からみても大きな負の影響をもたらすことが示唆された。

【親の態度に対する自分の反応】は、強い〈親への嫌悪感情〉であった。注目すべき点は、〈親への嫌悪感情〉を抱きながらも〈親の機嫌をうかがう〉行動にでていたというエピソードが多く母親の語りの中に存在したことである。子どもは無意識に過剰適応し、親子の役割逆転が生じる。Aのケースの役割逆転の様子が次のように述べられている。「子どもの為についていうのがなかったですね。子どもには親に合わせろっていう感じがなくて、子どもが一生懸命大人に合わせなくてはいけないっていう、親は不自由を感じていなくて子どもだけが不自由を感じていた。（中略）両親との暮らしをちょっと長いこととても苦しかったんですね。実際に身体の不調にも出ていたんですけど、家庭の中のことで、なぜ苦しいのかわからずうまくたちまわれない自分がとても悪いのだと思い込んでいました。なのでおそらくその影響だと思うんですけど、自己評価が低いのかな、あと、自分にちょっと自信が持てていな面が強いのかなと思います」。親が安全基地としての機能を果たさず、子どもに過剰適応が生じている場合、子どもに身体的症状が現われるほか、心的発達に阻害され、さらに、自己肯定感の低さなどその後の人格形成に大きな影響をあたえることが示唆された。Erikson（1959／2011）によると、乳幼児が母親とのあいだで達成すべき最初の基本的発達課題は、母親（他者）に対する基本的信頼の確立である。ネガティブな被養育経験を持つ母親は、〈親への嫌悪感情〉〈親の機嫌をうかがう〉〈孤独感・さみしい気持ち〉などによって、基本的信頼と自律の発達課題を達成できていない可能性が考えられる。そうした場合には、その後のライフサイクルに多大な影響を及ぼすものと考えられる。

被養育経験の中で語られた【ポジティブな要素】は、〈両親以外の重要他者の存在〉であった。【納得いかない親の態度】に対して〈親への嫌悪感情〉を抱いていた母親のうち、A, B, D, E, F, によって祖父母の存在が語られた。特にA, B, D, E, は親が愛着対象となり得なかったこともあり、祖父母が代わりに乳幼児期の愛着対象として機能したと考えられる。母親たちも子ども時代の境遇を祖父母によって助けられたと自覚しており、はっきりとそのエピソードが語られている。Steele（1986）は、成長した後に健康的な社会生活を送っている被虐待児の多くは、子ども時代に重要な代理人物をもつことができていたことを指摘している。祖父母の存在によって、現在治療的介入が必要な臨床群になることなく、不適切な養育に至らずに子育てを行えており、自分を保つことが

できていると考えられる。一方、心療内科に通院中の母親 J, K, L については、親に代わる重要他者のエピソードはなかった。そのために、心療内科への通院につながるような母親自身の不適応が生じた可能性があると考えられる。親が十分に機能しない場合、親に代わる愛着対象の存在が重要であることが示唆された。Egeland, et al. (1988) によっても、虐待の連鎖を断ち切ることができたケースの共通点として、子ども時代のある時点で愛情とサポートの提供者としての（虐待親に代わる）他者の存在があったことを挙げている。本研究における母親の重要他者は祖父母であったが、昨今、核家族化や、母親の高齢出産による祖父母の高年齢化が進行しており、祖父母との同居など、祖父母が直接子どもに関わる機会が減少していると考えられる。祖父母に限らず、子どもの愛着対象となり得る大人の存在についての検討も必要であろう。

被養育経験の【自分の子育てへの影響】のプロセスにおいて、【自分の人格形成への影響】【子育ての辛さ】への影響、自分の子育てに自信が持てないことから生じる【自信の持てない子育て】の категория が挙げられた。ネガティブな被養育経験は〈自己肯定感の低さ〉や〈人に頼れない〉自分を形成した。Erikson (1959/2011) は成人期の発達を 3 段階にまとめた。第 1 は、若い成人期（ヤングアダルト）の「親密（Intimacy）対孤立（Isolation）」であり、この段階では、適切なアイデンティティの感覚が確立されていることが必要で、それによって他者との本当の意味での親密さ（自分自身との親密さも含まれる）が可能となるが、この課題がうまく達成されないと表面的な人間関係しか築くことができず、自分自身を孤立させる結果になるという。第 2 段階は成人期の「ジェネラティヴィティ（Generativity・世代性）対停滞（Stagnation）」である。「ジェネラティヴィティ」は教育と伝統が主題である。それは、次の世代を生み育てることである。しかし、次の世代を育てる中で、前世代との（過去の）関係が問い直される。前の世代から何を受け継ぎ、そして、次の世界に何を手渡していくのか（西平，2014）とあるように、子どもを育てる中で、自分の親との関係を問い直す作業に直面すると考えられる。ネガティブな被養育経験によって親との葛藤を抱える母親にとっては、危機との直面とも言えると考えられる。また、〈子育ての適切なモデルがない〉〈反面教師〉〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉など、前の世代から受け継ぐものを肯定できない場合、発達課題に対して「停滞」してしまう可能性があると考えられる。さらに、子育て時期においては、母親のライフサイクルと子どものライフサイクルが母子相互作用の中で重なりあって発達していくということができる。世代間連鎖の観点から、子どもの発達課題が達



成されるためには母親の発達課題が達成される必要があると考えられる。子どもの基本的信頼や自律の発達課題を達成するための要因である母親を支えることは、子どもの発達課題の達成を後押しすることにもつながると考えられる。

岡本（2010）は、成人期の発達は、個々の力を成長させていく自己実現の達成を目指す「個」の発達と、自分のかかわりのある人々を支え育てていく「関係性」の成熟の2つの軸、および両者のバランスのあり方でとらえることによって、非常にうまく理解できると述べている。さらに「関係性」について、「個体内関係性」と「社会的関係性」という質の異なる2つの関係性が、生涯にわたって並行して発達していくとしている。

「個体内関係性」は、誕生直後から母親との相互のかかわりの中で形成されていく「内在化された他者像」であるとし、後の発達過程において、「重要な他者」とのかかわりの中で修正され続けていくという。ネガティブな被養育経験を持つ母親は、「内在化された他者像」がネガティブなものである可能性が高いと考えられ、他者との関係の土台が脆弱であるといえるが、重要他者との関係性の中で修正され続けるとあるように、〈家族のサポート〉〈専門家への相談・社会的サポート〉などによって、〈人に頼れない〉〈ひとりではがんばる〉ことから抜け出せることが可能であることを示唆していると考えられる。

また、岡本（2010）は、成人期のアイデンティティの発達には、「個」と「関係性」双方が等しく重みをもつことが必要で、両者が統合された状態が真に成熟したアイデンティティだという。「個」と「関係性」は入れ子のような関係にあり明確な区分は難しいが、成人期には、自分が関わっている「関係」に呑み込まれないだけの「個」の確立と、「個」が「関係性」を壊してしまわないだけの成熟した関係性の達成が必要である。成人期に体験される危機は、「個としての自分」、あるいは「他者との関係性」の揺らぎやそれらのバランスの崩れによるものが多いと述べている。ネガティブな被養育経験を持つ母親は、「個」としての〈自己肯定感の低さ〉と「関係性」に対する困難さ〈ひとりではがんばる〉〈人に頼れない〉という対人面の問題、双方を抱えていると考えられ、「個」についても「関係性」についても成熟しているとは言い難く、発達の危機の側面からみても、育児に対する困難感を抱えていると考えられる。

〈自分の性格を被養育経験に関連づけて考える〉ことは、自分が被害者であることを客観的に見ていることであり、語れていることである。そのような内省の作業は被養育経験の無意識的な巻き込まれを防いでいると考えられる。〈フラッシュバック〉が生じ、

〈自己コントロールのむずかしさ〉〈子育ての適切なモデルがない〉ことに気がつく、〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉から〈子どもがどう育つかの不安〉に繋がっているが、そこに巻き込まれずに済んだのが防衛機制としての知性化であった。防衛機制とは、精神分析理論の中心的な概念の一つであり、不安や嫌悪感、罪悪感などのような否定的な体験を引き起こす可能性のある欲動や情動を、意識から追い出してしまう自我の働きをいうものである（Freud, 1926/1970）。

【子育ての方略】としてキーワードとなったのが〈反面教師〉である。これについてはすべての母親からその意思が語られた。さらに知性化は〈頭で考える子育て〉を進めていく。Winnicott（1965）の言うところの“偽りの自己”の主な防衛は知性化であり、それが現実の適応力として機能している様子が語られた。ネガティブな被養育経験の世代間連鎖を断ち切るひとつの方略として、内省することと同時に、知性化が大きな役割を担っていることが示唆された。

【おりあいをつける】プロセスにおいて【親に対する気持ちや捉え方の変化】は注目すべき点である。〈親の養育の一部を受け入れる〉なかに、生活習慣、特に食にまつわるエピソードが母親 7 人から語られた。食は第一次欲求であり、特に幼少期は親に与えられるものに頼るしかない。生命維持の根幹を担う食に関する世代間の伝達は他の事項よりもその人の生活に密着している分、大きな影響を与えることが示唆された。

あの場合親のあの態度は仕方がなかったと考える〈親の態度の合理的解釈〉は、時間の経過、自分が親になって同じ立場を経験したこと、親が年をとって力を失ったことなどによる〈親の態度を前向きに捉える〉内容が語られた。〈親の態度を前向きに捉える〉場合と、距離を保って〈あきらめて期待しないようにする〉場合があるが、いずれにしても、被養育経験に埋もれて巻き込まれているのではなく、自分の気持ちの整理をすることができていると考えられる。自分の親に対する気持ちや考え方をきちんと内省できることが、負の世代間連鎖を断ち切るひとつの方略になっていることが示唆された。

【自分を保つために】母親たちが行ったことは、子育てへの〈家族のサポート〉や友人のサポートを受けることであった。しかし、これらには個人差があった。対人面の特徴を捉える母親の愛着スタイルにも関係していると考えられる。一方、〈専門家への相談・社会的サポート〉は、ほとんどの母親が利用していた。ネガティブな被養育経験があり、葛藤しながらも不適切な養育に至っていない母親は、医師や心理士などの専門家への相談をはじめ、保健センター、子育て広場やファミリーサポートセンター、教育相談など

の社会的サポートを活用することによって自分を保ち、子育てに向き合っていることが示された。

母親は、親との愛着形成、親からの子育てのモデル提示など、それまでの人生の中で得てきた親子関係に基づく経験によって子育てに臨むと考えられる。子育ては、自分と親との関係を通して学習し、自分が親にしてもらったことを子どもにしてあげることで自分のものになっていくと考えられる。〈子育ての適切なモデルがない〉とあるように、それがかなわなかった場合は、他者からの支援が必要になってくると考えられる。越境という概念のもとに、Engestrom et al. (1995) は、熟達による学びを垂直的学習とするならば、こうした越境による学びを水平的学習として捉えるべきだと論じた(青山, 2015)。母親自身が親から受けてきた養育を自分の子どもへの養育に生かしていくことを垂直的学習、あるいは垂直的越境体験と捉えることができると考えられる。家庭内伝達による適切な垂直的越境体験を得られなかった場合、家庭の外から得られる学びである越境による水平的越境体験、すなわち、母親を支える他者の存在の必要性が示唆された。語りからも、「保育園の先生がしている様子を見て同じようにした」「他のお母さんのしていることを真似した」などがあり、他者の行動を観察して自分自身の行動に取り入れるなど、〈頭で考える子育て〉をしている様子が示された。近年は核家族化が進み、それまでの、祖母から母へ、母から子へというような垂直的越境体験が機能しづらくなっており、親との葛藤を抱えていない母親にとっても、水平的越境体験は重要であると考えられる。

以上、インタビューデータより生成された概念および、概念から収束したカテゴリー・大カテゴリーによって、ネガティブな被養育経験の克服への母親の心理プロセスが得られた。子ども時代の不適切な養育に対して、子どもは過剰適応で対応し、それによって心身の発達を阻害されるばかりではなく、自己肯定感の低さ、人に頼れないなど、人格形成にも悪影響を及ぼすことが示された。また、ネガティブな被養育経験を持つ母親の子育てへの方略は、〈反面教師〉であり、知性化が作用していることが示された。

さらに、非臨床群の母親における負の世代間連鎖を克服する要因として、自分の被養育経験を整理して語れる内省力、重要他者の存在、社会的サポートの享受が示された。内省は、想起したことに分析を加えて評価することをともなう。「そのできごととはどのようにしておこったのか」「自分のしたことはよかったのか」「自分や周囲の人たちにどんな影響を与えたのか」といったことを問う(鈴木, 2008)。本研究のインタビュー対象

者は、子ども時代の親との出来事を想起し、理由づけや解釈を行っていた。また、本研究のインタビューという機会を通じて内省を深めているようにも感じられた。想起する必要のない過去の不快な養育体験を想起し、乳児にその不快さを投影同一化することになる（木部，2012）ような場合、それは世代間連鎖となるであろう。世代間連鎖を克服するには、真の内省に寄り添う支援者が必要であると考えられる。

## 第6章 研究4 子どもの年齢変化に伴う母親の被養育経験の影響の変容 プロセス

### 第1節 目的

Bowlby (1973/1991) は、アタッチメントが3歳以降にいわゆる目標修正的パートナーシップの段階へと徐々に移行を始めることを想定していた。児童期において、子どものアタッチメント上の目標が、養育者への近接性 (proximity) そのものの現実から、養育者の情緒的な利用可能性 (availability) の覚知へと大きく変じることを想定していた。このように児童期はアタッチメントが物理的近接から表象的近接へと実質的に切り替わる一大転換時である (遠藤, 2010) とあるように、子どもが児童期になったとき、母親の育児困難感がどう変容し、母子関係がどのように変化していくかを捉えることは重要であると考えられる。研究3において、ネガティブな被養育経験を有する幼児を持つ母親は、その影響による〈自己肯定感の低さ〉と〈人に頼れない〉という

【自分の人格形成への影響】に苦しみ、ネガティブな被養育経験を有するがゆえの【子育ての辛さ】を抱え、〈専門家への相談・社会的サポート〉を受けながらおりあいをつけていることが示された。研究4では、研究3のインタビュー対象者に対して縦断インタビューを実施し、幼児であった子どもが児童期に入ったことによって、ネガティブな被養育経験の影響がどのように変化し、どのような育児困難感を抱え、どう乗り越えようとしているのかという葛藤と心理プロセスを探索的に検討することを目的とする。それにより、ネガティブな被養育経験を持つことにより育児困難感を示す母親への継続的支援の視点の提案を目指す。

### 第2節 方法

#### 2-1 調査対象

研究3におけるインタビュー調査の協力者のうち、継続インタビューへの協力意思を示した8名を調査対象者とした

#### 2-2 調査時期

2015年6月中旬～2016年11月上旬

### 2-3 手続き

調査対象者 8 名に対し半構造化面接を行った。面接は筆者である面接者と一対一で行われ、研究 3 のインタビューガイドに変化の視点を加えたインタビューガイドを作成し、質問に沿って自由に語ってもらった。面接場所は調査対象者の自宅、喫茶店および診察室・面接室にて行われた。面接時間は、50 分から 90 分の範囲であった。

### 2-4 倫理的配慮

面接に際して、守秘義務の保障、参加拒否権利の保障を説明し承諾を得たうえで文書を交わした。調査対象者の許可を得て録音し逐語化した。

### 2-5 質問項目

インタビューガイドに沿って面接者から質問を行い、それに答える形式であった。以下に面接時のインタビューガイドを提示する。

- ① 今現在の両親に対する感情（前回の面接からの変化を中心に）
- ② 自分の幼少期に影響を与えた親以外の人物に対する今現在の感情
- ③ 両親からの養育が今現在の生活全般に与える影響
- ④ 両親以外の重要人物が現在の生活全般に与える影響
- ⑤ 自分の育てられ方について振り返ることはあるか、あるとすればそれはどんな時か
- ⑥ 自分の小さい時の家庭の様子や育てられ方について誰かに話すことはあるか、あるとしたらどんなときに誰に話しているか
- ⑦ 自分自身の子育てについて振り返ることはあるか、あるとすればそれはどんな時か
- ⑧ お子さんの成長に伴う心配事や困難ごとの変化はあるか
- ⑨ 子どもがわざと自分に対して嫌なことをしていると感じることはあるか
- ⑩ これまで子育ての中で辛かったり困ったりしたのはどんな時か
- ⑪ 子どもの頃のご両親からの養育の影響だと思われるご自分の性格は
- ⑫ 子どもにうまく関わっていないと感じることはないか
- ⑬ ご主人の子育てへのサポートについて何か変化はあるか
- ⑭ 子育てに困った時に頼りになる人や場所はあるか、あるとしたら誰か、どこか
- ⑮ 施設や相談所などのサポートを利用したことはあるか

- ⑯ 今現在、何らかの専門家の支援を受けているか
- ⑰ カウンセリングなどを利用して自分の育てられ方を振り返ってみたいと思うか
- ⑱ 専門家が援助してくれる体制があったら何を相談したいか
- ⑲ 自分の子育てについてどう思っているか、こうしておけばよかったと思うことは
- ⑳ これからどのような子育てをしていこうと思っているか、不安に思うことは何か

## 2-6 分析方法

データの分析法は、M-GTAを用いた。M-GTAの方法、適応性、分析過程については研究3と同様であった。解釈の適切さ、確からしさの向上を図り、本研究においては、分析・解釈の過程がわかりやすいように手順について具体例を挙げて明示化することを重視した。着目した具体例が最適に概念を示しているかを検証するために、インタビュー記録の中の注目個所にアンダーラインを引き、ラインの最後に（ ）をつけて、概念表とともに母子臨床の現場で働く心理士3名に分担部分のデータを提示し、最適と思われる概念を記してもらった（一致率87.3%）。筆者が、最適と思った概念と別の概念が妥当と評価された箇所に関しては、適切な概念名で示されていない、あるいは、重なる概念があると判断し、協力を依頼した虐待臨床の専門家とともに解釈を深めて再考し、一部修正した。「研究する人間」（木下，2007）の意識化を重視しながらも、解釈に偏りがなければ検証しながら進めることを目指した。

## 第3節 結果と考察

### 3-1 対象者のプロフィール

調査対象者8名の平均年齢は37.5歳（30歳～43歳）であった。家族構成は、夫と子ども1人が2名、夫と子ども2人が4名、夫と子ども3人が1名、子ども2人が1名であった。就労形態は、常勤2名、パート1名、無職5名であった。原家族構成は多世帯が4名、核家族が4名であった。原家族構成は多世帯が4名、核家族が4名であった。教育歴は、中学卒1名、高校卒1名、専門学校卒1名、短大卒1名、大学卒2名、大学院卒2名であった。成人版愛着スタイル尺度（詫摩・戸田，1988）の結果、回避型2名、アンビバレント型5名、安定型1名であった。調査対象者8名に対し研究3と同様のA～Lのアルファベットを割り当てた（Table 13）。

Table 13 研究4のインタビュー対象者属性

名	年齢	家族構成	就労	原家族構成	愛着スタイル
A	39	夫・子2	有	多世帯兄弟有	回避
D	34	夫・子3	無	父母兄弟有	アンビバレント
E	40	子2	無	多世帯兄弟有	アンビバレント
F	43	夫・子2	無	父母兄弟有	アンビバレント
I	39	夫・子2	有	多世帯兄弟有	安定
J*	37	夫・子1	有	父母兄弟有	アンビバレント
K*	38	夫・子2	無	父母兄弟有	アンビバレント
L*	30	夫・子1	無	多世帯兄弟無	回避

\* 臨床群: 総合病院の心療内科に通院中

### 3-2 概念とカテゴリー・大カテゴリー

分析焦点者を「ネガティブな被養育経験を有する小学生を持つ母親」、分析テーマを「子どもの年齢変化に伴う母親の被養育経験の影響の変容プロセス」としてインタビューデータを分析した。その結果、生成された概念は17個であった。概念相互の関係からカテゴリーの収束化を行った結果、8個のカテゴリーに収束した。8個のカテゴリーは、4個の大カテゴリーに収束した。すべてのカテゴリーと概念の定義をTable 14に示した。



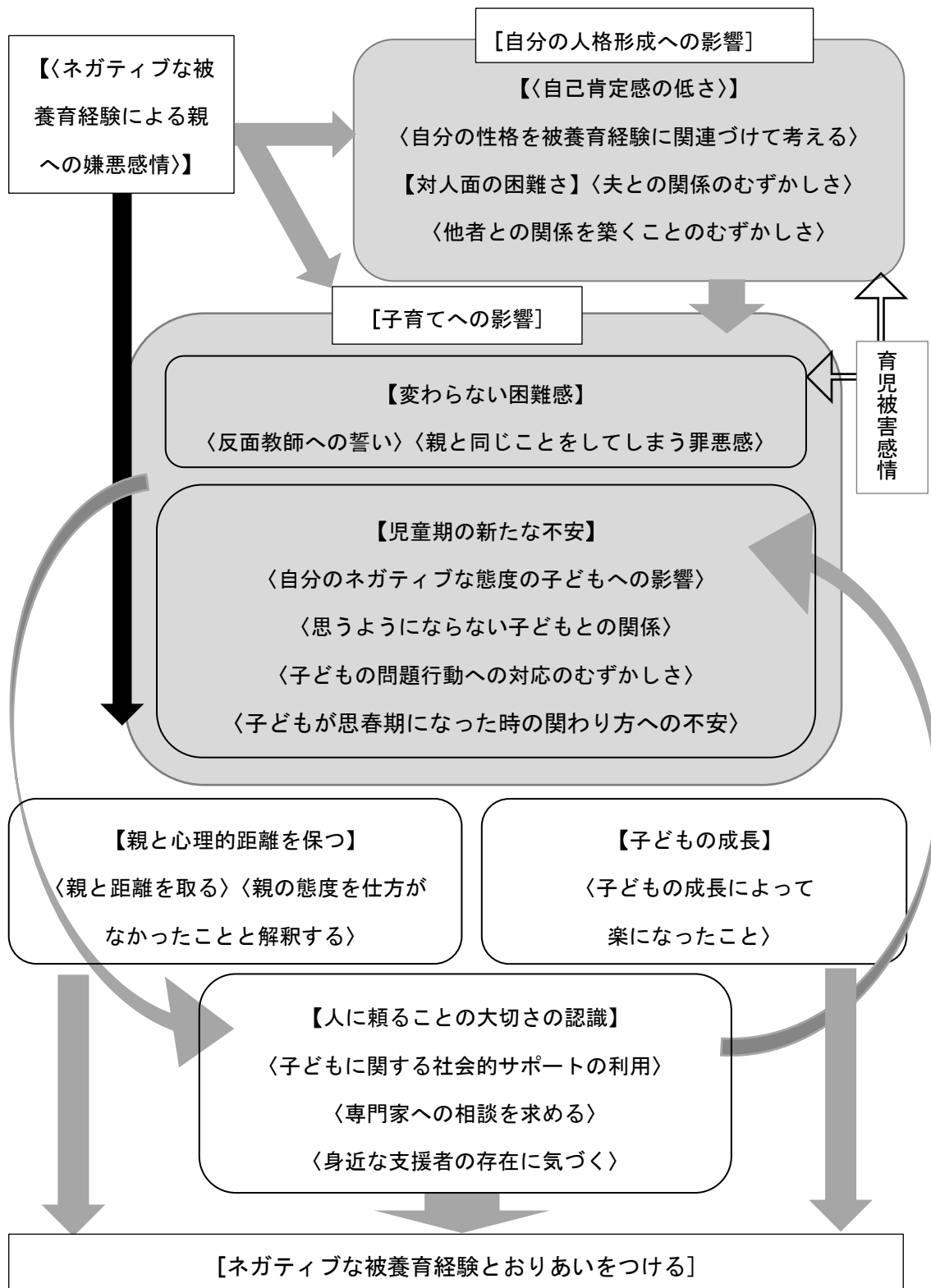
Table 14 研究4のカテゴリーと概念の定義

大カテゴリー	カテゴリー	概念	定義
ネガティブな被養育経験による親への嫌悪感情		ネガティブな被養育経験による親への嫌悪感情	ネガティブな被養育経験による 今も変わらない親に対する嫌悪感情
自分の人格 形成への影響	自己肯定感の 低さ	自己肯定感の低さ	自己肯定感が低く自信がなく 自分の性格や態度が嫌だと思うこと
		自分の性格を被養育経験に 関連づけて考える	自分の性格のネガティブな面は、 育てられ方が影響していると考えること
	対人面の 困難さ	夫との関係のむずかしさ	夫との距離感をつかめなかったり 夫との関係について困難さを感じる
		他者との関係を築くことの むずかしさ	他者との関係を築くことのむずかしさや ママ友などを必要ないと考えること
子育てへの 影響	変わらない 困難感	反面教師への誓い	親から受けた養育のように子どもを 育てたくないと思っている困難さのこと
		親と同じことをしてしまう罪悪感	ふと気づくと親の育て方で嫌だったことと 同じことを子どもにしている罪悪感のこと
	児童期の 新たな不安	自分のネガティブな態度の 子どもへの影響	自分のネガティブな態度が子どもの性格や 行動に影響するのではと不安になること
		思うようにならない子どもとの 関係	理想の母親像とはうらはらに思うように ならない子どもとの関係に悩むこと
		子どもの問題行動への対応の むずかしさ	子どもの不適応や発達の問題への 対応に困難さや不安を感じる
		子どもが思春期になったときの 関わり方への不安	子どもの年齢があがることによって生じる 新たな課題や不安のこと
	子どもの成長	子どもの成長によって 楽になったこと	子どもの発語や行動面の発達によって 幼児期と比べて楽になったと感じること
	ネガティブな 被養育経験と	親と心理的な 距離を保つ	会わないことによって親のことを考える 時間が減り楽になることと罪悪感
		親の態度を仕方がなかったことと 解釈する	時間の経過とともに、仕方がないことだった または良い方に考えられるようになること
おりあいを つける	人に頼る ことの大切さ	子どもに関する社会的サポートの 利用	子どもの発達などに関する社会的 サポートを利用すること
		専門家への相談を求める	親が自分自身の心理面や子育てについて 専門家への相談を求めること
	の認識	身近な支援者の存在に気づく	自分を支えてくれる身近な支援者の 存在に気づくこと

### 3-3 全体のプロセス

全体のプロセスを結果図とストーリーラインで示した。概念とカテゴリー間の関係を検討し、ネガティブな被養育経験を持ちながらも懸命に子育てに向き合っている母親の心理プロセスを結果図（Figure 15）に示した。続いて、すべての概念名とカテゴリー名によってプロセスを要約するストーリーラインを示した。分析の最小単位である概念を〈 〉、概念間の関係から生成されたカテゴリーを【 】、大カテゴリーを[ ]で示した。結果図における「 ➡ 」は影響の方向、「 ➡➡ 」は変化の方向を示す。

### 3-3-1 結果図



【 】大カテゴリー

【 】カテゴリー

< > 概念

➡ 変化の方向

➡ 影響の方向

Figure 15 研究4の結果図 ネガティブな被養育経験の克服への心理プロセス

### 3-3-2 ストーリーライン

〈ネガティブな被養育経験による親への嫌悪感情〉は、時間の経過とともに変化する部分もあるが、継続的に[自分の人格形成への影響]や[子育てへの影響]を示す。人格への影響として〈自己肯定感の低さ〉が挙げられる。また、〈自分の性格を被養育経験と関連づけて考える〉傾向がある。自分の親との良好な関係が築けてこなかった母親は、他者への信頼感や他者との適切な距離感が持てず、【対人面の困難さ】を抱き続ける。それは、一番身近な存在である〈夫との関係のむずかしさ〉に現れる。また、本来なら子育ての支えとなるべきママ友などに対して〈他者との関係を築くことのむずかしさ〉を感じており、継続的に母親の育児困難感を強める要因となっている。

[子育てへの影響]の【変わらない困難感】として〈反面教師への誓い〉による苦しさ、〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉が存在する。さらに、【児童期の新たな不安】として、子どもの自我が更に発達していき別個の人格形成がなされていくにつれ、〈自分のネガティブな態度の子どもへの影響〉が心配になる。また、〈思うようにならない子どもとの関係〉〈子どもの問題行動への対応のむずかしさ〉への悩みが募り、〈子どもが思春期になったときの関わり方への不安〉へと繋がっていく。

[ネガティブな被養育経験とおりがあいつける]プロセスには、子どもが言葉を話すようになって理解しやすくなるなど、〈子どもの成長によって楽になったこと〉や、〈親と距離を取る〉、時間の経過とともに〈親の態度を仕方がなかったことと解釈する〉など、【親と心理的な距離を保つ】ことが作用する。さらに、〈子どもに関する社会的サポートの利用〉や〈専門家への相談を求める〉姿勢は継続しており、〈身近な支援者の存在に気づく〉こともあって、【人に頼ることの大切さの認識】を持つようになる。ネガティブな被養育経験による育児被害感情と葛藤しながらも[ネガティブな被養育経験とおりがあいつける]方向への変容のプロセスをたどっていく。

### 3-4 概念の定義と具体例およびカテゴリーごとの考察

カテゴリーについての説明に続き、各概念を挙げ、はじめにその定義を示し、続いて該当する具体例を抜粋して記述した。具体例は「 」で示し、具体例の後ろには面接協力者に割り当てたアルファベットを（ ）内に示した。それらを受け、カテゴリーごとの考察を示した。

### 3-4-1 【ネガティブな被養育経験による親への嫌悪感情】

〈ネガティブな被養育経験による親への嫌悪感情〉の定義は「ネガティブな被養育経験による今も変わらない親に対する嫌悪感情」である。「父親と母親に会うとすごく疲れたんですよ。で実際、会ったり電話で話したりすると自分からかけられなくなるくらいかなりまいっちゃうんですよ（笑）。今でもそうなんですね。だから自分で電話かけられるようになると、あっ、元気になったなって思うんです」（F）、「親同士がケンカして、父親と母親が結構きつい言い方で話しているのを、うちに来てされると、それはやめてとか、私が、子どもが心配になっちゃうからとか。あまり合わないですね、あの、合わないというのは、こう、なんていうんだろうな、やっぱり、母と出かけたりしても最初のうちはいいけどだんだんイライラしてきちゃったりするので」（J）、「うるさすぎるなっていうのを誰と比べるでもないんですけどうるさすぎるなっていうのは感じているんで、それは変わらないですね」（K）。

【ネガティブな被養育経験による親への嫌悪感情】は、継続的にアンビバレントな感情として母親の生きづらさや子育ての困難さを生じさせていると考えられる。

### 3-4-2 【自己肯定感の低さ】

〈自己肯定感の低さ〉の定義は「自己肯定感が低く、自信がなく、自分の性格や態度が嫌だなと思うこと」である。「やっぱりちょっとあのまだ自分に自信がなくて、子育てについてもなんか自信がないところが結構ありまして、たぶん子どもの時に母との関わりがほとんどなかったこともあるかもしれないですけど」（E）、「私みたいな自分が成長しきれていない人が子どもを産んだり親になるのは子どもに対してよくないと思う」（C）、「自分のことが嫌ですね、ほんとに。ものすごく気分左右されやすい」（F）。

〈自分の性格を被養育経験に関連づけて考える〉の定義は「自分の性格のネガティブな面は、育てられ方が影響していると考えること」である。「小さい頃からなんかさめていたんですよ。正直な話、うちの親関係もぐちゃぐちゃしていたけど（中略）結構変に気を遣うところがあったから、いろんなことに対してさめていたというか、子どもにしてはなんか大人な考えでいたというか」（L）、「私の性格をつくったのはそれ（被養育経験）が影響していると思う。育てられ方っていうか（J）。

〈自己肯定感の低さ〉が子育ての困難感や対人面など、あらゆる面に影響を及ぼしていることと考えられる。虐待を受けて育った親の特徴として、自己評価の低さがあり、自信がないため、絶えず人からどう思われているのか、自分はバカにされているのではないかというように、人からの目が非常に気になり、過剰に厳しい目で自分を評価する（深津，2002）とある。自己肯定感の低さが、研究2で示された、被害的認知に影響していると考えられる。さらに、対人面についても自信が持てない、すなわち、愛着スタイルのアンビバレント傾向や回避傾向が強くなっていると考えられ、〈自己肯定感の低さ〉を巡る悪循環が生じていると考えられる。

### 3-4-3 【対人面の困難さ】

〈夫との関係のむずかしさ〉の定義は「夫との距離感をつかめなかったり、夫との関係について困難さを感じる事」である。「特に主人に対してたまりやすいのは、もしかしたら今までの育ちというか、なんか自分が育った環境で身につけた生きるための力がここでは今ちょっとそれが邪魔している、他者に対して厳しいというか、うん、ちょっとのことで被害者っぽく思ってしまう、軽んじられたと思ってしまうとか、そこが原因なんじゃないかなあ。気遣いされないことに対してちょっと変に敏感なのかなって」

(A)、「一番身近な人間関係のところで自分が距離感がつかめていないんじゃないかなと。そこが気になっているところですね」(A)、「子育てじゃなくて夫との関係っていうのが大きかったりする。すごく難しいですね。何か家族なんですけど、血のつながってない中途半端な家族なのでわからないんですよ、大人だし、言わないし、まあかといって男の人、うちの夫だけ？まあこっちが理解していないっていうのもあるかもしれないんですけど、理解しあえない」(D)、「当たり前って思われているけど、それも腹が立つっていうか、で何かあったらお母さんのせいにされるので、いつも緊張しているので、そりゃ肩も痛くなるわ、腰も痛くなるわって思いました。すごいですね、それで出産もして、それを出来て当たり前って思われると、ちょっとできてないところがあると、なんで、何してたの今日とか（中略）休みがないですから、フルですから」(D)、「私は私で離婚を考えているけど、いざ離婚ってなっていなくなって、子どもにとって必要なのか必要じゃないのかわからないというか、自分の父親があんなだったから全然父親像がわからない」(L)

〈他者との関係を築くことのむずかしさ〉の定義は「他者との関係を築くことのむずかしさやママ友などを必要ないと考えること」である。「対人関係の上で自分がやっばり他者に厳し過ぎたりというか、ちょっと心が、許容量が狭いんじゃないかと思うことがあって、おそらく成育環境のせいであろうとは思いますが」(A)、「父が怒るともう1週間1ヶ月は顔を合わさなくなるので、予定していたことが急にキャンセルとか、やっぱ自分の楽しみを奪われてしまうので、そういう点で人の顔色をうかがうとか自分の意見をはっきり言うとか、たぶんもうずっと出来なくて、いつも言われたことを嫌だなと思って断れないことが多くて嫌々ながら友達と思い込んで付き合ってる、その人との関係を続けてるっていうことがなんかいい人間関係がそういう風に、自分が人と気持ちよく付き合うっていうことがずーっと出来てなかったなと」(D)、「子どもの関係というより園でのお母さんとの、同級生のお母さんとの関係は難しいなと思いました」(D)、「なんか結構一匹狼みたいなのがあんので、そこまでして別に関わらなくていいかなって、深くは入らなくていいから、面倒くさいじゃないですか、友達って」(I)。

【対人面の困難さ】は、母親のネガティブな被養育経験で形成された内的ワーキングモデルによる現在の愛着スタイルによって、対人面に自信が持てない傾向が強いアンビバレントと、人を信頼しない回避傾向がそれぞれ作用していると考えられる。安定型の一人を除いて、すべての母親から対人面の困難さは語られていた。

【自分の人格形成への影響】は、大事にされたという思いが持てない、人の顔色をうかがうなどの影響により、【自己肯定感の低さ】と【対人面の困難さ】に現れていた。ネガティブな被養育経験によって形成された内的ワーキングモデルによる母親の愛着スタイルの影響があると考えられる。大人のパーソナリティは、未成熟な時期を通じての重要な人物たちとの相互作用、なかでも愛着人物たちとの相互作用の所産とみなされる(Bowlby, 1973/1991)とあるように、子ども時代に親との適切な相互作用がみられなかったことが影響して、パーソナリティにおいて、【自己肯定感の低さ】【対人面の困難さ】という弱さを抱えていると考えられる。さらに、家族という身近な存在との良好な関係を築けてこなかった母親たちにとって、一番身近な存在である〈夫との関係のむずかしさ〉は様々生じていた。養育者との生後12か月の相互作用を基礎として乳児期に形成される愛着方略は、行動の内的作業モデルとして、成人になるとストレスのある状況やチャレンジを要する状況、あるいは新奇な場面での情動制御や行動のガイドと

して機能し、かつ、対人場面において予測される事態やとり得る有効な対処行動のシミュレーション・モデルとして援用されていくと考えられる（Main, Kaplan, & Cassidy, 1985）とあるように、幼少期の親との間に安定的な愛着形成がされなかったため、内的ワーキングモデルは不安定なものになり、その後、成人となってからも他者との友好的関係性に期待せず、他者に対して信頼感を持ったり依存したりすることが困難な状態であると考えられる。子育てという未知の業を担うとき、わからないことだらけの事柄について、他者に頼ることなく一人で成し遂げるのは不可能に近いと考えられる。〈他者との関係を築くことのむずかしさ〉を語る母親にとって、育児困難感が生じるのは避けられないと考えられる。ネガティブな被養育経験の影響であると考えられる【対人面の困難さ】は、育児困難感の要因のひとつになっていると考えられる。

また、[自分の人格形成への影響]である【対人面の困難さ】と【自己肯定感の低さ】は、互いに強化しあい、母親の生きづらさを増大させていると考えられる。

#### 3-4-4 【変わらない困難感】

〈反面教師への誓い〉の定義は「親から受けた養育のようには子どもを育てたくないと常に考えている困難さのこと」である。「歯磨きとか全然してもらった覚えがないんですけど（中略）こういうことしてもらわなかったとか、生活の隅々に至るまで反面教師だった」（A）、「母親はやっぱり性格が激しいと思うんですよ。そこが苦手だと思うんです。それにずっと振り回されてきたというのがあって、だから自分がそうならないように、激しく腹が立ったりとか、そういったようにならないように自分がしているんだと思います」（F）。

〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉の定義は「ふと気づくと親の育て方で嫌だったことと同じことを子どもにしている罪悪感のこと」である。「笑顔が私は完全になくなっているから、そのところでは結局自分が母から受けてきたイライラした感じとか、そういうのを子どもに出している」（F）、「母親から受けたようにはしたくないかと、でもしちゃっているんですね、おなじようなことをくどくど言っちゃったりとかしていると、ああ同じことしているなと」（J）。

【変わらない困難感】は、〈反面教師への誓い〉と〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉であった。子どもが幼児期のときも、ほとんどの母親が〈反面教師への誓い〉をし、衝



動を抑えるために、必死で〈頭で考える子育て〉をしていた。しかし、なかなかうまくはいかずに、〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉にかられていた。罪悪感はさらに〈自己肯定感の低さ〉を招き、悪循環になっていく。子どもが児童期になっても幼児期のときと同じように、〈反面教師への誓い〉をしても、〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉を抱くという困難感が続いていくことが示唆された。

### 3-4-5 【児童期の新たな不安】

〈自分のネガティブな態度の子どもへの影響〉の定義は「自分のネガティブな態度が子どもの性格や行動に影響するのではと不安になること」である。「やっぱり少しのことで瞬間湯沸かし器じゃないですけど、ぱーんって怒れてしまうことが、いつもなんかイライラしてるような状態で、そういう様子が子どもたちにすごく伝わってるんだなっていうのを、最近感じました。やっぱり幼稚園でも三女がすごく幼稚園でイラついてる、すぐ怒ってるっていう話を今朝聞いたので」(D)、「神経質で、ものすごく確認行為が激しくて、ちょっとじゃないですよ、将来とかそういうことに対して悲観的なんですよ。(中略)今の自分にそっくりだなんて思います。私なんかやっぱり出しているのかなって、子どもの前で。私のせいかなと思う」(J)、「子どもは親が自分の今していることや姿に満足しているとかあきれているとかいうのを読んでいるっていうのは思いますね。で、やっぱり苦しんでいると思いますね」(F)、「上の子には厳しくしたから上の子が顔色を見るのが気になりますね。それが後悔していること」(I)。

〈思うようにならない子どもとの関係〉の定義は「理想の母親像とはうらはらに、思うようにならない子どもとの関係に悩むこと」である。「やっぱり上の子に関しては、もうかわいいという年ではないので、それが本人は、私のことかわいくないと思っているだとか、気持ちを読むことを言うので、それに対してうそをつけないというか、よしよしって、どんなあなたも受け止めますよっていうようなことができていないので、だから悪循環というか」(F)、「私はずっと生まれてから子どもの年だけ母親やっているから、犠牲ってことでは慣れているわけですね。食べたいときに食べれなかったりとか、聴きたい音楽とか子どもが聴きたいのが先になったりとか、自分というのを殺してやってきているから」(F)、「(園から)親がすすんで他の人に挨拶する姿を見せなさいと言われていたんですけど、私そうしているつもりなんですけど子どもには伝わっていな

いようで、特に上の子がもうちょっとしっかりしてくれればと思っていて、ひとり親ということもあって甘やかしちゃったというか、そうかなあと最近思っています」(E)，「やっぱり自分が限界のときはやっぱり、ああって怒鳴りちらしたくなりますことあります」(J)，「このあいだインフルエンザとかになっちゃって、2週間くらいとか2人きりで朝から晩まで、旦那が帰ってくるまでいると、なんだろう、もう2人だけの世界みたいな、自分の中で、息がつまるというか、なんだろう、子どもはゲームしたりしているんだけど、自分が病んできちゃう。ほんとに疲れちゃう」(J)，「他のママの方がよかつたんじゃない？って言うと、ううん、違う違う、ママがいいの、ママがいいのって風に言うんで、ああ気を遣っているなって。ああ、悪いこと言っているなあって思います。試すようなこと言っちゃって悪いこと言ってるなあと思う」(J)。

**〈子どもの問題行動への対応のむずかしさ〉**の定義は「子どもの不適応や発達の問題への対応に困難さや不安を感じること」である。「月曜日金曜日が、お腹が痛いとかお母さん頭が痛いとか言ってたので、でもそれももう、2年生の3学期、2学期の終わりから3学期くらいからちょこちょこあったので」(D)，「低学年のときにもう従わなかったし、学習習慣も身につかなかったし、結構大変だった」(F)，「おじいちゃんおばあちゃんに任せたりすることもなく、自分の責任のできるだけ範囲で守ってきたつもりなんですけど、やっぱりそれが守り切れなかったということですからごく自分を責めましたしすごく情けない思いもした」(F)。

**〈子どもが思春期になったときの関わり方への不安〉**の定義は「子どもの年齢があがることによって生じる新たな課題や不安のこと」である。「これからの人生の大半は友達と過ごすことになるので、その時に人間関係が崩れた時に、そのリカバリー、どういう風に私自身がサポートしてやれるか、本人がどういう風に解決策を見つけていけるのか…不安なところですね」(D)，「周りはすぐわかるのに自分にはわからないだとか、同じ学年の子と比べることができるようになったんですよ、子どもが。」(F)，「2年前より子どもたちも成長したので、小学校3年生は友達関係がちょっと複雑になってきていて、なかなか家でもその話を…嫌なことがあっても隠しておけないタイプなので、すぐ顔に出るんですけど、やっぱりなかなか隠しておけない、「何かあったんでしょ」って言っても「いや何にもない」って隠すことが多く…抱え込むことが多くなったな一

と思いました。あと、交換日記とかも始めて秘密が何かどんどん多くなってきたんだなーと思って、ちょっと気をつけなきゃいけないなと思いました」(D)、「小3の壁とか言われているんですけど、発達障害の傾向がある子が急に周りの友達についていけなくなるのがそれくらいと言われているので、そこにどんな問題がでるんだろうとか、そのときにうまく良い道を探してあげられるのだろうかとか、そこが一番の課題」(A)、「大きくなったらしゃべらなくなったりとか、なんかね、悪い方向にいつかはほしくないで、何でも話してくれるような子にするにはどうしたらいいんだろうっていう、うん、不安と、そんな感じですかね」(K)。

【児童期の新たな不安】として、幼児のときは親の側で親の考えに沿った生活をしていたが、子どもがより意志を持つようになり、親とは別個の人格を形成して親の見えない学校という社会に出ていく様子を見ながら、〈自分のネガティブな態度の子どもへの影響〉が気になる。親の良いモデルがないため、こうしてほしかったということを思い起こしながら理想の母親像を思い描いて奮闘するがうまくいかず、〈思うようにならない子どもとの関係〉に焦りとイライラが募ると考えられる。〈子どもの問題行動への対応のむずかしさ〉を覚え、〈子どもが思春期になったときのかかわり方への不安〉につなっていくことが示された。子どもの年齢が上がり言葉を操るようになることにより理解しやすくなるが、別個の人間との【対人面の困難さ】という側面である関係性の問題が今後の課題として挙げられていることが示された。「上の子はもうかわいいという年でもないし」(F)とあるように、子どもとの言葉でのやるとりが多くなることによって、自分が保護する人物という感覚は薄れているのではないかと考えられる。言葉によって自分に意見をしてくる子どもに対して、親も感情を言葉で表出してしまう、それによって子どもが反応するという、関係性の複雑さも生じていると考えられる。さらに、子どもの年齢があがり思春期になったときに良好な関係でいられるのか、自分に自信の持てない母親は先々のことにも不安を抱えていることが示唆された。また、学校という親の見えない世界で人間関係を築いていく子どもに対して、対人面に困難さを感じる自分が今後サポートできるのかという不安も抱いていることが示された。

### 3-4-6 【子どもの成長】

〈子どもの成長によって楽になったこと〉の定義は「子どもの発語や行動面の発達に

よって幼児期と比べて楽になったと感ずること」である。「話せばわかるようになってきたので、変にだだをこねたりとか、ダメでしょバチンということはなくなりました。そういえば、4歳くらいのときがほんと聞き分けなくて、ほんとについバチンということがほんとにたまにあったんですけど今はほんとなくなりました」(A)、「出産直後ですかね。8ヶ月で(保育園に)入ったので。最初の1年は今思うとほんとしんどかったなあと。自分自身の気持ちの整理がやっぱついていないし、その頃はまだ親との交流もあって親もほんと頻繁に来ていたので、子どものこと、親のこと、自分自身の体調のこととか、で、保育園でいろんなルールがあったりするからその言葉とかがまったくわからないことだったりとか慣れないことだったので一番しんどかった」(A)、「長女が2歳のころですかね。まあ普通なんですけどね、うん、今思えばもっと自分が寛大になってあげられなかったのかなっていう、その自分の不甲斐なさって、そんな大変なあれじゃないはずなのになんでそういうふうになっちゃったのかなっていう、自分がイライラしたりとか怒ったりとかそういうことですね」(I)、「子どもに、イライラすることされると、ほんとにもう、あつて思う、あつ、(叩いたら)ダメダメダメっていうのは、本当に少なくなりましたけど、あの、赤ちゃんの頃に比べれば」(J)、「産んですぐから薬を全部やめたんで、まったく眠れなかったです。眠れないから精神的によくないというか、子どもを産んでたぶんこころへんはぐちゃぐちゃあったけど、半年くらいから旦那は海外に行っちゃうし」(L)。

【子どもの成長】によって、楽になったことも語られた。幼児期に多くの母親が語っていた〈フラッシュバック〉の語りは、子どもが児童期になったことによってなくなっていた。〈フラッシュバック〉とは、無意識のうちに想起されるものであり、得体のしれないものへの恐怖を伴うと考えられる。目の前にいる子どもの泣き声から、無意識のうちに自分の幼少期のネガティブな出来事が想起されると考えられ、子どもが言葉を話すことで、情緒応答性の低い母親にとっても子どもの状態が理解しやすいということが楽になった要因であると考えられる。幼児期の語りの際も、生まれたばかりのときによく〈フラッシュバック〉があった、子どもは小さいときの方が大変だったとあり、出産直後のハイリスクの母親へのサポートは重要であると考えられる。今野・水谷・星野(2001)は、母子の愛着形成と虐待の予防に関して、わが子虐待の危険性は、妊娠中にはすでにある程度予見可能であることを示唆し、胎児への愛着形成の援助の重要性を

述べている。〈フラッシュバック〉が生じるほどの困難感を示している母親に対しては、出産前後からのサポートが重要であると考えられる。

#### 3-4-7 【親と心理的な距離を保つ】

〈親と距離を取る〉の定義は「会わないことによって親のことを考える時間が減り楽になることと罪悪感」である。「4年くらい連絡取らず会わずに過ごしてきて、親との関わり方に対する悩みは減ってきている気がする」(A)、「親はたぶん自分が何か悪いことをしたとか全然思っていないと思うので、説明してもわからないのでなんで離れていったかわからないと思っていて、それを怒っていると思うんですけど。納得した上での離れるだったらいいんですけど、それこそいいんですけど、振り切っちゃった感じだったのでその罪悪感が大きかったです。今はそれは仕方がなかったと自分で自分を許している、そういう状況です」(A)

〈親の態度を仕方がなかったことと解釈する〉の定義は「時間の経過とともに、仕方がないことだった、または良い方に考えられるようになること」である。「構ってもらえなかったとか、家帰ったら誰もいなかったとか、なにかそういうのがすごく寂しかったんですけど、でもそういうのがあったから今自分一人でどこかに行ったりとか、そういう一人であることに関して慣れじゃないですけど1人であるのが嫌じゃないのは、母が働いていたおかげがあったりするのかなと思います」(D)、「自分が同じ立場に立つと、あれは仕方がなかったなっていうのは思います。母は母なりに一生懸命やっていたんだろうなと思うと頭が下がります」(D)、「うちの父はわがままなタイプなんです、勝手というか、まあいいんですけどね。もう別に」(B)、「激しいってことはそれに対して、人に対しても情けもかけると思うし、いろんなことで傷ついたりすること、情けも深いと思うんですよ、親の世代っていうのは」(F)、「以前に比べて、嫌だっていうお話もしたと思うんですけど、そういう感情も、まったくなくなったというところとちょっと嘘なんですけど、だいぶ減ってきました」(D)。

【親と心理的な距離を保つ】ことには、2通りの方向性が示された。〈親と距離を取る〉とは、会うと辛くなるため、実際に会わないようにするという対応であった。一方〈親の態度を仕方がなかったことと解釈する〉については、自分も親になってみて、子育て

の大変さを理解し、親も大変だったから仕方がなかったと考える方略であった。親への嫌悪感とおりあいをつける作業でもあった。また、実際の子育てにおいて、物理的な親のサポートを必要としていることに苦しさを感じている語りもあった。親と長い時間を共有すると辛くなってくるが、子どもを預けたり、子どもと祖父母が関わることの大切さも感じており、ネガティブな感情を抱きながらも、実際には、親との付き合いが普通に行われている母親もいた。いずれにしても、【親と心理的な距離を保つ】ことをしながら、子育てに向き合っていることが示された。

#### 3-4-8 【人に頼ることの大切さの認識】

〈子どもに対する社会的サポートの利用〉の定義は「子どもの発達などに関する社会的サポートを利用すること」である。「学校相談センターみたいなところに電話して相談したことがあります。もちろんそのことは学校のほうにも伝えてあったので、先生方のご存知なんですけど、やっぱり家でもどういう風に対応したらいいのかわからなかったもので、かといって育児相談のほうだと年齢が大きすぎるから」(D)、「週に1回通級指導という形でいつも通う学校とは別のクラスに週に1回だけ通って、そこでやっぱり友達との関わり方とかを教えてもらって。全部公立でただでやってくれるのありがたいと思って。先生方の協力はすごくいただいているので、子どもをどうしたらいいかということの相談はすごくしやすいんですけど」(A)、「学童は3年で終わるけどもってあったらいい。(中略)仕事は2時に終わるので間に合わない。そうするとどうしようかと考える。母は車乗れないので自転車だし、やめなきゃいけないのかなと思う。預かってもらえるような学童ないし、なかなか世の中でも3年生の壁って言われていて、3年になったらどうしよう、考えないといけないと思う」(J)、「育児相談もそうなんですけど電話しても通り一遍というか教科書的なことばかりでなんかそれがすごく残念」(D)、「いろんな検査うけてまああの、子どものなんというかIQわかったりとか、得意不得意がわかったりとかそれはそれで、あの、結構役に立ったというか、立ったんですけど、あの。うちの子そんなに支援が必要な子なのかなと、ちょっとあの、親としてはなんかあのまあその心配した時期もあったので、なんかあの、なんかちょっと納得いかない時期もありました」(E)、「クラスの中で立ち歩いてケンカをする男の子がいたりとか、女の子同士のケンカとかそういうのが娘のストレスになっていたのが明確だったので、SCに話すと見に行けるじゃないですか、不適切なことがあれば(先生に)言っ

てもらえるっていう、ありがたいです。あと若い先生は ADHD とか言ってもやっぱり勉強不足な人も多いと思うので、プロの人がいないと厳しいと思いますよ」 (F)。

〈専門家への相談を求める〉の定義は「親が自分自身の心理面や子育てについて専門家への相談を求めること」である。「やっぱりなかなか人に言えない悩みとかもありますので、そういうのが相談できればいいと思うんですけど、カウンセリングって結構お金もかかりますし、時間もかかりますし、もっとなんか手軽というかそういうのがあれば利用したいです」 (E) , 「プロです。心理士さん、ドクター。遠くてお金がかかりますね。困ったことがあるというより定期的にうちは行っていますね。あとお電話も心理士さんにはなんかこういうことがあったらかけていますね。そうしたら自分も整理されるし (笑) , そうして話しているうちに答えが見えてくるというか落ち着くというか。(中略) こないだ母親と電話して言われたことに刺さっているんでちょっと今元気ないんですっていうことも言えるじゃないですか」 (F) , 「私みたいなちょっとその成育環境に問題があったかなっていう (笑) お母さん方って、相談する仕方とか相手が欲しいけどどうしたらいいのかわからないっていうところがおそらくみなさん思っているところだと思うんですけど」 (A) , 「家族以外に話したのはその同じような体験のあった、はい、話し込んだことはありました」 (A) , 「話せる母親はあまりいないけど、やっぱりそういう場があって同じような人の。元気なお母さんが入るとよくない。そーだよーって言うってくれる人、いつでも行ける場所があればいいのにない。保育園の方がお迎えの時に会ったりして話せたけど小学校になるとなくなる。学童も旦那が迎えに行ってくれているし、子どもをほったらかしにして駐車場とかで話さないでくださいと言われてるので話ができない。保育園でもない、友達でもない、相談でもない、そういう子育てのことを話す、もし、場所があったり、そういうのが何かあったら教えていただきたいなと思います。もしこういうのがあるんですけど来てみませんかっていうのがあったら教えてもらいたいな。グループでもこういう場でもいいし、あったらどんどん参加したい」 (J) , 「幼なじみの子がやっぱり心療内科に通ってカウンセリングを重ねることで元気になったので、同じような問題だろうと思うので、その子のように本当に体調崩すほどではなくなんとなく日常をこなせている私ですが行った方がいいのかなと。あったら、話す機会を持つことで苦しい気持ちが楽になるのだったら助けを借りた方がいいのかな。自分が安定していることで子どもとのやり取りも安定して穏やかになるのでそのために

も必要かなあと。あったらやった方がいいかなと言う気持ちには傾いている。あとは親子関係とかに特化したものがなかなか少ないので、そういう心療内科とかって、よくアルコール依存症とかそういうところを掲げているのは多いんですけど、親子問題ってどうやって相談したらいいのか、実際、中でどういうふうにカウンセリングの計画とか進んでいくのかなあというサンプルとか見たいなっていう。そういうことがわかったうえでちょっと決めたいんですけどあまり情報がないなあと思っているんですけど」(A)，「なんとか踏みとどまっている一見普通そうに見えるけどほんとはなんとか踏みとどまっているっていうところの人が実はっていう話ができる、で、そこで一步踏み出して介入してもらえると本当はちょっと、んー、いいですね。最近、病気で、未病って言葉がありますけど、その未病の段階で何かお互いにアプローチしあえたらすごくいいなあって思って」(A)，「育児相談はよくあるんですけど、自分とパートナーと、夫との関係を相談する場所がいまいちよくわからない。育児相談はもう山のようにあるんですけど、女性相談というのはなんかあんまり、時間が決まっていたりとか曜日が決まっていたりとかなんかなんか気軽に電話できるところがない」(D)，「今話していてふと思いましたこの機会がなかったら忘れていたと思う。話すこと大事ですね。自分のことも聴いてくれて認めてくれて、カウンセリングっていうのがものすごく大事なんだなと思います。先生だとお薬どう？って聞かれて変わらないですってすぐ終わっちゃう感じだけど、カウンセリングは45分かな、今は2か月に1回とかなんですけど、こういう風に思うということに対してじゃあこうしてみようかっていうように言ってくれるので大事だなと。もう10何年ですね、言え、ああまたそのくせねえって感じになっています」(J)，「かかっている心理士さんがすごくいいから、お金はかかるけどやっぱりすごく必要とされている職業というか、いい方に巡り合ったら子どもも親もすごく変わるっていうふうに思う」(F)，「やっぱり薬飲んでないと、ずっと飲んでいるからわからないんですけど、飲んでないとやっぱりなんか変化あるんじゃないかと思うと、やっぱり飲んでの方がいいってことですよね、うーん、前よりは。まだまだですけど」(K)。

〈身近な支援者の存在に気づく〉の定義は「自分を支えてくれる身近な支援者の存在に気づくこと」である。「主人の母親、おばあちゃんのほうも何かと気にかけてくださって、週に1回ちょっと子どもを放課後、習い事に連れて行ってくれるとか、夕食まで一緒に食べさせてあげちゃうからいいわよとか言ってくれてすごく力になってくれるのが



いいなあってすごくありがたい」(A)、「特に長女と、長女がガス抜きする、あの、もう…わがママをすごく言うとか、感情をむき出しにするので、あの、そういうことが、まあちょっと怒られますけど、出来る場があってよかったなと思います。だからそれが、あのー…そうですね。私がおばあちゃんから受けたことを、娘が義理の母に同じようにしているので、そういう人がやっぱり近くにいて、まあ距離的には遠いんですけど、親族の中にいてくれるって言うことがすごくありがたい」(D)、「(夫は)私の状態もわかってくれているし、サポートはすごくしてくれます。全然、あのいやなところない」(J)、「主人に話している。否定しない、こうなんじゃないの、えーとなるけど、間違ったことは言っていない。聞けることを言ってくれる」(J)。

【人に頼ることの大切さの認識】について、本調査の対象者は、子どもが生まれてから何らかの相談、サポートを受けていた母親であった。そして、今後についても、社会的サポートや個別の相談を積極的に利用しようとしている様子がみられた。自分のことを話すことの大切さ、カウンセリングの必要性をインタビュー中に改めて気づいたと語った母親もいた。人に頼ることの大切さの再認識と言えるだろう。それは、[ネガティブな被養育経験とおりにあいをつける]ために重要なものであることが示唆された。

子どもが幼児期から児童期になったことによって、[ネガティブな被養育経験とおりにあいをつける]方向へ進む要因の一つとして、子どもの年齢があがることによって言葉でのコミュニケーションがとれるようになり、理解しやすくなったことが考えられる。また、〈親と距離を取る〉〈親の態度を仕方がなかったことと解釈する〉ことで【親と心理的な距離を保つ】ことの重要性が示された。さらに、〈子どもに関する社会的サポートの活用〉が積極的に行われている様子が語られた。母親自身の心理面の支えとしての〈専門家への相談を求める〉語りはほとんどの母親からあり、実際に利用している状況もあった。幼児期から児童期になり、社会的サポートが受けづらくなっていることについても語られており、子どもの年齢があがることによって多様化する困難感への支援の提供が求められていると考えられる。

## 第4節 まとめ

子どもが幼児期のときの困難感の特徴は、2歳児における第一次反抗期や子どもが言葉をうまく操ることができず、考えていることが読み取りにくいことなどであったが、

子どもが児童期になると、子どもが意志を持つ一個の人物として自分と対峙してくることから、良好な関係性を築くことに気持ちを砕いている様子が語られた。幼少期に多く語られていた〈フラッシュバック〉については語られることはなく、減ってきたという語りもあった。ネガティブな被養育経験によって生じる〈フラッシュバック〉は、感覚的なものであると考えられ、言語の世界へと子どもが成長することに伴って軽減していく可能性が示唆された。

ネガティブな被養育経験の影響は、【自己肯定感の低さ】【対人面の困難さ】に示されるような[自分の人格形成への影響]が作用していることが示された。それが、ベースとなって、〈自分の性格を被養育経験に関連づけて考える〉〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉〈自分のネガティブな態度の子どもへの影響〉〈思うようにならない子どもとの関係〉などに影響を及ぼしていると考えられる。【対人面の困難さ】の、〈他者との関係を築くことのむずかしさ〉として、子育て環境においては重要な位置づけとなる子育て仲間との関係性を築くことに困難さを感じている様子がほとんどの母親から語られた。初めての経験となることが多い子育てにおいて、気軽に相談する相手がいないというのは育児困難感につながる要因となると考えられる。〈夫との関係のむずかしさ〉も語られた。【対人面の困難さ】によつての困り感が大きいのは夫との関係性であった。夫が依存対象として機能している母親もいたが、身近な他人としての夫は、親との関係性がうまく機能していなかった母親たちにとってはむずかしい業であったと考えられる。また、〈思うようにならない子どもとの関係〉に表れているように、子どもが自分の付属として側にいた幼児期と異なり、成長して小学生になり、一人の人間として向かい合う関係になったことにより、良好な関係性の構築に苦慮している様子も語られた。内的ワーキングモデルによって、対人面のあり方が規定されると言われているが、安定型でない愛着スタイルの母親の対人面のあり方が、他者の一人として、子どもとの関係性にも困難さを示していると考えられる。また、自分がケアされてこなかったことによって、どう子どもに対応したらいいのかわからないという葛藤も、子どもが幼児期から児童期になっても継続することが示された。

〈子どもの問題行動への対応のむずかしさ〉〈子どもが思春期になったときの関わり方への不安〉など、これからの子育てに関するむずかしさや不安は、子どもが学校という社会に出たことによって形を変えていった。ひとりで学校という社会に適応していくことと勉強についていくという新たな課題は、母親にとって重圧となっていると考えら

れる。【自信の持てない子育て】という漠然とした幼児期の悩みが現実のものとなって大きな不安の種になっていると考えられる。「学校で何があったのかわからない」「友達関係やいじめのことが心配」「学校のことを何も話してくれない」「何かあったんでしょと聞いても何もないと、隠すことが多く、抱え込むことが多くなった」など、普通の母親の悩みと同じようであるが、ネガティブな被養育経験のある母親は、〈自己肯定感が低い〉〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉があるなど、被害的に受け取る可能性が高いと考えられる。すでに子どもとの関係性に不安を感じている母親にとって、子どもの見えない生活の部分に対して過度の不安を感じることもあると考えられる。

〈子どもの成長によって楽になったこと〉は、子どもの泣きやかんしゃくといった理由が理解しにくいものへの対応が求められた幼児期より、子どもと言葉でのやりとりが可能になったことは、〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉〈自分のネガティブな態度の子どもへの影響〉を感じている母親にとって、子どもの理解に関してはしやすくなったと感じると考えられる。その一方で、児童期になったことによって〈思うようにならない子どもとの関係〉に悩むこととなる。

【親と心理的な距離を保つ】ことは、実際に〈親と距離を取る〉ことをした母親と〈親の態度を仕方がなかったことと解釈〉して、実際には親との交流がある母親がいた。親との関わりを継続しているが、親への嫌悪感情を抱える様子を次のように語っている。

「父親と母親と会うとすごく疲れたんですよ。で実際、会ったり電話で話したりすると自分からかけられなくなるくらいかなりまいっちゃうんですよ（笑）。今でもそうなんです。だから自分で電話かけられるようになると、あっ、元気になったなって思うんです」（F）、「母と出かけたりしても最初のうちはいいけどだんだんイライラしてきちゃったりするので」（J）。このような母親は、親への嫌悪感情とともに、親への依存感情が存在していると考えられる。親に嫌悪感情を抱きながらも依存感情があるというアンビバレントな状態によって苦しんでいる可能性もあると考えられる。

〈子どもに関する社会的サポートの利用〉については、幼児期より、社会的サポートが薄くなったとどの母親も語っており、育児困難感は複雑さを増していく中、サポートは先細りになっている現状が浮き彫りになった。また、自分を見つめること、自分について考えることの必要性を感じている母親の語りは多く、子育ての視点とともに、継続的に母親を支える支援が必要であることを示唆している。また、母親 J は語りの中で、安心して自分の不安を語れるグループがあったら参加したいと述べていた。「子育てをす

る母親のつらさを受けとめる」「孤立無援感に共感する」「相互受容」などが重視されるハイリスクの親の相互援助グループ（鷺山，2016a）なども有効であると考えられる。

## 第7章 研究5 ネガティブな被養育経験を持つ母親のパーソナリティと介入の検討

### 第1節 目的

ネガティブな被養育経験によって育児困難感を示す母親のパーソナリティの傾向を検討すること、および、介入によって、ネガティブな被養育経験の影響がどのように変容していくのかについて検討することを目的とする。それにより、ネガティブな被養育経験の影響によって育児困難感を示す母親への支援・介入の視点を提案することを目的とする。

### 第2節 方法

#### 2-1 調査対象

研究4における縦断インタビュー調査の対象者のうち、ネガティブな被養育経験あり群の母親3名（M, N, O）とした。

#### 2-2 調査時期

2016年3月下旬～2016年11月上旬

#### 2-3 手続き

調査対象者3名に対し、ロールシャッハ・テスト、および精研式文章完成法テスト（以下SCT）を実施した。ロールシャッハ・テストは、実施済みの1名を除き、筆者と臨床の専門家が1名ずつ実施、解釈は包括システムにて行った。解釈と所見作成については、筆者と臨床心理の専門家がそれぞれ行い、協議して決定した。さらに、その結果と所見について、ロールシャッハ・テスト包括システムのスーパーヴァイザーに検討を依頼、スーパーヴァイズを受けて修正し、再考した。SCTは対象者に対して検査用紙を渡し、記入後筆者に手渡し、または郵送してもらった。

ロールシャッハ・テストの施行とそのコーディング、解釈において、世界的にはロールシャッハ・テストの主流となっている包括システムを採用した。包括システムでは、結果を解釈する際に、テストデータのコーディング結果を、8つのクラスターと6つの特殊指標で見えていく。8つのクラスターとは、統制とストレス耐性（Control & Stress

Tolerance) , 状況関連ストレス (Situation Related Stress) , 感情の特徴 (Affective Features) , 情報処理過程 (Information Processing) , 認知的媒介 (Mediation) , 思考 (Ideation) , 自己知覚 (Self Perception) , 対人知覚 (Interpersonal Perception) である。特殊指標とは、知覚と思考の指標 (PTI) , 抑うつ指標 (DEPI) , 対処力不全指標 (CDI) , 自殺の可能性指標 (S-CON) , 警戒心過剰指標 (HVI) , 強迫的スタイル指標 (OBS) である。本研究においては、調査対象者 3 名における、各クラスターにある重要な変数の特徴的な部分と特殊指標に注目して検討し、その意味を解釈した。

さらに、母親 M に対して継続的に心理療法を実施した。2 回目の縦断インタビューの際に、現在の母親の困難感を支えるための継続的な心理療法の開始を提案、研究の趣旨を説明し、本人の合意を得て、精神分析的な心理療法を開始した。場所は心理相談室の面接室を使用、隔週 1 回 50 分、90 度対面式であった。面接後にはスーパーヴィジョンを受け、理解を深めた。

また、母親 N に対して、単発の面接を行った。2 回目の縦断インタビューの際に、ライフライン法による作図を依頼し送付してもらった。ライフライン法とは、個人の経験の概略を、対象者に線で表わしてもらうものである (サトウ, 2012) 。検査実施に続いて面接の機会を持ちたい旨を説明し、了承を得た。面接では、ライフライン法による図を基に、ライフストーリーを振り返るための語りを引き出す面接を実施した。場所は、レンタルルームを使用、時間は 80 分であった。

#### 2-4 倫理的配慮

検査結果については、守秘義務の保障、参加拒否権利の保障、個人を特定されない保障を確認し、2 名については文書を交わし、1 名については主治医の許可を得た。検査結果については、本人が特定されないよう、具体的な背景や状況の記述は控えた。

### 第 3 節 結果と考察

母親 M, N, O, について、ロールシャッハ・テストの結果について包括システムによる分析・解釈を行った。SCT の結果については、ロールシャッハ・テストの解釈時の参考のみに使用した。介入について、心理療法と単発の面接の経過と変容について考察した。まとめとして、ネガティブな被養育経験を有する母親のパーソナリティの特徴を捉え、介入に関する考察を述べた。なお、検査結果はその時の状況によって左右され

る可能性があるため、解釈を結果として扱う際は慎重に行った。

### 3-1 母親 M のロールシャッハ・テスト結果の検討

反応数=16

S-CON=7, DEPI=5

AdjD= - 2      EA=5.5      SumC' =6

➡慢性的な刺激過負荷状態，利用可能な資質が限られている。感情を内に抱え込みすぎて苦痛を感じている。

自己中心性指標=0.38 (Fr=1)

➡外界に不信感，被害的，自尊感情の低さがある。

COP=0 AG=1 GHR : PHR=0 : 2 H-Cort=1 PureH=0 T=0

➡他者とのポジティブな相互関係を期待しない，情緒的つながりを持ちにくい。

知性化指標=4 Wsum6=10

➡感情を知性的に扱う，防衛的，誤った判断が生じやすい，他者との親密さを期待しない。

W : M=8 : 2 Zd=+4.0

➡自分の能力を超えた，より多くのことを達成しようと努力している。

P=1, WDA%=0.92, X-%=0.19

➡明確な状況においても個性的な解釈，平凡が理解できない可能性もある。

DEPI=5 CDI=3 S=3 CF+C=3

➡感情の混乱が生じやすい，怒りを抱え込んでいる。

#### < 特殊指標 >

自己破壊についてのとらわれがある危険性がある。抑うつ指標にも該当しており，うつのは度は中度である。

#### < 統制 >

慢性的に刺激過負荷状態にあると考えられ，統制が困難になりやすく，構造化されていない場や，ストレスのもとでは統制力の低下が生じやすい。利用可能な資質はやや限られていると思われる。また，心に何らかの苦痛を感じており，本当は外に出したい感情を内に抱え込み過ぎていると思われる。自己犠牲的で，ぎりぎりのところでがんばっ

ている状況があり、現在の環境的というよりも内的なもの、長年にわたるものを抱え込んでいると思われる。理不尽なことに対する苦痛を抱え込むが、少ない資源で向き合っている。無理していることに自覚がなく、耐えるのは当たり前と考えている。

#### <自己知覚>

外界に対する不信感を持ちやすいと思われる。人よりも肥大した自己価値観を持っている可能性があり、意味ある対人関係を築き、維持することに困難が生じることもあると思われる。自己イメージや自己評価にまつわる深刻な葛藤を示しており、気分の変動が生じる可能性は大きく、行動面にもその影響があると思われる。高く価値づけられた自己イメージを下げるような出来事が最近起こった可能性も考えられる。自己イメージを形成する際に、他者からの攻撃性が影響している可能性や、他者に対して警戒心から攻撃的な自己イメージを持っている可能性があると思われる。

#### <対人知覚>

他者と親密な情緒的繋がりを結んだり維持することに慎重になる傾向があり、他者とのポジティブな相互関係が日常的に生じることを期待していないと思われる。

#### <思考>

被験者の対処スタイルは不定形であり、思考活動には一貫性がない。間違った判断をしやすく、また前にした判断を翻しやすい。環境に対する否定的で信頼感のない態度と関連していると思われる。そのため、親密さを期待せず、他者が親密さを示すふるまいをすると混乱したり、疑い深くなると思われる。知性化指標が高く、普通の人よりも頻繁に感情を知性的に扱おうとする傾向がある。

#### <情報処理>

情報処理に対する努力は大抵の人よりやや多いと思われ、自分の能力を超えたより多くのことを達成しようと努力していると思われる。情報の取り込み過剰をしており、スキニングに多くの努力とエネルギーを費やしていると思われるが情報処理の質は良い。

#### <認知的媒介>

認知的媒介は常に状況に対して適切であると思われるが、より詳細な状況に対して認知的媒介は損なわれると思われ、単純で明確な状況においても、個性的な反応が生じると思われる。親の養育を取り入れて出現する平凡反応が少ない。



### <感情>

感情の大きな混乱を頻繁に生じかねない性質があると思われる。スタイルは不定型であり、感情の表出が不規則であるため、この怒りは内に溜め込むこともあれば、突然表出する可能性もあると思われる、感情を刺激する状況に混乱することもあると考えられる。また、強い怒りを抱えていると思われる。

### <総合所見>

慢性的に周囲からの刺激が多く、負荷のかかっている状態にあり、ストレス状況下では統制力に低下が生じている。また、外に出せず内に抱え込んでいる何らかの苦痛を感じていて、思い詰めている可能性もあると思われるので、苦痛を外に出すような、話す時間をとる必要性があると思われる。自己イメージ、自己評価に関する葛藤があり、気分の変動が生じる可能性があると考えられる。他者と親密な情緒的繋がりを結んだり維持することに慎重になったり、他者とのポジティブな相互関係が日常的に生じることを期待していないと思われる。他者が親密な振る舞いを示すと疑い深くなり、感情を知性的に扱って防衛する傾向がある。感情の扱いにおいては混乱を生じさせる傾向もあるが、統制された環境では、適切に感情表現をしていくことが出来ると考えられる。また、強い怒りを慢性的に抱えており、こうした怒りは内に溜め込んでしまうこともあれば、突然表出されることもあると考えられる。

## 3-2 母親Nのロールシャッハ・テスト結果の検討

反応数=15,

CDI=5 S-Con=7

L=0.75 EA=3.0 P=1 EB=2 : 1.0 D= - 1 AdjD= - 1

➡人格構造は未熟、対人面で問題が生じやすい。ストレスによって慢性的に心理機能に支障をきたしている。

CDI=5 Food=2 COP=1 GHR : PHR=1 : 1 H-Cort=2 PureH=1 T=0

➡社会的スキルが低く、対人関係で困難を抱える。多くの依存的行動が見られる。他者との情緒的なつながりを結んだり、維持するのに慎重である。

### <特殊指標>

対処力不全指標が陽性であり、現在抱える課題への対処が難しい状況である。

#### <統制>

人格構造は期待されるよりも未熟で、日常生活で必要とされることへの対処も難しくなる場合があり、対人関係の面で問題が生じやすい。また、ストレスによって慢性的に心理機能に支障をきたしてしまいやすいことが考えられる。

#### <対人知覚>

社会的なスキルが乏しく、特に対人関係の面では頻繁に困難にぶつかってしまうことが予想される。親密な対人関係や相手と触れ合うことが必要とされるような場面には非常に用心深いと思われる。

#### <自己知覚>

自己へは関心を向けており、日常的に自己検閲をしていると思われる。対処スタイルは不定型で、意思決定や問題解決の際に一貫性がなく、感情によって混乱しやすく、思考に強い影響を与えるが、感情刺激を避ける傾向が非常に強いと考えられる。

#### <感情>

自分が思っていることや感じていることがよくわかっていない。葛藤することがむずかしい、深めていけない。感情の表現が乏しく貧弱であり、感情的な刺激に反応する資質が乏しいと考えられる。

#### <情報処理過程>

情報処理は効率よく行なう力はあると思われるが、現在の自分の能力を超えたより多くのことを達成しようと努力していると考えられる。情報の取り込み不足であるため、重大な部分や手がかりを見逃すことが多くなると思われる。部分で見ることができず、全部を抱え込む傾向にある。

#### <認知的媒介>

単純で明確に定義された状況でも、非慣習的でより個性的な反応が生じる、独自の判断基準をもっている。しかし、状況に対し独特ではあっても適切であることが考えられる。

#### <思考>

対処スタイルは不定型であり、問題解決の失敗から学ぶことが少なく、その結果望ましい効果的な解決に至るまでに手間取ることが多いと考えられる。また、思考の構えや価値観はかなり凝り固まっていて、変わりにくいと推察される。

#### <総合所見>

対人関係の面で問題が生じやすく、ストレスによって慢性的に心理機能に支障をきたしてしまいやすいことが考えられる。他者との関係は表面的で用心深く、関係を維持することが難しく、人と関わることにに対して不器用である。また、他者からの指示やサポートをあてにし、依存的である。不平不満が何によるものか関係づけられず、問題を掘り下げて言語化することが難しく、身体化してしまう。自分の子どもと母親との関係に目がいき、内面の母との関係が解決していない可能性がある。自己中心性指標が低いいため、自己不確実感があり、自分のことがよくわからない傾向がある。考えがまとまらず、乱れやすい。育てられ方が影響している可能性がある。ポジティブなことを自己イメージにつなげていくことが有効である。

### 3-3 母親 O のロールシャッハ・テスト結果の検討

反応数=21

S-Con=7 DEPI=5 PTI=3 CDI=3 HVI= (陽性)

L=0.24 EA=7.5 P=4 EB=5 : 2.5 D= - 3 AdjD= - 1 H-Cont=7

- ➡慢性的に刺激過負荷状態、思考・感情が混乱、ストレスへの対処力が弱くなっている。傷つき体験やネガティブな感情を抱え込んでいる。
- ➡ストレスが思考と感情に深刻な影響を与えている。心理機能に支障をきたしやすい。
- ➡警戒心過剰であり、母親や周りの人の顔色を伺いながら生活していた成育歴に影響を受けていると考えられる。
- ➡自己イメージに混乱、歪んだ見解から自己を否定的に捉えている可能性がある。
- ➡他者との関係は過度に慎重で他者理解も深まっていない。受動的な役割を好む。ネガティブな感情を出さないようにしており、自身の感情を扱い切れていない。

#### <特殊指標>

警戒心過剰指標が陽性であり、うつの程度は軽度であるが抑うつ指標が陽性であった。

#### <統制>

慢性的に刺激過負荷状態にあると考えられる。思考のみならず、感情も混乱しており、統制力を欠いた状態にあり、またストレスに効果的に対処する力は弱くなっている。そのため、構造化されていない場面では、統制が困難になりやすく、ストレスのも

とでは心理機能に支障が生じる可能性がある。感情を内に抱え込み過ぎているようである。自分のネガティブな感情を安心して人に伝えることが困難であるため、傷つき体験やネガティブな感情を抱え込んでいると考えられる。不安、悲哀、精神的緊張、心配などのような不快な状態を慢性的に感じており、身体化症状が出てもおかしくない。

#### <状況ストレス>

ストレス体験が相当なものである。ストレスが思考と感情の両方に影響を与えていると思われる。特に、無力感に影響を与えており、心配、不安、悲哀などが現れたり混乱を引き起こされたりする可能性がある。また、非常に統制力を失いやすいと考えられ、思考と行動、もしくはどちらか一方が衝動的になる可能性が高い。きちんと構造化された状況以外では、適切にあるいは効果的に機能することができていないと考えられる。状況ストレスによって心理的複雑さが相当増大している。複雑さが増すと、心理機能に支障をきたしやすい。

#### <思考>

意思決定の際、感情に影響されない思考型であるが、外界に対して警戒心過剰で悲観的構えをもっていることが思考に強い影響をもたらしている。良い存在でありたい自分にネガティブな部分があることを受け入れるのに恐怖を感じている。

#### <情報処理過程>

警戒心過剰である。母親や周りの人の顔色を伺いながら生活していた成育歴に影響を受けていると考えられる。過剰警戒のために細部に対する並はずれた関心が助長され、結果として全体に関心がいきわたらなくなる。また、物事を切り離してみることができずに、関連付けてみようとするため、自分で事態を複雑にしているようである。自分のネガティブなものを見せないために、自分の能力を超えた、より多くのことを達成しようと努力しているようであるが、このことが悪循環となり、目標を達成できない可能性が増し、失敗が増える。その結果、欲求不満や不全感を経験することも多い。

#### <認知的媒介>

認知的媒介の機能がひどく損なわれており、不適応の問題を抱えていると思われる。他者には知られたくないことを隠そうとすることへのとらわれがあるため、それが認知的混乱の一因となっている可能性がある。また、親密欲求が喚起されるようなことがあると、それを否認しようとする傾向があるのかもしれない。時には認知操作は精神病用の状態にある人に見られるのと同程度の深刻な破綻をきたす。

### <感情>

問題解決や意思決定の際には思考型のスタイルをよく使うと考えられるが、感情が直接的に思考に入り込み影響を及ぼすことも多く、感情が刺激される状況では混乱してしまうと考えられる。通常では感じられないようなかなりの苛立ちを経験していると考えられ、感情の混乱や身体化症状を起こしやすくなっている。そして、相当な怒りの感情を抱えており、この怒りは意思決定や対処行動にも影響をもたらす。また、感情の抑制が強いため、怒りはわずかに、しかも間接的にしか表に出ず、ただ内にくすぶらすだけかもしれない。かなりの怒りを抱えているため、心理的複雑さが高まると感情が行動の整合性や安定性に致命的な影響を及ぼす可能性も高くなる。

### <自己知覚>

警戒心過剰であり、外界に不信を持ちやすい。自身を無傷で完全なままに保つことに関心を寄せている。困難や失敗の原因を外部にあると考えてしまいやすい。自己検閲行動は普通ではないほど行われており、これにより自分のネガティブな部分を見てしんどくなっているようである。また、抽象的な自己概念を持つことが困難であり、具体的な身体に関心が向けられている。自分自身について理解が未熟なため、自己イメージや自己評価が主として、想像や現実体験の歪曲に基づいて出来上がっている。このことにより、意思決定や行動に悪い影響が及んだり、他者との関係で障害が生じている可能性がある。自己イメージの混乱や歪んだ見解から自己を否定的に捉えている可能性がある。

### <対人知覚>

警戒心過剰のため、他者との関係では過度に慎重で用心深くなりがちであるために、他者理解が深まっていない。親密な関係になることを期待せず、他者が親しげなそぶりを示しても非常に疑い深くなる。対人関係では受動的な役割を好み、これは意思決定の責任をとるのを回避するためと考えられるが、この受動的なスタイルによって苛立ちを増やしているようである。日頃の行動も強引あるいは攻撃的であることが多く、対人場面での不安感に対する防衛手段とも考えられるが、単にこれまで身に付けた他者との関係の持ち方の表れである可能性もある。

### <総合所見>

他者理解が不十分になっている。人に接していても安心感がなく、傷つけられるのではないかと思うため、感情を抑え込んでいる。周りを気にするあまり、自分のネガティブな感情を出さないようにしてきたため、自身の感情をくみ取る経験が不足し、自分で

扱い切れていない。ネガティブな感情は感情体験にまで達しておらず、漠然と苛立ちや不安を感じているだけである。これらを考慮した上で、安心して自分のネガティブな感情を出せる場の提供と、ネガティブな感情をくみ取り、自己理解を助ける人が必要である。また、他者に対する理解が不十分なため、現実在即した他者イメージを持てるように、本人の負担にならない程度に人が集う場所に行けるとよい。たとえば、自由参加の育児サークルのような場で、第2、第3の子育てサポートをしてくれるような存在を見つけられると本人の負担も軽減されると考えられる。現在は大変な状態にあるので世間一般の、子どもは母親が育てるもの、という考えにとらわれず、利用できる援助は積極的に利用していくのが良い。そして、対人関係が受け身なので、相手に何をしてほしいのか具体的に伝えられるようにしていくとよいと考えられる。

### 3-4 心理療法の経過

面接開始時、母親 M（以下 M）は 30 代後半、夫と小学校低学年の娘と暮らし、常勤で働いている。幼少期は、会社員の父親と専業主婦の母親と妹、母親の養父とその後妻の 6 人で暮らしていた。「父親は機嫌が悪いと急に怒鳴ったり蹴り飛ばしたり」「母親は自分の思い通りにならないと気が済まず、あなたは黙って親の言うことを聞いてればいいのっていう感じで怒鳴ったり、身体を激しく揺さぶったり、私の話を聞き入れてくれることはなかった」と被虐待経験を語った。M は、優しい祖父母を慕っていたが、祖父が死去すると両親は祖母を追い出し、そのまま音信不通となる。大学院修了後、仕事上で知り合った夫と結婚、娘を出産した。実父の死後、自ら実家と距離を置き、母親、妹と音信不通になっている。

主訴は、夫との関係がうまくいかず苦しいというものであった。幼少期の両親との辛い経験によって、自尊感情の低下、他者への信頼感が持てない等が影響し、夫との関係性にも困難を抱えている状態であると見立て、幼少期からの親との葛藤を整理し、夫との関係性を捉えなおし、精神的な安定を図ることを目標に精神分析的心理療法を開始することとなった。治療構造は隔週 1 回 50 分、90 度対面法、心理オフィス内面接室にて開始した。以下、経過概要である。「」は M の言葉、〈 〉はセラピストの言葉である。

第一期（開始から 6 か月経過）においては、毎回話す内容を整理して持って来ることが続き、言葉は硬く、情緒に触れることは無意識的に避けられていた。M は、行儀よく振る舞い、セラピストの前でも過剰適応しているように感じられた。「主人とのことなん

ですが、子どもに対する考え方に意見のズレがありまして。最初のうちはいつかおりあいがついていくのかなあって思っていたんですが、そういう感じでもなく、平行線というか、問題意識にズレがあって、それがなんか苦しいです。毎日どう話をしていこうかと考えているんですが、向こうは言ったことはすぐに忘れてしまうので。主人はなんか、発達障害のようなところがあって。子どもも発達障害の傾向があって、私も普通と違ったり、きっとその傾向があるのではないかと思うんですが」と夫と娘を発達障害であるとした。また、「私の許容範囲が狭いのかなと思うんですが、きっとそれは成育歴に関係しているのかなと思います。人のせいにばかりしていてもいけないと思うので私も変えるところは変えていこうと思っているんですが」と自分が変わる必要性を語りながらも、夫が検査を受けて発達障害であることを同定したいと語った。

第二期（開始後 7 か月から 1 年）は、他者との関係性のむずかしさの原因が自分にあると言いながらも自分を正当化する理論を並べているように感じられた。熟語を使用した語りの硬さは続いていた。1 年で終わりにした方がいいのではないかという迷いを抱いていたクライアントであったが、継続を決意してからは安定していった。

第三期（1 年から 1 年 6 か月）では、心理療法の信頼感から、自分の成育歴に触れ、セラピストとともに内省していくことを進められるようになっていった。情緒にも少しずつ触れられるようになった。

第四期（1 年 6 か月から 2 年）においては、心理療法に支えられていると感じている様子が言動に表れていた。持ってきた話題について深めたいという気持ちも持っており、考えながら語る様子も見られた。知性化によって処理する様子はまだ見られ、今後の課題を挙げながら心理療法の継続意志を語った。

第五期（2 年から 2 年 6 か月）では、セラピストの解釈について、自分なりに深めていく様子が見られた。心理療法を自分の生活の一部として位置付けているように感じられた。

第六期（2 年 6 か月から 3 年）では、自分を肯定できるようになるとともに、自分の弱さを認められるようになった。幼少期を振り返り、「あのときの自分には、そんなに気にしなくていいよと言ってあげたい」<こうしてほしかったことをお子さんにしてあげているのかもしれませんがね>「反面教師です」<お子さんの成長は、M さんのその年齢の自分と親を振り返る歴史なのかもしれませんがね>「そうですね」涙目になる。「でも、娘は自分ではないので、気を付けないと」<親御さんが価値観を押し付けてきたように、

Mさんは自分の価値観を押し付けてはいけないと思っているんですね>「そうできているかわからないけど気を付けている」と自信なさげに語った。

### 3-5 単回の面接による介入

母親 N にあらかじめ、ライフライン法に従って、自分の状態や気持ちの変動を時系列に描いてもらった。上方がよい状態・気持ち、下方がよくない状態・気持ちとしてラインを描き、きっかけとなったライフイベントを簡単に記入してもらった。それをもとに、幼少期から現在までの出来事を確認しながら、その時の気持ちを聴いた。ひとつひとつ考えながら語っていた。最後に、第一子妊娠期の母親との葛藤に対してのとらわれを意識化し、仕事にこだわっていることについて言い及ぶと、母親の影響であると気づいたとの語りがあった。

## 第4節 まとめと考察

3名の母親の共通の特徴として、自己肯定感・自尊感情の低さがロールシャッハ・テストの結果からも読み取ることができた。警戒心過剰の傾向もあり、子ども時代に親の表情を伺って生活していたという成育歴とも合致する結果であった。また、3名とも、対人面の困難さが示されていた。母親 M は他者への信頼感の低さから、母親 N は社会的スキルの乏しさから、母親 O は警戒心過剰であることから、対人関係について葛藤と困難さを抱えていると考えられる。研究 3、研究 4 で示された、ネガティブな被養育経験の【自分の人格形成への影響】である〈自己肯定感の低さ〉と〈対人面の困難さ〉について、ロールシャッハ・テストの結果においても示された。また、3名の母親は、不安定な愛着スタイルであり、愛着スタイルとの関連も示唆された。重なるストレスや過度な負荷によって耐えがたい苦痛を抱える可能性があるため、周囲の、あるいは専門家のサポートが必要であろう。また、母親 M は知性化での処理を多発しており、研究 3 の結果から導き出された〈頭で考える子育て〉、防衛としての知性化を駆使している可能性があることが示唆された。支援のあり方としては、対人面に困難さを抱えているため、支援を受け入れやすいよう、援助関係のスムーズな構築が求められる。援助の受け入れについて Steele (1986) は、他者を信頼すること、自分もケアをうけてよいと思えるようになること、人に気を遣われることによって人に気を遣うことを学ぶことが必要であるとしている。他者を信頼することがむずかしいという対人面に困難さを抱える母親には、



話を聞いてもらうこと、共感してもらうこと、自分の不安と一緒に抱えてもらう体験をしながら、他者に頼れるようになることが必要であり、それを支える支援者の存在が重要であると考えられる。

SCTにおいては、はっきりと親への嫌悪感情が表出されていた。それは、自分の過去の被養育経験を客観的に捉えて記述できていると言うことができる。3名の母親とも、自分について省みる必要性を感じているという語りからも、自分について振り返ること、内省する機会を継続的に持つことは有効であると考えられる。

心理療法について考察する。研究3において、【子育ての方略】として〈頭で考える子育て〉の概念が生成された。感覚の情報や情緒を理解する能力は、Bionによってアルファ機能と名付けられた。アルファ機能は感覚印象と情緒を象徴的思考に適した形に変容する。Bionはアルファ機能の一部はコンテイナーとコンテインドの関係性の摂取の結果によって備わるとした(Bion, 1962/1999)。つまり、アルファ機能の一部は情緒的経験にも当てはまると想定している。情緒的経験は情緒的理解によって変容されなければ、依然として投影により排出されるか、「未消化」の記憶として保持されるのみに使用される形式に留まる(Dubinsky, 1997/2017)。Mは、相手が情緒的な反応を示すとそれが何を象徴しているのか理解不能に陥っていた。「理解できない」「わからない」とMは度々発していた。理解できないと語られた子どもの情動を、M自身の情動と解釈してセラピストが返すことによって、子どもへの理解を促す場となったと考えられる。心理療法の中で情緒的経験をしていくことの重要性が示された。

また、研究3において見出された防衛機制である知性化について、現実を知性化で保っている母親の場合には、徐々に気づかせながらほぐしていく必要があることが示された。また、Mは幼少期に、血のつながらない祖父母と同居しており、親にはいい印象がまったくなかったが、優しくしてもらった良い記憶があり、よい対象の内在化につながった可能性がある。研究3において生成された概念〈両親以外の重要他者の存在〉が機能していたと考えられ、その部分がMの健康的な面であるように感じられた。また、夫の母親である義母に対して、Mは信頼を寄せており、「義母がいるからやれている」と語り、セラピストへの陽性転移にも表れていたと考えられる。依存できるよい対象の内在化が欠かせない(Dubinsky, 1997/2017)とあるように、心理療法においてはよい対象の内在化を促すことが重要であることが示唆された。

また、研究3において、子どもが幼児のときは、〈フラッシュバック〉〈子どもへのネ

ガティブな感情」などの概念が生成された。子どもが乳幼児のときは、母親の困難感が増大であると考えられるため、母親自身のパーソナリティに注目するよりも、子どもに対する適切な対応を可能にするために、クライアントの攻撃性を緩和させる依存対象として治療関係が有効であると考えられる。子どもへの理解が進んで関係性が安定したところで、自身のための内省を進めていくことが可能になると考えられる。その際、依存できるよい対象の内在化がひとつの目標となる。本事例においても、自分の成育歴を振り返り、今の自分の思考やあり様についての気づきを促し、不安が生じたときに頼れる安全基地としてセラピストが内在化されていったと考えられる。子育て中の母親が継続的に自分のための時間を持つことは物理的にもむずかしいと考えられるが、それが子どものためになっていると考えることが助けになるかもしれない。子どもの成長と一緒に見守り、保護者を支持し、共感し、保護者の話を傾聴する専門家がいることが保護者の安心につながり、そのことが安定した保護者の子育てにつながる（永末，2016）とあるように、子どもも大切にされ、母親も大切にされる体験を得ることが重要である。それはすなわち、ネガティブな被養育経験の連鎖を克服する母親の心理プロセスそのものであると考えられる。

単発的な面接に関しては、ライフストーリー、ナラティブ・アプローチ、アクティブ・インタビューなどの場合のように、語られる内容自体が語り手と聞き手の相互作用の結果であるという見方、その内容が共同生成的である（木下，2007）とあるように、調査のためのインタビューであっても、話すことによって得られる効果は大きいと考えられる。たった1回の面接でも、相手が主体的に相談を利用できている、と感じられる関係性を作ること（青木，2015）とあるように、対象者が主体的に行う面接は、1回であっても、気づきや内省を促すことが可能であることが示された。子育て相談などの面接は単発であることが多い。支援者は、1回で最大限の効果が得られるよう、相談者のニーズを的確に捉えて、育児困難感の背景要因にも目を向けた見立てによる支援が重要であると考えられる。

## 結論

---

## 第8章 総括

### 第1節 本論文の総合考察

本研究では、一般家庭の幼児を持つ母親を対象として、ネガティブな被養育経験が子育てに及ぼす影響と克服への心理プロセスに着目し、ネガティブな被養育経験を持つ母親の特徴と育児困難感のあり様について検討することを目的とした。さらに、ネガティブな被養育経験を克服する母親の心理プロセスを縦断的に検討し、継続的な支援のあり方について提案することを目的とした。

一般家庭の幼児を持つ母親を対象に、被養育経験の世代間連鎖の特徴を検討し（研究1）、母親の被養育経験と現在の養育態度との世代間連鎖と、「愛着スタイル」「虐待心性」との因果モデルを提示した（研究2）。そして、ネガティブな被養育経験を有する母親にインタビュー調査を行うことにより、ネガティブな被養育経験がどのように子育てに影響を及ぼしているのか、負の世代間連鎖を克服する母親の心理プロセス、および要因を検討した（研究3）。さらに、縦断インタビュー調査を実施し、子どもが児童期になることによって育児困難感がどのように変容していくのかそのプロセスについて、および、ネガティブな被養育経験を持つ母親特有の育児困難感のあり様について検討した（研究4）。また、ネガティブな被養育経験あり群3名のパーソナリティ検査結果の特徴を捉え、1名に対して心理療法を、1名に対して単発的な面接を実施して、支援・介入のあり方について提案することを目的とした（研究5）。

研究1の結果より、ネガティブな被養育経験がある人は、連鎖の有無に関わらず、ネガティブな被養育経験がなく現在も不適切な養育態度がない安定養育群の母親よりも愛着スタイルの安定傾向が有意に低いことが示され、ネガティブな被養育経験のある人は、ない人に比べて、回避傾向が有意に高いことが示された。アンビバレント傾向は、安定養育群が他の群と比べて有意に低いことが示された。ネガティブな被養育経験があった場合、被害的認知が高いと、世代間連鎖が生じる確率が高いことが示された。すなわち、被害的認知は、ネガティブな被養育経験があり、世代間連鎖が生じている母親の特徴であることが示された。

研究2の結果より、母親のネガティブな被養育経験が不安定な愛着スタイルに影響を及ぼし、不安定な愛着スタイルが子育てにおける虐待心性に影響を及ぼし、虐待心性が、不適切な養育態度に影響を及ぼしていることが示された。

研究3および研究4より、ネガティブな被養育経験が、母親の人格形成に影響を及ぼ

し、特有の子育ての辛さが生じていた。負の世代間連鎖を乗り越えようとする方略は、〈反面教師〉〈頭で考える子育て〉であることが示された。負の世代間連鎖の克服への要因として、非臨床群においても、親に代わる重要他者の存在、社会的サポートの享受、自分の過去の経験を振り返り整理して語れる内省力であることが示唆された。

研究 3、研究 4 の結果におけるネガティブな被養育経験を持つ母親特有の育児困難感をまとめる概念を抽出し『育児被害感情』と名付けた。『育児被害感情』とは、育児困難感を示す母親のうち、ネガティブな被養育経験あるいは、被虐待経験を持つ母親特有の育児に対する困難さであり、自分の受けてきた養育に原因があると意識できているところに特徴がある。まず、『育児被害感情』の位置づけを示し、『育児被害感情』を取り上げた経緯について述べ、その後、『育児被害感情』の構造と変容について述べる。さらに、『育児被害感情』の概念と支援の視点について検討する。

『育児被害感情』の位置づけは、育児不安・育児困難感の下位概念であり、背景要因因子でもある。育児不安の研究は 1980 年頃より牧野（1982）によって始められたが、育児ストレス、育児ノイローゼといった用語も同義語として扱われてきた。時代の変遷とともに母親の育児のしづらい状況を表現する用語は変化しているが、その定義は未だ曖昧である（井田，2013）。1993 年より川井を中心として育児不安の概念や構成要素を明らかにする研究が継続され、川井・庄司・千賀・加藤・中村・谷口・恒次・安藤（1999）は、育児不安の中核的要素である育児困難感を 2 つのタイプに分けて定義した。ひとつは、「心配・困惑・不適格感」からなる困難感で、もうひとつは「ネガティブな感情・攻撃衝動性」からくる困難感であった。後者の困難感が、『育児被害感情』につながる困難感であると考えられる。“何で叱っているのかわからないのに叱ってしまう” “子どもに八つ当たりしては反省して落ち込む” “子どもを虐待しているのではないかと思う” “怒りっぽい”（母親）が共通する一方で、“とめどなく叱ってしまう” 衝動性や、“子どものことを許せない” という許容性のなさが特徴的である（川井ほか，1999）。

『育児被害感情』を取り上げた経緯には、被害的認知への着目があった。被害的認知は、虐待する親の特徴として注目されてきた。Steele & Pollock（1968）は、虐待する親の精神病理として、乳幼児の行動についての親の高すぎる期待と要求を挙げており、その背景に子どもについての親の知覚の重大な歪みがあるとしている。また、児童虐待の加害者の要因の中で最も注目すべきは「認知の歪み」であるとされ、これは、子ども

の行動を悪意に解釈する、子どもに非現実的な期待をする、子どもが段階を追って成長することを理解しないなどの認知上の問題である（中谷・中谷，2006）。日本においては、臨床的な事例報告，例えば，子どもの自立的な行動の出現を，自分を否定する行為と受けとる（西澤，1994）や，「赤ちゃんはまるで悪意で攻撃しているかのように何度も叱られる」（渡辺，2000）など，母親の被害的認知が指摘されてきた。最近では，実証研究においても，被害的認知が注目されている。西澤・屋内（2006）は，子どもへの虐待傾向を示す保護者の中でも自身に被虐待経験がある親には子どもに対する被害的な認知が特徴的に見られることを示した。中谷・中谷（2006）は，先行要因として検討した育児ストレスは，認知の歪みをもたすだけでなく，虐待的行為に直接正の影響を及ぼすことを明らかにした。會田・大河原（2014）は，母親の被害的認知のあり群となし群では，母親のネガティブな被養育経験（負情動・身体感覚否定体験）において有意な差が見られることを示した。田口ほか（2014）は，子どもの行動に対する被害的認知と否定的認知を比較し，母親の被虐待経験は，否定的認知には影響しないが，被害的認知に影響を及ぼしていることを明らかにした。本研究においては，研究1，研究2において，ネガティブな被養育経験の世代間連鎖の因果プロセスとして母親の愛着スタイルと虐待心性を取り上げた。ネガティブな被養育経験の連鎖あり群においては，他の群と比較して有意に被害的認知が高かった。また，母親のネガティブな被養育経験が愛着スタイルに影響を及ぼし，母親の不安定な愛着スタイルが虐待心性に影響を及ぼし，虐待心性が現在の不適切な養育態度に影響を及ぼしていることが示された。臨床群でなく，非臨床群においても，被害的認知がネガティブな被養育経験の世代間連鎖の要因のひとつであることが示唆された。

被害的認知は，無意識のうちに不適切な養育を導く要因となっているが，『育児被害感情』は，母親が自分のネガティブな被養育経験によって育児困難感を抱いているということを意識できているところに違いがあると考えられる。すなわち，被害的認知が『育児被害感情』として意識化されることが，ネガティブな被養育経験の世代間連鎖を克服する第一歩と言いうことができる。認知に対しては意識を向けにくい，感情に対しては意識を向けやすいと考えられる。被害的認知は，母親にとって無意識のうちに生じているため，対処することができないものであるが，意識化し，言語化していくうちに『育児被害感情』となっていく，自分の困難感の実態が見えてきて，自らもそれに対処すべき行動を起こすことが可能になってくる。その方略が，〈反面教師〉であり，〈頭で考

える子育て）であると考えられる。支援者は、被害的認知を意識化し、言語化することに手をさしのべる必要があり、その後、『育児被害感情』を支えていく支援につながると考えられる。すなわち、過去の自分の経験を整理して語ることができる内省につながると考えられる。

続いて、『育児被害感情』の構造と変容について述べる。『育児被害感情』の構造は、研究3、研究4によって導かれた概念によって構成された。また、『育児被害感情』の変容について、子どもが幼児期のときの困難感と、児童期の困難感に変容することが縦断的インタビューによって示された。また、幼少期の方が『育児被害感情』が大きいことが示された。それは、子どもが学童期になり、言葉を操るようになったことによって、理解しにくい子どもの様子が理解しやすくなったこと、また、漠然とした不安が顕在化したことにより、困難感が見えやすくなったということ、時間の経過とともに自分の親との関係性の印象が薄くなっていったということがあると考えられる。『育児被害感情』の構造と変容を Figure 17 に示す。

『育児被害感情』は、【自分の人格形成への影響】をベースにして、継続的に、〈反面教師への誓い〉〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉に現れる。幼児期に特徴的な『育児被害感情』は、〈自己コントロールのむずかしさ〉〈フラッシュバック〉〈ひとりでがんばる〉〈子育ての適切なモデルがない〉〈子どもへのネガティブな感情〉として出現する。児童期に特徴的な『育児被害感情』は、〈自分のネガティブな態度の子どもへの影響〉〈思うようにならない子どもとの関係〉〈子どもの問題行動への対応のむずかしさ〉〈子どもが思春期になった時の関わり方への不安〉として出現することが示された。

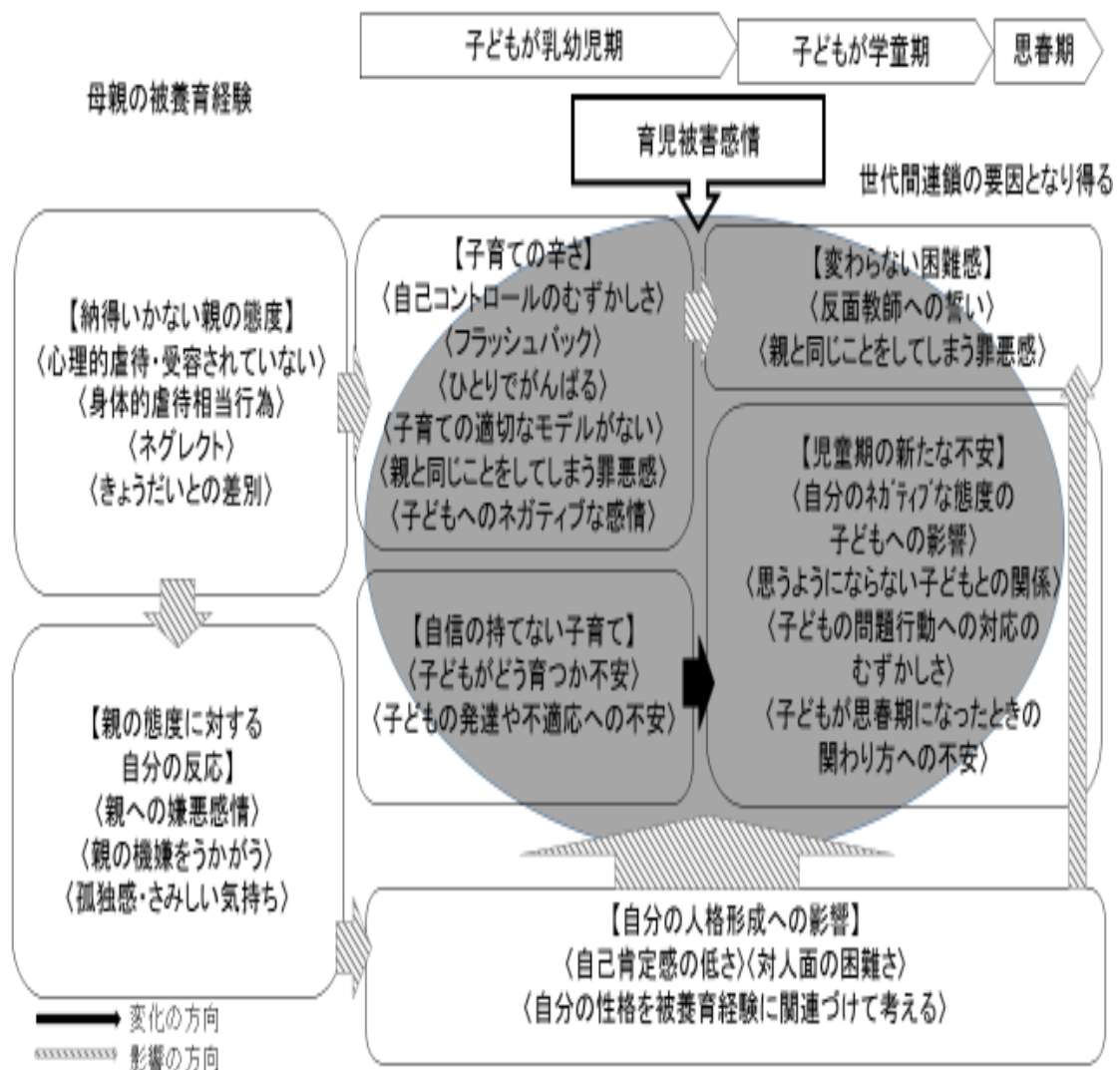


Figure 16 育児被害感情の構造と変容

さらに、『育児被害感情』を構成する概念について検討し、支援の視点について提案する。まず、被害感情を定義する。被害という言葉からは被害妄想が思い起こされる。被害妄想とは、人や組織や未知の力などから、害を加えられ、苦しめられ、悩まされるという妄想（小見山，1975）とあるが、母親が感じる被害とは、未知の力から害を加えられ、苦しめられ、悩まされることと解釈することができる。未知の力とは、自分が初めて向き合う乳児の生きる力と読み替えるとするならば、それは母乳を求めることであり、排泄を訴えることであり、調子が悪い時に訴えることである。乳児の場合それは



泣きによって表現されると考えられる。親が子どもの負情動表出（泣き・ぐずりなど）を受け入れるということは、親子の愛着を形成する上できわめて重要な関わりである。しかしながら、子育て困難が生じている場合には、こどもの泣き・ぐずりを前にして、親自身が不快感情でいっぱいになってしまうという事態が生じている（響・大河原，2014）。被害感情とは、自分に理解不能なものに苦しめられ、悩まされ、自分の力では対処不可能だと感じる陰性感情と定義することができる。

『育児被害感情』は、研究3・研究4の結果より、前述の Figure 17 のように形成され、その構造は、【被害感情】【依存対象の不在】【罪悪感】の3つのカテゴリーに収束されることが考えられる（Figure 18）。

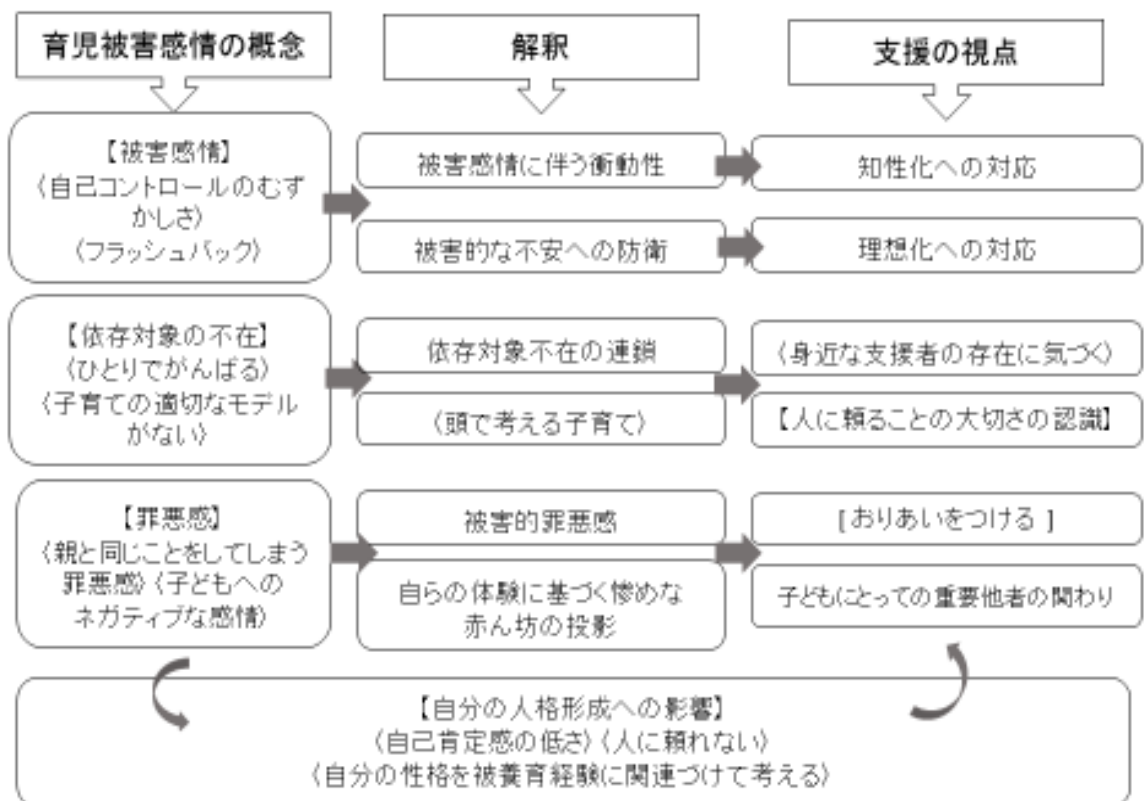


Figure 17 育児被害感情の概念化と支援の視点

【被害感情】である〈自己コントロールのむずかしさ〉は、「怒っちゃったとき、あんなにきつく言わなくてもよかったな、手をあげなくてもよかったなって、毎日振り返っていますね」「自分がされたからそうしちゃうってこと多いじゃないですか。だからそうしないように自分を自制するっていうのがすごい大変」などから理解されるように、ネガティブな被養育経験による被害感情に伴う衝動性であると考えられる。〈フラッシュバック〉は、被害感情が言語的なものではなく視覚的に出現するもので、相手がよくわからないという意味では、乳幼児期特有の概念であると考えられる。【依存対象の不在】によって母親は、〈ひとりでがんばる〉〈子育ての適切なモデルがない〉という被害感情にさらされる。幼少期に安全基地としての依存対象を得られなかった母親たちは、自分が親になって乳児・子育てという未知のものと向き合うとき、依存対象の不在に直面する。物理的な面もさることながら心理的な面において、依存対象の不在は育児において大きな痛手となる。日本独特の文化として里帰り出産がある。出産という一大イベントのあとの数週間を実家で過ごし、子どもの世話の手助けを受け、自分の体を回復させていく。ネガティブな被養育経験を持つ母親は、自分の親に嫌悪感情を持ち続けている母親も多く、出産という未知の出来事の際も、その経験者である親を頼ることを希望しないことが多い。「出産後親が度々来ていたことが苦痛だった」「実家では産めないと思い夫の実家を頼った」「親に頼るつもりはなかった」などとあるように、本来なら親をモデルとする行為であるにもかかわらず、親に依存できない母親たちが存在した。【罪悪感】のカテゴリーでは、〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉〈子どもへのネガティブな感情〉が生じ、それはネガティブな被養育経験に由来することを母親自身も自覚している。

現実の赤ん坊を異星人のように感じる母親もいる。赤ん坊はもはや自分の分身ではなく、母親がこころの中に抱いていた空想とも違う。赤ん坊が誕生すると、嫉妬の源泉になるかもしれない。いまや注目的は母親ではなく、赤ん坊だからである。赤ん坊はずっと母親のうち側にいて母親の一番悪いところを知っているのに、赤ん坊に自分の正体をばらされると感じ、母親が自分で拒絶していた貧相で貪欲な面をまるで赤ん坊が象徴しているように思えることもある。このタイプの顕著な特徴は、罪悪感や不安なうつ状態よりもむしろ、一種の被害感である。母親は母性や錯乱の海に溺れながら、乳児という泥沼の中に「吸い込まれる」ことを恐れていることもある（Raphael-Lelf, 1989）。自身が親から不適切な養育を受けてきたという自覚のある母親は、親のように育てた

くないという戒めを自らに課し、それがうまくいかないときの原因は自分が不適切な養育を受けてきたからだと考え、〈自分の性格を被養育経験に関連づけて考える〉。しかし、うまくは回らず、泣きを強める乳幼児は母親を追い込み、〈フラッシュバック〉を生じさせる。育児困難の現実のストレスや空想が母親の心的世界に保持できなければ、それは投影同一化によって乳幼児の中に排泄されてしまう。これによって、乳幼児が健康な場合ですら、母親の空想の中で「障害のある乳幼児」として母親に同定されてしまう。乳幼児は母親に育児の喜びを与える存在ではなく、母親の養育を非難する迫害的な対象として母親を攻撃する存在になってしまう（木部，2009）。母親は、子どもが泣く正当な理由の理解にたどり着くことができず、過去のネガティブな被養育経験の想起と認知の歪みによって『育児被害感情』を強めていく。対象の二つの面への極端に深い分裂は、ひきはなされている良い対象と悪い対象への分裂ではなく、理想化された対象と極度に悪い対象への分裂にある。そのような深くきわだった分割にあつては、破壊衝動や羨望や被害的な不安がひじょうに強いものであつて、理想化がおもにこれらの情緒にたいする防衛の役割を果たしていることがあきらかになる（Klein, 1957／1996）。こうして生じるであろう被害感情と、ネガティブな被養育経験による〈フラッシュバック〉などによる被害感情が母親を襲い、その後も『育児被害感情』は継続していくと考えられる。

Klein（1957／1996）は親の養育態度を中心とするこどもを取り巻く環境に関して、こどもは成長するにつれてさらなる試練に出会うのであるから、与えられた環境の中で、こどもの心的世界が成長することが大切であると強調し、環境の失敗が極端でない限り、養育方法への介入は避けることを勧めている。すでに自分の養育態度に対して罪悪感を抱いている者も多く、不備を指摘すれば、これを増長させるだけの結果を招いたり、逆に被害的に感じさせたりするであろう（木部，2006）。『育児被害感情』を抱いていると思われる母親に対しては、育児の教育支援ではなく、共感的に寄り添う支援が必要であると考えられる。また、Egeland（1988）が虐待の世代間連鎖を断つための要因のひとつとして挙げた、虐待的でない大人からのサポートを子ども時代に受けることができた体験を挙げている。『育児被害感情』を抱える母親の場合、支援者が直接子どもへの関わりの機会を設けることも重要な支援の視点であると考えられる。たとえば、保育園、幼稚園の先生との間に子どもが信頼できる関係性を築くことも重要であるし、発達の問題を抱える子どもなら、その治療教育や相談の際の子どもと支援者との関係性

も重要になる。母親を支援しながら子どもの環境を整えることと同時に、子どもにとっての家庭以外での、信頼できる大人との関係性構築は重要な課題であると考えられる。

本研究における『育児被害感情』は、ネガティブな被養育経験のある母親にとって、子育ての間、継続して持つ感情であると考えられる。理解しがたい被害感情という特徴から、児童期よりも幼児期により出現していた。妊娠期からの切れ目のない支援と言われているが、『育児被害感情』については特に早めの介入が大切であると考えられる。

『育児被害感情』は見えにくさもあるため、関わる支援者は母親一人一人を丁寧に捉えていくことが重要である。また、児童期に子どもとの関係性に関する被害感情に形を変えていくことが示された。幼児期と比べて児童期になると学校適応や勉強など、問題が複雑化する中、親の支援に対応する資源は少なくなる傾向がある。子どもの環境という意味での親への支援の受け皿が必要であると考えられる。

研究2で示されたモデル図と研究3・研究4で得られた概念を合わせた、ネガティブな被養育経験を持つ母親への支援モデルを以下に示す（Figure 19）。

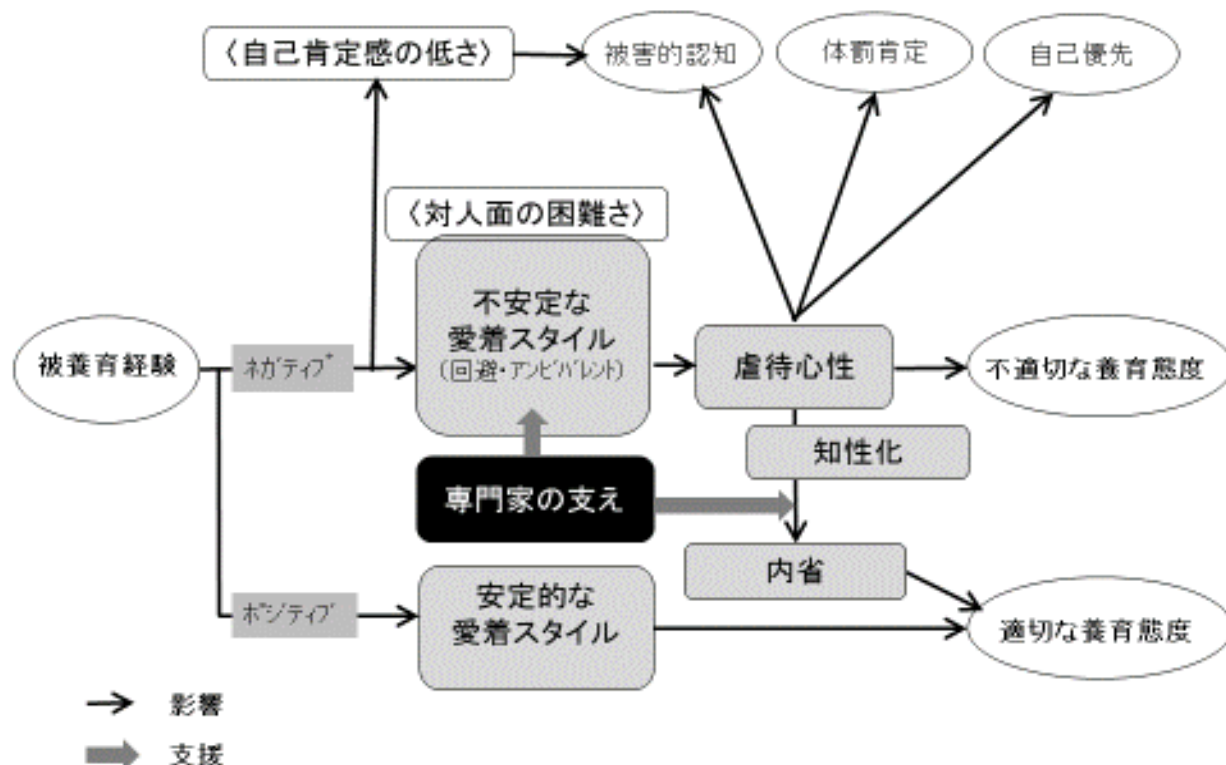


Figure 18 ネガティブな被養育経験を持つ母親への心理的支援モデル

母親が育児困難感を示したとき、子どもの要因や環境要因に目が行きがちであり、母親の養育態度に焦点化された場合でも、母親の子どもへの関わり方への指導や子育てガイダンスが提供されることが多い現状がある。しかし、本研究で導き出されたように、ネガティブな被養育経験を有する母親は、子どもへの虐待がみられない場合でも『育児被害感情』を抱えながらなんとか自分を維持している場合が多いため、母親を心理的にサポートしながら子どもの成長を見守る支援者の存在が必要であると考えられる。母親の育児困難感の背景にあるネガティブな被養育経験による『育児被害感情』のありように変容に寄り添うことが重要であると考えられる。その際、母親の不安定な愛着スタイルに十分配慮し、適切な援助関係を形成することが第一歩であると考えられる。さらに、母親の防衛である知性化にも注意を払う必要があり、支援者の適切なアセスメントが虐待の予防につながると考えられる。同時に、満たされなかった自分の子ども時代の気持ちをケアしてあげることも必要であろう。Bowlby (1973 ; 1988) は愛着理論を適用した治療法についても言及している。愛着理論を適用する治療者は、患者が自分自身や愛着対象についてのワーキングモデルを治療的關係の中で得た新たな理解や体験を通して、再評価、再構成するために、探求しうるような状況を提供することだと述べた。支援者がその気持ちを受容し、母親の心の安全基地になることによって母親の子どもへの態度が変わっていくと考えられる。さらに、母子の相互作用において重要である子どもとの自然な情緒交流については、心理相談や心理療法の中で、支援者が母親の情緒に敏感に応答していく姿を示すことが母親の情緒応答性を引き出す鍵になると考えられる。母親が育児困難感を示すとき、その背景要因を適切にアセスメントし、『育児被害感情』がある場合は、葛藤を共に抱え“真の自己”と向き合えるよう内省を促す支援者の存在が不可欠であることが示唆された。

## 第2節 本論文の限界と今後の課題

本論文の限界として、幼児を園に通わせる母親に対して行った質問紙調査における被養育経験尺度および養育態度尺度についての更なる検討が求められる。同じく成人版愛着スタイル尺度について、4 カテゴリー尺度を用いることが現段階では最も適切である（中尾・加藤，2003）と述べられている等、最適な尺度を採用するための検討が必要であると考えられる。また、インタビュー調査に関しては、対象者の条件の絞り込みを明確にすること、および、対象者の人数を増やしてより厚みのある概念を生成していく

ことが求められる。

今後の課題・展望として、子どもが思春期になったときについての研究が挙げられる。児童期になり子どもが言葉を操り、一見理解しやすいように感じられたとしても、思春期に子どもは自立への危機を迎え、親にとっては理解し難い存在となり、被害的に捉えてしまう可能性があると考えられる。『育児被害感情』がどう変化していくのか、子どもとの関係性はどのように変わっていくのかを縦断的視点を持って検討していくことにより、長期的視点に立った支援が提供できると考えられる。幼少期の養育者との関わりが子どもの内的ワーキングモデルを形成することを考えれば、子どもが小さい時期の早めの介入が求められるであろう。子どもが社会と関わりを持つようになるにつれ、環境としての親の意味は軽減していくとも考えられるが、内的ワーキングモデルは、未成熟の時期の重要他者との相互作用によって形成される（Bowlby, 1973/1991）と述べられているように、まだその影響は大きいと考えられる。母親たちの語りからも思春期への不安が述べられており、未解決の問題が顕在化してくる時期でもある。また、環境側の代表者である母親の条件から一方的にみるのではなく、実際の社会的相互交渉過程の変化のなかで検討されなければならない（田島, 1997）。ネガティブな被養育経験による『育児被害感情』の変容のプロセスの見通しを、育児支援や臨床現場に生かしていくことが求められる。

また、今回は、ネガティブな被養育経験を有する母親の心理療法の事例として1ケースを提示し、研究1から研究4で示唆された研究結果と照らし合わせることができた。しかし、詳細については本論文には掲載できていない。今後は、基礎研究から得られた知見を生かせる臨床研究についても検討を重ねていきたい。

### 第3節 本論文の意義

本研究において、一般家庭の母親の中に潜在するネガティブな被養育経験の世代間連鎖に苦しむ母親に注目し、ネガティブな被養育経験がどのように子育てに影響を及ぼしているか、負の世代間連鎖の克服への心理プロセスを提示できたこと、および、母親のネガティブな被養育経験によって生じる困難感を『育児被害感情』と定義し、その発生機序と内容を可視化したことは、子育て支援に携わる援助者にとって、意義があると考えている。

積み上げられてきた虐待の世代間連鎖に関する知見を、非臨床群に応用し、虐待に限

定しない、親との葛藤に苦しむ母親にも支援の目を向けられるきっかけになったと考えられる。ネガティブな被養育経験の世代間連鎖において、母親の愛着スタイルと虐待心性、特に、被害的認知に着目したことにより、支援に応用できるモデルを提示することができた。目の前の相談者である母親の育児困難感について、適切な見立てをし、ニーズに合った援助を提供することに役立つものであり、意義があると考えている。

## 文献

- 會田理沙・大河原美以. (2014). 児童虐待の背景にある被害的認知と世代間連鎖：実母からの負情動・身体感覚否定経験が子育て困難に及ぼす影響. *東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I*, **65**, 87-96.
- Ainthworth, M. D. S. Blehar, M. C. Waters, E. & Wall, S. (1978). *Patterns of attachments ; A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ : Erlbaum.
- Ainthworth, M. (1985). Patterns of infant - mother attachments. *Bulletin of the New York Academy of Medicine*, **6**, 39-52.
- 青木紀久代. (2015). 親としての自尊感情を理解しながら援助すること. (pp.110-113). *子育て支援と心理臨床*, 10. 東京：福村書店.
- 青木豊. (2008). アタッチメントの問題とアタッチメント障害. *子どもの虐待とネグレクト*, **10**, 285-296.
- 青木豊. (2014). 乳幼児－親心理療法. *子育て支援と心理臨床*, 9. (pp.19-25). 東京：福村書店.
- 青木豊・松本英夫. (2006). 愛着研究・理論に基礎付けられた乳幼児虐待に対するアプローチについて. *児童生年精神医学とその近接領域*, **47**, 1-15.
- 青山征彦. (2015). 越境と活動理論のことはじめ. 香川秀太・青山征彦（編）*越境する対話と学び*. 東京：新曜社.
- 荒牧美佐子・無藤隆. (2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に. *発達心理学研究*, **19**, (2), 87-97.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four - category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Belsky, J. (1984). The determinants of parenting: A process model. *Child Development*, **55**, 83-98.
- Bion, R. W. (1999). 経験から学ぶこと. *精神分析の方法 I－セブンサーヴァンツ*. (福本修, 訳). 東京：法政大学出版局. (Bion, R. W. (1962). *Learning from experience*, London : Heinemann.)
- Bowlby, J. (1991). *母子関係の理論 I 愛着行動*. (黒田実郎・大羽奏・岡田洋子他,



- 訳) 東京: 岩崎学術出版. (Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss ; Vol. 1 Attachment*. Basic Press : New York.)
- Bowlby, J. (1991). *母子関係の理論II 分離不安*. (黒田実郎, 岡田洋子, 吉田恒子他, 訳) 東京: 岩崎学術出版社. (Bowlby, J. (1973) *Attachment and Loss ; Vol. 2. Separation*. London : Hogarth Press .
- Bowlby, J. (1988). *A secure base : Parent - child attachment and healthy human development*. Basic Books.
- Brennan, K. A. , Clark, C. L. , & Shaver, P. R. (1998). Self - report measurement of adult attachment : An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds. ), *Attachment theory and close relationships* (pp. 46-76). New York : Guilford Press.
- Bretherton, I. (1990). Open communication patterns, internal working model, and the intergenerational transmission of attachment relationships. *Infant Mental Health Journal*.
- Coohey, C. , & Braum, N. (1997). Toward an integrated framework for understanding child physical abuse. *Child Abuse and Neglect*. **21** , 1081-1094.
- Crowell, J, A. & Feldman, S. S. (1988). Mother's internal models of relationship children's behavioural developmental status . *Child Development*, **59**, 1273-1285.
- Dubinsky, A. (2017). 理論的概観: 情緒的経験の理解 (木部則雄, 監訳) *発達障害・被虐待児のこころの世界 精神分析による包括的理解*, pp.5-26. 東京: 岩崎学術出版. (Dubinsky, A. (1997). *Psychotic States in Children*. Margaret Rustin, Maria Rhode, Helen Dubinsky and Alex Dubinsky, (Eds. ) Karnac Books Limited , London, England. )
- Egeland, B. (1988). Breaking the cycle of abuse: Implications for prediction and intervention. In Brown, K. , Davies, C. & Stratton, P. (Eds.) *Early Prediction and Prevention of Child Abuse*. pp. 87-99. John Wiley & Sons. Chichester.
- Egeland, B. , Jacobvitz, D. , & Sroufe, L. A. (1988). Breaking the cycle of

- abuse. *Child Development*, **59**, 1080-1088.
- Engestrom, Y. Engestrom, R., & Karkkainen, M. (1995). Polycontextuality and boundary crossing in expert cognition: Learning and problem solving in complex work activities. *Learning and Instruction*, **5**, 319-336.
- 遠藤利彦. (1992). 内的作業モデルと愛着の世代間伝達. *東京大学教育学部紀要*, **32**, 203-220.
- 遠藤利彦. (2010). アタッチメント理論の現在: 生涯発達と臨床実践の視座からその行方を占う. *教育心理学年報*, **49**, 150-161.
- 遠藤利彦. (2013). 現代進化発達心理学から見るアタッチメント. 日本発達心理学会 文化比較・行動比較分科会, 2013.4.20. (白百合女子大学).
- 遠藤利彦・江上由実子・鈴木さゆり. (1991). 母親の養育意識・行動の規定因に関する探索的研究. *東京大学教育学部紀要*, **31**, 131-152.
- Erikson, E. H. (2011). *アイデンティティとライフサイクル*. (西平直・中島由恵, 監訳) 東京: 誠信書房. (Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: International University Press.
- Evans, A. L. (1980). Personality characteristics and disciplinary attitudes of child abusing mothers. *Child Abuse*, **4**, 179-187.
- Fonagy, P. (2008) *愛着理論と精神分析*. (遠藤利彦・北山修, 監訳) 東京: 誠信書房. (Fonagy, P. (2001). *Attachment theory and Psychoanalysis*. London: Other Press.)
- Fonagy, P., Steele, M. Steele, H. Moran, G. S., & Higgitt, A. C. (1991). The capacity for understanding mental states The reflective self / parent in mother and child and its significance for security of attachment. *Infant Mental Health Journal*.
- Fraiberg, S., Adelson, E. & Shapiro, V. (2011) 赤ちゃん部屋のおぼけ. (木部則雄, 監訳) *母子臨床の精神力動: 精神分析・発達心理学から子育て支援へ*, pp.103-149. 東京: 岩崎学術出版社. (Fraiberg, S., Adelson, E. & Shapiro, V. (1975). Ghosts in the Nursery. Joan Raphael-Leff (Ed.). Parent - infant psychodynamics - Wold Things, Mirrors & Ghosts. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, **14**. 387-422.)

- Fraley, R. C., Heffernan, M. E., Vicary, A. M., & Brumbaugh, C. C. (2011). The experiences in close relationships - relationship structures questionnaire : A method for assessing attachment orientations across relationships . *Psychological Assessment*, 23, 615-625.
- Freud, S. (1970) 制止, 症状, 不安. フロイト著作集 6. (井村恒郎, 訳) 京都: 人文書院. (Freud, S. (1926). *Inhibitions, Symptoms and Anxiety*. S. E., 18.
- 深津千賀子. (2002). 児童虐待をする母親の心理療法. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要 1, 18-21.
- 福田佳織. (2004). 母親の被養育経験と乳児への敏感性との関連 家族心理学, 8, 85-98.
- 古村健太郎・村上達也・戸田弘二. (2016). アダルト・アタッチメント・スタイル尺度 (ECR-RS) 日本語版の妥当性評価. 心理学研究, 87, 303-313.
- Green, A. (2011). デッドマザー・コンプレックス. (木部則雄, 監訳) 母子臨床の精神力動: 精神分析・発達心理学から子育て支援へ. pp.194-208. 東京: 岩崎学術出版社. (Green, A. (1986). *The dead mother complex*. Joan Raphael-Leff (Ed.). Hogarth Press and Rebus Press.)
- Gray, J. D., Kempe, C. H. et al. (1979). Prediction and Prevention of child abuse. *Seminars in Perinatology*, 3, 85-90.
- Haft, W. & Slade, A. (1989). Affect attunement and maternal attachment. *Infant Mental Journal*, 10, 157-172.
- 花田裕子・小西美智子. (2003). 母親の養育態度における潜在的虐待リスクスクリーニング質問紙の信頼性と妥当性の検討. 広島大学保健学ジャーナル, 3, 55-62.
- 花田裕子・坂原美保子・寺岡征太郎. (2005). 幼稚園に子どもを通園させている母親の育児不安と児童虐待傾向. 長崎大学医学部保健学科紀要, 18, 5-8.
- 繁多進 (2014) 愛着 (アタッチメント) 理論の基礎: ボウルビィ理論の骨格とボウルビィの臨床. 子育て支援と心理臨床, 9. (pp.6-12). 東京: 福村書店.
- 秦野悦子. (2016). 乳幼児期の子育て支援 特集「乳幼児期の子育て支援」巻頭言. 生涯発達心理学研究, 白百合女子大学生涯発達研究教育センター紀要8, 1.
- 林裕美・横山恭子. (2010). ネガティブな被養育経験を持ちながら適切な情緒応答性を示す母親の特性について: 負の世代間伝達を断ち切るために. 上智大学心理学年報, 34, 33-42.

- Hazan, C., & Shaver, P. R. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 511-524.
- Helfer, R. E. & Krugman, D. R. (2003). 予防への臨床的及び発達のアプローチ.  
(坂井聖二監訳) 虐待された子ども：ザ・バタード・チャイルド. 東京：明石書店.  
(Helfer, R. E. & Krugman, D. R. (1997). Clinical and Developmental Approaches to Prevention. In Helfer, M. E., Kempe, R. S. & Krugman, R. D. (Eds.) *The Battered Child, fifth edition*, The University of Chicago Press.)
- 響江吏子・大河原美以. (2014). 母親が乳幼児の負情動表出を受け入れられないのはなぜか?：「泣き」に対する認知と授乳をめぐる愛着システム不全の影響. *東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I* **65**, 97-108.
- 平井正三. (2015). 精神分析と子育て支援：総論. *子育て支援と心理臨床*, **10**, pp.6-12.  
東京：福村出版
- 本間博彰. (2003). 児童虐待の現状と課題：児童虐待と医療・保健のかかわりをめぐって. *臨床精神医学*, **32**, 123-127.
- Hopkins, J. (1990). The observed infant of attachment theory. *British Journal of Psychotherapy*, **6**, 460-471.
- 井田歩美. (2013). わが国における「母親の育児困難感」の概念分析：Rodgers の概念分析法を用いて. *ヒューマン研究学会誌*, **4**, 23-30.
- 稲垣千代・渡邊孝憲. (2007). 母親の養育態度と内的作業モデルとの関連について. *家庭教育研究所紀要 日立財団*, **16**, 16-28.
- 岩渕祥子・奥澤聡子・神川洋平・川崎有亮・中西恵美・贅裕亮・稗田太郎・津田洋子・和田敬仁・野見山哲生. (2009). 母親の育児負担感への寄与因子の検討に関する研究. *信州医誌* **57**, 155-161.
- Kaufman, J., & Zigler, E. (1987). Do abused children become abusive parents? *American Journal of Orthopsychiatry*, **57**, 186-192.
- 金政祐司. (2003). 成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望：現在，成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは. *対人社会心理学研究*, **3**, 73-84.
- 金政祐司. (2007). 青年・成人期の愛着スタイルの世代間伝達：愛着は繰り返されるの

- か. *心理学研究*, **78**, 398-406.
- 唐軟斐・矢嶋裕樹・桐野匡司・種子田綾・中嶋和夫. (2005) 母親の子どもに対するマルトリートメントの構造化の試み. *日保学誌*, **7**, 269-276.
- 柏木恵子. (2008). *子どもが育つ条件：家族心理学から考える*. 東京：岩波書店
- 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村敦・谷口和加子・恒次欽也・安藤朗子. (1999). 育児不安に関する臨床的研究Ⅴ：育児困難感プロフィール評定質問紙の作成. *日本子ども家庭総合研究所紀要*, **34**, 1-105.
- 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村敦・安藤朗子・谷口和加子・佐藤紀子・恒次欽也. (2000). 子ども総研式・育児支援質問紙（試案）の臨床的有用性に関する研究. *日本子ども家庭総合研究所紀要*, **36**, 117-158.
- 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・安藤朗子・中村敦・谷口和加子・佐藤紀子・恒次欽也. (2001). 子ども総研式・育児支援質問紙（ミレニアム版）の手引きの作成. *日本子ども家庭総合研究所紀要*, **37**, 159-180.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹. (2000) 日本人母子における愛着の世代間連鎖. *教育心理学研究*, **48**, 323-332.
- Kempe, C. H. & Helfer R. E. (1972). Innovative therapeutic approaches. In Kempe, C. H. & Helfer R. E. (Eds) *Helping the Battered Child and His Family*, p.41-54, J. B. Lippincott Company, Philadelphia and Toronto.
- Kempe, C. H., Silverman, F. N., Steele, B. F., Driegemueller, W., & Silver, H. K. (1962). The battered - child syndrome. *The Journal of the American Medical Association*, **181**, 17-24.
- 木部則雄. (2006). *こどもの精神分析 クライン派・対象関係論からのアプローチ*. 東京：岩崎学術出版社.
- 木部則雄. (2009). 臨床実践における「精神分析と子育て支援」：マザーリング障害のある母親の心的リアリティ. *白百合女子大学発達臨床センター紀要*, **12**, 13-27.
- 木部則雄. (2012). *こどもの精神分析Ⅱ クライン派による現代のこどもへのアプローチ*. 東京：岩崎学術出版社.
- 木部則雄. (2015). 親・乳幼児精神療法について：欧米でのフライバーグとタビストックの臨床実践. *子育て支援と心理臨床*. **10**, (pp.34-39). 東京：福村出版

- 木本美際・岡本祐子. (2007). 母親の被養育経験が子どもへの養育態度に及ぼす影響. *広島大学心理学研究*, **7**, 207-225
- 木下康仁. (1999). *グラウンデッド・セオリー・アプローチ：質的実証研究の再生*. 東京：弘文堂.
- 木下康仁. (2003). *グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い*. 東京：弘文堂
- 木下康仁. (2007). *ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて*. 東京：弘文堂.
- Klein, M. (1985). 分裂的機制についての覚書. (狩野力八郎・渡辺明子・相田信男, 訳, 小此木啓吾・岩崎徹也, 責任編訳) メラニー・クライン著作集4. *妄想的世界*. 東京：誠信書房. (Klein, M. (1946). Note on some schizoid mechanisms. *International Journal of Psychoanalysis*, **27**, The Writings of Melanie Klein Vol. 4. London : Hogarth Press.)
- Klein, M. (1996). 羨望と感謝. (松本善男, 訳, 小此木啓吾・岩崎徹也, 責任編訳) メラニー・クライン著作集5. *羨望と感謝*. 東京：誠信書房 (Klein, M. (1957). Envy and Gratitude. *International Journal of Psychoanalysis*, **27**, The Writings of Melanie Klein Vol. 5. London : Hogarth Press.)
- 小林美智子. (2007). 今後の展望. *小児科臨床*, **60**, 853-866.
- 小林佐知子. (2006). 産後抑うつ状態に関する心理学的研究の概観. *Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University Psychology and Human Development Sciences*. **53**, 97-106.
- 小見山実, 加藤正明・保崎英雄・笠原嘉・宮本忠雄・小此木啓吾. (編) (1975). *増補版 精神医学事典*. 東京：弘文堂
- 近藤清美. (2014). ビデオ育児支援法による親子関係支援. *子育て支援と心理臨床*, **9**, pp.13-18. 東京：福村書店.
- 今野義孝・水谷徹・星野常夫. (2001). わが子虐待の早期発見と早期教育に関する考察：母子の愛着形成とわが子虐待の予防. *文教大学教育学部紀要*, **35**, 105-117.
- 厚生労働省. (2014). 厚生労働省第10次報告. <http://www.mhlw.go.jp/http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya>. 2016.11.
- 厚生労働省. (2016a). 平成27年度児童相談所での児童虐待相談対応件数 (速報値).

- <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000132381.html>. 2016.9.
- 厚生労働省. (2016b). 平成26年度地域保健・健康増進事業報告の概況.  
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/c-hoken/14/index.html>. 2016.11.
- 久保田まり. (2013). 愛着の“つまずき”及び児童虐待への予防的支援: Healthy families Americaプログラムを中心に. *東洋英和女学院大学人文・社会科学論集*, **31**, 45-60.
- 鯨岡峻. (1999). *関係発達論の構築*. 京都: ミネルヴァ書房.
- 黒澤礼子・田上不二. (2005). 母親の虐待的育児態度に影響する要因の検討. *カウンセリング研究*, **38**, 89-97.
- Lebovici, S. (1988). 働くお母さんと育児. *児童青年精神医学とその近接領域*, **29**, 395-402.
- Mahler, M. S., Pine, F. & Bergman, A. (1981). 高橋雅士・織田正美・浜畑紀 (訳) 乳幼児の心理的誕生: 母子共生と個体化. 愛知: 黎明書房. (Mahler, M. S., Pine, F. & Bergman, A. (1975). *The Psychological Birth of the Human Infant*. New York: Basic Books.)
- Main, M., Kaplan, N., Cassidy, J., (1985) *Security in Infancy, Childhood and Adulthood*. University of Chicago.
- 牧野カツコ. (1982). 乳幼児を持つ母親の育児不安と学習 (一般研究Ⅲ, 1 部会家庭・就学前教育). *日本教育社会学会大会発表要旨集録*, **34**, 124-125.
- 三島正英. (2001). 母親の意識にみる子どもへの虐待傾向とリスクファクターの検討. *山口県立大学社会福祉学部紀要*, **7**, 1-10.
- 本村汎・磯田朋子・内田昌江. (1985). 育児不安の社会学的考察: 援助システムの確立に向けて. *大阪市立大学生生活科学紀要*, **33**, 231-243.
- 長沼佐代子. (2005). 成人における愛着の機能: AAI の愛着パターンと諸変数との関連. 博士論文 (未公刊) 白百合女子大学. 東京.
- 永末愛. (2016). 乳幼児健診を起点とした子育て支援. *生涯発達心理学研究*, 白百合女子大学生涯発達教育研究センター紀要, **8**, 3-13.
- 中嶋みどり. (2004). 非臨床群の母親における児童虐待相当行為に関する心理学的要因の検討. *広島大学大学院教育学研究科紀要*, **3**, 249-257.
- 中嶋みどり. (2005). 保護者における児童虐待の認知の特徴と発達心理学的要因の検討.

- 発達心理学研究, **16**, 72-80.
- 中尾達馬・加藤和生. (2003). 成人の愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか? : 4 カテゴリー (強制選択式, 多項目式) と 3 カテゴリー (多項目式) との対応性. 九州大学心理学研究, **4**, 57-66.
- 中尾達馬・加藤和生. (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討. 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.
- 中谷奈美子・中谷素之. (2006). 母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響. 発達心理学研究, **17**, 148-158.
- 中谷奈美子・本城秀次・村瀬聡美・金子一史. (2007). 母親の防衛スタイルと虐待的行為の関係. 心理臨床学研究, **24**, 675-685.
- 中谷奈津子. (2002). 虐待の世代間連鎖と子育て支援事業の認知に関する研究. 保育学研究, **40**, 29-36.
- 納谷保子・小林美智子・鈴木敦子. (1995). 年齢による虐待の特徴. 小児内科, **27**, 59-64.
- 西平直. (2014). エリクソンは発達の「環境」をどう描いたのかー図表に込められた智慧. 鈴木忠・西平直 (編) 生涯発達とライフサイクル. 東京: 東京大学出版会
- 西澤哲. (1994). 子どもの虐待: 子どもと家族への治療的アプローチ. 東京: 誠信書房.
- 西澤哲. (2010). 子ども虐待. 東京: 講談社現代新書.
- 西澤哲・屋内麻里. (2006). 虐待的行為につながる心理的特徴について: 虐待心性尺度 (Parental Abusive Attitude Inventory : PAAI) の開発に向けた予備的研究 児童福祉機関における思春期児童に対する心理的アセスメントの導入に関する研究. 分担研究報告書.
- 小原倫子. (2005). 母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連. 発達心理学研究, **16**, 92-102.
- 岡本祐子. (2010). 成人発達臨床心理学の視点. 岡本祐子 (編) 成人発達臨床心理学ハンドブック. pp.1-10. 京都: ナカニシヤ出版.
- 小此木啓吾. (2002). 現代の精神分析: フロイトからフロイト以降へ. 東京: 講談社
- 奥山眞紀子. (2008). アタッチメントとトラウマ. 庄司順一・奥山眞紀子・久保田まり (編) アタッチメント 子ども虐待・トラウマ・対象喪失・社会的養護をめぐって. 東京: 明石書店



- 奥山眞紀子. (2010). マルトリートメント (子ども虐待) と子どものレジリエンス. 学術の動向 2010年4月号, (pp.46-51). 東京: 日本学術協力財団.
- 大原美和子. (2003). 母親の虐待行動とリスクファクターの検討: 首都圏在住で幼児をもつ母親への児童虐待調査から. 社会福祉学, 43, 46-57.
- Raphael-Leff, J. (2011). かいじゅうたちのいるところ. 木部則雄 (監訳) 母子臨床の精神力動—精神分析・発達心理学から子育て支援へ. (pp.63-82). 東京: 岩崎学術出版社. (Raphael-Leff, J. (1989). Where the wild thing are. *The International Journal of Prenatal & Perinatal Studies*, 1, 78-89.)
- Rholes, W. S. & Simpson, A. J. (2008). 成人のアタッチメント—理論・研究・臨床一. (ロールズ, W. A. 遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志 (監訳)) 京都: 北大路書房. (Rholes, W. S. & Simpson, A. J. (2004). *Adult Attachment: Theory, Research, and Clinical Implications*.)
- Sanders, B., & Becker-Laussen, E. (1995). The measurement of psychological maltreatment: Early date on the child abuse and trauma scale. *Child Abuse and Neglect*, 19, 315-323.
- 酒井佐枝子・加藤寛. (2007). 養育者の対人関係の持ち方が虐待傾向に及ぼす影響: 子ども虐待予防に必要な視点を考える. トラウマティック・ストレス, 5, 157-165.
- 坂田祥・成瀬昂・田口敦子・村嶋幸代. (2014). 幼児の行動特性別にみた母親の育児困難感とその関連要因. 日本公衆誌, 61,
- サトウタツヤ. (2012). 1人の人の経験を描くライフストーリーとしての TEM 安田裕子・サトウタツヤ (編). TEM でわかる人生の径路 質的研究の新展開. pp.12-20. 東京: 誠信書房.
- 千崎美恵. (2014). 母親の被養育経験と子育て: 世代間連鎖と母親の愛着スタイル・虐待心性を超えて. 白百合女子大学発達臨床センター紀要, 17, 70-81.
- 千崎美恵. (2015). ネガティブな被養育経験の連鎖を克服する母親の心理プロセス. 白百合女子大学発達臨床センター紀要, 18, 27-30.
- 島義弘. (2014). 親の養育態度の認知は社会的適応にどのように反映されているのか: 内的作業モデルの媒介効果. 発達心理学研究, 25, 260-267.
- 島義弘・上嶋菜摘・小林邦江・小原倫子. (2012). 母子相互作用において母親が使用する情報: 内的作業モデルの影響. 発達心理学研究, 23, 34-43.

- Steele, B. F. (1986). Notes on the lasting effects of early child abuse throughout the life cycle. *Child Abuse*, 10, 283-291.
- Steele, B. F. (2003). 虐待者の治療再考. (坂井聖二監訳) 虐待された子ども：ザ・バスタード・チャイルド. 東京：明石書店. (Steele, B. F. (1997). Further reflections on the therapy of those who maltreat children In Helfer, M. E., Kempe, R. S. & Krugman, R. D. (Eds.) *The Battered Child, fifth edition*, pp.566-576. The University of Chicago Press.)
- Steele, B. F., & Pollock, C. B. (1968). A psychiatric study of parents who abuse infants and small children. In Helfer, R. E. & Kempe, C. H. (Eds.), *The battered child first edition*, (pp.103-147). University of Chicago Press, Chicago and London.
- Stern, D. N. (1989). 乳児の対人世界 (理論編). (小此木啓吾・丸田俊彦, 監訳). 東京：岩崎学術出版社. (Stern, D. N. (1985). *The interpersonal world of the infant*. New York : Basic Books.)
- 杉山登志郎. (2011). そだちの凸凹 (発達障害) とそだちの不全 (子ども虐待). *日本小児看護学会誌*, 20, 103-107.
- 鈴木忠. (2008). 生涯発達のダイナミクス. 東京：東京大学出版局.
- 鈴木祐子・木村恭子・刀根洋子・及川裕子. (2001). 子ども虐待の認識：ビネット調査を試みて. *日本赤十字武蔵野短期大学紀要*, 14, 53-66.
- 社会福祉法人こどもの虐待防止センター. (1999). 首都圏一般人口における児童虐待の疫学調査報告書.
- 社会福祉法人こどもの虐待防止センター. (2000). 首都圏一般人口における児童虐待の疫学調査報告書.
- 社会福祉法人こどもの虐待防止センター. (2001). 首都圏一般人口における児童虐待の疫学調査報告書.
- 庄司順一. (2001). 子ども虐待はなぜ起こるのか. 高橋重宏 (編) 子どもへの最大の人権侵害 子ども虐待. (pp. 111-124). 東京：有斐閣
- 橘浩太. (2000). 親の被養育体験を媒介とした養育態度の世代間伝達に関する検討 - 児童とその親の認知を通して -. *名古屋大学大学院教育発達化学研究紀要 心理発達科学*.

- 田口（袴田）理恵・河原智江・西留美子. (2014). 虐待的行為指標の妥当性の検討：母親の虐待的行為得点と社会経済的状況・育児感情の関連. *共立女子大学看護学雑誌*, **1**, 1-7.
- 田島信元. (1997). 母子相互交渉と母性形成との関係に関する短期縦断的研究. *性格心理学研究*, **6**, 40-49.
- 武内珠美・田井中華恵・河野伸子. (2014). 母親の養育態度に関する研究：母親自身の愛着スタイルと自己受容に焦点をあてて. *大分大学教育福祉科学部研究紀要*, **36**, 43-54.
- 詫摩武俊・戸田弘二. (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度：成人版愛着スタイル尺度作成の試み. *東京都立大学人文学報*, **196**, 1-16.
- 玉井邦夫. (2001). *子どもの虐待を考える*. 東京：講談社.
- 田中千富美. (2004). 虐待化傾向とアダルトアタッチメントの意識的側面の関連性. *島根大学教育学部心理臨床・教育相談室紀要*, 37-49.
- 田中康雄. (2013). 育ちの歴史における「世代連鎖」. *教育と医学*, 東京：慶應義塾大学出版会.
- 戸田弘二. (1991). Internal Working Models 研究の展望. *北海道大学教育学部紀要*, **55**, 133-143.
- 徳永雅子. (2013). 虐待の世代間連鎖の背景とその対応. *教育と医学*, 東京：慶應義塾大学出版会.
- Trickett, P. K., Aber, J. L., Carlson, V., & Cicchetti, D. (1991). Relationship of socioeconomic status to the etiology and developmental sequela of physical child abuse. *Developmental Psychology*, **27**, 148-158.
- 恒次欽也・庄司順一・川井尚. (2000). いわゆる育児不安に関する調査研究(2)：最新版質問紙による「育児困難感」の規定要因に関する研究. *愛知教育大学研究報告*, **49**, (教育科学編) 125-132.
- 津崎哲郎. (1992). 児童虐待：福祉機関の援助と課題. (第33回日本児童青年精神医学会総会シンポジウム) *児童青年精神医学とその近隣領域*, **33**, 396-399.
- 津崎哲郎. (2012). 子ども虐待予防のために、専門職にできること. *大阪市立大学看護学雑誌*, **8**, 71-76.
- 鵜飼奈津子. (2000). 児童虐待の世代間伝達に関する一考察. *心理臨床学研究*, **18**,

402-411.

- 浦山晶美・西村真実子. (2009). 母親の内的ワーキングモデルと虐待的な養育態度の関連性. *日本公衛誌*, **56**, 223-231.
- 鷺山拓男. (2004). *子どもの虐待と母子・精神保健：虐待問題にとりくむ人のための覚書* (改訂版). PHNブックレット. 東京：萌文社
- 鷺山拓男. (2016a). 講義「虐待ハイリスクケースの親グループ支援」. *子どもの虹情報研修センター紀要*, **14**, 49-68.
- 鷺山拓男. (2016b). 母子保健の虐待予防における援助関係形成に求められること リスクを抱える親たちを支えるために：乳幼児健診におけるファーストコンタクト：技術論を超えて. *子どもの虐待とネグレクト*, **18**, 172-188.
- 渡辺久子. (2000). *母子臨床と世代間伝達*. 東京：金剛出版
- 渡邊茉奈美. (2011). 「育児不安」の再検討：子ども虐待予防への示唆. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, **51**, 191-202.
- 渡邊茉奈美. (2014). 妊娠期の虐待不安に影響を及ぼす要因の検討：ソーシャル・サポートを中心に. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, **54**, 293-302.
- Winnicott, D. W. (1990). 移行対象と移行現象 (北山修, 訳) *児童分析から精神分析へーウィニコット臨床論文集Ⅱ*. 東京：岩崎学術出版社. (Winnicott, D. W. (1951). Transitional object and transitional phenomena. *International Journal of Psychoanalysis*, London : Tavistock.)
- Winnicott, D. W. (1990). 原初の母性的没頭 (田中和子, 訳) *児童分析から精神分析へーウィニコット臨床論文集Ⅱ*. (北山修, 監訳) 東京：岩崎学術出版社. (Winnicott, D. W. (1956). Primary Maternal Preoccupation. *International Journal of Psychoanalysis*, London : Tavistock.)
- Winnicott, D. W. (1977). 情緒発達の精神分析理論：自我の芽生えと母なるもの. (牛島定信, 訳) 東京：岩崎学術出版社. (Winnicott, D. W. (1965). *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*. London : Hogarth Press.)
- 山口忍・丸井英二・斉藤進・荒賀直子. (2007). 1歳児をもつ母親の育児困難感. *順天堂医学*, **53**, 468-476.
- 山本政人. (2010). 日本におけるアタッチメント研究の展開. *学習院大学人文*, **9**, 35-54.

山野則子. (2006). 「育児負担感と不適切な養育関連モデル」の実証的研究ー共分散構造方程式モデルによる分析ー. *梅花女子大学現代人間学部紀要*, **3**, 25-32.

山崎嘉久・山縣然太郎・佐藤拓代・秋山千枝子・小倉加恵子・溝呂木園子・朝田芳信・船山ひろみ・松浦賢長・草野恵美子・石川みどり・黒田美保・市川香織. (2016). 標準的な乳幼児健診診査モデル作成に向けた提言. 平成 27 年度国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (AMED) 成育疾患克服等総合研究事業. 乳幼児期の健康診査を通じた新たな保健指導手法等のための研究班. あいち小児保健医療総合センター保健センター保健室.

## 要約

育児困難感のリスク因子として、子どもの問題、親の問題、環境の問題がある (Belsky, 1984)。育てにくい子どもへの対応に親が困難を抱える場合とともに、親側の何らかの要因による不適切な養育態度が子どもの発達を妨げ、育てにくい子どもとなっていく場合があり、母子相互作用と育児困難感は密接に関連していると考えられる。育児困難感の背景要因のひとつに親の被虐待経験が挙げられるが、虐待は、一般家庭の不適切な養育の延長線上に位置づけられるようになっており、一般家庭における不適切な養育の世代間連鎖に注目することで虐待予防に関する示唆が得られると考えられる。本研究では、ネガティブな被養育経験を有する母親を対象に、不適切な養育の世代間連鎖と子育てに及ぼす影響について検討し、ネガティブな被養育経験を克服する母親の心理プロセスとその支援のあり方について提案することを目的とした。

研究 1 では、幼児を持つ母親 1257 名に対して質問紙を配布し、775 名の有効回答を得た。ネガティブな被養育経験がある母親のうち、現在不適切な養育態度がみられる母親を連鎖あり群、不適切な養育態度がみられない母親を連鎖なし群、ネガティブな被養育経験がない母親のうち、不適切な養育態度がみられる母親を不適切養育群、不適切な養育態度がみられない母親を安定養育群に分類し、それぞれの群における特徴的な傾向について検討した。因果プロセスとして被養育経験によって形成されと考えられている愛着スタイルと、不適切な養育態度に影響を及ぼしていると考えられている虐待心性 (西澤・屋内, 2004) について検討した。ネガティブな被養育経験がある母親は、安定養育群より有意に安定傾向が低かった。また、ネガティブな被養育経験がある母親は、ない母親より有意に愛着スタイルの回避傾向が高かった。虐待心性においては、連鎖あり群と連鎖なし群で有意な差がみられたのは被害的認知であった。連鎖あり群は他の 3 群すべてと比較して有意に被害的認知が高かった。また、現在の養育態度と被害的認知は比較的高い相関が見られた。さらに、愛着スタイルのアンビバレント傾向は、虐待心性の被害的認知と弱い相関がみられた。ネガティブな被養育経験があり、世代間連鎖が生じている母親は、アンビバレント傾向が高く、被害的認知も高い傾向にあることが示された。アンビバレント群の子どもたちは、子どもが親に援助を求めたとき、親が関わってくれるか、応答的であるか、援助的であるかということに対して不確かだと思っている (Bowlby, 1988)。そのような不適切な養育経験を受けて大人になった母親は、その不安感を持ち続けている可能性があり、それが子どもに対する被害的認知に繋

がっていると考えられる。

研究 2 では、母親のネガティブな被養育経験が不安定な愛着スタイルに影響を及ぼし、不安定な愛着スタイルが虐待心性に影響を及ぼし、虐待心性が母親の不適切な養育態度に影響を及ぼしているというモデルが成立することが検証された。ネガティブな被養育経験を持つ母親の世代間連鎖を抑制するには、母親の愛着スタイルの特徴、および虐待心性の傾向に注目した支援の重要性が示唆された。

研究 3 においては、ネガティブな被養育経験をもつ母親 12 名に対して、世代間連鎖を克服する要因と母親の心理プロセスについて探索的に検討した。子ども時代の不適切な養育に対して、子どもは過剰適応で対応し、それによって心身の発達を阻害されるばかりではなく、〈自己肯定感の低さ〉〈人に頼れない〉など、人格形成にも悪影響を及ぼすことが示された。また、ネガティブな被養育経験を持つ母親の子育てへの方略は、〈反面教師〉であり、知性化が作用していることが示唆された。さらに、負の世代間連鎖を断ち切る要因として、自分の被養育経験を整理して語れる内省力、重要他者の存在、社会的サポートの享受が重要であることが示唆された。

研究 4 は、研究 3 インタビュー対象者で縦断調査に同意を得られた母親 8 名を対象に、子どもが児童期になったことによって、ネガティブな被養育経験の影響と育児困難感がどのように変化したかについて探索的に検討した。変わらない困難感は〈反面教師への誓い〉〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉であった。子どもが理解しにくいことによる不安は軽減し、児童期の新たな不安は、子どもとの関係性によるものであった。

研究 5 においては、縦断インタビュー対象者のうち、ネガティブな被養育経験あり群の母親 3 名に対してロールシャハ・テストと SCT を実施し、パーソナリティの側面からの検討と支援のあり方の提案を目指した。3 名の母親の共通の特徴として、自己肯定感の低さと対人面の困難さが検査結果からも読み取ることができた。また、警戒心過剰である特徴は、子ども時代に親の表情を伺って生活していたという成育歴とも合致する結果であった。知性化での処理を多発している結果も見出された。研究 3 の結果から導き出された〈頭で考える子育て〉、防衛としての知性化を用いて子育てをしている可能性が示唆された。SCT では親への嫌悪感情が表出され、ネガティブな被養育経験を〈反面教師〉と捉えられることに繋がっていると考えられ、自分の過去の被養育経験を客観的に捉えて言語化できていた。また、研究 3、研究 4 の対象者は、自ら語ることを希望していた。自分について振り返ること、内省する機会を継続的に持つことは、ネガティブな

被養育経験を克服するために有効であると考えられる。

支援のあり方としては、自己肯定感が低く、対人面に困難さを抱えているため、支援を受け入れやすいよう、援助関係のスムーズな構築が求められる。Steele (1986) は、子どもを虐待する親は他者を信頼すること、自分もケアをうけてよいと思えるようになること、人に気を遣われることによって人に気を遣うことを学ぶことが必要であるとしている。対人面に困難さを抱える母親には、話を聞いてもらう、共感してもらうこと、自分の不安と一緒に抱えてくれる支援者の存在が必要であると考えられる。また、「子育てをする母親のつらさを受けとめる」「孤立無援感に共感する」「相互受容」などが重視されるハイリスクの親の相互援助グループ(鷺山, 2016a)なども有効であると考えられる。

本研究において、ネガティブな被養育経験を克服する母親の心理プロセスが明らかになり、研究3および研究4の結果より、連鎖している、していないにかかわらず、ネガティブな被養育経験のある母親特有の困難感である『育児被害感情』の存在が明らかになった。『育児被害感情』は、様々取り上げられている育児不安・育児困難感の下位概念に位置づけられ、その背景要因因子でもあると考えられ、被害的であるところが特徴である。子育て困難が生じている場合には、子どもの泣き・ぐずりを前にして、親自身が不快感情でいっぱいになってしまうという事態が生じている(響・大河原, 2014)。被害感情とは、自分に理解不能なものに苦しめられ、悩まされ、自分の力では対処不可能だと感じる陰性感情と定義することができる。『育児被害感情』の構造は、インタビュー調査によって得られた概念〈自己コントロールのむずかしさ〉〈フラッシュバック〉〈ひとりでがんばる〉〈子育ての適切なモデルがない〉〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉〈子どもへのネガティブな感情〉によって構成され、【被害感情】【依存対象の不在】【罪悪感】の3つのカテゴリーに収束されることが示された。

育児困難感を示す母親への支援については、その背景要因を適切にアセスメントすることが重要であり、背景にネガティブな被養育経験がある場合には、母親の愛着スタイルと虐待心性に注目し、『育児被害感情』への介入を丁寧に行うアプローチが有効であることが示唆された。



## 付記

本論文における研究 4 および研究 5 は、2016 年度明治安田こころの健康財団の研究助成金を受けて行った。

### 研究 1

2014 年 「母親の被養育経験と子育て：世代間連鎖と母親の愛着スタイル・虐待心性を超えて」 *白百合女子大学発達臨床センター紀要*, 17, 70-81.

2015 年 第 26 回日本発達心理学会発表

「母親の被養育経験と子育て；世代間連鎖と母親の愛着スタイル・虐待心性を超えて」 *日本発達心理学会第 26 回大会論文集*

### 研究 3

2015 年 「ネガティブな被養育経験の連鎖を克服する母親の心理プロセス」  
*白百合女子大学発達臨床センター紀要*, 18, 27-30.

2016 年 第 35 日本心理臨床学会発表

「ネガティブな被養育経験の連鎖を克服する母親の心理プロセス」  
*日本心理臨床学会第 35 回大会論文集*

### 研究 4・研究 5

2016 年 「育児被害感情による子育て困難感を示す母親の臨床研究」  
*明治安田こころの健康財団研究助成論文集*, 52, 1-10.

## 謝辞

本論文を作成するにあたり、質問紙調査にご協力いただきました皆様、ご多忙にもかかわらず、園における配布や回収に時間を割いてくださいました園長先生をはじめ、各園の先生方に深く御礼申し上げます。そして、縦断インタビューや検査の施行にご協力くださいましたお母様方、お一人お一人の顔を思い浮かべながらの執筆となりました。深く感謝を申し上げます。

指導教官の木部則雄先生には、研究のグランドデザインの段階からの確な指針をいただき、内容に関する吟味、論文執筆に関するご指導から、インタビュー対象者のご紹介、面接場所をご提供いただくなど、多岐にわたってお世話になりました。研究がなかなかまとまらず、迷路に入り込んでしまったときも、不安な気持ちを受け止めてくださり、前に進めるよう的確に導いてくださいました。本研究を最後まで成し遂げることができたのも木部先生のご指導あつてのことと心より感謝致しております。

田島信元先生には、研究に対する姿勢や考え方、論文の構成、分析の方法など、貴重なご指導をいただきました。研究室にご相談に伺うといつも快くご丁寧にご指導してくださり、毎回感激しておりました。ありがとうございました。

秦野悦子先生には、博士課程の研究指導や指導委員会の際に常に鋭いご指摘をいただき、改善の方向へ導いてくださりました。分析の細かいところに至るまでご丁寧にご指導いただきました。心より御礼申し上げます。

鈴木忠先生には、量的研究に関して様々な角度から深く吟味してくださいました。研究1について、誤ることなく完成を見ることができましたのも鈴木先生の正確なご指導のおかげと大変感謝しております。

波多江洋介先生には、論文の全体の構成や考え方につきましてご指導をいただきました。高橋貴志先生には、調査にご協力いただく園長先生への橋渡しをしていただき、研究に向き合う心構えなどのご指導をいただきました。審査委員会では、岩政伸治先生に有意義なご指摘を賜りました。貴重な知見をご教授くださいました先生方に深く感謝いたします。

精神科医の鷲山拓男先生、堀内慶子先生をはじめ、とよたまカンファの先生方には虐待臨床に関する多くのご示唆をいただきました。研究3のM-GTAの分析のスーパーヴァイザーをお引き受けくださいました東京大学の根本愛子先生とM-GTA研究会の先生方には貴重なご指摘と励ましを賜りました。共分散構造分析など統計については、大

学入試センターの荘島宏二郎先生に度々ご相談をさせていただき、その度に快く対応してくださいました。ロールシャッハ・テストのコーディングや解釈につきましては小山真弓先生にご助言をいただきました。研究3・研究4において、子どもの虐待防止センターの早山明美先生には、概念生成の段階からデータの分類に至るまで、現場での実感を反映させたさまざまなご指摘をいただくとともに、データの多さにくじけそうになるたびに励ましのお言葉をいただきました。助教の村田朱美先生には、研究の内容や進捗状況に関して、多くのご助言と心強い励ましをいただきました。皆様に心より感謝申し上げます。

そして、諸先輩方、同志の仲間には様々な面で助けていただきました。概念へのデータの分類、モデル図の検討、検査の実施、原稿の推敲など、大変な作業を快く担ってくださいました。皆様の支えがあつてこそ論文の完成をみる事ができたと思っております。また、質問紙調査の配布・回収に奔走してくれた子育て仲間にも助けられました。本当にありがとうございました。

最後に、いつもひそかに応援してくれた夫と子どもたち、見守っていてくれた父と母に感謝します。ありがとう。

## 附録

---

- ①質問紙
- ②研究協力依頼書
- ③研究 3 M-GTA 分析ワークシート
- ④研究 4 M-GTA 分析ワークシート

## 「子育てに関するアンケート」調査のお願い

この度は貴重なお時間をいただきありがとうございます。

アンケートは無記名です。結果は統計的に処理しますので、園や個人のお名前が特定されることは一切ありません。

このアンケートは、子育ての悩みの傾向について調べようとするものです。今後、小さなお子さんを持つお母さま方への支援に役立てばと思っております。お忙しいことと存じますがご協力いただけたら幸いです。

ご記入後は、アンケートが入っていた封筒に入れ、封をしていただき、10月8日（火）までに 園出入口の

「子育てに関するアンケート」の箱に入れていただくか、担任の先生にお渡しいただきますようお願いいたします。

（調査者）

千崎美恵

白百合女子大学大学院 文学研究科 発達心理学専攻 修士2年  
〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1丁目25番地

メール： [sg123754@sg.shirayuri.ac.jp](mailto:sg123754@sg.shirayuri.ac.jp)

【1】現在のあなたご自身のことについてお伺いします。

どの程度あてはまるか、あてはまる場所に○をお付けください。

	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	よくあてはまる	非常によくあてはまる
1 私は知り合いがしやすい方だ	1	2	3	4	5
2 人に頼るのは好きではない	1	2	3	4	5
3 人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思う	1	2	3	4	5
4 私はすぐに人と親しくなれる方だ	1	2	3	4	5
5 あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを 求められたりすると、イライラしてしまう	1	2	3	4	5
6 自分を信用できないことがよくある	1	2	3	4	5
7 私は人に好かれやすい性質だと思う	1	2	3	4	5
8 人は全面的には信用できないと思う	1	2	3	4	5
9 私はいつも人と一緒にいたがるので、時々人からうとまれてしまう	1	2	3	4	5
10 たいていの人には私のことを好いてくれていると思う	1	2	3	4	5
11 どんなに親しい間柄であろうと、なれなれしい態度をとられると 嫌になってしまう	1	2	3	4	5
12 ちょっとしたこと、すぐに自信をなくしてしまう	1	2	3	4	5
13 気軽に頼ったり頼られたりすることができる	1	2	3	4	5
14 人と親しくなるのは好きではない	1	2	3	4	5
15 自分に自信がもてない方だ	1	2	3	4	5
16 初めて会った人とでもうまくやっていける自信がある	1	2	3	4	5
17 私は人に頼らなくても、自分ひとりで十分に上手くやっていけると思う	1	2	3	4	5
18 友達が本当に私を好いてくれていないのではないかとか、私と一緒に いたくないのではないかと心配になる	1	2	3	4	5

【2】現在のあなたの子育てについて伺います。

どの程度あてはまるか、あてはまる場所に○をお付けください。

(お子さんが複数いる場合は、園に通っている年が上のお子さんについてお答えください)

	まったく そうでは ない	あま りそう では ない	ど ち ら と も い え な い	ど ち ら か と い う と そ う で あ る	い つ も そ う だ
1 私は子どもとスキンシップをとっている	1	2	3	4	5
2 小さいことでも良いことはほめる	1	2	3	4	5
3 子どもと一緒に遊んでいる	1	2	3	4	5
4 子どもの話をよく聞く	1	2	3	4	5
5 お尻はたたかない	1	2	3	4	5
6 物をなげつけない	1	2	3	4	5
7 頭はたたかない	1	2	3	4	5
8 外に閉め出さない	1	2	3	4	5
9 感情的にしかることはない	1	2	3	4	5
10 部屋や風呂場に閉じ込めない	1	2	3	4	5
11 子どもが傷つくようなことは言わない	1	2	3	4	5
12 子どもをしかるとき大声をださない	1	2	3	4	5
13 子どもに無視はしない	1	2	3	4	5
14 子どもだけを家に残して夜間に外出はしない	1	2	3	4	5
15 栄養が十分な食事を用意している	1	2	3	4	5
16 子どもがケガをしたり病気の場合は病院に連れていく	1	2	3	4	5
17 洗濯や身の回りの世話をしている	1	2	3	4	5

【3】あなたの子育てについてのお考えをお伺いします。

どの程度あてはまるか、あてはまる場所に○をお付けください。

	まったくあてはまらない	どちらかといえばあてはまらない	どちらかといえばあてはまる	非常にあてはまる
1 子どもがいるために、自分の楽しみがうばわれた気がする	1	2	3	4
2 子どもが私をばかにしているように感じる	1	2	3	4
3 子どもをしつけるためには体罰は必要である	1	2	3	4
4 子どもがいなければ、もっと自由にできるのにと感じる	1	2	3	4
5 子どもが私に対して悪意を抱いているような気がする	1	2	3	4
6 体罰はしつけの方法として有効である	1	2	3	4
7 子どものことより自分の楽しみを優先したい	1	2	3	4
8 子どもがわざと私をこまらせようとしている	1	2	3	4
9 体罰を使ってでも子どもをしつけるのは親の務めである	1	2	3	4



【4】あなたの幼児期から児童期における、あなたの親についてお伺いします。

どの程度あてはまるか、あてはまる場所に○をお付けください。

(父親と母親で回答が異なる場合は、その項目についてより影響のあった方についてお答えください)

	まったく そうでは なかった	あまり そうでは なかった	どちら ともいえ ない	どちら かという とそうだ った	いつも そうだっ た
1 親は私の意見を尊重していた	1	2	3	4	5
2 親は私によく関わり、守ってくれた	1	2	3	4	5
3 親に平手やげんこつでたたかれた	1	2	3	4	5
4 親は私を傷つけないような言葉がけをしてくれた	1	2	3	4	5
5 親に部屋や風呂場などに閉じ込められた	1	2	3	4	5
6 親は私の学校のことや興味があることに関心を示してくれた	1	2	3	4	5
7 親に無視された	1	2	3	4	5
8 親は洗濯や身の回りの世話をしてくれた	1	2	3	4	5
9 ほんのささいなことでも親にひどくしかられた	1	2	3	4	5
10 私の家のルールは納得のいくルールだった	1	2	3	4	5
11 親に何か物を使ってたたかれた	1	2	3	4	5
12 親は栄養が十分な食事を用意してくれた	1	2	3	4	5
13 親に放っておかれていたと感じた	1	2	3	4	5
14 私が幼い頃、夜に子どもだけを残して親が外出することはなく家にいた	1	2	3	4	5
15 親に物を投げつけられた	1	2	3	4	5
16 病気やケガをしたときは、病院に連れていってもらった	1	2	3	4	5
17 親にけられた	1	2	3	4	5
18 親は私のことを大事にしてくれていた	1	2	3	4	5
19 何も悪いことをしていないのに、おこられたり、どなられることがあった	1	2	3	4	5
20 親はきょうだいをみな平等に扱っていた	1	2	3	4	5
(きょうだいがいない場合は3に○をつけてください)					

【5】あなたご自身のことについてお伺いします。

選択肢には○を、（ ）にはご記入ください。

- 1 年齢 （ ） 歳    2 性別 （ ）
- 2 就労形態  
①専業主婦    ②常勤    ③パート・アルバイト    ④自営手伝い    ⑤その他（ ）
- 3 教育歴  
①中学    ②高校    ③専門学校    ④短期大学    ⑤大学    ⑥大学院    ⑦その他（ ）
- 4 夫の年齢 （ ） 歳
- 5 夫の職業 （ ）
- 6 子どもの年齢・性別 （ ） 歳（男 女） （ ） 歳（男 女）  
（ ） 歳（男 女） （ ） 歳（男 女）
- 7 家族構成  
①配偶者    ②子ども（ ）人    ③実父    ④実母    ⑤義父    ⑥義母  
⑦きょうだい（ ）    ⑧その他（ ）
- 8 親族が同居あるいは近所に住んでいますか いる（ ） いない
- 9 育児で困った時に助けてくれる人はいますか いる（ ） いない
- 10 育児で困った時に相談する人はいますか いる（ ） いない
- 11 育児における配偶者の気遣いやサポートに満足していますか ①満足している②普通③不満である
- 12 あなたの育った家の家族構成 ①父    ②母    ③きょうだい（ ）  
④祖父母    ⑤その他（ ）

ご記入もれがないか、再度ご確認ください。ご協力いただきありがとうございました。

子育てに関するインタビュー（対面式質問）にご協力いただける方はいませんか？  
協力してもいいと思われる方は、以下に連絡先をご記入いただければ幸いです。  
時間の制約上、お願いする場合もしない場合もございますが、いずれにしても、  
後日、こちらからご連絡させていただきます。

お名前；

お電話番号；

メールアドレス；

※ご不明な点、ご相談などございましたら千崎（せんざき）までご連絡ください。

様

## 研究協力依頼書

本日はお忙しいところお時間を割いていただきありがとうございます。以下の「研究の背景」「研究の趣旨」「研究倫理に関する誓約書」をご一読の上、インタビューにご協力していただきたくお願い申し上げます。なお、わずかではありますが謝礼を謹呈させていただきます。ご査収いただければ幸いです。

### 本研究の背景

現在、私は白百合女子大学発達心理学専攻修士課程に在籍しており、修士論文の作成に取り組んでいます。本研究はその一環として行われるものです。研究テーマにつきましては、指導教官である木部則雄教授の承諾を得ております。

### 研究の趣旨

本研究は、子育て中のお母さま方を対象に、子育てにどのような困難を感じていらっしゃるのか、ご自分がどのような養育を受けてきて、それが今の子育てにどのように影響しているかなどについて、お聞きしたいと思っています。インタビューは1時間程度を予定しております。

.....

## 研究倫理に関する誓約書

本研究は以下の研究倫理に沿って実施いたします。

- 1) 匿名性を担保し、お名前が公開されることはいっさいありません。また研究が公開される際にも人物が特定される可能性のある表現を用いることはありません。
- 2) 研究の協力はいつでも拒否することができます。また、部分的に発言箇所を削除したい等のご希望がありましたら遠慮なく申し出てください。
- 3) インタビューの内容は録音させていただきますが、録音データはテキスト（文字）化した後、保管の必要がなくなった時点で完全に破棄します。
- 4) インタビューの内容は分析した後、以下の範囲で使用させていただきます。白百合女子大学において提出される修士論文、学会・研究会での発表、学会論文誌。
- 5) 研究結果は、2014年3月頃、文書でご報告いたします。

ご不明な点などは研究者にご確認ください。以上研究趣旨や倫理的誓約を読んだ上でご協力いただける方は承諾書へのご記入をお願いいたします。

年 月 日  
研究者

連絡先 携帯アドレス  
携帯電話番号

指導教員

白百合女子大学 発達心理学研究室

.....承諾書.....

上の研究趣旨や倫理的誓約をふまえ、研究に協力することを承諾します。なお、本依頼書・誓約書・承諾書は2部作成し、研究者と研究協力者で1部ずつ保管することに同意します。

年 月 日

お名前

	<b>研究 3 M-GTA 分析ワークシート</b>
概念 1	心理的虐待・受容されていない
定義	受容されていないと感じた親の態度
ヴァリエーション	<p>父が仕事をやめてしまった関係で母の方もちょっと仕事を始めて、忙しい様子だったので、子どもなりにちょっと家事を手伝ったりがんばってたんですが、あなたが作るものはまずい、とあまり褒められた記憶はなくて、ちょっと攻撃的な反応が返ってることが多かったです。(A)</p> <p>小さいころ母が、えーとね、ピンク色とか女の子らしい色が嫌いだったんですよ。で、くつとか洋服とか選ぶときにお母さんが好きなブルーのものを選ばなくちゃって自分ですごい思ってた記憶があるんですね。で、それでもちょっと女の子っぽい色の物がどうしても欲しくなって、ピンク色の物とかを手にとってこれが欲しいって言ったときに、母にはそんないかにも女の子らしい頭の悪そうな色を選ぶなんてお母さんの子じゃないわとか言われて、その記憶がすごくあるんですけど (A)</p> <p>あまり料理してなかった。だしの味わかんない。普通入院すると病院の料理っておいしくないというんですけど、食事がおいしかった。食べたいと思って言ったんだけど、魚料理やらない。そんな臭いもん作れるわけないでしょと言われ、希望をだしても却下だったし。たとえ作ってくれたりしても、いやいや作っているって感じで。お母さんのできないことは言っちゃだめって思った。食に興味なかった。ごはんワンパターンでバランスもよくなかった (A)</p> <p>毎日もう時間に追われていたのでもいつもなんか2人ともかりかりしていたなと思います。でもその気持ちがすごくよく。あまり話を、2人とも聴いてもらったという感じはなかった (D)</p> <p>母はやっぱ時間に追われていたので、話しかけても今新聞読んでいるからとか言って、あまり話を聴いてもらった記憶がない (D)</p> <p>父は12歳までのときは絶対権力的な感じでもう逆らうなんてことはできなかった (D)</p> <p>すごく小さい頃かえらの記憶が鮮明にあって、自転車の後ろに私が乗っていながら、ピックアップした後に耳鼻科に向かっているんですけど、たぶん耳が痛いって言って、なんで今痛いって言うのかって母親がイライラしながら連れて行かれた印象があって、その時に私はだって今痛くなったから今言ったのについていう気持で受けとめてたっていう (F)</p> <p>私はほんとにこうしたかったのにと言う気持ちを思い出す。例えばわたしはほんとにかわいい服をきたかったのに母親は正当的な、自分の好きなボーイッシュなものを着せられていたなど、服を見れば思い出すし。常に私はこうしたかったなということを常に思い出しますね。幼い時のことを (F)</p>
理論的妥当性	〈受容されていない〉をキーワードにしようとしたが、それでは全てがこの概念に入ってしまうので態度に限定して、一般的にわかりやすい〈心理的虐待〉という言葉を入れた。が、〈受容されていない〉も入れることとした。

概念 2	身体的虐待相当行為
定義	自分が受けた身体的な虐待に相当する行為
ヴァリエーション	<p>父には仕事が忙しい時は急に怒鳴られたり，急にけりとばされたりということがありました。(A)</p> <p>母の方は，感情的になりやすくて怒りっぽかったんですけど，例えば洗濯物の干し方だとか，物のしまい方，洋服のたたみ方とか，ほんとにささいなことなんですけども，別のやり方はいっさい認めてくれなくて，えーと，母に対してこういうやり方でたたむのを習ったよとか，こうやって干すといいて聞いたよ，みたいに発言をすると，すごく怒りだして，あなたは黙って親の言うことを聞いてればいいのっていう感じで怒鳴ったり（やってみせる）身体を激しくゆさぶったりすることがしばしばありました (A)</p> <p>1 回すごく怒って柱に縛りつけられたことがあって，それが忘れられないんですけど今でも，兄がきてほどこいてくれたっていうエピソードがひとつ，印象深いんですけど。結構泣いて怒ったりとかしてましたね (C)</p> <p>言うことを聞かないとお尻を叩いてみたり，そういうことはしたくないですね。布団叩き棒で。逃げ足速くなった。脅かされてて，それはよくない思いやりたくないからやっていないですね。脅かしですよ。脅かしはよくないと思ったのでそうおもったことはやってないですね (H)</p> <p>あとあと聞いた話ですけど，家に灯油ばらまいてどうのっていう話を聞いた (L)</p>
理論的根拠	<p>概念 1 と一緒にしていたが，虐待の程度の違いが大きかったので概念として独立させた。</p> <p>母親 C からは教師による体罰が語られたが，テーマが違うので削除した。</p>

概念 3	ネグレクト
定義	養育放棄と親の無関心
ヴァリエーション	<p>病院にあまり連れて行ってもらえなかったんですね。えーと、なんか家の中常に動物がいまして、私は皮膚炎になったり鼻炎になったりすることが多かったんですけど、母は一回病院に連れて行くだけでそのあと続けて治療をするようなときに、どうも続けて連れて行ってもらった記憶がなくて、1 回行けばそれでいいと思っている感じで、常に身体の具合が悪いけど、他のおうちの子みたいに病院にあまり連れて行ってもらった記憶がなくて (A)</p> <p>母の印象っていうのはないですね。まあ、なんか、正直いつも寝ている人みたいな感じ。まあ父はちょっと、あの、同じ敷地内に祖父母のいる家と父と母の家があって、母屋と新居っていうのが2つありまして、新居の方に父がしばらく一人で住んでいて、私が15歳くらいまで住んでいたんで父と会うのは週末の土日だけだったので、父は影が薄くて (笑)、えーと、何ていうんでしょう、あまり話を聞いてくれない、あんまり相手をしてくれないなという感じでした (E)</p> <p>母の方はうーんと、まあ、あまり、うーんと、あまり接触がなかった (E)</p> <p>おじいちゃんおばあちゃんの方が、あの、すごく身近だったので、えーと、んー、あまり父と母にはそのときはあまりいい感情を持っていなかったですね (E)</p> <p>私は結構わりとほっとかれて育ったので、でも姉がいたのでまあいろいろ協力し合ってあの、いろんなことを乗り越えてきた感じ (E)</p> <p>結構アルコールを飲んでいて人で、それがひどくなって、なんか家に帰ることがなかったりとか。それは何をしていたのか知らないですけど。あとはなんだろうな、病院に私を連れてお見舞いに行ったときにですけど、私を置いてどこかに行っちゃったりとか、それも何してるかわからなかったんですけど、何日も帰ってこなくて気づいたら帰っていたとか、最終的にはくすりに溺れてしまったようで (L)</p>
理論的根拠	母親 E の分類のときに誕生した概念。概念 1～4 は幼少期に受けたネガティブな被養育経験であり、並列概念となっている。

概念 4	きょうだいとの差別
定義	きょうだいと差別された親の養育態度とそれに対する感情
ヴァリエーション	<p>妹がずいぶんかんしゃく持ちというか、ちょっと気に入らないところがあると泣き叫ぶようなところがありましたので、それで全体的に妹の希望が通ることが多くて、あとは、私がお姉ちゃんだからということで我慢してた場面が多かったなあっていう、まあそこは妹の方にも言い分があると思うんですけど、幼い頃の印象としては自分が結構我慢していたような気がする、というところがあります。大きくなってからも、朝、それぞれ高校生になってからなんですけど、朝早く出るとき、そんな変わらなかったんですけど、妹には朝ごはんがあったけど私にはなくて、それは、父がなんだか早く起きて、妹のためにせっせとサラダ作って、パン焼いたりしてたんですけど、私にはなくて。あの子は一人で大丈夫だから見たいな感じで、そういえば私には朝ごはんはなかったとなと思う。今になって思えば、細かいことなんですけど、大丈夫っておもわれていたのかなあ、その分放っておかれていたような気がするというのもあります。(A)</p> <p>学校の先生がすごく嫌で、ほんとに、それ影響を与えている気がしますね。兄妹なんですけど、すぐ比較するんですね。兄は勉強もスポーツもなんでもできて性格もよくて、ほんとに学校の先生からも好かれるみたいな感じだったんですけど。私は客観的にみたら勉強もそこそこできていたけど運動もそこそこ、兄と比べると全然劣ることが多くて、それを指摘され続けているって感じで先生は嫌いでしたね (C)</p> <p>3人きょうだいの1番上なので、私はかりかりいろいろやっているのに弟たちが怒られないのがなんかこう腹立たしい気持ちだった (D)</p> <p>私、きょうだいの中で、女、男、男なので、母に一番下の弟が1番かわいいでしょって中学生のころかなんかに聞いたらそうだよと言われたのがショックを受けた (D)</p> <p>弟と比較された (D)</p>
理論的検討	母親 C からは、学校における、教師によるきょうだい比較による心の傷が語られたが、テーマが違うため削除した。

概念 5	親への嫌悪感情
定義	親の養育態度に対して抱いた嫌悪感情やこうしてほしかったという気持ち
ヴァリエーション	<p>母の方も印象としてはいつもイライラしている。父に比べていつも感情的になることが多かったです。自分がいつも正しいと思っていて、同級生をお母さんのことを見下すような発言をすることが多かったです。人の意見をあまり聞かない。独善的な、お母さんがやってあげたことをあなたは当然喜ぶでしょう、ということがとても多かったです。(A)</p> <p>父の方は文句が多いというところで、見ているテレビの出演者が好きじゃないということで、その人をバカって言ったりちょっと激しい口調で文句を言っている場面が多かったです (A)</p> <p>学校に通ったりするようになって、外で接する大人たちに比べて両親それぞれの言い分や行動がそれぞれ理不尽なものだと感じていました。(A)</p> <p>イライラしていたなあ、何かやるとすぐ怒られたなあという気持ちが強いですね。(A)</p> <p>うちの親も自覚してくれていたらなあっていう、人とは違うところを目をそらすんじゃなくて、自覚してくれてたら、自分はこれがうまくできないから自制をしなくちゃいけないとか、そういうふうに思ってくれたら、もっと子ども時代生きやすかったのかなという気持ちはあります (A)</p> <p>私の育った家族は親は不自由を感じていなくて子どもだけが不自由を感じていた (A)</p> <p>もう母親に対しては死ねとか書いてました、日記に。ほんとに、それも覚えてるんですけど。日記は捨てちゃったけど。いなければいいと母親がっていうのを思っていましたね (C)</p> <p>父親に対しては早く自分が大人になってで、父親にも意見できる立場になりたいみたいな感じで思っていました。なんか見返してやりたいとか、そんな感じで。(C)</p> <p>父親が強いっていうのはずっと変わらないんで、母親が父親のいいなりっていう状態も、DV ってまでは言えないけど言語的な DV っていうのは見てていやだなと思うから (C)</p> <p>好きなプロ野球チームが負けたり、あとパチンコに負けたり、ちょっと仕事場でいやなことがあって玄関が汚いとそれだけで怒ってしまうような人でした。なので、何かとあれ怒るかわからないので私としてはいやだなあという記憶しかない。(D)</p> <p>なんでこの人たちが親なんだろうっていう、他の家族がうらやましかった (D)</p> <p>家を飛び出してよその子になりたいという気持ちしかなかった (D)</p>



	<p>おじいちゃんおばあちゃんの方が、あの、すごく身近だったので、えーと、んー、あまり父と母にはそのときはあまりいい感情を持っていなかったですね (E)</p> <p>母はいつも忙しそうにイライラしている印象ですね (F)</p> <p>親の勧めで、地元でも厳しくて、今風ではない、時代より一昔遅れているような学校だったんですけど、校則とかもすごく厳しくて、そういうところに親の勧めで入れられたというか、自分も納得して入ったんですけど、その当初は、やっぱりなんで一とか思ったりしたんです (G)</p> <p>はっきりいっていやで、厳しくて、なんでというか、反発ももちろんしましたし。でも怒られるみたいなの。両親とも同じような考えでした (G)</p> <p>父は感情的に、自分の感情で怒る人だったので、それで子どもたちにもあたってくるので、ちょっと嫌な感じでした。嫌いとかではないんですけど、そういう怒鳴ったりするのがいやだった (I)</p> <p>すごく怖かった印象があるので、印象っていうかその感情しかない (J)</p> <p>父親は怖かったけど覚えてない。母親は常にうるさかった。それがいやでいやで。大きくなってもずっとうるさかった (K)</p> <p>お母さんに対してはいやだいやだそれだけ。お父さんは…。どっちもちょっと古風な、頭が固い、そんな印象があった両親して。いやだった (K)</p> <p>私の母親が乳がんかなんかの末期になっちゃって、そっからちょっといろいろ大変になって、そんでちょっとね、家庭が少し崩壊し始めちゃったんで。何だろうな、小学生から中学生ぐらいまでは私の中で父親はなんか弱い人っていうイメージがありますね (L)</p> <p>自分の心が壊れる前にそっち (薬物) の方に手を出してしまっただけで結局自分の意思が弱い人だったんだろうなと思う (L)</p>
理論的メ	<p>嫌悪感情についての語りが多かった。他の概念とダブるところがあった。カテゴリーにすることも考えたが、概念にとどめた。</p>

概念 6	親の機嫌をうかがう
定義	親の機嫌を伺っていた様子・怯えていた様子
ヴァリエーション	<p>子どもの為についていうのがなかった。子どもは親に合わせろっていうか、子どもが希望したからといって叶うわけじゃなくて、子どもが一生懸命大人に合わせなくてはならなくて。私はそういう印象でした (A)</p> <p>両親の思う通りにふるまいたい、両親の意にそった形でふるまいたいという気持ちも強く、私自身も、両親の顔色をうかがうというか、ことにちょっと必死だったなあという思い出がある。(A)</p> <p>父は、12歳までのときは絶対権力的な感じでもう逆らうなんてことはできなかった (D)</p> <p>父は怒ってしまうともう1週間、1ヶ月話をしなくて、家族と顔をあわせないことが多かったので、私が怒らせないようにしないと思っていました。だからあまりけんかしないようにしないと、お父さんまた怒って、天照大御神のように部屋にこもってしまうっていう風になってしまうので。できるだけお父さんが帰ってくる時間になったら片づけていたなという具合 (D)</p> <p>子どものときはやはり母親の機嫌を伺いながら、波風たたないように動くような雰囲気を持った母親だったと思います (F)</p> <p>その日をやるだけで一生懸命な、なんか、迷惑をかけられないという気持ちが幼いながらに持っていた感じがありますね (F)</p> <p>子どもらしさっていうような、あの、ことが、なんていうんですか、あんまりわがままも、母も言わなかったって言ってますし、それこそ服従関係だったと思います。それに対して疑問を持たなかった。いい子にしていればいいので、ただ父と母はいなくなったらどうしようという依存の気持ちはものすごくあったと思います (F)</p> <p>ずっと怒られているという、ちっちゃい頃から、保育園の頃から、つねにビクビクしているっていうことしかないですね。(J)</p> <p>母親は怖い。父親は優しい。母親には逆らえない (J)</p> <p>やっぱり怖いとか、そういうの。こわかったし、ご機嫌をうかがいながらだったし、うーん、ご機嫌伺いながらずっときたかな (J)</p>
理論的根拠	子ども時代の葛藤を代表するようなキーワードとなる重要な概念である。

概念 7	孤独感・さみしい気持ち
定義	親の態度に対してさみしいと感じたこと
ヴァリエーション	<p>理不尽だったなあという怒りの感情よりも、一層強く思っていたのは、さびしいっていう、両親から自分が理解されていないということと、理解されたいという気持ちから、さみしいという感情が強かったです。(A)</p> <p>母が別れた亭主にストーカーされていて、逃げるのに仲居をしていて、児童施設に預けられていたので、親から、いらない子なので捨てられたと思っていました (B)</p> <p>休みの日にしか会いに来てくれなかった。他のお母さんはみんな一緒にいるのに。いらない子なんだと思って育っていました (B)</p> <p>3年生くらいか、気づいたら(お母さんが)一緒にいた。それでもすれ違いが多かったので、いるなーくらいで。おかえりではなく、いらっしやいと言っていた (B)</p>
理論的妥当性	概念を生成した段階では、多くのデータが集まることを予想していたが、予想に反してこの概念に分類されるものが少なかった。削除も検討したが、代表的な気持ちの総称であるのでそのまま概念として残した。

概念 8	両親以外の重要他者の存在
定義	親以外の重要人物との受容的な関わりとその影響
	<p>その血の繋がりはないけどその祖父母にはだいぶかわいがってもらった記憶があります。(A)</p> <p>とてもかわいがってもらったなあっていう気持です。あと、祖父もとても優しい人で、よく祖父と祖母と私っていう3人で旅行に連れて行ってくれて、両親と私と妹っていう4人で旅行に行ったことは一度もなかったんですけど、祖父母と旅行に行ったっていうのが家族旅行だったのかなという思い出です (A)</p> <p>お料理とお裁縫なんか実技面はおばあちゃんに教わったのでいまでもとても役に立っています。だからどうしてもお料理、作るものは、煮物など茶色のものが多くなっちゃうんですけど。だしを取るとかそういうところから教えてもらったのでとても感謝しています。生きていくうえで大事なことになるので。食べ物に関することは特に、とても感謝しています (A)</p> <p>お裁縫を、娘なんで、お裁縫を教えてあげたり、お料理一緒にしようよって声かけているのは、おばあちゃんの影響でやってるなど。(A)</p> <p>祖父母と母の姉のだんなさん。伯父さん。一緒に暮らしてはいないんですけど、つきあっているときから、自分の娘のようにかわいがってもらったので。祖父母も一緒に暮らしてるのもあるし、かわいそうな子という気持ちもあるし、他のいときより愛情を注いでもらった。(B)</p> <p>おじいちゃん、おばあちゃんですよ。普通に寝る時、昔話してもらったり、日常のささいなこと、つけものをつけるの一緒に手伝ったりこれくらい(前のテーブルをたどる)の大きいたる3つ4つつけるんです。大変ですよ。畑の収穫とかそのようなことです。日常生活すべてだと思います。今思えば。伯父さんはでかけたときに私が車にはねられかけまして、相手の方にもものすごく怒ってくださってすごく心配してくれて、寝ちゃった時におんぶしてくれたり (B)</p> <p>子どもに対する教育姿勢は祖父母、伯父から学んだと思います (B)</p> <p>おばあちゃんの、母方の方なんですけど、おばあちゃんの子どもになりたいって思っていました。遠かったんですけど、母が週末休みでそうじをしたいので邪魔になるからって言うとおばあちゃんちに行ってと言われて、父が送っていったりして、祖母のところに行っていたので、祖母と週末一緒に過ごすことが多かったの。やさしかったのでやっぱり天国だなと弟と言っていました (D)</p> <p>祖母は本当に怒られたことがない、怒ったところを見たことない、というくらいとっても優しい人でした。で、なんでもできるっていうのも変ですけど、和裁士だったので、手先が器用で、料理もちろん、家事全般、とても器用にこなしていた (D)</p>

	<p>週末の楽しみが、いつもおばあちゃんちに行くっていうことだったので、そういう楽しみができてたんだと思いますね。(Q) 楽しみがあるからがんばれるというのが思います (D)</p> <p>おじいちゃんとおばあちゃんは、受け入れてもらえることが多かったんで、家とはうってかわって、なので、あの、で、私も子どもに対して、できることは受け入れてもらえるとその自分を肯定することが、自分を肯定してもらったっていう気持ちになれるので、いろんなしがらみありますが、できるだけそのおりあいをつけてやりたいとか、提案してくれたことについては否定しないようにしようと思っています (D)</p> <p>祖父は仕事をずっと年までして、その仕事を子供たちに手伝わせるんですけど、手伝うとすごくほめてくれたり、なんか、うんと、やっぱりあの、テストとかでいい点をとると一番喜んでくれたのは祖父です。そうですね、祖母はほんとにあの、まあ、あのやさしい人で、えーと、うーんと、なんか私が覚えているのは、水ぼうそうになったときに、かゆくて夜眠れなくて、祖母がずっと抱っこしてくれていたのを覚えています (E)</p> <p>すごくかわいがってもらっているんで、今も、そういう風なおばあちゃんになりたい。おじいちゃんにも感謝している (F)</p> <p>両親が仕事をしていたので、休みの日とか結構おばあちゃんにいろいろ連れて行ってもらいました。電車乗って遠くまで、水族館とかにも連れて行ってもらったし、だからなんかさみしい思いはしませんでしたね (G)</p> <p>いまでも付き合っている友達1人と。そう。あと病院の先生。十何年もつきあいあるから (L)</p>
理論的	<p>特にネガティブな養育経験を持った母親から、祖父母の存在の重要性が語られていた。それによって立ち直ることができているんだと確証できるくらい、はっきりとしたエピソードとして語られていた。</p>

概念 9	自己肯定感の低さ
定義	自信が持てない、おどおどすること
ヴァリエーション	<p>両親との暮らしをちょっと長いこととても苦しかったんですね。実際に身体の不調にも出ていたんですけど、家庭の中のことで、なぜ、苦しいのかわからずに、うまくたちまわれない自分がとても悪いのだと思い込んでいました。なのでおそらくその影響だと思うんですけど、自己評価が低いのかな、あと、自分にちょっと自信が持てていな面が強いのかなと思います。(A)</p> <p>私自身はあんまり褒められた記憶はないし、何をしても大人はどうまくはできなかった子ども時代なので、何をしてもなんかここはダメねとか言うことが多かった (A)</p> <p>自信を持てない方だと思う。自己肯定感が低い。それは、なんか、それは、あの、母にそういう風に、あの、そうだったからか、よくわからないですけど、あの、とりあえず、なんていうか、そうですね、んー、そうですね、なんか、自信満々に堂々としたタイプではないです。それが影響しているんですかね、自分ではわからないんですけどね (E)</p> <p>逆に母と同じようには自分ではできないっていうか、スーパーというか、家事もして育児もして仕事もしてっていうことが、彼女はやりたくてやっていたと思うんですけど、私はやりたくてもその能力がないというのがすごくよくわかっているんで (F)</p> <p>はっきりいって何のとりえのない主婦なんですけど、もうちょっと、高校とか大学の進路のときに、したいことが明確に見つかっていたら、もっと違う人生だったのかなとか、もうちょっと自分に特技とか資格とか、そういうものがあつたらなあとか、よく思ったりするんですけど (G)</p> <p>すごく気を遣わせる子にしまったなとか、んー、全部私が原因だろうなっていう風に思う。父親、パパはすごく理解があって冷静で私がこう理想にしているような接し方ができるんですけど、私はわかりながらもできなかったりして、イライラしたりしてしまったりしてしまうので、私じゃなかったら良かったんじゃないかなと思う。なんかもっと私がこう理想としているいつもやさしくてニコニコしてて、こう、なんだろう、優しい太陽みたいなそういう母親っていうか、母親に育てられた方がよかったよねと今思います (J)</p> <p>仕事をしてても休みのときでも必ず自分を責める自分がある。そういう風に思っている自分を、子どものことをそういう風に思っちゃう自分とか、掃除をしなかったり、何もできない自分とかを必ず責める自分がある (J)</p> <p>私は子どもを産むべきじゃなかったかなと思う。結局、動物とかなら自分がね、やなときは檻に入れたりとか、外に逃がしちゃったりとかそういうことができるけど、自分が一番って思っている私みたいなタイプ、タイプっていうか人間には、子育てとか向いてない (J)</p>

	<p>次の子にはっていう、気持もめばえたりしたこともありました。でもいろんな人に無理だよって言われて、んー、やっぱり向いてないんだろう、向いてないっていうか、私はダメなんだろうと思う。私、うーん、んー、私だろうなと思う。私じゃなければもったきょうだいもつくってあげれたり、楽しい家庭だったり、いろんなお料理作ってあげられたり、なんかそういうことできたんじゃないかなと思う (J)</p> <p>中学生くらいから。でも年齢は上がって行って、精神的には中学生くらいでストップしている感じなんで。そのまま子どもできて、年とってもすごく大変なんですね。んーんー、私、んー、やっぱり私はダメなんだとか、私じゃなければよかったなとっていうのを強く思う。んー、私あんまり必要じゃない気がする。自分自身が今の家族の中に、子どもと主人と私の中で、私は悪影響を及ぼすだけで必要ない、主人がすごくよくやってくれるので、主人といた方がすごくいい子に育つような気がする (J)</p> <p>全然ダメだなっていう、そうですね。こうしてこうしてこうしなくっちゃって考えるけどできない (K)</p>
理論的	<p>自己肯定感の低さは、母親 A の語りの中に出てきた言葉であり、そのまま概念にした。他の母親からも、この内容が多く語られていた。当初考えたより、大きな概念であり、他の概念に所属するデータが同時にこの概念にも所属することが考えられた。重要なキーワードなので、他の概念とダブる場合は、こちらの概念を優先した。</p>

概念 10	人に頼れない
定義	人には頼れないと感ずること
	<p>一般の家庭のように親に頼ることはない。自分で解決できることは自分でやる。夫にも協力求めたことないです (B)</p> <p>ネットで調べる。例えば児童センター、児童相談所？役場の相談窓口、えーと、子ども抱えてできる仕事ないかと。内職してみたり、とにかく母との関わり全くないので頼れる他人、こっちが地元でないの、友人もまだいなかった。インターネットが頼り。本とか図書館で、都内の。お母さんは田舎に。祖父母もこのころには亡くなっていた。伯父さんは血友病で倒れて17歳のとき亡くなったので (B)</p> <p>泣いてたって感じですかね。1人で泣いて少しすっきりして次もがんばろう。自殺しちゃえば楽だなと思ったこともあった。自殺はしないけど。ここから飛び降りちゃえば楽だよなと何度となく思った。この状況から逃げ出したって言う、だから誰か支えがいたらもっと違ったかも。自分が病気になったときも、全部自分でやっていて、まあ、近くに支援がない人はみんなそうだと思うんですけど。東京の人とか。んまあ助けを求めているっていうか、助けを求めている。 (C)</p> <p>自分を出すことが苦手っていうんですかね、苦手っていうのか、お母さん友達もそこまで深く付き合える人がいないっていうのか、人に甘えることも苦手ですし、なんていうか、やっぱり、あんまり人と距離を狭められないっていう感じがあります。自分の性格的には (E)</p>
理論的妥当性	<p>インタビュー対象者の愛着スタイルが回避型の人が5人いたので、この概念に属する語りが多く出ると考えていたが、予想よりは少なかった。母親 E の語りによって生成した概念であった。母親 E はアンビバレント型であった。</p>



概念 1 1	自分の性格を被養育経験に関連づけて考える
定義	自分の性格や境遇を親の養育態度・環境に関連づけて考えること
	<p>うつ病になってしまった。子どもが小学校のとき、次女の妊娠、出産後、産後うつ病になりました。自傷行為まではいかないけど、とにかく、死にたいと。何かなと治療受けていくうちに母親に対する不平不満、愛情不足、そーいのがカウンセリングでわかりまして、3年、4年近く葛藤していて (B)</p> <p>母本人にぶつけた (B)</p> <p>すごい耐えているんで、わたし。すごい我慢するという感じ。子どもがほんとに好きかもほんとにわからない。職業がら赤ちゃんとかすごく好きだけど、自我が出てからの子どもとかもともと苦手かもしれないんですけど。そういうときに対応するのにこれは私がこうやって親から育てられたせいなのかなって思うことがありますね。 (C)</p> <p>自分が仕事で悩んだりとか交友関係で悩んだりとかしたときに、親がこうしたからではないだろうか、自分の成育歴をかなり反映して考えちゃう (C)</p> <p>親が言った通りにしちゃって後悔というか、だから子どもには自分の好きなことを見つけてほしくて、それに向かって頑張ってもらいたいっていう気持ち大きいですね (G)</p> <p>なんか話してたり子育ての話だったりしても、イライラしてしまったり、ムカムカしてなんかこうきつく言ってしまうたりっていうのがあります (J)</p> <p>大声、声の大きい人とか怖い。なんだろうな、怖い、ビクビクしちゃったり、怒られたりするとすごく動揺したり、うーん、影響はすべて出ていると思います。まあ、自分が精神的な病気になったり、うーん、したり、んー、全部影響してるかなと思う (J)</p> <p>影響しているかわからないんですけど、そこらへんが自分の人格形成の中で大事な時期に結構ぐちゃぐちゃになってたから、それで結局、神経クリニックに十何年通うことになったわけですけど (L)</p>
理論的根拠	母親 C の語りから生成した概念。自分の人格をネガティブな被養育経験のせいにするという、客観的に見れていることもあり、独自性のある重要な概念。

概念 1 2	自己コントロールのむずかしさ
定義	自分がされたことをしないようにすることに常に意識を向けている大変さ
ヴァリエーション	<p>怒っちゃったとき。あんなにきつく言わなくてもよかったな、手をあげなくてもよかったなって。毎日振り返っていますね。(B)</p> <p>自分がされたからそうしちゃうってこと多いじゃないですが、だからそうならないように自分を自制するっていうのってすごい大変って思いながらがんばってやっています。(Q 自分がされたことを自制するのが) そう、すごい大変、すごい意識していないとそれをわーって怒らないようにするととか大声ださないとか叩かないとかは自分の中でのすごい鉄則みたいになっているんですけど。(C)</p> <p>全体的に、生きてることに対して無理している。みんなそうだと思うんですけど努力している。自分の置かれていた環境をそのまま出していくと社会性のない人になっちゃうし、子育てもきつとうまくいきませんし。そうやってはいけないっていうようにこう自分を常に修正しているっていう感じ(C)</p> <p>母親の気分のムラに振り回されていた時期が結構長かったと思うんですね。大学進学決めるまでずっと彼女の気分のムラに左右されていたというか。それを押しのけてまで何とかするというのはなかったんで、私が娘に気分のムラをぶつけたときに娘がその私のようにならないように気をつけるようにはしている (F)</p>
理論的根拠	母親 C から、特徴的に語られたデータに名前を付けた。他の概念とダブらないようではあるが、ここが、被虐待経験を受けた人に特徴的なところだと考え、概念として命名した。

概念 13	フラッシュバック
定義	子育ての中で生じるフラッシュバックの辛さ・思い出すと辛くなること
ヴァリエーション	<p>現在, 子育て中ですが, 子どもと接する中で自分が幼いときに両親から怒鳴られたことや理不尽に怒られたことを鮮明に思い出してそれをちょっと苦しく思う事があります (A)</p> <p>お子さんといると余計に) いるからこそ思い出すんだと思ううんですが, でもだいぶ苦しい思いは減ってきました (A)</p> <p>(Q 生まれてすぐから) 生まれてからやっぱり急にいろんなことを思い出すようになりまして。 (A)</p> <p>子どもと接しているとき常になんかフラッシュバックのように似た場面は思い出すので, 常に振り返っている感覚ではあります。 (A)</p> <p>フラッシュバックもある。育児の体罰とか厳しかった。(中略) 母親と暮らすようになって, スパルタの教育をしてくれる人だったので, うーん, 何か, 厳しかったですね。しつけという大義名分あるもん。 (B)</p> <p>似たような場面って出るじゃないですか, なんか騒いだり子どもが言うことをきかないような, きつとこういうときにイライラして母親は怒ってわーって怒ったんだらうなっていうのが, フラッシュバックするんで自分の中でも, (C)</p> <p>私はほんとはこうしかったのと言う気持ちを思い出す。例えばわたしはほんとはかわいい服をきたかったのに母親は正当的な, 自分の好きなボーイッシュなものを着せられていたなど, 服を見れば思い出すし。常に私はこうしかったなということを常に思い出しますね。幼い時のことを (F)</p>
理論的根拠	トタウマの関係で, 心理分野ではよく話される用語であるが, 普通の会話として形のなかに登場した。フラッシュバックだけでなく, 侵入性想起を含む概念として膨らませた。

概念 1 4	ひとりでがんばる
定義	一人で頑張る子育ての辛さ
ヴァリエーション	<p>長女が赤ちゃんのとき、まだ若かったから、生活保護とか知らなかった。でもこーゆう困りごとっていっぱいあったかもしれない。義母が植物人間になったのがその時期で、お義母さんの介護を、生まれてすぐの子を抱えて生活しなくちゃいけない。仕事ないしじゃあどうやって生活していこうかなと。そうゆうのいっぱいあったけど忘れちゃった。覚えていてもいいことないよ (B)</p> <p>夫はほとんど夜遅くて、1 2 時 1 時だし、土日はもう寝ちゃってるって感じで。家族の支援もなくて、自分で 1 人で 2 人みるっていう生活がスタートしてからはやっぱり大変でしたね (C)</p> <p>自分で解決していたって感じですかね。もうほんとに誰にも頼れないから、大変だけど乗り越えていたっていう感じですかね (C)</p> <p>泣いてたって感じですかね。1 人で泣いて少しすっきりして次もがんばろう。自殺しちゃえば楽だなと思ったこともあった。自殺はしないけど。ここから飛び降りちゃえば楽だよなと何度となく思った。この状況から逃げ出したって言う、だから誰か支えがいたらもっと違ったかも。自分が病気になったときも、全部自分でやっていて、まあ、近くに支援がない人はみんなそうだと思うんですけど。東京の人とか。んまあ助けを求めているっていうか、助けを求めている。 (C)</p> <p>入園式を子ども 1 人で参加したことがあったので、誰も出れなくて、そういうときは困るなと思いました。熱が出たときとか、見なかったことにしようと思ったら、そういう時に限って夫がその熱で行かせるわけ？と言う。休んでもらってもいいかなって目で見ると、おれ無理だからと言うし。そういうとき、子育て困るなと思いました (D)</p> <p>パパがいないのでなんでも自分一人で受け止めなくてはいけないので、自分の中でどんどん溜まっていって、今はお父さん帰りが遅いとか単身赴任とかも多いですけど (E)</p> <p>自分っていうもの、例えば仕事をしている人は仕事をしている自分の位置を確立しているけど、1 0 0 %, 2 4 時間ママでいるということがあの結構つらいので、そこのつらさはやってみてわかるものなので、早く脱したいっていう風に思ってます (F)</p> <p>出産。海外で 2 人出産して子育てしたので、知らないことだらけで体力的にとってもきつかったんで、本当に責任感のみで生きていると言う感じで。赤ちゃんのことをかわいいと思わずもう子育てしてました (F)</p>

	<p>修行ですね。あの、自分の苦手なところがすごく明るみになってしまうんですよ。子育てをするっていうことで。それをつきつけられるっていうのが (F)</p> <p>子どもを優先しなくちゃいけないし、なんだろうな、それがものすごくいやなんです。私を見てっていうか、なんだろう、よくあのいろいろテレビとかで子育てでネグレストとか、そういう子どもの虐待のとかを見たりするんだけど、んー、なんだろう、そこでやっぱり同じように思うのは、子どももそうだけど、なんで私を見てくれないの、なんで子どもばかりって、私だってすごく辛いのに、それがうまくこう、なんていうんだろうな、ちっちゃいころは子どもがちっちゃい頃はもっとイライラしてたので、イライラすると物に当たったりとか、キーってなったり、今でもするときがあって、ひどい時はタオルとかをカミソリとかで傷つけたりとか、それくらい、なんだろう、イライラします (J)</p> <p>結局子どもの、あの、は、守られているっていうか、けど、私のこの辛さっていうかは、うーん、自分で、なんでこんな風に思っちゃうんだろうって自分をすごく責めるし、こんな、んー、なんだろうな、すごく責めて、なんてだめなんだろうっていう風に毎日のように思うから (J)</p> <p>子どもが小さい時の方がひどかったですね。必死過ぎちゃって、(もう一人の自分が)自分を責めるんで。だから自分が消えたいっていうか、私も辛いからいいかなって。なんかちゃんとやっとかないと、あれなんか大丈夫あそこのうち、とか言われちゃうし、すごく毎日同じ服着てるとか泣き声がするとかでも言われちゃうし、もっと、私を見て、辛いのは子どもじゃなくて私なんだけどって (J)</p> <p>自分を責める。すごく。ポチっと押して消えられるボタンがあったらとつくに押していると思う (J)</p> <p>遊んであげたいけど要領下手。家事に精いっぱい、プレッシャー、そっちを優先して子どもを後回しにした (K)</p> <p>この子がミルク嫌いってこともすごいあとから知って、なんで飲まないんだろうってすごい悩んでいた時期があったから、この子に対してっていうより、体重も増えなかったりしたから、子育てっていうのに対してイライラして悩んでいた。子育てに関してイライラしていた時期、そこに旦那やら義母が、ガアアって言うてくるから、ストレスたまってこの子に対してイラッとしてしまったことがある (L)</p>
理論的	<p>カテゴリー名と同じ名前の概念名として立たせた。多く語られ、そこに入るデーが多かったが、カテゴリーにしてしまうと何の概念にするかむずかしいのでそのままの名前をつけた。子育ての辛さをかたるとき、その背景にひとりでがんばるという姿勢がみえてきた。分けるとダブってしまう概念なので、名前をくっつけてひとつの概念にした。</p>

概念 1 5	子育ての適切なモデルがない
定義	自分がされていないので適切な子育てがどのようなものかわからない困難さ
ヴァリエーション	<p>思い出すけどそれはやっちゃいけないから何か違う方法をもって思うんですけど、ちょっともどかしいのは、やっちゃいけないことはわかるんですけど、やっていいことの例が、サンプルが自分自身にないので、あまり (A)</p> <p>両親との体験だけをもとにしてしまうと、ほんとにやってはいけないことしかサンプルになって、やってよいことの体験がないので、それがちょっと自分なりに困っている (A)</p> <p>私が子供のころに基本的な生活習慣（手洗い、うがい、はみがき、入浴、バランスのよい食事）を身につける機会が不十分だったので、おそらく、ほかのひとと「普通」の感覚が違う (A)</p> <p>どう接していいのかわからない、その、さっきも言ったあまり正しい接し方がわからないという不便さは自分なりに感じているんですけど (A)</p> <p>祖母が、あのいろいろ一生懸命がんばって、忙しい人だったので、えーと、あの、勉強教えてくれたりとか、なんていうか、普通のお母さんっぽい、細かい世話にまで手がまわらなくて、姉と一緒にいろいろ育っていった感じで。私も今子どもを持って、子どもに対して、何ていうんでしょう、細かい母親的な世話っていうのがちゃんとできているのかなと時々思うことがあって、いろんな、しつけとか、そうですね、たとえば、えーと、あの、幼稚園のお母さんの中には、服も幼稚園に持って行くランチョンマットとかも毎日毎日アイロンかけてきちんと持っていくというお母さんがいて、私はされたことがないので、自分の子どもにもそうする必要性を感じていなくて、そういうお母さんもいるんだなって思ったりしました。子どもに対しても、あの、あまり威厳っていうのか、たぶん、すごくしつけに厳しい母親ではないと思います。(E)</p> <p>これでいいのか、このやり方で本当に子どものためになったのかなと、自分が本当にそーゆうことされていないので、しょっちゅうまあ反省したり、他のお母さんと比べちゃったりということはあります。そうですね、他のお母さんのやり方を見てということが多いです (E)</p>
理論的妥当性	母親 A より、丁寧な語りによってこの概念についての説明がなされた。A は自己分析をし、知性化で子育てに向き合っているが、その中の特徴的な悩みであると感じられた。

概念 16	親と同じことをしてしまう罪悪感
定義	親の養育と同じことをしたくないのに気がつけば同じことを子どもにしてしまう罪悪感
ヴァリエーション	<p>子どもを強くしかった時に、あっ、親と同じことをやってないだろうかとすごく心配になって振り返ります。(A)</p> <p>決めつけて話をしてしまったり、あと話がくどい、なんて自分が子どもを怒っていて思いました。母と父と一緒にだなと思いますし、母は時間が無くて夜ヒステリックに、声をあらげて怒っていたことがあるので、そんなところは母と一緒にだなと、悪い影響だと思います (D)</p> <p>そこまで教育熱心ではない、それは私がそういう風に教育されたから、育ったからだだと思います (E)</p> <p>子どもが何か欲しいって言うと、まあ、だめって言うときもありますけれど、どっちかって言えばなんか与えちゃう方のお母さん。そういうのを、これでいいのかなと反省したとき、自分の子ども時代を振り返って、えーと、なんか、おばあちゃんに似ているのかなって思うことがあります (E)</p> <p>やっぱり、なんか、あの、私の子育てはまあ祖母のやり方に似ていると思う (E)</p> <p>理想的には私は自分が感じてきたことを子どもに感じさせたくないと思っているんですけど、今そのことがいかに大変だということを感じ、結局、同じような母親が私にしてきたような、せかしたり、気分によって子どもにあたったりとか、結局同じようなことを自分が子どもにしていると思います (F)</p> <p>自分の気分のムラを子どもにそのままぶつけてしまうことは似ていると思うんです (F)</p> <p>叱り方とかは、なんか本当に腹がたったときは、なんか父に似ているような気がします (I)</p> <p>母親と同じように子どもに対して言ってしまうたり、するっていうのがほんとによくありますね。なりたくない、あーいう風には言いたくないし、あのとき言って傷ついたし、そう言う風に言ったらいけないんだってわかりながらもそうしてしまう (J)</p> <p>自分の子どもに対して自然に、したくもないのにガミガミ言ってすごい口うるさくなったりイライラしたりとかずっと性格が似てるなと思ってそれがいやで、似てる性格がいやでイライラしちゃうのがずっとある (K)</p>
理論的根拠	<p>〈反面教師〉で子育てをしているという語りとは裏腹に、気がつかないうちに、あるいは、気がつく、親と同じことを…という悩みが語られた。それを常に恐れている、ネガティブな被養育経験のある人の独特に心性であると考えられる。</p>

概念 17	子どもへのネガティブな感情
定義	子どもに対して抱いてしまうネガティブな感情
ヴァリエーション	<p>子どもってどんな存在って聞かれても、えー、どんな存在だろうっていうか。なんかよく宝物とかいなきゃいけないとか守ってあげなきゃいけないとかよく聞くんだけど、私それを考えた時に、えー、何にも浮かばないっていうか、逆にこう大変だなあとか、あー、いなければいいのになあとか、そういうのはいっぱい浮かんでくるけど、んー、そういう宝物とか、いなくちゃいけないとかそういうのは全然浮かんでこない (J)</p> <p>24時間四六時中一緒だと思うと、子ども好きじゃないなと思う。子ども好きじゃないし、産まなければ良かったなと思う。いなくなって欲しいと思うし、んー、子どもなんなんだろうっていう感じ (J)</p> <p>子どもは疲れます。あの、いい風に、なんだろう、言えないです。あんまり。疲れて大変だし、イライラするし、本当にいなくなってほしい。主人と2人きりの生活に戻りたい。散らかされてイライラするし、でも怒っちゃだめだって言われるし (J)</p> <p>もっと大きくなってほしい。めんどくさい、んー、手のかからない中学生、高校生とかになってほしいと思う。主人と2人の生活に戻りたい。そうすればもっと優しくなれたり気持ちに余裕が持てたりするんで…。 (J)</p>
理論的妥当性	母親 J のデータからしか分類されなかったのが削除も検討したが、母親 J の言葉は無視することができないものであり、被虐待児の被害的認知を含んでいたため採用した。臨床群独特の捉え方であると分析した。



概念 18	子どもがどう育つか不安
定義	子どもに対して無理していたり、無視やどなることなどの子どもへの悪影響の不安
ヴァリエーション	<p>自分が育てられた環境に比べれば、マシなのであって、はたして、一般的にごくあたりまえの環境・親子関係を築けているのかは見当が付きません。甘やかしすぎなのか、逆に厳しくしすぎなのか、判断に迷うことも多いです。子供が通っている保育園での様子や先生とのやり取りの中で、そのごくあたりまえの環境をなんとなく推測して、今のところは、おそらくは大きく外れていないのだろうなあとは思っていますが、自信はありません。(A)</p> <p>長女が5年生から中2にかけて、親がしょっちゅう死にたいとわめいていたら不安になりますよね。赤ん坊もいるし、お姉ちゃんは相当我慢していたと思う。私に依存していることが多い (B)</p> <p>全然違うと思います。正反対って感じ。それがうまくいくかどうかはわからないんですけど。(C)</p> <p>実際に言うことを聞かなかつたりとかの場面で叱らないといけない場面になると、無視しちゃうという傾向があって、まずは自分の気持ちを穏やかにしないと向き合えないんで、聞こえないふりじゃないけどそんな感じで、それがなんか悪い影響を与えるかなというのが今の悩みなんですけどー。(C)</p> <p>ほんと怖くて、これから、ほんと、どうやって育てているのか自分のこのやり方でどう子どもが育てているのか心配でしかたない。自分が厳しい家で育ったからある程度自立したんだけど、こういう風にあまりあてにしない、反面教師的にやっている結果、ちゃんと育つか、その結果、将来的に心配っていう感じですかね。(C)</p> <p>一生懸命だけど迷いながらやっているという感じ。どう育つか、上の子甘やかしすぎたかな、小学校入ってから弱過ぎていじめられるのかと思ったりとか。2人目の子は逆に下の子は強くなりすぎちゃって手をかけられなかったからだと思うけど、思春期になったらぐれるんじゃないかとか、なんかもう自分の子育ては常に反省見たいな感じで思っていますね (C)</p> <p>自分の目指している最低基準はクリアしているかなと思うけど、この先については心配という感じですかね (C)</p> <p>決めつけて話をしてしまったたり、あと話がくどい、なんて自分が子どもを怒っていて思いました。母と父と一緒にだなと思いますし、母は時間が無くて夜ヒステリックに、声をあらげて怒っていたことがあるので、そんなところは母と一緒にだなと、悪い影響だと思います (D)</p> <p>夢の話ですけど、駅に呼び出されて、息子の友達にたばこの火押し付けられたとか、この子がちゃんと育つか不安、男の子の親になって振り込め詐欺の気持ちがわかる。何かやってくれるじゃないかといつも思っているから、やっぱやったと思って振り込んでしまうんじゃないかと。今は幼稚園で私</p>

	<p>はわかっているけど、そのうち、全然知らないところに行ってて、無事にやってくれるかというのがすごく不安です (F)</p> <p>子育てに悩んでいるときに、これでよかったのかなとか、あのときあーしてあればこうなっちゃったのかなとかいろいろ振り返ったりします (H)</p> <p>誰かに私の子育ての仕方を客観的に「ここはこうした方が良いかも」とか指摘してほしい。自己流なのでよくわからないから…。仕事と違ってそういう面がやり難いというか難しいというか。自己満足で育ててしまいそうで怖いなと思っている (I)</p> <p>すごく気を遣わせる子にしてしまったなとか、んー、全部私が原因だろうなっていう風に思う。父親、パパはすごく理解があって冷静で私がこう理想にしているような接し方ができるんですけど、私はわかりながらもできなかったりして、イライラしたりしてしまったりしてしまうので、私じゃなかったら良かったんじゃないかなと思う。なんかもっと私がこう理想としているいつもやさしくてニコニコしてて、こう、なんだろう、優しい太陽みたいなそういう母親っていうか、母親に育てられた方がよかったよねと今思っています (J)</p>
理論的	<p>自分の子育てに自信がない、どうしよう、という気持ちを具体的に表現するため、長い概念名になった。母親の困惑している状態がよく表れている概念であり、実際の一番の悩みでもあると感じられた。</p>

概念 19	子どもの発達や不適応への不安
定義	子どもの発達障害や不適応が今後どうなるのか不安
ヴァリエーション	<p>子どもに発達障害の傾向が出ていまして、そのことを主人の方があまり受け入れられないので、相談したいと思ってあまりその話は聞きたくないみたいな感じで、思うような協力は現在得られていないというのが困っているところになります。(A)</p> <p>子どもがお祭りにいた時にどうしても欲しいものが諦められず、ほっぺた叩いたとき、ぶったあと、自己嫌悪だったんですけど、あばれて大変で、しずめるためににも他に手段がなかったなど。年に1回か2回なんですけど、たまに叩いちゃうことがあります。気持ちを納めるのが子どもが苦手なんで、できるだけ考えてからたたきようとしている。かーとなると泣き叫ぶ傾向がありまして、あまり人が多いところでそれをやりますと迷惑かなと、大きくなって、アンガーマネジメントっていうんですか、小学校入る前に準備として連れて行った方がいいのかなとか思ったりとか。できたらたたきたくないです。私も。いい解決方法でないと思っているので (A)</p> <p>上の子はよくできた子なので、このままいけばうつ病になるなこいつと思う。関わり過ぎているので私に対する依存が高いですね。次女はアスペルガーなんですね。生活一般のことが、そうとうできないので、今10歳、11歳になるんですけど、3歳児なみに幼くて、できない、お片づけできない、そういった面でこのままで大丈夫かと思う。教えても駄目だし。三女はそんな次女を見ているので、妹として甘えたい部分あるのに片づけ率先してしたり、朝起こしてあげたり、このままだとちょっと不安です。抱っこさせてあげるときに甘えさせてあげられない。そうするとちいさいとき自己の確立が難しくなる。あとあとひずみが来るんじゃないかと思います (B)</p> <p>一生懸命だけど迷いながらやっているという感じ。どう育つか、上の子甘やかしすぎたかな、小学校入ってから弱過ぎていじめられるのかと思ったりとか。2人目の子は逆に下の子は強くなりすぎちゃって手をかけられなかったからだと思うけど、思春期になったらぐれるんじゃないかとか、なんかもう自分の子育ては常に反省見たいな感じで思っていますね (C)</p>
理論的根拠	子どもが発達における遅れがあるという語りが母親 C から出たあと、愛着障害との関連はないのだろうかと気になり概念化した。結局4人の母親から子どもの発達の遅れが心配とお話しが出た。

概念 20	反面教師
定義	親にされていやだったことはしないように強く思うこと
ヴァリエーション	<p>両親のことは反面教師として捉えて、両親にされたことは自分の子どもにはしないようにと心がけています (A)</p> <p>自分の子どもの場合は、なんかちょっと熱があったとかだったら必ず病院に連れていって、家の中も清潔を心がけているし、ほんとに反面教師に思っています。(A)</p> <p>100%違うようにしたいです。当たり前子どもががんばれば褒めてあげたいし、子どもが悲しんでいればなぐさめてあげたいし、という。ごく普通のことをしてあげたいです。で、私自身はあんまり褒められた記憶はないし、何をしても大人はどうまくはできなかった子ども時代なので、何をしてもなんかここはダメねとか言われることが多かったので、できるだけ褒めてあげたいなと思っています。(A)</p> <p>(料理の大切さ) 母にはそういうこと言われたことがなかったので(子どもには) やってあげなきゃなあっていう気持 (A)</p> <p>なんかそれだけはしないでおこうとかって子どもに対して、っていうのはすごいありますね。そうやって思っているの、例えば叩くとかは絶対にやらないって思って、実際やらないようにしてるとか。(C)</p> <p>結構叩く人だったから私は叩きたくないみたいな (C)</p> <p>親以外の人物ですよ？差別しないようにしよう。反面教師って言う考え方、人の悪いところは真似しない。自分がやられていやだったことは人にはしない、という考え方ができましたね。いいとはいえないけど、自分の長所にはなっている。誰かをいじめたりはしないし、誰とでも仲良くしようとして過ごしているし、人の嫌なことはしない、いい方に。社会活動においては。(C)</p> <p>父みたいにそのときの気分で人を怒るっていうのがとっても真似したくないなと思います (D)</p> <p>母があまり何もできない人だったので逆に私は逆にあの、何て言うか、子どもにかまってあげたいっていうのがあって、えーと、小学校とかでボランティアとか父兄が結構参加するイベントがあるんですけど、そういうのにこまめに出るようにしたりとか、とにかく私は母に対してえーと、なんか、自分の友達になんかお母さんが会ったら恥ずかしいなっていう気持があって、子どもにとって恥ずかしくないお母さんでいようと思っています (E)</p> <p>そういった自分が感じてきた思いを子どもにはさせないようにしようと思っていることは母親には話してません (F)</p>

結局母親が仕事，ワーキングママだったことで，もう私はワーキングママには子どもが小学校に上がるまではならないという強い気持ちがあって子どもを産みましたね。結局迎えに来るのが最後だったりとか，そういう寂しい気持ちを子どもにはさせたくない。0歳，1歳の頃から保育園に預けることだけはしないぞっていう風な気持ちを持っていました（F）

気分のムラを子どもにぶつけないということでは，母親のしてきたことっていうのとは180度違う母親でありたいというのが理想ですね（F）

私は強迫と感じてやめられなかった習い事とかあるんですけど，基本的には娘の意思を尊重しようという気持ちが常に働いてます。私はストレスとかを与えないで彼女が決断できるように，そういう関係でありたいと思っている。やりたいと思ったことはサポートするけれど，無理にさせるようなことはしないようにしている（F）

親にこうしなさい，あーしなさいとかレールの上を走ってきた感じで育ててきたので逆に自分の子には選択をさせてあげたい。私が小さいときダメって言って言われて習い事をやらせてもらえなかったもので，自分の子には秘めた可能性あるかもしれないのでいい部分を伸ばしてあげたいというか，興味を持ったことは一通りやらせてあげられるような親になりたいと思っています（G）

こうやりなさい，ああやりなさいというのではなく，自分のはのびのびとさせてあげたいという思いがある（G）

親が言った通りにしちゃって後悔というか，だから子どもには自分の好きなことを見つけてほしくて，それに向かって頑張ってもらいたいっていう気持ち大きいですね（G）

言うことを聞かないとお尻を叩いてみたり，そういうことはしたくないですね。布団叩き棒で。逃げ足速くなった。脅かされてて，それはよくないと思いやりたくないからやっていないですね。脅かしですよ。脅かしはよくないと思ったのでそうおもったことはやってないですね（H）

違うようにしたい点は，3姉妹で無意識にその親が比べる発言をしたので，それがプレッシャーになったり，傷ついたりしてたので，そういうことはしないようにしています（I）

父を反面教師にして家庭的な人と結婚できたのかなと思ったりします（I）

母親のようにはないようにって思っているんですけど（J）

すごく怖かった印象があるので，印象っていうかその感情しかないの，子どもにはなるべく怒らないで，冷静に話を聞いてあげて，こう思ったんだね，こう風に思ってこうしたんだねっていう風に，冷静に対処するっていうか，冷静に，自分自身も冷静に，冷静に言って，ダメなことはダメ，いいことはいいっていう風に褒めたり叱ったりしてあげたいっていう風に思っています（J）

似てきちゃう。それがいやで仕方ない。同じことはしないようにしようと思うけど（K）

理論的	<p>1 番最初に思いついた概念であった。実際に概念名を言葉にしている母親も数人いた。カテゴリーを【子育ての方略】としたが、カテゴリーに上げていいほどのキーワードとなった。〈反面教師〉と考えながらも〈親と同じことをしてしまう罪悪感〉という対の概念が生成された。〈反面教師〉を心に誓いながらもうまくいかない母親の様子が罪悪感として語られた。また、〈反面教師〉を強く意識することによる概念〈頭で考える子育て〉による苦しさも語られた。</p>

概念 2 1	頭で考える子育て
定義	自然にできず頭でどう対応したらいいのか考えて行う子育て
ヴァリエーション	<p>(Q 一呼吸おいて整理してお子さんと) はい、そうですね、それを毎回しているんだと思います。自分で。そうでないとできないかなあ。反射的にできたらいんですけど。(A)</p> <p>いつも一呼吸おかないと。保育園の先生はこうやってほめていたとか、両親以外の自分が接した大人であるとか、現在子どもがお世話になっている大人たちの対応を思い出してその場面に適した、やってよいことを自分なりに選択している感じで。だからなんか反射的にほめてあげるとかはできていないんだと思います。ひとつひとつ考えて選択して、褒めてるのかなって自分で思います。(A)</p> <p>反射的に怒鳴っちゃうと、娘の方がやはり発達障害の傾向がありまして、大きい音がすごく苦手なので、反射的にたとえば怒鳴ってしまうと、怒鳴られたことのショックで、ほんとに伝えたいダメなことが伝わらないものですから、ちょっとやっぱり穏やかに接しないといけないというのもありまして、怒るのもちょっと反射的にはできないです (A)</p>
理論的根拠	母親 A から語られ、大きい概念となると考えたが、他の概念に引っ張られてしまったデータが多々あった。〈自己肯定感の低さ〉〈反面教師〉などとダブる概念であった。

概念 2 2	自分の子育てへの満足感
定義	親ができなかったことを自分はできているという満足感・自己肯定感を持つこと
ヴァリエーション	<p>母にされたこと、同じような場面で、母にされた、父にされたことと、ではないことをしてあげられたときにすこしちょっと満足感というか達成感というのがあるんだと思います。ちゃんとできたという気持ちがある (A)</p> <p>子どもが娘なんですけど、やっぱり女の子なんで最初ピンク色にすごい魅かれて、やっぱり女の子ピンク好きなのはそんなに悪いことじゃないよなと思って、欲しいって言ったピンクのものをちゃんと買ってあげるし、そういうことを、好きだって言う色をちゃんと褒めてあげられたときに、そうだよね、ピンクかわいいからねとか、女の子らしくってかわいい色だよね、って、本人が好きなのをけなさずに褒めてあげる言葉が言えたときに、ああ、自分はこう言ってもらいたかったなあって思って。そんなことの積み重ねでだんだんちょっと、なんだろう、自分自身のその傷ついたところもちょっと治ってくるようなところがあります。(A)</p> <p>自分が育てられた環境に比べれば、子供には、精神的にも身体的にもよい環境を与えられているし、よい親子関係を築けていると思っています (A)</p> <p>毎日あったことをあーだよこーだよって毎日話している。普通の高校2年生は話さないじゃない。でさ、こーゆうのがうざかったとか、ものすごいオープンで話してくれるので普通のおうちより仲いいんじゃないかな (B)</p> <p>仕事をしたというのも大きなこと、誰もサポートいない中でやってきたという、自信もあったんじゃないかと思います (D)</p> <p>幼児期から結構、療育に通ったりだとか、子どもの様子っていうのを一番に優先順位において行動している部分は180度違うと思います (F)</p> <p>結構ほんとに子ども優先できたという自負があるので、がんばってそういうとこでよかったなっていう、がんばった甲斐があったなっていう、そういうとこで自分も嬉しくなったり、私が愛情のかけ方を間違ってたのかなと (G)</p>
理論的根拠	母親 A の語りをここに分類したが、最初はこの概念はつくっていなかった。非臨床群であるため、普通に満足感が語られていることもあり、重要性を感じなかったが、他に所属することのできないようなデータがそろったので概念として作った。



概念 2 3	親の養育の一部を受け入れる
定義	親の養育態度の中でここは良いと思える部分について同じようにすること
ヴァリエーション	<p>母と一緒に暮らすようになってから、ストーカーしてた父が自殺して、落ち着いて安心して暮らすようになった。洋服や料理、すべて手作りで、仕事の合間にやってくれたりとか、その影響を受けている。自分の子にもレトルトや冷凍食品は与えないようにしている (B)</p> <p>寝る前に絵本を読んであげたり、食事に手をかけてあげたりしているところは似てる (B)</p> <p>冷静に考えると、まあ全部が全部もちろん親のやったことがダメって言うわけではなくて、例えば好ききらいなく食べなさいとか、そういう基本的な生活習慣みたいなのは子どもにもそういうようにしているっていうのはありますし、あとなんか、いいもの食べさせないとだめだよみたいな、食品も、へんなもの、安いもの、簡単なものばかりじゃなくて、ちゃんとしたものを、そういうのは守っている。そうだなあって。早く寝なさいとか寝る時間を多く取るとか、そういうのはよかったし、今もそうしているっていうのはありますね。(C)</p> <p>旬のものを食べる、農薬がかかっていないとか、自然に逆らわない食事の仕方っていうのは大切だなというのが今も思いますね (D)</p> <p>うそをつくのはいいけど、うそは自分にかえってくるんだからねと言われたのがすごく的確だったことが今でも覚えていますし、何かことあるごとに面倒くさくてうそをつきたいなと思うときも、ふとそれが蘇ってくるので、正直にあるべきというところが私の生活の中で、ちょっとした、はどめじゃないですけど、抑止力になっている (D)</p> <p>両親に関してはやはり自分に正直でいなさいとか (D)</p> <p>母が大事にしていたごはんのことが今も影響している (D)</p> <p>あれやりたい、これやりたいって言っても、えーそれ？って言われることが無く、じゃあやってみたらっていつも後押ししてくれるとか。それが2人は共通していたと思います。そーいう気持ちでいつも子どもに接してあげたいなと思いますね (D)</p> <p>例えば初節句とか今度七五三とか、1歳のお祝いとか、そういう子どもの節目節目の行事ごととかに関しても、しっかりお祝いとかちゃんとくれたりとか、なんていうんですかね、そういう昔からの、母も自分の親からやってもらったことを私にもちゃんとやってくれてるっていうか。私もこの子たちにそういういい伝統というか、そういうことを継承していけたらいいかなと思っているんですけどね (G)</p> <p>母親の影響が一番多いですね。いろいろ教えてもらったりだとか言われたこ</p>

	<p>と、自分なりに言われていいなと思ったことは自分の子どもに教えていますね。うそはついちゃいけないよだとか、目上の人の言うことをよく聞くようにとか (H)</p> <p>高齢者をいたわる気持ちとかは、今っていくつになっても親に頼るタイプの人が多いですけど、大人になったら逆に今度は老いた人のたすけに、自分が大人になるっていうことを、逆転していくっていう、そういうことを母から学んだ (I)</p> <p>いいところは真似はしたいかなっていう感じ (L)</p>
理論的性	<p>インタビューを聞くまでは予想もしていなかった概念。この概念のような考えを持つことができることが、非臨床群であるゆえんだと思えるオリジナリティのある概念。この概念に含まれる食にまつわる語りが多く聞かれたので、最初は、〈食に関する被養育経験〉という概念を作っていたが、内容より行動に注目して概念名を変更した。</p>

概念 2 4	親の態度を前向きに捉える
定義	時間の経過・自分が親になったこと・親が老いてきたこと等によって生じた、親を受け入れようとする気持
ヴァリエーション	<p>私も働き、それなりにいろいろ世間にもまれると、ちょっとお父さんに対して歩み寄ったりその当時の気持ちがわかったりっていう、まったくもっていやという気持ちよりかは少し理解することできるようになった。好きとか嫌いとかではなく、冷静にみれるようになった (D)</p> <p>家がいやだったということはある意味自立を促してもらえてたのかなという気持ちも少ししたかなと思います (D)</p> <p>最近それが悪気があってではなく、母は自分の気持ちに正直過ぎるのでオブラートに包めない人だということがわかった (D)</p> <p>母は私が 20 歳のときに亡くなったので、亡くなった後は、母は母なりになんか一生懸命やってくれたのかなと思っています。(E)</p> <p>今の方が父との関係は良くなっていて、父もいろいろ一人で暮らすことになっていて寂しかったんだろうとか、えーと、いろいろ我慢すること多かったんだろうなと思ってますけど、今は父に感謝することも多いですし (E)</p> <p>こういうやり方でいいのかなとかいろいろ迷うことも多いですけど、別に虐待されて育ったわけではないのでそれはよかったなと思います (E)</p> <p>今はすごくよく理解して、子育ても、遠くにいるんですけど協力してもらっていますし。父親も相変わらず、会話ないですけど、温かく見守るという感じで (F)</p> <p>今思うと、世間の高校生ではできないような経験をしたかなという逆に。友達と話していても話題が絶えないというか。今となっては感謝していますね (G)</p> <p>父はもう亡くなっちゃったんで、こうやって東京に学費をだしてもらって、今こういう生活があるのも父のおかげなので感謝しているっていう感じ (I)</p> <p>母については、今自分が同じような、子どもを産んでみて、このような環境で、すごく大変だっただろうなと (I)</p> <p>父に関しては、私がしっかりしていた、で、ませていたこともあって、生意気に見えたのか、私が、子どもなのに、何でも 1 人でやれっていう感じで。例えばちょっと遠くに行くのも、そんな感じの対応だったので、最初は不安ながらも悔しくてそういう自分で何でもこう調べて行くとかし始めたんですけど、結局それが人に依存しないで済むように、私の場合は、なりました (I)</p> <p>結局父に突き放されたタイミングが自分にとってはよかったのかもしれない</p>

	<p>いですね (I)</p> <p>母親は自分が子どもを産んでから逆に母親の方が頼りになってるのは確かなんですけど (J)</p> <p>私自身が母親になったから思うんですけど、子どもの為なら我慢いろいろできたりするんだろなって思うんで、そういう点ではすごい母親に対しては尊敬している (L)</p> <p>父は死んじゃってるらしいんで。なんだろう、神奈川かなんかの病院で亡くなったみたいに聞いたんだけど、でも仕事中だって聞いたから、くすり止めてがんばってたのかなあとか、そんな感じで思っていました。(Q どう) どうっていうか、思い出になっているっていうか、なんだろうな、嫌いではなかったんですね (L)</p>
理論的	<p>前向きな発言ばかりではなかったが、仕方がないという25の概念ともかぶるデータもいくつかあったが、それでも少しでも前に進むためには重要な概念となった。</p> <p>普通に前向きにとらえられる母親と、苦しんでやっと前向きに考えらる母親との差があった概念である。</p>

概念 2 5	親の態度の合理的解釈
定義	親はああいう状況だったから、あんな態度をとっても仕方なかったと思ひ込もうとすること
ヴァリエーション	<p>両親ともにちょっと何か発達障害的な傾向を持っていたのではないのかなと考えています。で、両親にしても悪気はなかったんだろくなっていることはなんとなくわかるんで、今はそれが自分なりに一番合理的に納得できる理由です。ただそのことに本人たちも気付けずにきたんだろくなと思っています。(A)</p> <p>今同じ子どもが3人という状況なので、仕事をしながらよく3人育てたなと思うと頭があがりません。母も怖かったけど、まあ、ああするしかなかっただろうなと、好きとか嫌いというよりもああするしかなかったなと、理解することができた (D)</p> <p>今考えればその年齢で共働きで子育てしていて保育園に預けて年子を育てていたら、そうなるのは当然かなと思います (F)</p> <p>若かりし頃の子育てだったから大変だから仕方がないとは思うけど (F)</p> <p>母親は小さい頃から、もう今思うと、母親が怒る役割で、父親がなだめる役割だったのかなと思うんですけど (J)</p>
理論的根拠	母親 A が、親を発達障害だと思わないとやってられない、という内容を語ったとき、そういう考え方があるんだということで概念にした。名前を付けるのが難しかったが、最終的にはしっくりいく、[おりあいをつける]プロセスへの移行にとって重要な概念となった。

概念 26	あきらめて期待しないようにする
定義	親に期待せず，会わないようにしたり距離をとったり諦めたりすること
ヴァリエーション	<p>現在のところ，ちょっと残念なんですけど，父の方が先年なくなりまして，母の方は，健在なんですけれど，ちょっとやっぱトラブルになりがちなものでしから今はちょっと接触を避けている状態です（A）</p> <p>やっぱ思い出すと涙が出てくる。んー，親と接触を避けるようにしてだいぶよくなったんですけど，やっぱちょっと思い出すと苦しいです（A）</p> <p>本人たちに聞くとものすごく大事にしたと思っているし，結構理不尽なことを言われた話をしても，覚えていないし，お母さんがそんなこと言うわけないでしょとかとかまず記憶にないし。大人になってから母に話したことあるんですけど，覚えていないとか，あれ，なかったことになっているんだみたいなことが多かったですね（A）</p> <p>1回高校生のときに一度言ったことがあるのと，とにかく母とのやり取りですごく疲れてしまうので，手伝っていることとかにそんなに文句を言わないでほしいとかそういうことは言ったりとか，大人になってから小さい頃こう言われたことがとても辛かったっていう話をしても，そんな昔のことを持ちだしてあんたは執念深いとか言われて，たぶん自分が覚えているっていうことは消化しきれていないから覚えているのであって，それで言ったんですけど，やっぱ届かないですね（A）</p> <p>どのみち遠くにいるのであまり会わない。てきとうに連絡とっててきとうに話すくらいには回復している。でも長い時間は一緒にいられない（B）</p> <p>自分の父とか母はいましたけど，関係悪いせいか頼ろうとしていないので。うちから出てからは支援求めるのは0なので，実家に帰るのも自分が一番苦しいときに助けてもらおうとは思わない。親からの支援は期待していないので（C）</p> <p>今は年老いているんで人生を全うしてくださいって感じ。で，別に怨んでいるとかは全然なくて，あの，そうですね，穏やかに過ごしてほしいなっていう感じですかね。ただ父親が強いついていうのはずっと変わらないんで，母親が父親のいいなりっていう状態も，DVってまでは言えないけど言語的なDVっていうのは見てていやだなと思うから，できたら父親が早く死んで（笑）母親が自由になれたらいいなっていう風に思いますけどね。（C）</p> <p>父親は逆にあまり関わってこないっていうか，んー，あまり好きじゃないかな，いろいろあって（J）</p>
理論的根拠	26と27の概念は，人によって分かれるような内容となった。あきらめて期待しないようにする，としても，そのように自分の中で整理することによって，前に進めると解釈できる。

概念 27	家族のサポート
定義	夫や今の家族のサポートに支えられていること
ヴァリエーション	<p>私が子供のころに基本的な生活習慣（手洗い、うがい、はみがき、入浴、バランスのよい食事）を身につける機会が不十分だったので、おそらく、ほかのひとと「普通」の感覚が違うので、夫の意見を聞くようにしています（A）。</p> <p>夫の協力はありがたいと思うものの、もう少し踏み込んで関わってほしいとも感じています。保育園の送り迎え、運動会などの行事への参観といったルーチンワークはこなしてくれますが、保護者会を含めた保育園とのやり取り、発達相談でのアドバイスの内容検討や実行、情報収集、園への報告、意見のすりあわせ等、あれこれ考えて試行錯誤する部分には全く関心がなく、協力も得られていません。子どもの成長にかかわることで、本来なら一番に相談したい相手なのですが、話をしても関心を示してもらえない状態で、不満というか悩みのタネでもあります（A）</p> <p>サポートねえ、ないなあ、ない。運動会も来ない。卒園式も来るかわからない。長女の小学校は来たことないし、長女の運動会も1度も来ない。次女は大好きなのでかろうじて運動会に2回来たかな。三女は保育園に一度も来ませんでした。生活でも、生活能力ない人なので、手伝ってはくれません（B）</p> <p>夫は精いっぱいやってくれていると思うんです。子どものことはすごい好きみたいでよく遊んでくれているんで。これがマックスかなと思っている。（C）</p> <p>義父母はたまにみてあげようかと言ってくれたりするんですけど。でもなんかその私としてはみてくれるなら毎日この時間やってくれる、例えばお迎えに行ってくれるとかだといいけど、自由に生きている人なんで、思いつきで今日暇だからみてよっか、とかだと逆に生活のリズムが崩れる。子どももその時だけ甘えていろいろ食べてきてご飯が食べられなくなるとか、私のストレスが増す。お礼も言わないでいると悪いし、ご飯も作ってわたさなくちゃいけないとか、気を遣うことが増える。逆に頼むの大変（C）</p> <p>あまり認めたくないけど。よく考えると（夫に）してもらっている、ここぞというときにしてくれているだろうなと思う（D）</p> <p>土日は父がちょっと子どもたちと遊んでくれたりするんですけど、父も母も自分の趣味があり、そっちの方を優先していて、子を見るのは私。あんまりあの、助けになってくれることはないんですけど、まあ私ももうあてにはしていないっていう感じです。あの、母の方は実母ではないので、母は父の再婚した人なので、実母ではないので距離ある感じで、だからあまり気軽には頼めないし、あまり接点がない（E）</p> <p>うちの家族の場合は土日以外不在で、そのことを伝える時間もないので。それぞれの持ち場で、主人は仕事、私は子育て、家事、持ち場で100%がばっているんで、それぞれの持ち場を保つことで精一杯というのは、ちょっとバランスが悪いと思います（F）</p>

	<p>主人は結構忙しく外に出ちゃう，組合とかに入っていて，外に出ることも多くて，夜はいないことも多くて，1番助けてくれるのは友達ですね，ママ友。すごくほんとにありがたいですね。家族のサポートよりも頼りになるというか，こんなこと言っちゃ怒られちゃうかもしれないけど。お姑さんもそんなになんですよ，うちのお姑さん，なんか一歩引いている人なので（G）</p> <p>夫婦で協力し合って子育てをしている。と感じています。母や姉も助けてくれるので，感謝しています（H）</p> <p>自分の中でストレスの解消法を見つけました。あまり頼ってはいません。夫は平日は深夜で，土日の予定も多いですが，子育て（日常の）は私の仕事と思っているのであまり追い詰められることはないです。悩みが発生した時は，夫が話を聞いてくれます（I）</p> <p>サポートはとってもらってくれると思います。やっぱり。保育園も，病院の先生に診断書を書いてもらって入れることができたし，私が調子悪いときに母親にきてもらって子どもをみてもらったりとか，私がイライラして一人にならなくなったときに，主人がみてくれていて私が2階でイライラをどうしようもないのを叫んだりを2階でするとか，そういうのはしてもらっていると思う（J）</p> <p>主人がまず手伝ってくれない。手伝ってくれないのはまあいい，ただ，口うるさく命令するのがいやで，それが子育てに影響してしまう（K）</p> <p>旦那があまりにもひどいから，ひどいっていうか，頼りないからほとんど母親の方にいるし（L）</p>
理論的	<p>最初はサポートがあるという意味で家族のサポート概念としたが，夫への不満が語られて来たので，オイジティブとネガティブの語りを別の概念に分けることも検討したが，分けずに，夫（家族）について語られたデータをこの概念に振り分けることにした。</p>



概念 28	人に話すこと
定義	自分のつらい経験や悩みを共感してもらうことで癒えること
ヴァリエーション	<p>夫に話すことはあります。子供に身につけさせたい生活習慣の内容や、身につけさせるための協力をしてもらいたいときに話します (A)</p> <p>主人に小さかった頃の話を話そうとしても、主人の方はすごい温かい家庭なのでピンとこない。親と上手くいってない関係をあまりピンとこないようで、あまりその話をすごくすると私が文句を言ってるような感じになっちゃってあまりよくないなあと思ってあまり言えないなあっていうところもあって。むずかしいですね、あんまり言い過ぎるとよくないし。ほんとは誰かに言いたいんですけど (A)</p> <p>母本人にぶつけたくらいかな。4, 5年前に (B)</p> <p>(話すのは) せいぜいだんな。だんなの方がヘビーなのであんまり話せないですね (B)</p> <p>夫にもそこそこ話してる。70%は話している。柱に縛られたとか具体的なエピソードは話さないけど。結構叩く人だったから私は叩きたくないみたいな、育児方針の中で叩かないとか (C)</p> <p>友達も似たような境遇で、両親が離婚して、父親いなくて、父親がこういう人だから、傷をなめ合うとかじゃないですけど、その子には20歳位のとき言ったかな。というくらいですかね。あとは、そうですね、私も大学院にいったことあるんですけど、友達に心理の子がいて、やっぱり自分の今後の進路を迷った時、結婚しようか、それともやっぱ仕事で地元に戻ろうか岐路だったんですけど、悩み聴いてもらったとき、そもそもどういう感じで育ってきたのか、そのときに結構深くまで話したかもしれないですね (C)</p> <p>だんなの方がヘビーなのであんまり言えないですね。だんなのお母さんが、彼が5年から中3のときキッチンドランカーで、ガス管加えて自殺してみたり、高速飛び込んでみたり、私の上をいく自殺歴の持ち主だったのでちょっとかわいそうでね。話せなかった。 (B)</p> <p>負の部分の人を人に話したくないなと私が思うのであまり話してない。あと夫くらいですね。いろいろ問題がある家なので、話とかなないと結構ちょっと大変になる (D)</p> <p>(誰かに被養育経験を話すことは) ないですね。母のエピソードがないので、えーと、まあいろいろ複雑な家だったので (E)</p>

	<p>子どもの友達のお母さんたちとしゃべったりしていると気が晴れるんですけど。なんかそーゆう機会がない連休のときとかあと病気とかでお休みしているときとか、子どもの相手が私だけになってしまうのでなんか、あの、きついですね。子ども持っているお母さん同士でないとわからないことっていうのが結構あって、なんか、まあママ友なんですけれど、話聞いて通じ合えることも多いですね (E)</p> <p>お友達とか、心理士さんとも会っているので、自分の考えを整理したりとか話すことによってストレスを軽減したりするために話をします (F)</p> <p>主人には結構話しますね。友達とかたわいもない話しのときとか話したりしますね (G)</p> <p>主人に、私はこういう風にされたから、こういう風にしてあげたいな、みたいな、理想を言ったりします (J)</p> <p>児童相談所とかそういうところに行けば虐待をする親の会とかあるんだろうけど、そういう会に参加する自分ってなんなんだろうって。虐待って変な風に思われるのはいやだし。子ども消えて欲しいよね、ああ、わかる、みたいな、そういう話をして、じゃあまた、みたいな、そしてまた集まって、超やだったんだけど、みたいなのに共感してもらえるような (J)</p> <p>親の会を作ってくれたらいいなあって。子育てして大変で辛くってっていう、そういうのがあれば遠くても行きます。きっと楽しみになると思います。わかるわかるって言ってもらえるだけで、そうだよーっていう (J)</p> <p>そのお母さんは、子育ての支援活動みたいなのに参加されている方だったので、なんか若干カウンセリングみたいな感じで話を聴いてもらったなと思います (D)</p>
理論的	<p>話すことの意味は、2通りあると考えられた。治療的な語りと、友達とのおしゃべりであった。どちらも共感してもらえることで癒しになっていったとかがえられるため、一緒に概念化した。</p>

概念 2 9	専門家への相談・社会的サポート
定義	育児相談や治療的介入など専門家に救われたことや社会的サポートに助けられたこと
ヴァリエーション	<p>保育園の先生，発達相談室の臨床心理士の先生。困ったことがあったときに，親身に相談にのってくださり，一緒に考えてくださるので，とてもありがたく思っています (A)</p> <p>厳しかったですね。(Q おじいちゃんおばあちゃんの前ですか) しつけという大義名分あるもん。うつ病になってしまった。子どもが小学校のとき，次女の妊娠，出産後，産後うつ病になりました。自傷行為まではいかないけど，とにかく，死にたいと。何かなと治療受けていくうちに母親に対する不平不満，愛情不足，そーいうのがカウンセリングでわかりまして，3年，4年近く葛藤していて (B)</p> <p>自分では普通だと思っていた。そーゆうのが鬱積していると知らない状態で，カウンセリングで自分がわかった (B)</p> <p>次女産むときに，区はサポートしてくれる。施設はショートステイを利用してまして，親がみてくれるわけでないので，保育園の年長さんのとき，三女産むとき同じようにショートステイを利用しました。あとは相談，いっぱい使っているかもしれない。長女思春期相談も。前に不安定に，周りに悪い友達がいって万引きして相談に。保健所の思春期相談所みたいな。次女がアスペルガーってわかる前，警察の児童相談窓口があるんですけど，そーゆうところに相談して，サポート相談にいったりした。相当使っていると思いますよ (B)</p> <p>施設は子育ての，育休中の子育て広場地域のサークルみたいなのはちょこちょこ行った (C)</p> <p>この時間は相談にいきますとかはしないんだけど，相談に行くことはしないけど，そういうところに保育士さんとかサポーターがいて相談にいったりしました。おむつを取る練習をそろそろしようかなとかたわいもないことですけ相談するっていうのはありましたね。深いところは相談しないですけど (C)</p> <p>ファミリーサポートセンターの援助会員さんのおばちゃんにはほんとに頼りになりました (D)</p> <p>友達もいなかったときに，校区に1つずつ児童館があったので，そこに行って子ども遊ばせる，そこでお友達ができる，そこで情報貰ったりとか，そういう場所がすごくよかったなと思います (D)</p> <p>情報誌を無料で配布されて，インターネットの掲示板もやってますってあって，まあ遊びに行くところもわからなかったんで，そこに登録をしてその中で話をして近くの友達が，そこから人の輪が広がったっていうのがありました (D)</p> <p>電話相談したことはあります。(Q 子育て相談に出向いたりとか) あります。あります。(Q 結構活用を?) そうですね。(Q 幼稚園とかは?) 幼稚園もたま</p>

	<p>に、1回、なんか相談やってますって書いてあったのでどんなもんだろうって感じで相談に行ったことはありますけど。(D)</p> <p>園の先生があの、結構、あの、なんか、あの、困った時はいろいろアドバイスとかいただいたことがあります (E)</p> <p>年中の息子も、言葉の遅れ、その他行動や子育ての悩みを、OT, ST を受けて、その Dr とその、訓練士、そこの所属のすべてを把握している心理士さんに定期的に話すことで、あの、相談にのってもらっています。それがなければとても考えられないくらいにしんどいことだと思いますね (F)</p> <p>知らない子にもすぐに手が出ちゃう子で、何回もだめよだめよって教えても手が出ちゃって。私がすごい悩んじゃって、遊ばせたくなくなっちゃって。そういうときに1回相談に行きましたね。保健師さん (G)</p> <p>A 区の教育センターに相談に行きましたね。小4から中3までの間、週に1回土曜日に行っていましたね。(Q どういった) えーとね、まあ、宿題をやらないだとかそういうがんこな性格とかがあったので困るんで。子どもは子ども、親は親で相談してみてくれるんで、そこに行って専門の人に相談してっていうのがありましたね。いろんなことの話聞いてくれるのでそこに行くといわたりとすっきりしました (H)</p> <p>カウンセリングに行っているので小さい頃からの話はずっとその先生と、あと、結婚するまでは、私が精神的に調子が悪くなるまで、なってからはずっと、母親も父親も、私のこれがいやだったあれがいやだったというのを聞きながら、あの、先生と話していました。小さい頃はこうで、母親の態度がいやで、父親のあの態度がいやでとかそういうことは話しています。結婚前と結婚してから。結婚してからは子どもができる前までは主人と2人で入って私が話して主人が聞いているという感じでしたが、今は子どもが大きくなってきたので私だけ行って私だけ話してくる。子どものことが結構多くなってきたので、子どもが自分のことを言われているとわかってきたので (J)</p> <p>電話とかで、こーゆう風に、2歳くらいかな、こういう状態なんですけどどう接したらいいですかとか、そういう、保育園とかで配られる、そういうのに電話したことがあるんだけど、実際に利用したりとかはない (J)</p> <p>カウンセリングの先生は男の先生です。最初はほんとにほんとに自分を話すまでに3年くらいかかった。それまではいつもの自分というか、つくった自分、言えなかったけど、今はだいぶ言えるようになった (J)</p> <p>児童相談所とかそういうところに行けば虐待をする親の会とかあるんだろうけど、そういう会に参加する自分ってなんなんだろうって。虐待って変な風に思われるのはいやだし。子ども消えて欲しいよね、ああ、わかる、みたいな、そういう話をして、じゃあまた、みたいな、そしてまた集まって、超やだったんだけど、みたいなのに共感してもらえるような (J)</p> <p>先生は先生だけど、通い始めはすごい私たぶん泣いてたような記憶があるから、それから考えると今お薬を全く飲んでないから、なんか十何年ものつきあいでいろんなこと変わったなって感じ (L)</p> <p>3, 4か月のとき、体重が少ないので毎月計りに来てくださいとか言われて。</p>
--	---

	<p>育児の母子手帳のグラフに沿ってなくちゃいけないという感じのところだったから、それじゃないと健康でないっていう考えだったから、2か月でやめてしまった。体重なんて自分で測ればいいと思うし、保健師といえちょっと考えが違ったから。2か月いってから止めてしまった (L)</p> <p>病院の方針とか、その保健師の方針とか、あとは何だろう、子育てをしてきた人たちの押し付けとか、そういうのをなんだろう、やめてほしいとか困るっていうか。なんか尊重した上でっていうのがないから、こうだからこうしなさいっていう感じだから、それが困ってたかな。今は自分の意見通しちゃうけど、ゼロから始めているのにいろんな知識を言われてもわけがわからなくなるからそれが困る (L)</p> <p>要は始めての子育てだから、ほとんど知識がない中で育てるわけじゃないですか。今はいろいろ調べたりとかしてこの子に合っているか合っていないかで判断するけど、ほんとに生まれたての頃とかはよくわからないまま、周りにいろいろ言われても、全然この子に合ってなくて、さらに爆発しそうになったりしたから、なんだろう、変な言い方、こう昔の時代の育て方と今の時代の育て方も違うし、あと保健師さんも言ってること人それぞれだし、なんか市によってとか、それによっても考え方が違うから統一してくれとは言わないけど、なんかマニュアルあるという話も聞いたから、マニュアルがあるくらいならすべて統一してほしい (L)</p>
理論的妊	<p>専門家への相談と社会的サポートを別の概念にすることも検討したが、境界線がつけにくいこともあり、ひとつの概念としてまとめた。想像以上に専門家に相談しているケースが多かった。社会的サポートについてはほとんどの母親が何らかる支援を利用していた。</p>

概念 30	被養育経験の捉え方を変える
定義	被養育経験を自分なりに前向きに捉えようとする事
ヴァリエーション	<p>私も人間だし、頑張り過ぎないでこうって思うようにしようと思います。で、子育ては、自分で子育てをしてみて、自分は子どもが好きじゃないんだっていうのがわかったし、それなら無理してがんばる必要もないし、できることをやっていこうという気持ちになれるようになってきました。やっぱり転勤を何度か経験して、無理しなくていいんだなっていうこと、まわりに甘えるっていうことも大事だなと思いました (D)</p> <p>できてないことを悔やむのはもう、以前はすごく思ってたんですけど、それをするのをやめようと思ったっていうのも大きなことだなと思います (D)</p> <p>悩んでいるっていうこと自体がもったいないなと、時間の無駄だし、いいことない、ということが (D)</p> <p>兄妹が2人で、うちは男と女ですが、2人いてくれてよかったなということと、こういうやり方でいいのかなとかいろいろ迷うことも多いですけど、別に虐待されて育ったわけではないのでそれはよかったなと思います (E)</p> <p>自分がそういう病気になってなければそういう人の気持ちもわからないし、あと、父親がそういうくすりだのやってたのとかもなければ、そういう人の気持ちも知らないしっていうんで、他の人よりは少し経験していることが多いからそういう人の気持ちを少し考える人になってきたかな (L)</p>
理論的根拠	概念の中のデータの内容にはばらつきがあったが、この名前をつけることによって、捉え方の変化が見られることの重要性が強調された。大きな概念であるので、どんなエピソードも含んでしまいそうであるが、子育てについてというよりは、人生観についてというようなニュアンスのデータがそろった。

	<b>研究4 M-GTA 分析ワークシート</b>
概念 1	ネガティブな被養育経験による親への嫌悪感情
定義	ネガティブな被養育経験による今も変わらない親に対する嫌悪感情
ヴァリエーション	<p>・父親と母親と会うとすごく疲れたんですよ。で実際、会ったり電話で話したりすると自分からかけれなくなるくらいかなりまいっちゃうんですよ（笑）。今でもそうなんです。だから自分で電話かけれるようになると、あっ、元気になったなって思うんです（F）</p> <p>・今二世帯でえーとあの、下は私の実の父と父が再婚した人が住んでいるんですけど、おじいちゃんおばあちゃんっていう形なんですけども、だから娘が発達支援にかかったっていうことは全然話していないんですね。あのまあ、わたし、まあたぶん、障害って言っちゃうと、なんかすごい、ええっ、みたいな感じになっちゃうだろうと思って、まあその、発達障害って今多いみたいだし、そんなに、そういう軽度のそういうのも結構あるんだろうし、まあ、でもたぶん、おじいちゃん、おばあちゃんはそれをすごい大きく取っちゃうだろうなと思うって、そういうのも言えなくて（E）</p> <p>・親が遊びに来たりして、で、親同士がケンカしてるのとか、なんか、父親と母親が結構きつい言い方で話しているのを、あの、うちに来てされると、それはやめてとか、私が、なんか、子どもが心配になっちゃうからとか、なんか、あまり合わないですね、あの、合わないと言うのは、こう、なんていうんだろうな、やっぱり、母と出かけたりしても最初のうちはいいけどだんだんイライラしてきちゃったりするので（J）</p> <p>・変わっていないですね（E）</p> <p>・母親が真逆だから、真逆だから、何でもかんでも、なんていうんですかね、言ってしまう感じ、そこが、なんかうーん、本人は隠れてやっているつもりなんですけど、わかりやすくそこで言うなよとか、落ち着けとか母親に合図してわかっているんですよ。＜お父様が K さんに気を遣ってお母さんにだまっておけよって＞そうそう、黙っておけよって、そうそう。いやですね（K）</p> <p>・口うるさいのが全部が全部悪いのかなって思うわけではないんですよ。でも私個人は昔からうるさすぎるなって言うのを誰と比べるでもないんですけどうるさすぎるなって言うのは感じているんで、それはかわらないですね。でも 2 年前よりうちわになったかなっていう、うちわっていうかうるさくなくなってきたかなって気はしますがあまり変わらない（K）</p> <p>・小学校とかの小さい頃の育てられかたって覚えていないですね。勉強が難しくなってくる中学生になると勉強しなとか口うるさくなってきたっていう、そういう印象しかないんですよ（K）</p> <p>・小学生くらいから母親父親がいろいろあって、中学 2、3 年のときに、心療内科なのかな、みたいなところに、たぶん親に連れていかれたのかな、あまり記憶がないんですけど、で、先生に質問？されてそのときになんか知らないけど父親もいたんですよ、そしたらなんかもう、精神的に参っているからなんか体が悲鳴あげていて、死ぬ一步手前ですよって言われたのは覚えている。で、そのクリニックみたいなのにたぶん何回か行ったんだとおもうんだけど、K 先生の予約が取れたとかでたぶん行って、自分の記憶があ</p>

	<p>んまりないから何とも言えないけど、たぶん行って、K先生の前で泣いていた記憶しかない。なんか、薬かなんかで眠くて横になっているか泣いているかしかが覚えていない（L）</p> <p>・ここ骨折してたんですよね。泣きながら痛い痛いって言って、そういうのを見てがんばれーがんばれーって応援してたんですけど、わたし一人で行かされて本当に昔ってどういう時代だったんだっていう、そういう思い出し方ですよね，そこにあんまり暗さはないですけどね（I）</p>
理論的 メモ	<p>一部「親への感情の変化」に移行していく概念となった。</p>



概念 2	自己肯定感の低さ
定義	自己肯定感が低く自信がなく自分の性格や態度が嫌だなど思うこと
ヴァリエーション	<p>・やっぱりちょっとあのまだ自分に自信がなくて、子育てについてもなんか自信がないところが結構ありまして、たぶん子供の時に母との関わりがほとんどなかったこともあるかもしれないですけど（E）</p> <p>・姉がいまして、年子なんですけど、今海外で結婚して子どももいて、時々年に2回か3回、子どもたちを連れて帰ってくるんですけど。その姉が私とは全然違う性格で、なんか、私は結構優柔不断なんですけど、姉は結構決断が早くて、えーと、すごい何でも自信がありまして、でー、たぶん、そういう姉と自分を比べることも結構多かったのかなと思います。で、それで、あの、姉は自分の力でどんどんあの人生を切り開いていくタイプで、あの、私は結構まあどっちかという受け身のタイプなので（E）</p> <p>・姉と特別に仲が悪いわけではないんですけど、なんか、あの、結構姉が来ると片付けが好きなんで、うちの中の普段私が片づけないところとかを片づけてたり掃除してくれたりして、で、なんかありがたいんですけども、それはなんか、掃除していなかった自分がダメだったっていうふうに思わされちゃうところもありまして、姉が来ると私の方がなんか緊張してしまうところがあります（E）</p> <p>・私みたいな自分が成長しきれていない人が子どもを生んだり親になるのは子どもに対してよくないと思う（J）</p> <p>・ほんとダメです。だめです。そう、前にもどるんですけど、もっと人生経験を積んでいい母親に生まれたら、もっといい子に育ったんだろうなと思います。私だからいけなかったんだろうなと思います。うん、それはすごく思う（J）</p> <p>・自分を責めたり、なんで、私じゃなかったらよかったのに、自分を責めて悪循環（J）</p> <p>・自分のことが嫌いですね、ほんとに。ものすごく気分が左右されやすい（F）</p> <p>・柔軟性が足りないかなって思っているところと、決めたらガーっていくところが、その、ちょっと思い込みが、そのなんていうの、柔軟性がそこにもっとあればいいんじゃないかなって思うんですけど。ガーっていくエネルギーはあっていけるんですけど、まあ、若くないから、しなやかさが大事だと思うんですけどそれが足りないですね（I）</p> <p>・被害妄想じゃないですけど、ちょっと体が疲れてきたりすると、少しなんかそういう所が、思い込みが激しいというか、そういう所が嫌だなど思いました。でもそこをふと気づいて、あの発想を変えられるように、意識的にするように…してます（D）</p> <p>・なんか私がその悪い癖っていうのが、できないことが気になるんですよ。できることを喜ばばいいのに、できていないっていうことが気になる、だからそれを人のせいにしてはいけないと思うんですけど、評価っていうものを見ると、やっぱりだーってよいがあって、ぽこっとできていない部分がすごく気になるとおもうんです（F）</p>
理論的メモ	研究3の〈自己肯定感の低さ〉と同じ概念。被養育経験の影響を大きく受けている。キー概念となる。この概念が子育てへの不安や子どもとの関係性のむずかしさにつながっていると考えられる。

概念 3	自分の性格を被養育経験に関連づけて考える
定義	自分の性格のネガティブな面は、育てられ方が影響していると考えること
ヴァリエーション	<p>・ただ逆に、それが過保護になるんじゃないかという気持ちもあって、何でも一緒にやっているのだから、手をかけてもらえなかった反動で手をかけ過ぎていないかというところが自分で気がかり。親が反面教師になるからやっちゃいけないことはわかるんですけど、やっていいことの加減がわからないのが相変わらずちょっとそこが課題というか。自分の中で、子どもにどのくらい手をかけてあげたらいいのか、子どもにとってちょうどいいところでちゃんと手をひかれるんだろうかというのがちょっと気になっているところです（A）</p> <p>・これはすぐに許していいことなのかとか、たぶん常識の範囲だとは思いますが、そこをうっと考える習慣はやっぱりなかなか抜けなくて、ここで許していいとか、ここはだめって厳しく言うべきか、やっぱりちょっとワンテンポ考えちゃうっていうのはありますね。（A）</p> <p>・自分自身がものすごく親の顔色をうかがって過ごしていたので、ものすごく親に対する変な気遣いをすごくしていたんだと思うんですよ。だから、なんていうかな、親の表情を読んで先回りして親の機嫌をそこねないようにみたいなものすごいそこにエネルギー使って暮らしていたんだと思うので逆に他の人は家族にそこまで気遣いをしないで自分のやりたいように暮らしてきたんだろうなと思うんですけど、なんだろう、たぶんそっちが普通なんですけど、自分に対して気遣いがされていないなあと思うハードルがすごく低いのかなあって、なんでこのくらいわかってくれないんだっていう不満が（A）</p> <p>・父親細かすぎるから神経質、そういうところは似ちゃっている気がしますね（K）</p> <p>・なんでも自分でこう、やりなさいというように言われたことが自分にとっては結構プレッシャーだったかもしれないんですよね。あと、それで褒めるタイプではなかったのだから、叱咤激励タイプだったので、うーん、柔軟性がないんじゃないかな、自分に。と思います（I）</p> <p>・所属しない方が気楽みたいな感じだったから、一匹オオカミになれたみたいな、なんか、万遍なく仲がいいって感じ。（中略）小さい頃からなんかさめていたんですよ。なんか、正直な話、こう、うちのまあまあ、親関係もぐちゃぐちゃしているけど、いとこのとことかも結構ぐちゃぐちゃしていて（中略）結構変に気を遣うところがあったから、結構、いろんなことに対してさめていたというか、子どもにしてはなんか大人な考えでいたというか、なんかそんな感じで過ごしていたから、だからなんかグループにも所属したくないし、嫌われている子とかでも別に構わないし、結構さめていた（L）</p> <p>・その祖父の方が左？右？左かあ、左半身マヒだったから、それでかは知らないけど、ちっちゃい頃から学校の行事であるような、なんだろう、老人ホームとかに行って、なんか、なんだろう、ちょっとしたお世話とかまではいかないけど、掃除をしてみたり、そういうところによく行って、なんか気がついたら介護福祉士になりたかったけど、親に、なんか体力ないから無理って言われて（L）</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今はなついているけど、たぶんいなくても平気そうだから、かといって、私は私で離婚考えているけど、いざ離婚ってなっていなくなって、子どもにとって必要なのか必要じゃないのかわからないというか、自分の父親があんなだったから全然父親像がわからない、だから必要ないものだ自分では思っているけど子どもにとってはわからないので何とも言えない。むずかしいですね（L）</li> <li>・私の性格をつくったのはそれ（被養育経験）が影響していると思う。育て方っていうか（J）</li> </ul>
理論的 メモ	被養育経験の今の自分への影響について多く語られていた。カテゴリーにおける中心的概念に位置づけられる。

概念 4	夫との関係のむずかしさ
定義	夫との距離感をつかめなかったり、夫との関係について困難さを感じる事
ヴァリエーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主人の方もちょっと諦めがついたとかちょっと受け入れる気持ちになってきてくれたみたいで。そのことですごく表面的にはあまり衝突すること減ってきているんですけど。だからといってこう応援してくれているとか理解してくれてる感じではなくて、そこが私の中の一番の問題（A）</li> <li>・一番身近な人間関係のところで自分が距離感がつかめていないんじゃないかなと。そこが気になっているところですね（A）</li> <li>・特に主人に対してたまりやすいのは、もしかしたら今までの育ちというか、なんか自分が育った環境で身に着けた生きるための力がここでは今ちょっとそれが邪魔している、他者に対して厳しいというか、うん、ちょっとのことで被害者っぽく思ってしまう、軽んじられたと思ってしまうとか、そこが原因なんじゃないかなあ。気遣いされないことに対してちょっと変に敏感なのかなあって。もうちょっと、変に解像度が高くなっているような感じで。もうちょっと気にしないでいられたら自分は楽になるんじゃないかなあと。主人も男の人だし、それが当たり前なんだろうとか、そこがちょっと加減がやっぱりわからない（A）</li> <li>・主人との関係でいろいろ不満がたまりやすいのは自分が今まで変に気を遣いすぎて生活してきたことを他者にも求めているところがあるんじゃないかなと（A）</li> <li>・そのアプローチの仕方が見つからない理由が、やっぱり私が主人にこう理想を押し付け過ぎているのかとか、その加減が、普通の人はずっと一歩引いたりして言ったり、考えられるのかなとか。その悩みの原因が自分の中にあるんじゃないかとかって、それがちょっとやっぱ苦しいというかしんどいところですね（涙ぐむ）（A）</li> <li>・通級関係のことだけ頑なにあんまり協力しないので（A）</li> <li>・手伝えないことはもう仕方がないと思ってるんですけど、邪魔しないでもいいって言ったら変ですけど(笑)、あの一、よく日常茶飯事3人いればしょっちゅう喧嘩するので、それをいちいちうるさいって…言われるのがこっちとしてもすごくピリピリしますう（D）</li> <li>・疲れてるというのもわかるので、あの一、やっぱりピリピリしてるのであまりお願いを、これをやってほしいあれをやってほしいっていうのも、あの、極力、自分で出来ることはもう自分でやろうと、はい。いるかいにかかわらないので、もうまーちゃんに保険をかけて、お祖母ちゃんに来てもらうって形をとってます。急にいなくなるっていうことをもう想定してあるので（D）</li> <li>・多分何かしてた方が、自分に八つ当たりされないじゃないですけど、意識が違う方に向くので、そういう多分自分から、自分をはけ口にしてもらいた</li> </ul>

	<p>くないがために多分勉強してみたらって言うんですけど…って本人が言ってました (D)</p> <p>・ピリピリしてるので、それがすごく困りますね。それで一気に家の雰囲気が悪くなるので、でも俺は怒ってない、俺は疲れてないって…たちが悪い、子どもよりたちが悪い。子どもなら子どもで素直な方が良いんですけど、そういうわけではないので…そこが一番難しいですね。優しい言葉をかけても、裏を取られるじゃないですけど、ニュアンスが上手に伝わらなかったりすると余計こういうこと言ってるんやろって揚げ足を取られるじゃないんですけど…。またそこを訂正するのがすごくエネルギーが… (D)</p> <p>・子育てじゃなくて夫との関係っていうのが大きかったりする。凄く難しいですね。何か家族なんですけど、血の繋がってない中途半端な家族なのでわからないんですよ、大人だし、言わないし、まあかといって男の人、うちの夫だけ？まあこっちが理解していないっていうのもあるかのしれないんですけど、理解しあえない、俺はこういう人だからって言ってそれ以上のことを考えようと、まあ考えるとエネルギーがいるからだと思うんですけど、なかなかそこから先が進めない。俺は相談してもらってないとか、相談っていう意味が分からないとも…、もうなんでそんなに大人にエネルギーを使わなきゃいけないんだって思うのが (D)</p> <p>・もっともってほしい。もっともって。今後20年かけて、あの、帳尻あわせてもらえたらいいですけど。今は収入の割合で私の方が多くやっていますが、夫の方が10年早く定年退職になるので、そうしたらおねがいしますよって思ってます (I)</p> <p>・しょうがないからあいつと一緒に居るけど、別に、正直いらない。たぶん離婚しちゃう。いらないから離婚するかも (笑) &lt;だんなさんはどう考えている&gt;いや、たぶん何も考えていない (L)</p> <p>・いるときにたまにごはんたべさせるとかお風呂に入れるとかその程度、別に私は普通にそれをやっているから、もしそれを褒めてくれとか言われたら殺してやろうかって (笑) 何を言っているんだって。期待していないから別に (L)</p> <p>・父親はあんまり、いい人だったけどいろいろやっていることはめちゃくちゃだったから、私も私でなんかね、だんなを信用していないとか嫌いとか、なんか、子どもにとっての父親って何って思っちゃう。いらないか思っちゃって、なんかだから、私はその、自分の父親いらなかったけど、子どもはわからないし、でも父親って何なのかわからないし、そこらへんが一番疑問 (L)</p> <p>・今はなついているけど、たぶんいなくても平気そうだから、かといって、私は私で離婚考えているけど、いざ離婚ってなっていないくなって、子どもにとって必要なのか必要じゃないのかわからない (L)</p>
理論的 メモ	<p>最初は「夫の態度・夫との関係」としてネガティブとポジティブの両方の感情を入れ込んでいたがネガティブが占める割合が大きく、ポジティブな感情についての語りは「結婚後の新たな支援者」に分類した。</p>

概念 5	他者との関係を築くことのむずかしさ
定義	他者との関係を築くことのむずかしさやママ友などを必要ないと思うこと
	<p>・その一方で、やっぱちょっと悩みと言うか、対人関係の上で自分がやっぱり他者に厳し過ぎたりというか、ちょっと心が、許容量が狭いんじゃないかと思うことがあって、たぶん、おそらく成育環境のせいであろうとは思いますが、そこを克服しなあとってはいるんですけど、その糸口がちょっとわからない。どうしたらいいかわからない (A)</p> <p>・父がいつどこでその、父が怒るともう 1 ヶ月・1 週間 1 ヶ月は顔を合わさなくなるので、あの一、予定していたことが急にキャンセルとか、やっぱ自分の楽しみを奪われてしまうので、あの、そういう点で人の顔色を窺うとか自分の意見をはっきり言うとか、たぶんもうずっと出来なくて、あの一、いつも言われたことを嫌だなと思って断れないことが、多くて嫌々ながら友達と思い込んで付き合ってる、その人との関係を続けてるっていうことがなんかいい人間関係がそういう風に…いい、いいように、人と…自分が人と気持ちよく付き合うっていうことがずーっと出来てなかったなと…何か人と一緒にいないといけないんじゃないか、別に一人でも、一人になる勇気もないし、でも嫌なところ嫌な人と一緒に、いた方がいいのかってなんかそういうのを思春期の時に… (D)</p> <p>・家庭環境がすごくいいわけじゃないんですけど、あの…人と接する事ってあんまり好きじゃなくて、人見知りもするし、上手く人間関係がもともと築けなかったの、凄く人に対して興味が…小っちゃい頃からあって (D)</p> <p>・子どもが迷惑かけちゃっているなというしろめたい気持ちもあり、あとはお互い仕事で忙しいので、会える時間も限られますので、さっとあまり立ち話もせずさって帰っちゃうようなお互い感じも多かったのが特別親しい方は特にいなくて。うん。何人かは、ちょっとほんとに子どもがだいぶ落ち着いてきてからあの個別にやり取りする方は少しはいるんですけど、なんかこう全体でワーっていうこう、なんていうんですかね、親しくやった感じではなかったの、そこ、自分に余裕があったらできたのかなあ、なんか気持ちの問題ですけど。そこまであまりこう人間関係を広げる方向には自分ではできなかったの (A)</p> <p>・ちょっと人と距離を置いていたとかですかね。それは今もあまりかわってないんですけど。えーと、でも、そうですね、役員になっていろんな人と話さなきゃいけないことも増えてきて、あの、そうですね、あまり誰とでも親しくなれるわけでは全然ないんですけど、とりあえず、あの、初めて会う方ともちょっとお話できるような感じにはなってきました。 (E)</p> <p>・子どもの関係というより園でのお母さんとの、同級生のお母さんとの関係が難しいなと…思いました (D)</p> <p>・親にその知識がなければ助けを求めることもできなくて、たぶん親はもう、鈍感な人は、なにあの親っていう感じで言われるだろうし、まともに感じる事ができればすみません、すみませんになってると思うので、私、下男の子なんで、そういつて謝ったりあれしたりするのもトラブルに巻き込まれるのもすごくいやだから、私学に逃げたというのがすごくありますね (F)</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが仲良くなったその子のお母さんには1人でも2人でもいれば結構何でも聞けるんですけど、そうですね、えーと、仕事していらっしゃるお母さんも半分以上いらっしゃるのではほんとに知らない人も多いですね（E）</li> <li>・苦痛でもないですね。1回2か月くらいそういう出来事が起きたんですよ。それは苦痛でしたね。殺されるかと思いましたね、その人に。変な人だったんです（K）</li> <li>・あんまり関わらないとか関わりがないとか、なんか運動会とかそういういった行事で、運動会とか参観日とかそういう行事で親を見る程度で、その中でママ友同士がしゃべったりしているけど、別になんか結構一匹おかみみたいなとこ、私があんので、そこまでして別に関わらなくていいかなって、深くは入らなくていいから、うーん、話す用事ができたら話そうかなって感じですかね、別によくもなく悪くもなく、てきとうに、なんかこうジリジリ見ると面倒くさいじゃないですか、友達って、いや、それが現実になっているかっていうとわからないけど、そうはなりたくない（L）</li> </ul>
理論的 メモ	<p>最初「ママ友との関係」をひとつにまとめたが最終的にはネガティブに捉えているものを一つの概念としポジティブなものは「人に話すこと」に入れた。</p>

概念 6	反面教師への誓い
定義	親から受けた養育のようには子どもを育てたくないと常に考えている困難さのこと
ヴァリエーション	<p>・反面教師という意味で参考にしてしているところは、うーん、多いですね。朝、そうですね、例えば生活習慣の上なんですけど、私は小学校のときとか朝ちゃんと起こしてもらったことがなくて、いつも登校班とかに遅れちゃって一人で学校に行くはめになることが多かったんですけど。今子どもが小学校にあがって、親がちょっと先に起きて支度しなとこうポンポンオンと起こしてあげれば子どもは遅刻しないで行けているので、うちの親はできなかったんだなっていうのを改めて確認したというか、うん、そうですね。歯磨きの習慣とかもやっぱり同じようにそうだし、歯磨きとか全然してもらった覚えがないんですけど、子どもはちゃんと習慣づけいたら、自分で歯磨きするのも親が仕上げ磨きをするのも、習慣になって今現在虫歯もないし、こういうことしてもらわなかったなとか。生活の隅々に至るまで反面教師だった（A）</p> <p>・結局どうしても自分の親との比較で考えちゃうんですけど、子どもと一緒になんかやることを自分では心掛けている（A）</p> <p>・イライラしないで、忍耐強くつきあってあげなきゃなという気持ちで。生活習慣のひとつひとつは生きる力なので身に付けさせていかないといけないことなので、子ども、大人だけでやれば効率がよくて確かにチャッチャと終わるんですけど、子どもとつきあって説明しながら一緒に作業をしながらというのはとても大事なことだと思うのでそれを心掛けています。ちょっとイライラしたりもするんですけど、そこは、でも、うん、怒っちゃったら親と一緒にだなという気持ちがあって（A）</p> <p>・私の性格をつくったのはそれが影響していると思う。育て方っていうか。だからだから自分はいらないようにと思うんですけどむずかしいですね（J）</p> <p>・わかんないですけど、母親はやっぱり性格が激しいと思うんですよ。で、そこが苦手感だと思うんです。それにずっと振り回されてきててっていうのがあって。だから自分がそうならないように、はげしく腹が立ったりとか、そういったようにならないように自分がしているんだと思います（F）</p> <p>・自分が嫌だったことは子どもにもその思いはさせたくないの、自分がそうならないようにしたいというのは強いですよ（K）</p> <p>・なんかなんでもそうですけど、反面教師にするとこってありますし、いいところはなんだろう、真似したい、誰でもそうだと思うんですけど、あれはちょっとねっていうのはね、感じですかね（I）</p>
理論的メモ	1 回目のインタビューで子育ての方略カテゴリーの中心的概念であり 2 回目でも継続して語られ概念となった。



概念 7	親と同じことをしてしまう罪悪感
定義	ふと気づくと親の育て方で嫌だったことと同じことを子どもにしている罪悪感のこと
ヴァリエーション	<p>母親から受けたようにはしたくないなど。でもしちゃってるんですよね、同じようなことをくどく言っちゃったりとかしていると、ああ同じことしているなど（J）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・結局私がこどもだったときに親がイライラしてたのは母親が当たり前だと思ったレベルに私になっていなかったからなんだろうなっていうのは思っ て、それがあの、より低いレベルで自分が子どもに示していると思いますね。 だから子どもは親が自分の今していることやある姿に満足しているとかあき れているとかいうのを読んでいるっていうのは思いますね。で、やっぱり苦 しんでいると思いますね。</li> <li>・そこで笑顔が私は完全になくなっているから、そのところでは結局自分 が母から受けてきたイライラした感じとかそういうのを子どもに出している から（F）</li> <li>・やっぱりそう育ってきたので私は子どもに対して細かいですね、って感じ ますね。感じるけどなかなかそこは変わらない。＜Mo お影響かな＞うんうん、 影響かなって思っちゃいますね（K）</li> <li>・私も本当に怒ったときには父親みたいにガーってなりますよね。やっぱり DNA だと思いますね。DNA か環境かどっちかわかりませんけどね（I）</li> <li>・多分自分が、忙しすぎて、あ、おんなじことしてるなっていうのは思うん ですけど、それを、あの、もう、やめようとかっていうのを、それを振り返って 自己嫌悪に陥ることが多かったんですけど、何かもう、今は仕方がないって いう諦めというか。なんか、それは今の私、はそう、そうなのかもしれない、 何か受け入れが出来るようになったじゃないですけど、まあ、そのあとごめ んねって、言っとこうって…（お子さんたちに？）そうですね。…少し、プ ラスアルファするようにしようと、あの、やってしまったことはもう仕方ない と、もう思えるようになりました。（D）</li> </ul>
理論的 メモ	反面教師の概念を受け、そうできない実際の自分の養育の語りをまとめた概念となった。

概念 8	自分のネガティブな態度の子どもへの影響
定義	自分のネガティブな態度が子どもの行動に影響するのではないかと不安になること
ヴァリエーション	<p>・やっぱり少しのことで瞬間湯沸かし器じゃないですけど、ぱーんって怒れてしまうことが、いつもなんかイライラしてるような状態で、きっとそういうことがあるのか、やっぱそういう私がイライラしてたりそういう様子が違うということが子どもたちに凄く伝わってるんだなっていうのを、最近感じました。やっぱり幼稚園でも 3 女がちょっとすごく幼稚園でイラついてる、すぐ怒ってるっていう話を今朝聞いたのでもしかしたら私とその薬を飲み始めてるので、私がすごくイライラしてるし、でも体もしんどいし、やっぱ家でイライラしてるのでそういうのがうつってるのかなーと思って (D)</p> <p>「あー、めんどくさい」っていうことを凄く連発するっていう、なんかそういうことが、ちょっとしたことで喧嘩することが多かったり、「もう何にもやりたくない」って言って「全部やって」って言って先生にやってもらうことがあるっていうのを言われてたので、あの、お母さんの気持ちっていうのは出してなくてもそういうの敏感に子どもたちって感じ取るんだなーって…思いました (D)</p> <p>・私の性格が、よく移るって言うんじゃないですか、子どもが虐待されたらその親がまたその子どもにみたい。そういうんじゃないけど、私の性格にもすごく似てきちゃった、子どもが (J)</p> <p>・神経質で、ものすごく確認行為が激しくて、ちょっと、ちょっとじゃないですよ、ね、将来とかそういうことに対して悲観的なんですよ。1 年生のときはだいたい、朝必ずこれがあることを言ってねっていう、あの、ランドセルにこれが入っていることを言ってねっていう、もう確認してねって、ぼくに必ず言ってねっていうのが毎日だったんですよ。で、それが 2 年生になってだいたい収まってきたんですけど、今度はなんか将来のことを、例えば字が上手だから習字習えと勧めたりすると、でもぼくバカだからとか、ぼくねバカだから絶対に怒られるからしないって、全然先の将来のことも、ぼくバカだから働けないし、バカだからおうちも建てられないし、とかってそういうことを言うのを見ると、大人、小さい頃私そうだったかはかわからないけれど、今の自分にそっくりだなんて思います。私なんかやっぱり出しているのになって、子どもの前で。うーん、私のせいかなと思う。(J)</p> <p>・家族で遊んでいて、何をバカなことを言ってんだよ、バカだなとか言ったりすることもすごく悲観的に捉えるんだなって、流せないんだなと。今の私にそっくりなんですよ (J)</p> <p>・学校のことを言うと、覚えてないとか、わかんないとか。なんか覚えていたとして、たぶん、だぶんって絶対言うんですね。たぶんこういう風に言っていたと思う、たぶんだよ、間違っているかもしれない、たぶんだよって絶対に言います。絶対こういう風に先生言ったとかは絶対言わないです。(ちょっと自信がないからなくてたぶんと?) 自信がない (J)</p> <p>・ほんとに小さいときから、私が表情に出ているので、録画して残っているんですけど、3, 4 歳くらいのときに、誰も教えてなのに、ママニコニコになってって言うようになったんですよ。それはたぶん私が出していないつもり</p>

	<p>なんですけど表情がたぶんものすごく死んでいるんだと思って、いやな顔してるんだろうかと、それを見て子どもが私に向かってママニコニコになって言うようになったり、すごく気を遣う子になっているのを肌で接していると、うーんと、なさないといけない。今からでもなおせるのかなって。3歳の子にそういうふうに言われると、あれ私、そんなに表情に出ているのかなとか、行動にでているのかなって思いますね（J）</p> <p>・忘れ物とかも結構細かいんですよ。その細かいのが似たのかなとか、私がまだみているんですよ。＜本人が＞あれ入れた？箸入れた？入れたでしょとか、入れたよって言っているのに、あれ忘れてない？これ忘れてない？って自分が用意しないのにすごい細かいから、そこ似ちゃったのかな、いいこと半面、ちょっと細かすぎるのかなって思いますね（K）</p> <p>・子どもは親が自分の今していることやある姿に満足しているとかあきれているとかいうのを読んでいるっていうのは思いますね。で、やっぱり苦しんでいると思いますね。（F）</p> <p>・上の子には厳しくしたから上の子顔色を見るのが気になりますね。＜振り返っている？＞それが後悔していること（I）</p>
理論的 メモ	<p>この概念は被養育経験の影響が色濃いため考察においてキー概念と位置付けた。</p> <p>母親にとっては、自分の嫌な行動が子どもに影響していると認識するため、自分の行動を振り返って自己嫌悪になり、子どもを見てさらに自分を責めるという二重のダメージを感じる事となる。</p>

概念 9	思うようにならない子どもとの関係
定義	理想の母親像とはうらはらに思うようにならない子どもとの関係に悩むこと
ヴァリエーション	<p>・ 2 番目 3 番目になるとそういう、お姉ちゃんの用事があるからとか、そういういうことで出来なくなってきた、2 番目になると頻度も凄く少なくなってきたるなー、もう少し遊ばせてあげられたらいいのになーって思います (D)</p> <p>・ 一人が泣いたら芋づる式にわーって、しかもそれをご飯作ってる時だったり、何か外に出た時とか、話を聞かなきゃいけないとき、そういう時に、あのわーわーわーわー泣き叫ばれるとすごく…一人じゃなくて大体張り合ってた二人が。でそれを見てる上のお姉ちゃんがまたイライラするし、そういうのが一番…かといって周りも大変だねとかそれしか言えないよなとか…っていうのが一番困ります (D)</p> <p>・ お母さんってすごいマネジメント能力がいるんだなって。何か時間の管理と、あと習い事やってるなら習い事するスケジュールの管理と、各々やったり社会時間というか、それぞれの生活スタイルが違うので、それにどういう風に自分の時間を隙間に入れていくとか、なんかすごい優先順位が…あとやる気にさせる言葉がけとか、お母さんってすごいなって思いましたね、今話して (D)</p> <p>・ 当たり前って思われてるけど…それもちよっと腹立つっていうか…で何かあったらお母さんのせいにされるので、いつも緊張してるので、そりゃ肩も痛くなるわ、腰も痛くなるわって思いました。凄いですね。で、お産もして…なんかそれを出来て当たり前って思われると…ちょっと出来てないところがあると、なんで、何してたの今日とか、何でこんなにものがいっぱいあるのかなとか、何でこんな散らかってるって言われるのも、ん？って思ってしまったり、休みがないですからね、いつもフルですから (D)</p> <p>・ 自分が今まで公立の小学校にいつてついていけるようになっていうゴールで子育てをしてきて、だから集中できるようにとか、なんていうんですか、その自分の子が、その、ある求められるところでこうそこにもっていけるようになって意味で療育をしていたところと思うんですよね。早くすればそのゴールに近づけると思っていたんですけど、でも実際はそうではなかったです (F)</p> <p>・ テストで 85 以上は取ることを單元ごとに求めて、自分が、いかないといけないっていうふうに思って、それを意識してさせていたところがあると思うんですよね。評価が当たり前で。それを息子たちにも押し付けていたと思うし、まあ幸いか不幸か、うちの子たちはそれに従うような子ではないんですよね (F)</p> <p>・ はたらかたくても子どもに手がかかって、その、アベレージのことがあれば自分で準備もできるし宿題もできるんですけど、ものすごいお困り感のなかで仕事っていうそのイメージすらわからない、子育てばっかりっていう感じで、時間とお金がいつまでもかかるっていう状態 (F)</p>

・私もうずっと生まれてから子どもの年だけ母親やっているから、犠牲ってことでは慣れているわけですね。食べたいとき食べれなかったりとか、聴きたい音楽とか子どもが聴きたいのが先になったりとか、自分というのを殺してやってきているから、自分がどうしたいのかっていうのは、自分一人だったらバラエティも見たいだろうし、好き勝手したいところはあると思う、出かけたいと思うんだけど、子どもの習い事を考えるとやっぱり教育ママっていう風になって（F）

・今もずっと変わらず辛いですね。やっぱり周りの人がこれくらいの年の子にはこんなこととは言わなくてもわかるだろうとかいう平均値に届かないから（F）

・子育てしづらいですよ、やっぱり。周りの目もきびしいですね。やっぱり親は何しているんだっていう視点で昔の人は見ますから、でも今は普通に私たちの時よりも、お困り感満載の子がたぶん多くなっている気がして。療育とかも受けずに子どものことでさんざん親の育て方が悪いだのなんなのって言われたら傷つくと思うし、言ってもわからないんだっつうのっていうのをほんとに言いたいところがあると思うんですよ（F）

・年齢をどんどん重ねるにしたがって疲れも、疲れやすくもなり、あの、夜勉強しようと思うことが出来ない上に朝勉強しようっていうのも起きれないので(笑)、出来なくなってなかなかそれが今、悩みかな（D）

・ものすごく時間と特別なふさわしいサポートがあつたらできますけど、そのところすべて根気ですよ。親も。あの、お金と時間はかかるし、百万回言うしかないっていう感じで（F）

・すごくしっかりしている子はしっかりしていて、そういう子は親御さんがちゃんとしっかりしつけているんだなと。うちは娘は愛想がいいんですが息子の方はシャキッとしていない。甘えん坊で全然しっかりしていないので、で、あの、息子の4年生の方もしっかりしている子とのんびりあんまりしっかりしていない子がいて、これはまあ見るたびにもうちょっと小さいころ厳しくしつけておけばよかったんじゃないかとか、うーんと、どういうふうに育てたらこういう子になるんだろうっていうことは思います。はい。幼稚園でなんか、園長先生なんかは、何々しなさいというよりも、親、例えば挨拶だったら挨拶しなさいと言うよりも親がすすんで他の人に挨拶する姿を見せなさいと言われていたんですけど、私そうしているつもりなんですけど子どもには伝わっていないようで、特にあのまあ、ちょっと上の息子の方がもうちょっとあの、しっかりしてくれればと思っていて、でもやっぱりひとり親ということもあって、あのー、あまやかしちゃったというか、そうかなあと最近思っています（E）

・子どもたちに自分のことを自分でやらせるっていうのが徹底してこなかったの、なんかあの、何でもなんか私任せみたいなのが結構あって、で、なんか、うーんと、私が忙しかったりとかあの、気持ちに余裕がなかったりとか疲れているときに子どもたちは何もしてくれなくて、手伝いも何にもしてくれなくて、で、それでなんか、あの、えーと、これもやらなきゃいけない、あれもやらなきゃいけない、とかいうときに子どもが何かやらかして、仕事が増えるとか、そんなんでキーとなることとかが時々あります。あの、私ひとりまあ親なんですけ、まあ、もう一人なんかあの、いてくれたらなと

	<p>思うことはあります (E)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・親が本当にどう思っているのかっていうのを読んじゃうので、そのところが、あなたはあなたでいいのよって、言えないところっていうのが苦しみがいい加減にしないでよっていうところでやっぱり揺れるから、そんなにすごいになるために言っているんだったらまだちょっとあなたってなるんですけど、平均のところにはいかないというのはかなり生きづらいというか、ストレスが親にもかかると思いますね (F)</li> <li>・やっぱり自分が限界のときはやっぱり、ああって怒鳴りちらしたくなることあります (J)</li> <li>・小学校に上がって、いちお学童にも行って、保育園と同じようにあまり一緒にいる時間でいうのがやっぱり5時くらいから家に帰ってくるっていう感じなので、うーん、それぐらいの、あの、なんだろうな、ずっと一緒にいるじゃなくて、離れるっていうのがないと、いまだにまだ、やっぱり、ずっと2人っきりで一緒にいうのは、たぶん6歳位のときから変わらないんですけど、大変なんですよ、私自身が大変。(J)</li> <li>・このあいだインフルエンザとかになっちゃって、2週間くらいとか2人きりで朝から晩まで、旦那が帰ってくるまでいると、なんだろう、もう2人だけの世界みたいな、自分の中で、息がつまるとうか、なんだろう、子どもはゲームしたりしているんだけど、自分が病んできちゃう。ほんとに疲れちゃう (J)</li> <li>・一緒にいてほんとになんでこんなに疲れるんだろうという風に疲れる。ゲームしてても一緒にいるだけでストレス。子どもがいることのストレス、憔悴しちゃう。旦那がゴルフとか行ってもものすごい嫌。今でもそれは変わらない。波が下がる。この世界で2人きり、どうしてここまで下がっちゃうんだろう。疲れて疲れて、その自分が嫌でもあり、なんで子どもに対してこんなに疲れちゃう？みんな普通にしてるんだろう。かまってって言わないのに疲れる。寝ててもゲームしてて、そうしてても疲れる (J)</li> <li>・本人は、私のことかわいくないと思っているだとか、気持ちを読むことを言うので、それに対してうそをつけないというか、よしよしって、どんなあなたも受け止めますよっていうようなことができていないので悪循環というか (F)</li> </ul>
理論的	<p>最初は「子育てのむずかしさ」としていたが「うまくいかない子育て」とかぶるので「親という仕事の大変さ」と命名し、「うまくいかない子育て」は母親の反省や落ち込む気持ちがふくまれているときとし、それが一般的な大変さについてはこの概念に当てはまるようにした。</p> <p>〈うまくいかない子どもとの関係〉と振り分けを迷うケースがあったが、関係性に言及しているものはそちらに振り分け、関係性に言及していないものをこの概念に振り分けた。その後、思うようにならないものをこの一つの概念にした。</p>

概念10	子どもの問題行動への対応のむずかしさ
定義	子どもの不適応や発達の問題への対応に困難さや不安を感じる事
ヴァリエーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あまりにもやっぱり言い方がきつかったり集団生活で手が出たりとか、そういうことに関してすごく…あの、ちょっと悩む所（D）</li> <li>・担任変わりますって言われて、なんか一貫した教育っていうか落ち着いた教育っていうものが受けられないんじゃないかという不安を感じて、娘もそれで結構混乱している様子（F）</li> <li>・ある程度のレベルがないとあの人数の集団生活というのは無理だと思うんですよ（F）</li> <li>・宿題をしなくちゃいけないといってもしないし、低学年のときにもう従わなかったし、学習習慣も身につかなかったし、結構大変だった（F）</li> <li>・息子がもうやめたいと言い出して、習い事でもなんかそこでその子をそこに残すかそこから離すのかっていうのはすごく悩めますね（F）</li> <li>・集中できなかったり、ものをうつせなかったりとかね、ちゃんと見ていればできるんだから、その子が焦らず認められて落ち着いた環境っていうのがね（F）</li> <li>・授業についていけなくなるっていうのが見えるから、そうじゃない環境が用意できるのであればそうしてあげた方がいいって言われましたから、それを、何々君って、今こっち見るよっていうふうに子どもたち20人に対して2人くらいついて巡回するようなシステムさえあれば、そんなことしないでいいと思います（F）</li> <li>・給食の場所を選んでいて。友達が食べてれば食べるかなっていう期待をしていて、でもずっと食べていなくて＜全然？＞一切食べていないって聞いていたけど、家に帰って食べさせないわけにはいかないので食べさせていて、ずっと何か月もやってて、この味噌汁飲んでみたんですよって、前は興味あって飲んでみても吐いちゃったりしてたから、シュウマイを半分食べてみましたとか、みたいな、少しは成長しているのかな（L）</li> <li>・1歳のときよりはこうしたいというのを口にするからいいけど、こうしたいが強いから、そこまでイヤイヤみたいなのはそんなにはないけど、まあイヤイヤみたいなときもあるし、言ってくれる分かるけど、そういうのも大変かなって（L）</li> <li>・一緒に、食事のこともそうだけど、トイレも怖くてできないって幼稚園のとき、入るくらいまで言っていたので、今やっと幼稚園のトイレに慣れたから、幼稚園でできるようになって、家でも少しできるようになって、一緒に</li> </ul>

	<p>やってもらっている感が，幼稚園で。で，なんかでこう，こういうことですかという電話があったときに，少しこの食べもの食べましたよってという報告をしてくれたりとか，担任の先生がしてくれて（L）</p> <p>・1学期よりはスムーズに行けるように，なったと思います。（じゃあ1学期も登校渋りが）そうですね。月曜日金曜日が，お腹が痛いとかお母さん頭が痛いとか言ってたので，でもそれももう，2年生の3学期，2学期の終わりから3学期くらいからちょこちょこあったので，担任の先生もちょっと気にはしてくれてたので，人数が少ないので教頭先生とかもご存知なのでお姉ちゃんどうですかーとか聞いて下さるんですけど…（で，3年生になったらクラスが）大人数になって。ちょっと，つかれ，やっぱ週末とかはまだ外出たくないとか言いますね（D）</p>
理論的 メモ	<p>最初は〈子どもの不適応〉としていたが問題行動に修正した。そうすることによって，発達の問題による行動についてもこの概念に含めることとした。</p>



概念 1 1	子どもが思春期になったときの関わり方への不安
定義	子どもの年齢があがることによって生じる新たな課題や不安のこと
	<p>・今は無邪気に仲良くやってくれているけど、あれってうちちょっとこう仲間うち、たぶんちょっと不愉快なことをやっちゃったりするんだろうな、そうなったときになんとか避けられるようになって、大丈夫かな、本人がどこで、変に逆恨みしないだろうかとかどうやって本人が受け入れていくんだろうとかか（A）</p> <p>・私は旦那がいる上で、子どもが小学校で勉強できなくても、すごく怒ったり、勉強できるよにしないでちゃだめだよって言いますけど、塾行く？とか言ったりしますけど、ある程度できて、学校行きたくないって言った時はたまには私が休みだったら休ませてあげて、なんか、子どもの不安よりも自分がどうにかしなくちゃということの方が大きくて、うん、自分ちゃんとしなときっと子どもも大変なんだろうなって（J）</p> <p>・20人学級だったら先生も一生懸命オーバーワークしてずっと残ってやっていて、子どももなんか心の叫びというのがあると思うんですよね。うちの子もそうですけど。そうしたくてそうなるんじゃないかって体がそうなるやうな子っていうような子もいるし、親にその知識がなければ助けを求めすることもできなくて、たぶん親はもう、鈍感な人は、なにあの親っていう感じで言われるだろうし、まともに感じる事ができればすみません、すみませんになってると思うので、私、下男の子なんで、そうやって誤ったりあれしたりするのもトラブルに巻き込まれるのもすごいや（F）</p> <p>・周りと自分を比べる目をもったときに本人たちが苦しむわけですよ。それで結局イライラしたりけんかしたりするんですよね、今までは私だけが困っていて、それができないことに（笑）あったんですけど、周りにはできているのに自分だけができないとか自分だけが怒られるっていうふうな、本人の心配事や困難にぶつかったときに、結局いきたくないとかそういうことが起きてきますね。体に出たりね（F）</p> <p>・周りはもうできているのに君だけできない、怒られる、っていうふうな客観的に周りを意識して、あれ自分って、思ったときに感じていますね（F）</p> <p>・結構公立って求められるものが高い。全部評価して何をあれして強く生きていくかっていうのは、結構へこむことが多いと思いますね、だってへこみたくなければあの、評価いりませんっていうようにつかえすオプションがあってもいいと思う。何のためにそれをしていくのがよくわからない（F）</p> <p>・先生とも主に連絡帳でのやりとりになって個人面談っていうのがあるんですけど年に1、2回なので、なかなか細かいことは、なんか先生もすごく忙しいので聞けないでほんとにそうですね、</p> <p>・今は友達関係もいろいろちょっと複雑になってきているようで、いじめたり、いじめられたりしていないかとか、あの、ちょっとあの、クラスの中であの子がどういう位置にいるだろうか、あまり目立たないタイプなので先生に目をつけられるタイプなのかとか、私、学校で何があったのかわからない</p>

	<p>ので、つかめないこととかありまして、それがちょっと気になってます。息子の方もあんまり学校のことをベラベラ教えてくれるわけではなくて時々ポツポツと話してくれる感じなので、その学校の友達関係のこと、先生との関係のこと、勉強に関してはテストを持って帰るので少しはわかるんですけど、勉強の方もあの、成績のほうもちょっとは気になっています（E）</p> <p>・下の娘はえーと、ちょっとあのえー、とろい、ゆっくりタイプなので、えーと、ちょっとあの勉強の方は、今のところ大丈夫そうなんですけど、これから遅れとらないといいなとは思っています（E）</p> <p>・息子の方がこれから大きくなっていくと、これから違う関係になって行くのかなと思っています。いまはまあ、元々すごく甘えん坊なので、うちにいるときとか2人でいるとき結構なんかベタベタしてくることも多いんですけど、学校とかで会うと完全に無視とかしてきて、あっ、それは全然構わないんですけど、学校のことをもっと話してほしいんですけど、なんか教えないとか、別にとか、そういう答えが多くなってきて、はい、まあ、それでもまあ息子も甘えたい気持ちも結構あるようなんですが、まあ、また離れていかなくちや困るんで、それはそれで全然いいんですけども、なんかあのこれからちょっとむずかしい年になっていくおかなと。やっぱりお父さんいてくれたらいいのかなと思うことも最近増えています。男同士のなんか。（E）</p> <p>・本来は自分でさせなきゃいけないことをなんかあの、私がやってきてしまったっていうことが結構あって、それが今も続いているのが結構ありまして、それをいきなり明日から自分でやってねという息子の方でそれをどう受け止めるのか、あの、ちょっとあの、心配なところがあって、えーと、なので、自分でやってほしいんだけど、えーと、そういう、（E）</p> <p>・上の子の思春期のことと、あと、えーと、まあこれから、そうですね、友達関係のこと、いじめとかそういうのがなんか、なければいいかと、友達関係でうまくやっていってくればいいかと。やっぱ勉強のことです（E）</p> <p>・小学校あがってまず勉強というより宿題あるからこなすって感じですよね(中略)今まで遊んでって自由に育ってきたのに宿題はしなくてはならない。そのへんがまだ、なんだろう、うちの子は理解できていないのか、宿題しながら違うことをやってみたり、動いてみたり、まだ集中できない。それが大変ですね。勉強と言うより宿題終わらせるのが大変（K）</p> <p>・子は前回2歳だったんですけどどうですか？）保育園です。物事がなんでもわかってきた分、わがまま、っていうか甘えがひどくなってきたから、それが、なんだろう、まあ言うことを聞かないし、これ欲しいとなったら上の子以上にあきらめないんですよ。すごいしぶといというか。（K）</p> <p>・やっぱり勉強ですかね、宿題？ほんとにいやいややっているからもう少し勉強する気にならないかなとか、あと、自分の勉強でなくても自分の思い通りにならないと、下と同じですよ、怒り方は違いますけど、泣いて怒ってみたい（K）</p> <p>・宿題させるにもやらないじゃないですか、だから言うじゃないですか、でもどこまで言ったらいいのか、どこまでいうと自分も口うるさくなっちゃうし、そういう悩みですね（K）</p>
--	---

	<p>・子どもだからいいけど、傷ついちゃう子なら傷ついちゃうようなことを、大人の前で言っちゃうからびっくりしちゃうなあって。大人は、私は別に逆に言われたってすぐ泣くよねって気にしないと思うんですけど、人によっては、何この子強いなとかって言うおかあさんだっている場合だっているじゃないですか、この子やだとか、すぐそういう、なんていうんですかね、言ってくるとか、自分の子どもかわいいからそう思うかもしれないじゃないですか、そこがビクビクするようなことを、平気でそういうことを言うてる、って感じで（K）</p> <p>・2年前より子供たちも成長したので、おねえ…1番上の小学校3年生は友達関係がちょっと複雑になってきていて、なかなか家でもその話を…嫌なことがあっても隠しておけないタイプなので、すぐ顔に出るんですけど、やっぱりなかなか隠しておけない、「何かあったんでしょ」って言っても「いや何にもない」って隠すことが多く…抱え込むことが多くなったな—と思いました。あと、交換日記とかも始めて秘密が何かどんどん多くなってきたんだな—と思って、あの一…ちょっと気をつけなきゃいけないな—と思いました（D）</p> <p>・真ん中は、年中、年長さんになったので、あの一…（年中さん？）あ、すみません年長です。来年小学生なので、やっぱりあの年少さんの時と比べてやることもできるようになったし、人のお世話も出来るようになったんですけど、やっぱりあの、気分が乗らないと何しても出来ないタイプなのでなかなかその何かを片付けとか次の日の支度とかをする、やらないといけないことから逃げるが多くなったな—と思いました。出来ないじゃなくて、出来るのにやらない、ということが多くなって、うまいこと逃げてるといつも感心します（D）</p> <p>・言葉も出るようになったんですけど、やっぱりあの、家で揉まれてる分、それを幼稚園に持っていくので、あの一、腹が立ったりとかすると、どうしてもあの、いつも、家でも手が出るので、まあその延長線上で幼稚園でも手が出たりすることが、最近が多いな—と思います。自分でやっぱり何でもやりたがる時期に…（D）</p> <p>・補助は出ているけれども、所得で十分ではないし、そういったステッカーを貼られることがいやで、その施設を紹介しても行かない友達もいるわけですよ。あのやっぱり手帳みたいなのって思いっきり書いてるから、自分は何んかおかしいのかって子どもは思いますよ。だから、みんな違ってみんないいというわりには分けるよねっていう（F）</p> <p>・育児に関してはやっぱり皆がおのおの成長してるので、お姉ちゃんなんか特にその、どういう風に対応していけばいいのか、思ってる以上にきっと彼女はすごく大人なので、あの一、そのでき、やりたいけど出来ないその友達との関係のもどかしさとか、そういうところをなかなかゆっくり話を聞いて汲み取るということができてなくて、ふとその彼女との会話を振り返ると、あの、なんか押し付けてるような感じがしてるな—、で反対に追い込んでるんじゃないかな—という気持ちがすごく…最近はやっと反省している…ですね（D）</p> <p>・お姉ちゃんのことさっき、あの（そうですね、そういうこともありますよね）っていうのはそうですね、1番ですね。（お姉ちゃんがだんだんこう思春期になってきて（D）</p> <p>・自分の物差しで意見を押し付けてるな—と思います。あの、一番初めにもお</p>
--	--

	<p>話ししたように、なんか自分の気持ちに正直で良いんだよって言ってる割に、あれ、よく考えると私の気持ちを彼女に押し付けてそうしろって言うような気がするなって…いうのがうまく関われ、その彼女の気持ちの、どうしてそれが友達と喧嘩してうまく仲直りが出来ないっていうのを深く掘り下げてなくて、あの、早急に結果を出すような話し方をして、ますます追い込んでる気がするなっていうのを…思います。(そうですね) 難しいですね、ほんとに時間をとるっていうのが。(D)</p> <p>余裕がなかったんですけど、結局。これからは少し子どもも落ち着いてきたのであんまりケンカすることも、ケンカでもちゃんと理由あることが多くなってきたので、できるかな、お母さん方とも、うん。もうちょっと後ろめたい気持ちも少なく、うん。</p> <p>・今は通級と学校と、集団で過ごす学校と少人数で過ごす通級と両方の2本立てでやっているけど、何年くらいこれ続けていったらいいんだろうかと。こう適宜いい道をちゃんとさがしてあげられたらいいなあと思っています。親がちゃんと発信すれば学校の先生方は一生懸命応えてくださるので、なんだろう、そのかわり、親がみつけないと発信できないことでもあるので、相談にのったり対処してくださる体制はきちんとあるのでそこを適切に利用できるように見極めないといけないなあと思っています (A)</p> <p>・本人がちょっとみんなと違うっていうことを本人に自覚してもらわないとみんなの中で気を付けて生活していくことができないのでどうやってどんな形で本人に自覚させていったらいいのかなあっていうのが課題ですかね。結構お友達同士で自然に身につけていってほしいんですけど、その力がちょっと弱いので、また、変に繊細なところがあるので、ものすごい失敗をしちゃうとこんどはそれが反省とか学習とかにつながらず、ただただへこんじゃったり相手を恨んじゃったりすることにもなりそうなので、ゆるやかな自覚の仕方がどうやったらいいのかなあ (A)</p> <p>・小3の壁とか言われているんですけど、発達障害の傾向がある子が急に周りの友達についていけなくなるのがそれくらいだと言われているので、そこにどんな問題がでるんだろうとか、そのときにうまく良い道を探してあげられるのだろうかとか、そこが一番の課題 (A)</p> <p>・犯罪に巻き込まれないかが心配ですね。(そうですね、色んな事が起こる世の中ですもんね) そうですね。何か外に一人で出せれないとかってなると、自分の時間にやることが、ことを割いていかなきゃいけなくなると…あの、何ていうんですか、出してやれない、ちょっと優先順位を、自分の方、そのご飯を作るっていう方に重きを置いてしまうと彼女のことを犠牲にしてしまうことがあるので、そういうのがすごく、申し訳ない (D)</p> <p>・これからの人生の大半は友達と過ごすことになるので、その時に人間関係が崩れた時に、そのリカバリー…やっぱりちょっとどういう風に私自身がサポートしてやれるか、本人がどういう風に解決策を見つけていけるのか…不安なところですね (D)</p> <p>・公立はそういうふう to 評価っていうものをペーパーでして、それを受けて、さらに中学受験とかする方たちは塾にもいったり、私立の小学校に関して進学中心のところっていうのは、一单元早くも進んだりとかするわけで (F)</p>
--	---

	<p>・ どういう風にしたら子どもが、その普通に近づくかというか、よりできるようになるかっていうようなところで今まで目指してたことで、行き詰って初めて、変わらなきゃならないのは親のほうだっていうふうに気付いたので、その子育てで振り返るとすれば子どもを変えするというよりは自分が変わらないといけないというときに振り返りますね。それでその方法を変えますよね。(笑) 今はだから子どもがそういう状態だからそれを変えようというよりはいかにハッピーに過ごせるのに私がかわれればいいのかっていうふうに変えてますね。子供を育てるというよりは親が変わらないと、っていうふうに振り返らないといけないくらいの息づまりというか、子供はもう子育てっていうか、自分の思うようにはならないという、ので、自我がすごいですし、ましてアベレージにはということを考えるのが間違っているという、だから親育てってことでしょうね。視点がかわりますよね。(F)</p> <p>・ うちだけですかね、こんなにてこずっているのは (F)</p> <p>・ 今後、そういつて安心して預ける場所というか相談していける場所があるかどうかということですよ。あと、経済的なことも不安ですよ。とにかくお金がかかっています。(F)</p> <p>・ やっぱうるさく言わないでー、うん、うまくまわれればいいんですけどね、うるさがっているんですかね、うん、れば一番いいと思うんですけどね。そうすれば、もっとコミュニケーションをたくさんとりたいですね&lt;子どもさんとね&gt;そう。今はまだあれですけど、大きくなったらしゃべらなくなったりとか、なんかね、悪い方向にいつてはほしくないの、何でも話してくれるような子にするいはどうしたらいいんだろうっていう、うん、不安と、そんな感じですかね (K)</p> <p>・ ただ子どもの教育についてあの、上の息子が4年生であの、まあ、あの、公立の中学に行くか私立の中学に行くかもう考える時なんですけど、もし受験するのであればそういうふうに私の力でもっていかなくてはならないんですけど、私自身子どもの時にそういうのは経験なくて当たり前公立だったのになかなかあの、その、なかなか私の方なかなかどうしても勉強というのは腹がすわらない。そういうのはちょっと子どもの将来についてちゃんと考えた方がいいのかなと思っているんです (E)</p>
理論的 メモ	<p>困難感の変化が読み取れる概念となった。多くの語りがこの概念に振り分けられ、縦断インタビューにおけるキー概念となった。</p>

概念 1 2	子どもの成長によって楽になったこと
定義	子どもの発語や行動面の発達によって幼児期と比べて楽になったと感じること
ヴァリエーション	<p>・話せばわかるようになってきたので変にだだこねたりとか、ダメでしょバチンということは全くなくなりました、そういえば、4歳くらいのときがほんと聞き分けなくて、ほんとについバチンということがほんとにたまにあったんですけど今はほんとなくなりました。(A)</p> <p>・前はちょっとなんでそんなことで怒るんだろうとか、イライラしちゃうんだろうって理由わからなかったんですけど、まあ年を重ねて経験値が上がることで、あっ、こういうことがこの子にとって不快なんだなあというのがだいぶわかってきたので彼女に合わせてあげることもできるので、今はそんなにないです (A)</p> <p>・だんだん自分で自分の調子を理解できるようになってきてむやみにあんまりけんかはしなくなってきたなあって思っていますね (A)</p> <p>・主人と子どもが衝突することが減ってきて、お互いに相手がよくわかってきて、お互いにうまい距離がみつかったのかなと思うんですけど。最近はいぶ仲良くやっているかなと。ちょっと前は仲はいいんだけどほんと子どもみたいにケンカしている感じがあって、それはどうなんだろうということが多々あったんですけど、今はだいぶ、互いにいい距離を見つけたのかなって感じはあります (A)</p> <p>・親が上と下に手がかかるので真ん中はちょっと自分でやってということが多くなるので、あんまり人を頼らず髪の毛も自分で括ったりとか、そういうことが自然と出来るように…はい、なりました (D)</p> <p>・だいぶ私の今はイライラは減ったかなと思います。(F)</p> <p>・保育園の頃はそんなにゲームとかしなかったんですけど、今は自分でゲームとか、あと、タブレットを使ってユーチューブを見たりとか、そういう、自分で、一人で遊ぶことが増えたんですね。なので、ママ遊んで遊んでっていうのが少なくなったのでだいぶがイライラが減ったのかもしれない (J)</p> <p>あとはそんなに変わってないかな (J)</p> <p>・子どもに、イライラすることされると、ほんとにもう、あつて思う、あつ、(叩いたら)ダメダメダメっていうのは、本当に少なくなりましたが、あの、赤ちゃんの、6歳に比べれば (J)</p> <p>・困らせる原因も子どもなんですけど助けてくれるのも子どもで、そうですね、時々なんかあの、娘がなんかママ大好きとかお手紙書いてくれたりとか、息子の方もそんなキーキーすることないじゃんと言って、わりとなんかそれでこっちも肩の力が抜けることもありまして、あと、私もなんか自分でなんか自分はもっとうすればよかったのにと反省することも結構あるんですけど、えー、なんかあの、ちょっとダメなお母さんかもしれないんですけど子どもたちは一番大好きって言うてくれるので、それが一番、はい、助かります (E)</p> <p>・すぐ顔に出るんですけど、やっぱりなかなか隠しておけない、「何かあったんでしょ」って言っても「いや何にもない」って隠すことが多く…抱え込むことが多くなったなーと思いました (D)</p>
理論的メモ	「子どもの成長に伴う関係性の変化」としていたが、プラス面とマイナス面が混在していたため、プラス面をまとめて概念とした。

概念 13	親と距離を取る
定義	会わないことによって親のことを考える時間が減り楽になることと罪悪感
ヴァリエーション	<p>・あの時は自分でも何がなんだか、たぶん親とのかかわり方が一番の心に占めている懸案事項だった。あの頃はちょっと親との接触を断つようになっていったと思うんで、今、3、4年、4年くらい経つのかな、4年くらいまったく連絡とらず会わず過ごしてきて、親とのかかわり方に対する悩みは減ってきている気がする（A）</p> <p>・親のことを思い出すことが少なくなってきました（A）</p> <p>・やな思い出のフラッシュバック多かったんですけど、2年たって距離も時間もたったら思い出すことが減ってきて、それが今気持ちが安定していることに繋がっていると思います（A）</p> <p>・いやなことをされた、いやな言葉を言われたっていうことをすごく覚えていて囚われていた時期でもあったんですね。そういうのを思い出すのが今は減ったっていう感じですね。このまま忘れられたらいいんですけど。（A）</p> <p>・罪悪感というか、親はたぶん、自分が何か悪いことをしたとか全然思っていないと思うので、説明してもわからないのでなんで離れていったかわからないとおもっていて、それを怒っていると思うんですけど。納得した上での離れるだったらいいいんですけど、それこそいいんですけど、振り切っちゃった感じだったので罪悪感が大きかったです。今はそれは仕方がなかったと自分で自分を許している、そういう状況です（A）</p>
理論的メモ	該当する方が1名だったが重要な語りと捉えて1つの概念として扱った。

概念 1 4	親の態度を仕方がなかったことと解釈する
定義	時間の経過とともに、仕方がないことだった、または良い方に考えられるようになること
	<p>・その時の子どもの気持ちもすごく分かるので…（子ども持つてゐるご自分も？）あ、自分が、子ども産んだ時の、その子どもに構ってもらえなかったとか、家帰ったら誰もいなかったとか、何かそういうのがすごく寂しかったんですけど、でもそういうのがあったから今自分が 1 人であの、どこかに行ったりとかそういう 1 人であることに関して慣れじゃないですけど、1 人であることが嫌じゃないのはそういう・・・あの、母が働いていたお陰があったりするのかなというの、おも、思います。あの、自立するじゃないですけど（E）</p> <p>・激しいってことはそれに対して人に対しても情もかけれると思うし、いろんなことで傷ついたりすることみなさけも深いと思うんですよ。親の世代は。（F）</p> <p>・変化ではないですけど、孫、私の子どもみてもらう機会が多いじゃないですか、全然怒らないで育てるっていうか。なんていったらいいんだろう、むずかしい、説得するっていうか納得させるっていうか、全然もう怒鳴りもしないし怒らずにイライラもしなければ、そこがすごいなっていうか、ある意味甘やかしているかもしれないんですけど、そうですね、それは昔からですね。自分が子どもの時の対応がどうだったかあまり覚えていないんですけど（K）</p> <p>・やっぱりあの、食べる・・・前も(笑)。食べるのが一番、ですね（D）</p> <p>・うちの母も働いてる人だったので何かしてないとだめなタイプっていうのも変なんですけど、あの、暇になれない人なので、そういう、あのフットワークの軽さと言うのは、そういうところは私にもあるようなので、やっぱりどっか出かけようとか、そういうどっかでかけ、連れて行ってあげたいっていう気持ち、私も連れて行ってもらったし、皆でどっか行こうよっていうのも良い影響かな（D）</p> <p>・そういう人達を、祖父母とかを介護していた母を見ていたから、やっぱりあの、そういうのではずっと取り組んでいきますよね、介護とかにスッと入っていける、やっているところを見てきているから自分の父親が倒れたり自分の母親が病気だったりしてもそういう世話っていうのにスッと入っていける（I）</p> <p>・人は突然死ぬとか、そういうトラブルが起きた時に慌てず行動することが何よりも大事であるということがそのとき思いました。それは結構人格形成になっていますよね（I）</p> <p>・性格とか考えとか多少母親に似てたりするけど、自分が子どもを持って、たぶん前尊敬しているって言ったけど、よく育てられるっていうのは変だけど、すごいなっていう、わたしみたいな性格なのになんてすごいと思う（L）</p> <p>・私もあの以前に比べてその、いやだなっていうお話もしたと思うんですけど</p>



	<p>ど、そういう感情も、全くなくなったというところちょっと嘘なんですけど、だいぶ減ってきました（D）</p> <p>・子ども達も嬉しそうにしてるので、あの何か来てもらって申し訳ないなと思うよりかはお互いに会える時間が出来てよかったのかな（D）</p> <p>・やっぱり自分が同じ立場に立つともう、ほんとにもうあれは仕方なかったなっていうのは、思います。で、あのきっとうちの母は母なりに一生懸命やってたんだろうなあーと思うと頭が下がります（D）</p> <p>・うちの父はわがままなタイプなんで、勝手というか、まあいいんですけどね。もう別に（I）</p>
理論的 メモ	<p>最初に生成した概念である「親のいい方向への変化」と「親の養育の肯定的側面」と「親への感情の変化」が分けずらい似た概念であったため「親の態度をしかたがなかったことと解釈する」分類した。</p>

概念 15	子どもに関する社会的サポートの利用
定義	子どもの発達などに関する社会的サポートを利用すること
ヴァリエーション	<p>・どっちかの親，でも遠くて来れないので連れて行くとか，行った先でもし何か用事があつたら見てもらおうとか，行ってる時に見てもらったり，ファミリーサポートセンターとか，民間の託児所とかですね（D）</p> <p>・子育て，子育て広場というか遊ぼう会っていう名前なんですけど，同じくらいの学年の子が毎週・月 2 回集まるっていうのに，行ってましたけど…（一番下の子と？）はい。（それ以降幼稚園に）あ，そうですね。（あとはファミリーサポートとか一時預かり…）でも一回お願いしたんですけど，その予定が合わなかったり…（活用しづらい？）見つけてもらえないところが…見つかるまでにすごく時間がかかるので…（利用しにくいですね）利用してないですね。（してない）もう何かあつたら民間の託児所を…（あ，託児所は）あ，はい，少々値段がかかっても仕方がない思いながら。（長期になるとお祖母ちゃんに頼んだりってことですか？）そうですね。（単発だと託児，民間に）そうですね，半日とかだともう，はい。（じゃあ今専門家の支援を受けてたりとか…あ，さっき体のことは病院に…）あ，そうですね，はい。それくらいで，産婦人科にそうですね。生理不順でかかっているくらいで。（何かこう，自分がもう大変だなと思ったり，子育てが大変だったり，色んないらいらした時にカウンセリングを受けたりみたいなのは考えてない？）まだ，はい，そうですね。（何か専門家が援助してくれる体制みたいなのがあつたらどんな風なことを，どんな風なのがあつたらいいと，どんなことを相談したいですか？）あー，よくお姉ちゃんのことで，あの，その学校の相談は，電話相談をしたことが 1 回。（学校にですか？）あ，いえ，あの何ていうんですか，学校相談センターみたいな，そういう学校のことに關する相談を受けてくれる…（教育センターみたいな感じですね）あ，そうです。そこに 1 回電話したくらいですけど（D）</p> <p>・1 回 9 月の上旬にその学校相談センターみたいなところに電話して相談したことが…あります。もちろんそのことは学校の方にも伝えてあったので，先生方はご存じなんですけど，やっぱり家でもどういふ風に対応したらいいかわからなかったのて，かといつて育児相談の方だと年齢が大きすぎるから，（そうですね，育児相談だと小学校入っちゃうとね）そういうことがわかりづらい，そういうことがもうちょっと教えてもらえると，どこに電話すればいいかわかるなと思ひました。（どこに相談したらいいかってことですね）そうですね。よく区からもらったりする雑誌とかでも，育児相談は描いてあるけど，育児にその小学校が入るのか，まだまだ育児っていう括りでは入るけど，実際相談する内容としてはきっとまた別なんだと，教育っていう方になるんだと，そういうことが難しいなと思ひました（D）</p> <p>・結局あのやっぱり育児相談もそうなんですけど，電話をしても通り一遍と言ひか教科書的なことばかりなので，何かそれがすごく残念だないつとも思ひました。まあ，忙しいから仕方がないんですけど…（忙しいっていうのは役所が？）はい。なんか早く切ろうっていう雰囲気がありありと出てるじゃないですけど…。そういうところに…（時間もたくさんあつてちょっとしたところに連絡できたりとか，言ひて話聞いてもらえるところがある</p>

	<p>と良いですよ) そうですね。なんか都会に行けばいくほど複雑な気がします。(ん?) 都会に行けばいくほどすごく複雑な気が…地方だと結構ここに電話すればとりあえず大丈夫っていう、そういう感じだった気がするんですけど…(どんなことでも窓口が一本化っていう?) はい。(それはここじゃないですよみたいに言われちゃうみたい…) (やっぱり相談、カウンセリングとかまではいかなくても相談できる場所があった方が良いでしょう) そうですね。なんか、匿名でちょっとあの、ライトな感じの電話をしたり、やっぱり名前を言っても良いんですけど、そういう時にさらっと相談が(しやすい) しやすいところが… (D)</p> <p>・なんかこうモヤモヤした感じを、でも友達にも言えない、そんなこと友達に言うほどでもないよなと思うと、難しいなーと思いますね。かといって、育児相談で夫の話するのも変だし… (D)</p> <p>・カウンセリングの先生だったり、相談、そうですね、主人、あとは会ってお母さん、学童働いていないと入れない、預かってくれる場所、学童は3年で終わるけどもっとあったらいい。両親が70歳に近いので、仕事やめて夏休みいてあげるようにしようと言ってくれる。どうなるかなと思う。仕事していた方がいい。週3回仕事の中でも普通5時、でも3時くらい、短縮授業だと2時に帰ってくる。、仕事は2時に終わるので間に合わない。そうするとどうしようかと考える。母は車乗れないので自転車だし、やめなきゃいけないのかなあと思う。預かってもらえるような学童や保育園幼稚園学童ないし、なかなか世の中でも3年生の壁って言われていて、3年になったらどうしよう、考えていないといけないなと思う (J)</p> <p>・話せる母親はあまりいないけど、やっぱりそういう場があって同じような人の。元気なお母さんが入るとよくない。そーだよーって言うってくれる人、いつでも行ける場所があればいいのにない。保育園の方がお迎えの時に会ったりして親同士話せる方があったけど小学校になるとなくなる。学童も旦那が迎えに行ってくれているし、子どもをほったらかしにして駐車場とかで話さないでくださいと言われてるので話ができない。保育園でもない。相談する、友達でもない、相談でもない、(J)</p> <p>・子育てのブログアップしている人いますよね、私もこういう風になりたかったんだ、今日から、ブログ書いたりしてみようかな。携帯でやっている人とかいるじゃないですか、あーいう人を見ると私だけじゃないって (J)</p> <p>・保育園も無認可なんですけどね、ファミリーサポートも登録はしているけれど結局決まっていないし、行政的なところのサポートは一切ない状態ですね。あの、無認可とかで保育園の、あの、区からの補助金とかもうち出ないから、ほんとに何もサポートしてもらっていないですね、行政には (I)</p> <p>・今私に必要なのは物理的なものがおおきいですね、シルバー人材センターもだめだったんで、全部ダメダメで。そう、うん。そういう、うん、子育て含めて手が足りていないところの支援、私がほしいのは (I)</p> <p>週に1回通級指導という形でいつも通う学校とは別のクラスに週に1回だけ通って、そこでやっぱりお友達との関わり方とかを教えてもらって。(Q 学校だけ? 民間は) ないですね。全部公立でただでやってくれるのがあるがたいと思って、(Q 保護者会) そうですね。聞ける。そうですね、先生方の協力はすごくいただいているので、子どもをどうしたらいいかということの相談はすごくしやすいんですけど (A)</p>
--	--

	<p>・今発達支援のデイケアに週1回2人が通っている（F）</p> <p>・発達にでこぼこあるかなあと相談を始めたのが2歳児クラスのから頃だったと思うのですが、それ以降にいろんな人と相談していく、自分で相談しなきゃなという気持ちもあってどんどん動けるようになってきたのでそこからはだいぶ楽になった（A）</p> <p>・保育園の間は保育園と区がやっている発達相談室っていうところで専門家の方に相談することができましたのすごくそこはありがたかったですね。（Q 発達相談は1か月半に1回でしたっけ）はい、そうでした。（Q 就学前の相談もそこで？）就学前の相談自体は区の教育委員会でやるので、その相談の進め方とか手続きなんかを相談していました。どういうふうに子どもの状況をお話したら分かってもらえるのかとか、こういう言葉は適切かとかそういうことをたくさん相談することができました。子どものことを知ってもらうための手段をやっぱりいろいろ相談してアドバイスいただいたので心強かったです。やっぱ専門用語とかあったり言葉の加減っていうか、なんか変に大げさに説明しちゃっているんじゃないかとか、どのくらい適切に状況が伝わるかっていうところで、先生方の力を借りながら就学相談を進めていきました。（A）</p> <p>・専門家というか、先生すぐに子どもの性質をすぐに見抜いてくださって足りないところとかここは伸ばした方がいいところとか的確に判断してくださって教えてくださって、私が気づいていないところもあってありがたい、うん、すごく理解してもらっているなあという安心感があります（A）</p> <p>・下の娘が就学前にちょっとあの就学相談というので、ちょっとあの発達障害の疑いがあるということで市がやっている発達支援室みたいなところに行って、それからあの、就学相談に行って、それであの、結構あの、小学校に入る前にいろいろ検査とか、あの、ありまして、あの、えーと、府中の小児医療相談室？大きな、えーと、小児医療センターかな、小児保健センター児童思春期精神科みたいなところに2回ほど行きました。そこでちょっとあの発達障害のいちお疑いあるということで、学校で支援を受けるためにはそういう診断が必要だから診断出してくださいみたいな（E）</p> <p>・いろんな検査うけてまああの、子どものなんというかIQわかったりとか、得意不得意がわかったりとかそれはそれではいい、あの、結構役に立ったというか、立ったんですけど、あの。うちの子そんなに支援が必要な子なのかなと、ちょっとあの、親としてはなんかあのまあその心配した時期もあったので、なんかあの、なんかちょっと納得いかない時期もありました（E）</p> <p>・あきらかに支援が必要な子では今のところないと思うんですけど、まあちょっとこれから様子見ていきたいと思いますという感じです。（Q 資料出した？）はい、出しました。それでえーと、1番ベテランのしっかりした先生のクラスになりまして、その先生が穏やかにみてくださって（E）</p> <p>・あらゆるところを使っていますよね。発達支援のデイケアですね（F）</p>
理論的 メモ	<p>社会的サポートというと広く拾ってしまうと考えられるが、〈子どもに関する社会的サポートの利用〉と、親の精神的支援の〈専門家への相談を求める〉に分けた。子どもの発達に関する支援を受けているという語りは多かった。子どもの発達の相談を介して母親自身も助けられたという語りがあった。子どもへの支援はこの概念に、母親への支援は〈専門家への相談を求める〉に振り分けた。</p>

概念 16	専門家への相談を求める
定義	親が自分自身の心理面や子育てについて専門家への相談を求めること
ヴァリエーション	<p>・そういうカウンセリングとか受けに行った方がいいのかなとか。どういう道があるのかなあっていうのが、自分で気にしながら暮らしていけばいずれよくなるんだろうとか、実はもっとてっとり早い方法があるんだろうとか (A)</p> <p>・幼なじみの子がやっぱり心療内科に通ってカウンセリングを重ねることで元気になったので、同じような問題だろうと思うので、その子のように本当に体調崩すほどではなくなんとなく日常をこなせている私ですが行った方がいいのかなと。あったら、話す機会を持つことで苦しい気持ちが楽になるのだったら助けを借りた方がいいのかな。自分が安定していることで子どもとのやり取りも安定して穏やかになるのでそのためにも必要なあと。あったらやった方がいいかなと言う気持ちには傾いている。あとは親子関係とかに特化したものがなかなか少ないので、そういう心療内科とかって、よくアルコール依存症とかそういうところを掲げているのは多いんですけど、親子問題ってどうやって相談したらいいのか、実際にでどういうふうにカウンセリングの計画とか進んでいくのかなあというサンプルとか見たいなっていう。そういうことがわかったうえでちょっと決めたいんですけどあまり情報がないなあと思っているんですけど (A)</p> <p>・私みたいなちょっとその成育環境に問題があったかなっていう (笑) お母さん方って、相談する仕方とか相手が欲しいけどどうしたらいいのかわからないっていうところがおそらくみなさん思っているとことだと思うんですけど、そういう相談機関ってあるんですか (A)</p> <p>・子供本人のことでないし、結局自分自身のことなんだけど、親との関係がどうだったっていうの、判定じゃないけど、ちょっとそれはおかしいですねって、それはちょっと普通じゃなかったですよって言ってもらえると気も楽になるっていうか、逆に。やっぱり普通じゃなかったんだって思って、次に踏み出しやすくなるので、そういうなんかおかしいなって思ったときに相談できる場所があったらいいなあと思っているんですけど、あるんですかね？そういうところって。どういうところを利用したらそういう話を聞いてもらえるのかなとか、うーん、そういう支援の仕方があるといいなっているんですけど。細かいすごく特殊な、特化した話だと思うので (A)</p> <p>・ちょっと発達の傾向がある子ってやっぱり、親もそういう傾向があったりそのまた親もそういう傾向があったり事実はあると思うので、セットで話を聞いてもらえると、子どものことで相談できるのと一緒に親の成育歴についても一緒に聞いてもらって、調べてもらおうとわかったり、自覚を持ったりするのかなっていうのはやはりむずかしいんでしょうか (A)</p> <p>・ちらっと聞かれたのは私の方の家族とか主人の家族とかで同じような子はいますかとかは確かに聞かれたことはあって、んー、まあ、ちょっとそれぞれ一族から似ているところがあるとかはあったなあっていう話はし</p>

	<p>たんですけど私自身がちょっとその成育歴で悩んでいるという話題にまではいかなかった（A）</p> <p>・ なんとか踏みとどまっている一見普通そうに見えるけどほんとはなんとか踏みとどまっているっていうところの人が実はっていう話ができる、で、そこで一步踏み出して介入してもらえると本当はちょっと、んー、いいですね。最近、病気で、未病って言葉がありますけど、その未病の段階で何かお互いにアプローチしあえたらすごくいいなあって思って（A）</p> <p>・ 2年前にできていたらよかったと思うんですけど、今も必要だと思うので是非やっていきたい（A）</p> <p>・ 幼なじみが相談していたところに行こうかと思ったけどちょっと遠すぎて。精神科って形でなくて女性問題の特化した科があって、でも遠いなあと。ウイメンズ・・・？そういったところに友達は行っていて、でも自分の身近ではなくてどうしたものかなって思っていて（A）</p> <p>・ 今話し手ってふと思いましたこの機会がなかったら忘れていたと思い。話すこと大事ですね。自分のことも聴いてくれて認めてくれて、カウンセリングっていうのがものすごく大事なんだと思います。医師の先生だとお薬どう？って聞かれて、かわりないですってすぐ終わっちゃう感じだけど、カウンセリングは4 5分かな、今は2か月に1回とかなんですけど、こういう風に思うということに対してじゃあこうしてみようかっていうように言ってくれるので大事だなと。私は違う先生にみてもらっているの（伴走して）もう10何年ですね、言えば、ああまたそのくせねえって感じになっています（J）</p> <p>・ プロです。心理士さん、ドクター。＜小さい時からの＞そうですね。遠くてお金がかかりますね。ここからだと車で6キロくらいですかね。困ったことがあるというより定期的にうちは行っていますね。あとお電話も心理士さんにはなんかこういうことがあったら、かけていますね。そうしたら自分も整理されるし、そうして話しているうちに答えが見えてくるというか落ち着くというか（F）</p> <p>・ 聴き上手だと思いますね。娘も心理士さんに会ったら、メモしながら聴いてたって言うんだけど、ずっとしゃべりっぱなしで、また会いたいというのはやっぱり聴いてほしいんですね（F）</p> <p>・ だからそういったときにやっぱり心理士さんに、こないだ母親と電話して言われたことに刺さっているんでちょっと今元気ないんですっていうことも言えるじゃないですか（F）</p> <p>・ 親子心理相談っていうのをかかっていたけど、やっぱり金銭的なもの、時間的なものがあれになるんで、やっぱりね、近くないとダメなんですよ。だから片道25分かけて月一会いに行くなんてことは難しいですよ。たぶん、今カウンセリングは前の学校公立だと毎週金曜日にいらっしやっていて、学期に一度くらいあっていたんですけど、やっぱり月一くらいに近くで通っていて無料とかだとすごくいいだろうなと思いますね（F）</p> <p>・ 月一くらいと思うんですけど、なかなか重い腰が、遠いですから。なんかこういう自分が家事能力ない、お弁当作ったら、どっちらけのまま、洗濯が</p>
--	--

	<p>あって、洗い物があって、子どもたちが帰ってくれば習い事の送迎があったりしてなかなか回らないんですよ（F）</p> <p>・クラスの中で立ち歩いてケンカをする男の子がいたりとか、女の子同士のケンカとかそういうのが娘のストレスになっていたのが明確だったので、SC に話すと見に行けるじゃないですか、そのメリットがあったんですよ（F）</p> <p>・私からは言えなくて、SC の人は、言いますって言ったから、私じゃない人があって、不適切なことがあれば先生に言ってもらえるっていう SC はありがたいですね。なかなか先生に直接言えないですよ。あと若い先生は ADHD とか言ってもやっぱりお勉強不足な人も多いと思うので、プロの人がいないと厳しいと思いますよ（F）</p> <p>・かかっている先生も心理士さんがすごくいいから、やっぱりすごく必要とされている職業というか、いい方に巡り合ったら子どもも親もすごく変わるっていうふうに思う（F）</p> <p>・やっぱりなかなか人に言えない悩みとかもありますので、はい、まあそういうのが相談できればいいと思うんですけど、やっぱりまあ、そうですね、カウンセリングって結構お金もかかりますし、まあ、ねえ、あの、時間もかかりますし、で、今のところそこまでしなくても、なんとかできていると思っています。もっとなんか手軽というかそういうのがあれば利用したいです（E）</p> <p>・やっぱり薬飲んでないと、ずっと飲んでいるからわからないんですけど、飲んでないとやっぱりなんか変化あるんじゃないかと思うと、やっぱり飲んでての方がいいってことですよ、うーん、＜で安定して＞そうですね、前よりは。まだまだですけど（K）</p> <p>・くせがあるんで。そこがいけないんじゃないかって思ったので。そこだけわかればなんとかなるんだろうかあ。それとも専門家の力を借りた方が手っ取り早いんだろうかとかあ（A）</p> <p>・育児相談はよくあるんですけど、自分とパートナーと…夫との関係を相談する場所がいまいちよくわからない、育児相談はもう山のようにあるんですけど、女性相談と言うのはなんかあんまり、あと時間が決まっていたりとか、曜日が決まっていたりとか、なんか気軽に電話できることが…やっぱり夫との関係が良くないと、家族全体…。その方が結構比重が大きかったりするんでそういう所が…（D）</p>
理論的 メモ	<p>支援の利用については〈子育ての社会的サポート〉＜子どもの発達支援の利用〉と重なる部分もあったが、〈専門家への相談〉は、母親自身の精神的な部分への相談に限定して概念化した。多くの母親が自分自身について相談したいと語っており、多くの語りが振り分けられた。</p>

概念 17	身近な支援者の存在に気付く
定義	自分を支えてくれる身近な支援者の存在に気づくこと
ヴァリエーション	<p>・主人の方の母親，おばあちゃんの方も何かと気にかけてくださって，週に1回ちょっと子どもを放課後，お習字教室と一緒に連れて行ってくれるとかいう形で，夕飯まで一緒に食べさせてあげちゃうからいいわよとか言ってくれてすごく力になってくれるのがいいなあってすごくありがたい（A）</p> <p>・うちはやっぱり離れて暮らしてるのでなかなか逃げ道っていうのが娘たちにはあんまりないんですけど，その役割をしてくれてるのが義理の母だなと（D）</p> <p>・特に長女と，長女がガス抜きする，あの，もう…わがママをすごく言うとか，感情をむき出しにするので，あの，そういうことが，まあちょっと怒られますけど，出来る場があってよかったなと思います。だからそれが，あの一…そうですね。私がおばあちゃんから受けたことを，娘が義理の母におなしようにして，いるので，そういう人がやっぱり近くにいて，まあ距離的には遠いんですけど，親族の中にいてくれるって言うことがすごくありがたい（D）</p> <p>・すごく社交的な方なので，あの一，そんなに，あの一，そんなに干渉しなければ向こうも干渉してこないっていう，とても，生活しやすい，私は生活しやすい風にしてもらってたと思います。そうですね。ほんととはっきり物事を言って下さるのでそれがすごくありがたいです</p> <p>・（夫は）私の状態もわかってきているし，サポートはすごくしてくれます。全然，あのいやなところない（J） 不安は主人がいなくなったらほんとに私何もできなくなってしまう。生活もそうだし，子どものことでもそうだし，旦那がいなくなることに對して極度の不安がある。旦那いてからこそできていることであって（J）</p> <p>・主人の方はそういう意味では，学校行事とか保護者会とかそういう点では決して拒否の姿勢ではなくて融通聞く限りでやってくれるのでありがたいと思っています（A）</p> <p>・家族以外に話したのはその同じような体験のあった，はい，話し込んだことはありました。（A）</p> <p>・話せる母親はあまりいないけど，やっぱりそういう場があって同じような人の。元気なお母さんが入るとよくない。そーだよーねーってしてくれる人，いつでも行ける場所があればいいのにない。保育園の方がお迎えの時に会ったりして話せる方があったけど小学校になるとなくなる。学童も旦那が迎えに行ってくれているし，子どもをほったらかしにして駐車場とかで話さないでくださいと言われてるので話ができない。保育園でもない。相談する，友達でもない，相談でもない（J）</p> <p>・主人に話している。否定しない，こうなんじゃないの，えーとなるけど，間違ったことは言っていない。聞けることを言ってくれる（J）</p>



	<p>・そういう子育てのことを話す、もし、場所があったり、そういうのが何かあったら教えていただきたいなと思います。もしこういうのがあるんですけど来てみませんかというのがあったら教えてもらいたいな。グループでもこういう場でもいいし、あったらどんどん参加したい（J）</p> <p>・話していて思い出した。この機会がなかったら忘れていたと思う。話すことは大事なんですね。自分のことも聞いてくれて認めてくれて、カウンセリングはものすごく大事だと思う（J）</p> <p>・友達のお母さんくらいですかね。なんか、子どもがこんなことしてやあねみたいな話しですね。（Q 話すと楽に？）そうですね。なんか気が楽になるというか。いろいろまあアドバイスもらえたりとか（E）</p> <p>・ああ、友達として関わっていますね。今もいます。幼稚園のその、上の子の、結構友達として機能しています。親同士で（K）</p>
理論的 メモ	<p>実母に頼れず夫の母親に助けられたという語りが2人の母親からあり、しかも、精神的に信頼できたとのことであった。結婚後としたのは、夫と夫の母親のサポートというのは大きい意味があると考えたためである。</p>